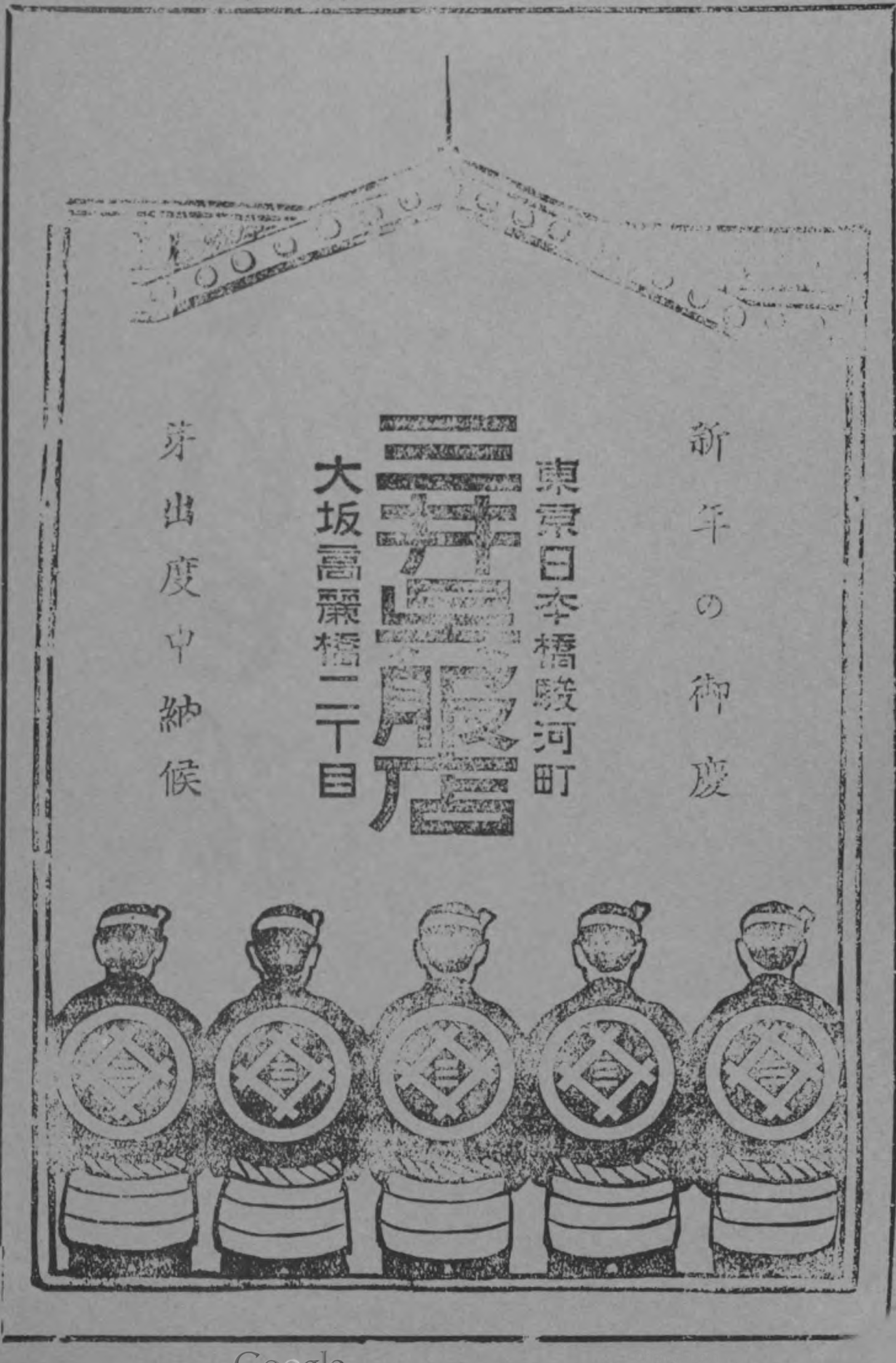
女鑑

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



定價一枚一錢　百枚八十錢
郵税一枚二厘　百枚二十錢

日刊新聞 萬朝報

萬朝報は實にためになる新聞紙です

△論説が確實で日新らしい△雜報ハ機敏で綿密と簡潔とを兼て居ます△文章ハ平易です△世界の新らしい知識が悉く紙上に現はれます

萬朝報は實に面白い新聞紙です

讀者の趣味を滿足せしむるとに最も力を盡します。目下左の二興を催して居ます

寶さがし

之れ誰も知らぬ所へ寶を隠して置き△紙上に其場所の分るだけの謎を掲げ、△合點の行つた人が勝手に其の寶を取去るに任せるのです△寶ハ勸業債券と引替ます

米しらべ

之れ一升の米を密封して來年の二月まで保管し置き△其の粒の數を當させるのです△當てた人に田地一反(金三百圓)を進呈します

發行所　東京市京橋區弓町廿一番地　朝報社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

謹賀新年

衛生無毒 クイーン白粉

皮膚艶美 クイーン水



發賣本舗 花陽堂

東京市日本橋區新和泉町

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新意匠
羽衣コートの御披露

一羽衣コート中柄金二圓六十錢以上
一羽衣コート[illegible]柄金一圓九十[illegible]

各種

御望の方ハ御報知次第説明書并に[illegible]差上げ[illegible]



一呉服物一式并に御禮式御衣裳
其他新柄仕立上ヶ本[illegible]服品々

一男女御袴 寸尺別に御調製有之候

東京市麻布區飯倉町[illegible]丁目

發賣元 萬長呉服店

電話新橋千百六十七番

●冬期進物用無比の佳品

([illegible]氏發明)
(日本東京木村病院長ドクトル木村順吉氏證明)

日本[illegible]ベルト

(改正[illegible])
角形 [illegible]拾錢
圓形 [illegible]
送料 [illegible]

特[illegible]
效[illegible]血の道、僂麻質、頭痛、肝臓、腎臓、喘息[illegible]冷症[illegible]

本品[illegible]

[illegible]温氣全身[illegible]

[illegible]永年[illegible]老人 婦[illegible]旅行者冷症の人[illegible]

代無比の温[illegible]

東洋一手
發賣元
東京市京橋區三十間堀三丁目十四番地
(商標登記)ベルト商會
(電話新橋三八六七番)

女鑑 第拾四年 第壹號 目次

本號に限り定價拾五錢

定價
- 一册　金拾錢
- 六册三ヶ月分　前金五拾七錢
- 十二册半年分　前金壹圓拾錢
- 廿四册一年分　前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料
- 五號活字廿三字詰一行　金參拾錢
- 半頁　金八圓
- 一頁　金拾貳圓
- 表紙一頁　金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年十二月卅一日印刷
明治三十七年一月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊索一

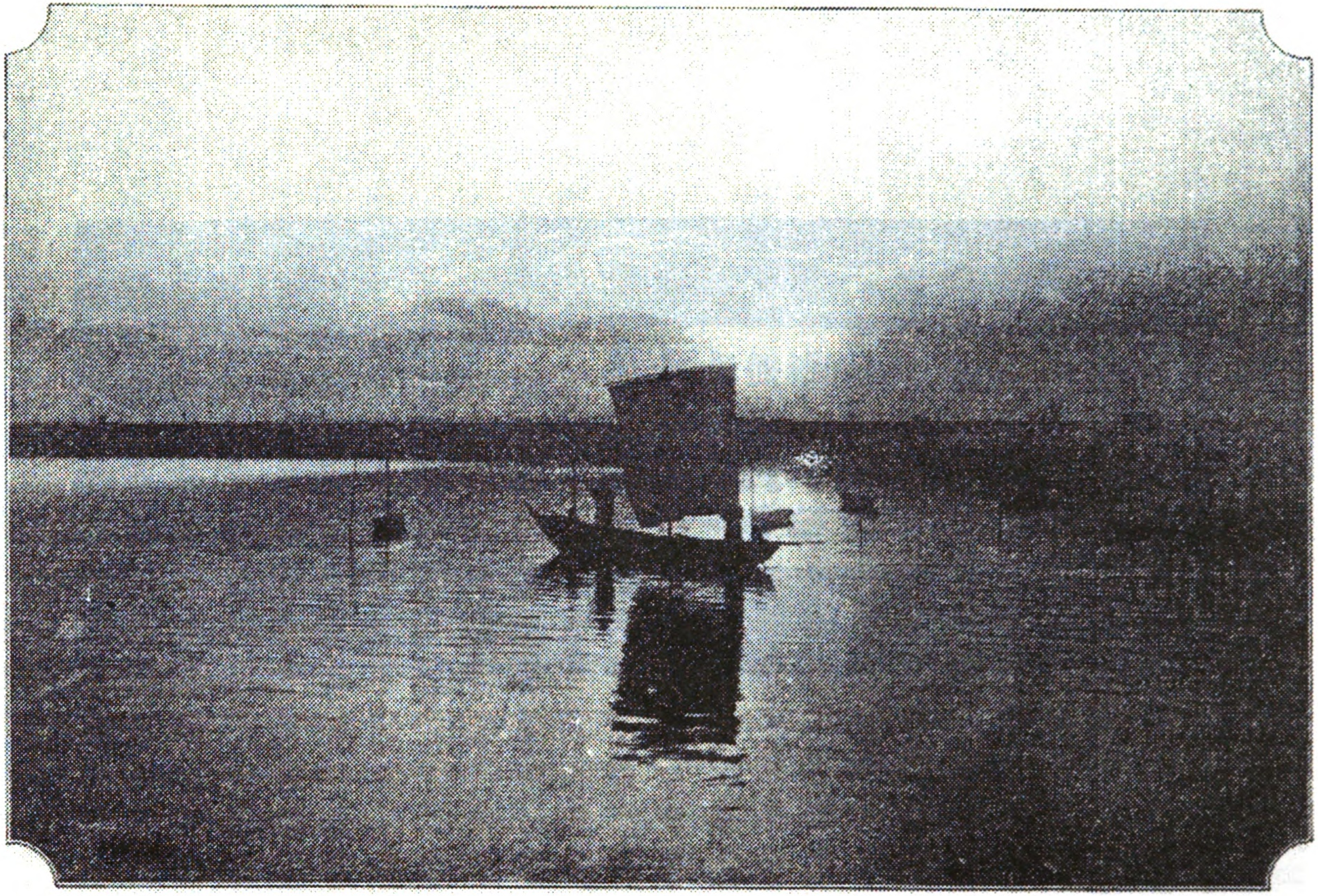
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

謹賀新年







初日出（高輪より品川沖を望む）


賀正
東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
店主松田幸治郎

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

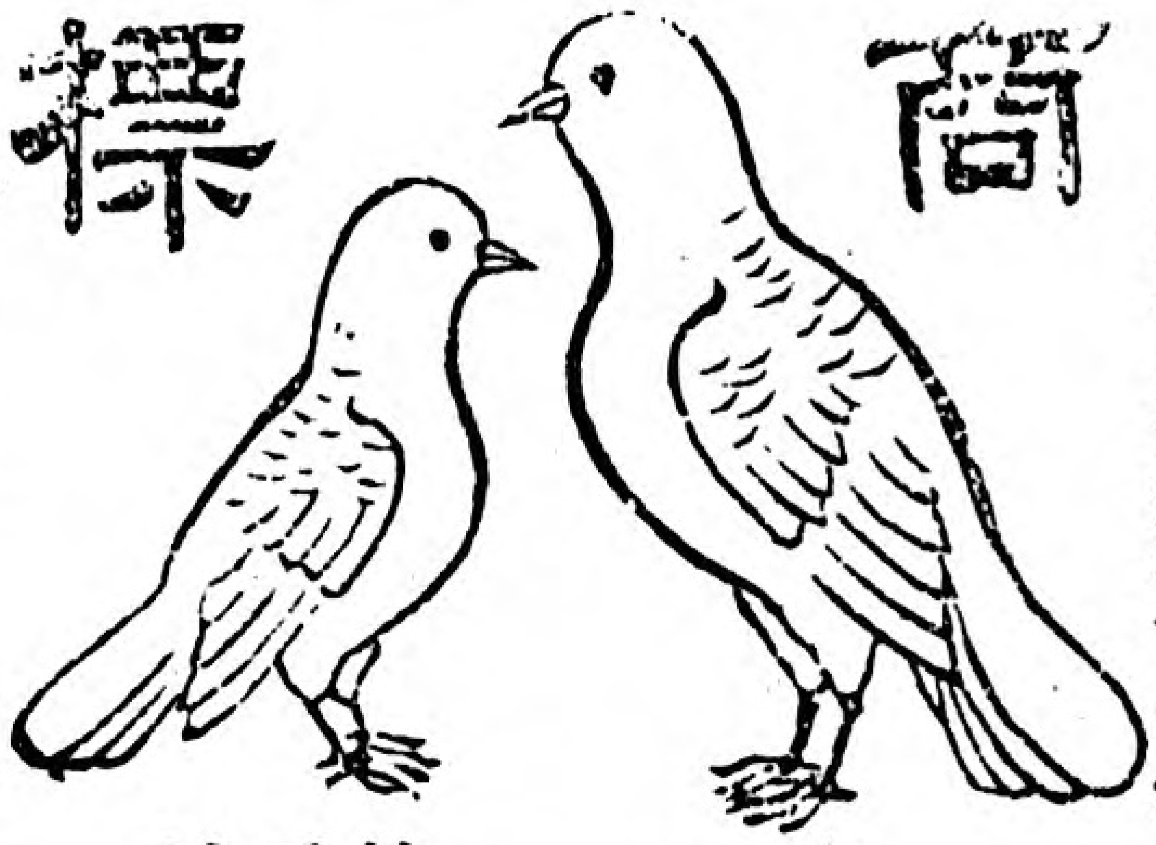
廣告

玉子ウドンコ。フノリに優る
奇々妙々の髪洗毛髪を大事になさる御方の大必要衛生品他に類なき自慢なり

従來の洗粉等とは全く違ひ且つ小量にて湯水澤山不用毛髪の汚油を落すのみならず赤毛硬毛曲毛には一度御用ひれば直に特効あり故に髪を大事になさる御方は早く御用ひ遊されてこうのこのうそでなき事早く知り玉へ

八妙髪あらい くせ直し

商標



純粋茶山花 愛油
美麗油
衛生食料品に尤適用

此の美れい油は茶山花の實より搾取りたるものにして此の茶山花の特効として髪の毛を黒く艶を出す事恰も鳥羽色の如くにして曲わる毛硬毛も軟になる事は皆様御存の通り故弊店に於て美麗油と稱し廣く全都の御婦人方の御望を滿さん爲産地へ特約し搾取一手大販賣仕候間、目下流行の椿油と御實驗の上髪洗と丶もに御愛用の程願上候

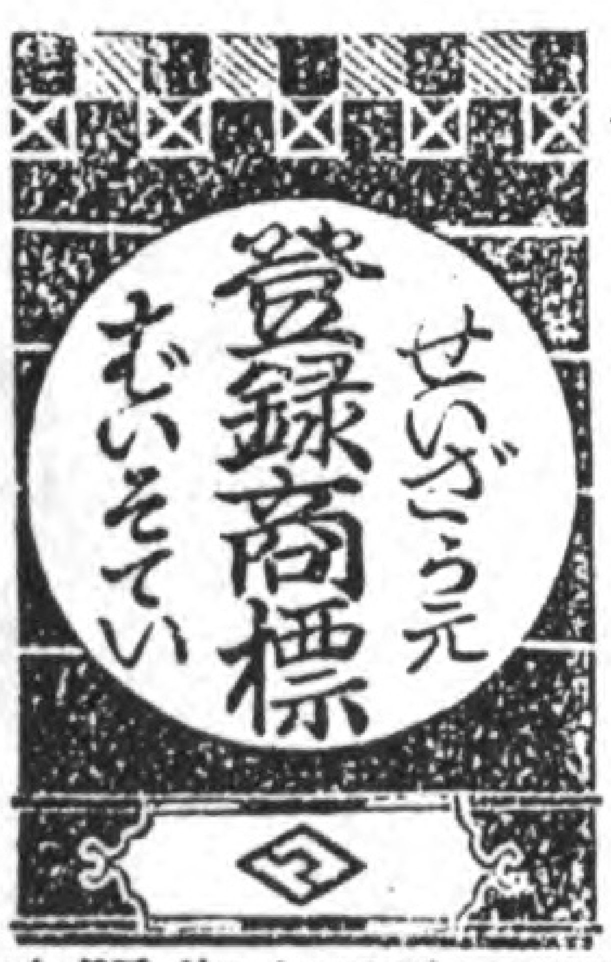
販賣店到る所にあり

發賣本舖 東京市日本橋區小舟町三ノ四 西村房次郎

第五回博覧會

褒賞授領

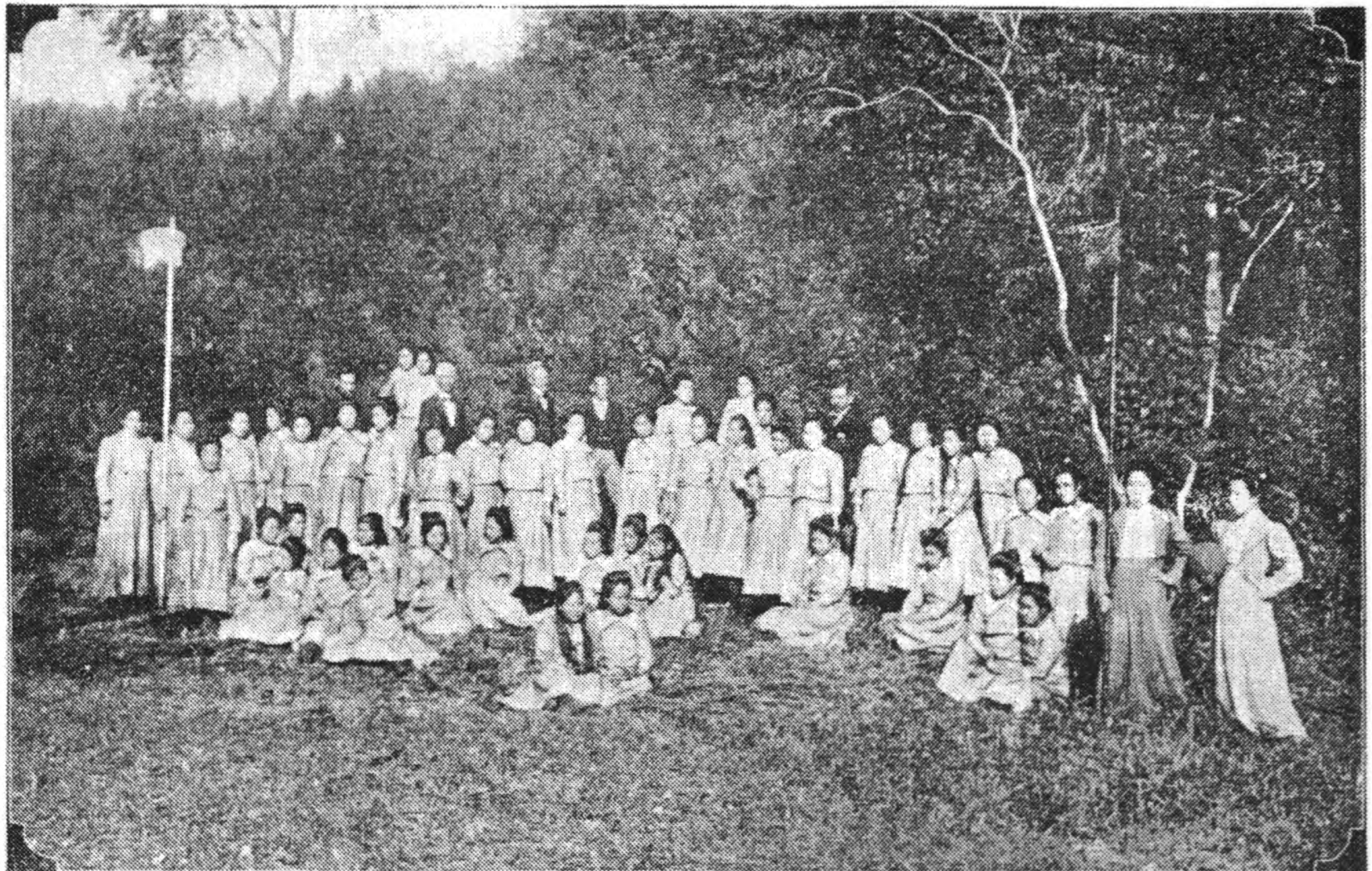
定價 壹袋壱錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黒船町
梅素亭謹製
電話下谷二百三十四番



日本女子大學校運動會

女鑑兼題投稿優等者



栗山たか子



大枝庸子

謹賀新禧



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

瀬戸引辨當箱

新發明品鐵製堅固

元祖新發明鐵製堅固ハギメなし瀬戸引辨當箱は從來の漆器辨當箱の如く臭氣なく夏季と雖も飯の腐敗する事無き故に衛生を重ずる方は是非共御使用あるべきなり

偽物有此玉印御注意



漆塗と違ひ臭氣なく御飯の腐敗する事なし

日本橋區馬喰町四ノ廿三

製造販賣元
特約販賣店

◎取次販賣希望の方は弊店同様販賣仕候間御便宜店にて御相談被下度候

東京市日本橋區馬喰町四丁目廿三番地
玉 **中村村司**

東京市日本橋區室町二丁目
木屋本店 **林漆器店**

東京特約販賣店

日本橋橋町二丁目 岩田雜貨店
日本橋小傳馬町二 星野金物店
日本橋區橋町四 近江屋半兵衛
日本橋新材木町 太田漆器店
神田鍋町八 大久保金物器
神田一ツ橋通り 高木漆器店
日本橋村松町七 角田漆器店
日本橋小傳馬町二 府川漆器店
日本橋大傳馬町二 森田善七鐵葉店
日本橋馬喰町二 木村雜貨店

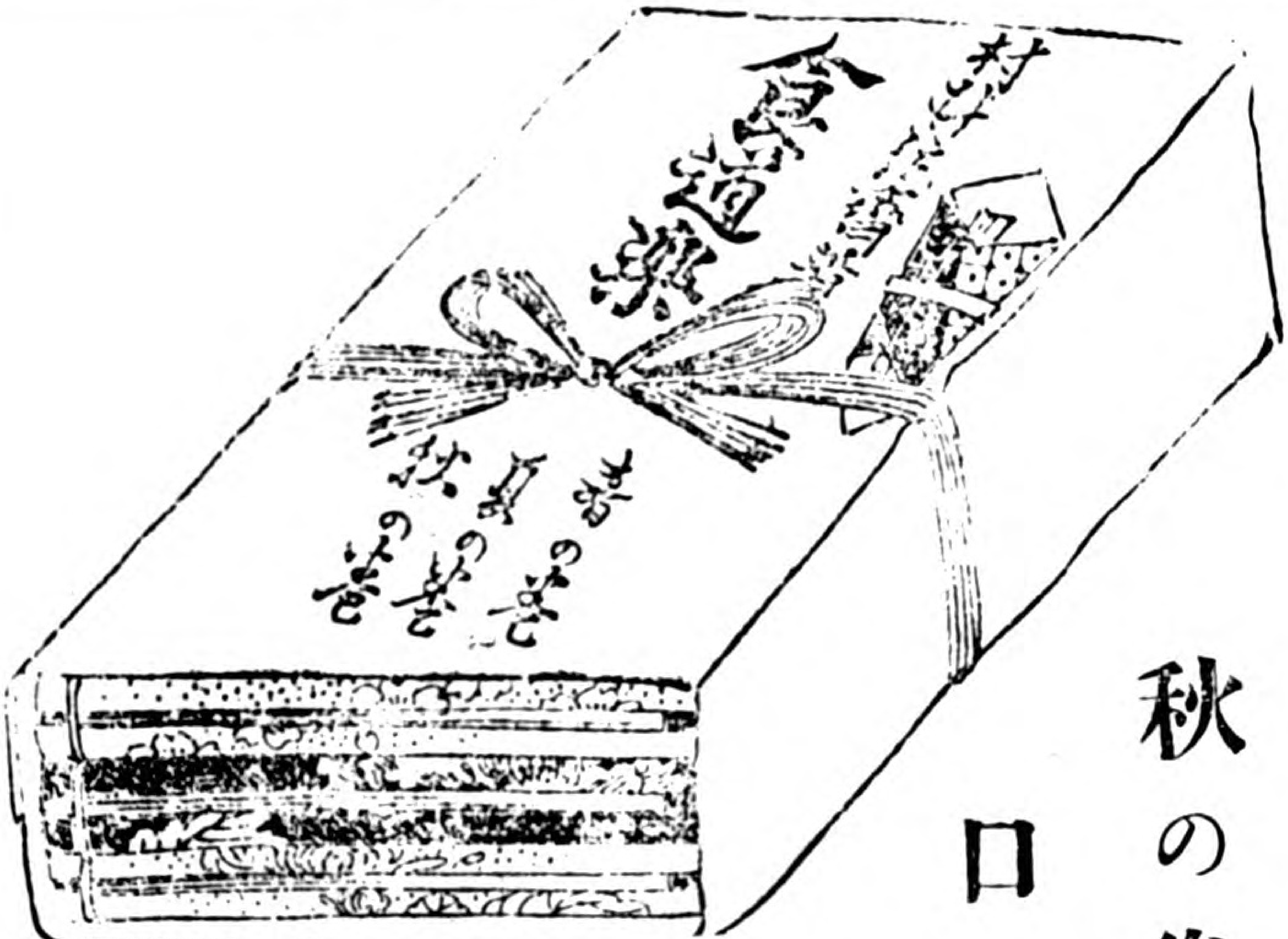
◎他に類似粗製品有之候得共丸玉印に御注意御購求願上候◎賣捌店は全國到る處の漆器店金物店勧工場に有若最寄に無之時は弊店へ御申越被下度候◎取次販賣望の方は御申込次第御便利の相談可申候◎定價明細書入用の節は御申越次第送呈仕候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

增補註釋 食道樂

正價一册 金八拾錢宛

郵税 市內五錢▲地方拾錢▲臺灣三十錢 米國開封廿六錢▲淸韓國三十錢也



秋の巻出版 十二月十五日發行 忽ち十版を重ぬ

口繪……天長節夜會食卓眞景

▲附錄には米料理百種 五十種日本料理◎五十種西洋料理

▲パン料理五十種あり

◎春の巻（二十三版） 口繪大隈伯爵家臺所眞景

附錄 日本人一日の食物表▲日用品分析表 料理法の書籍▲臺所手帳

◎夏の巻（增十二回版） 口繪岩崎男爵家臺所眞景

附錄 ▲西洋食器類價格表▲西洋食品價格表 ▲臺所の手帳

發行所 東京市京橋區卅間堀三丁目 電話新橋二千三十六番 報知社出版部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●都新聞は他に眞似のなき「都式」といふ本社發明の新活字にて印刷すれば外の新聞よりも二倍の讀み出あり毎號面白き小說、探偵實話、及び新講談を載せ挿畫は浮世繪大家の筆になりて且つ毎月一回『都の華』といふ流行風俗專門の美麗なる册子を添ゆ紙質鮮明、記事豐富眞に日本一の名に背かず



定價（一ヶ月金三十五錢、三ヶ月金一圓、六ヶ月分金一圓九十五錢布外は郵税一ヶ月金十三錢

廣告料 定價（五號活字廿一字詰一行一回金四十錢前金にて割引なし

發行所 東京市麴町區内幸町一丁目五番地 都新聞社

編輯用（電話新橋三千百八番） 庶務用（電話「特」新橋百七十五番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

謹奉賀新禧

（新年改正 目錄印刷中）

第五回內國勸業博覽會
壹等賞牌　貳等賞牌　參等賞牌
襃狀等數通受領

○西洋樂器
オルガン、ピアノ
ヴヮイオリン其他
吹奏樂器、附屬品

○標本模型
美術的模型品及
剝干製標本物產
標本、國定國語
讀本敎授用標本

○器具器械
運動用具、諸體
操器械、身體檢
查器械、小學計
數器、械具類

（新刊書類）

前島密君題字
坪井正五郎君序文
言文一致會編纂

言文一致唱歌 金十八錢 郵稅二錢
音樂學校旗野講師作歌
同　渡邊講師作曲

育兒唱歌 金八錢 郵稅二錢
春、夏、秋の卷

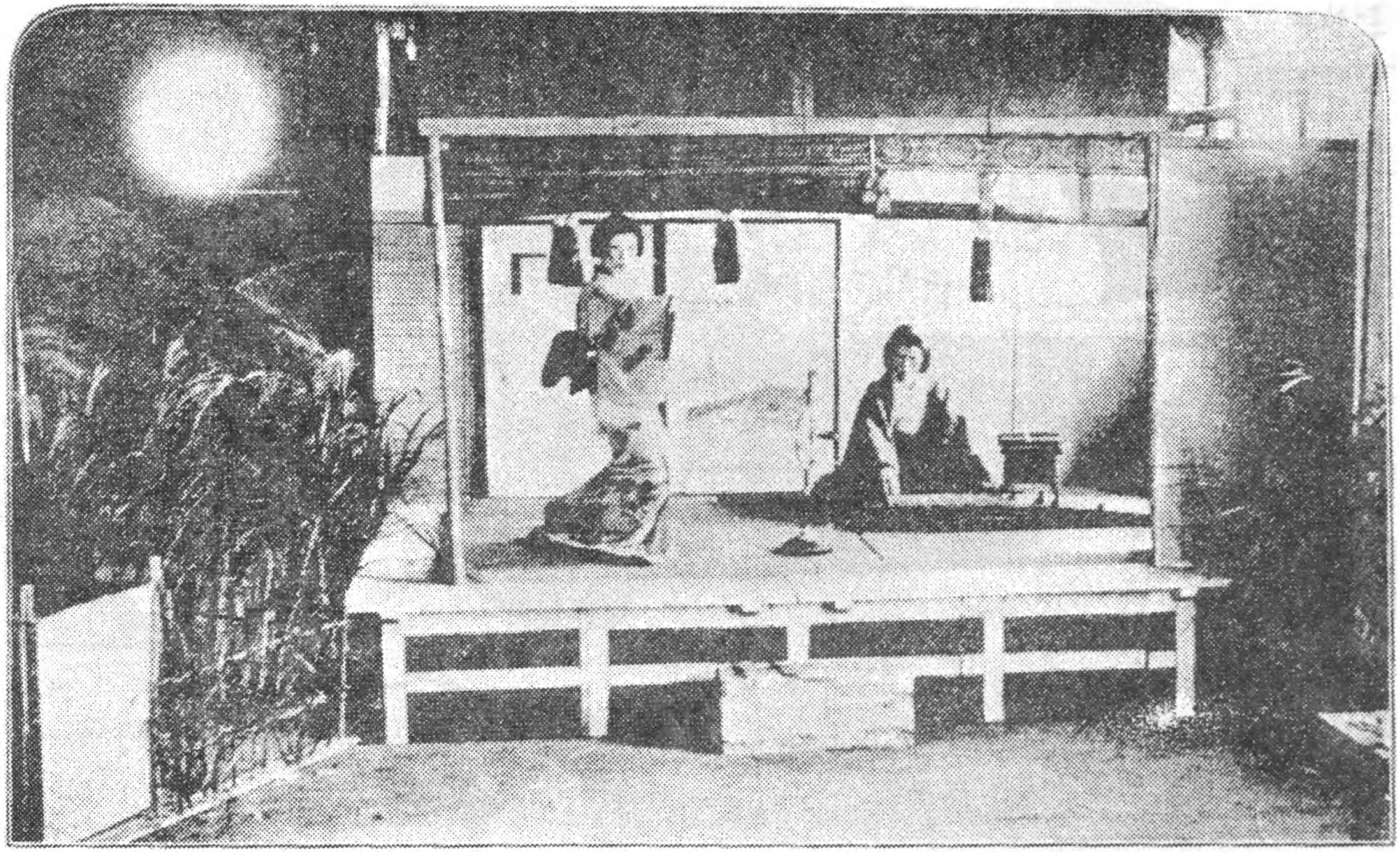
共究會編纂
音樂遊戲界
毎月一回二十日發行金十錢





東京市神田區千代田町二番地
同文館樂器械具店
（電話本局二千十三番）

小督



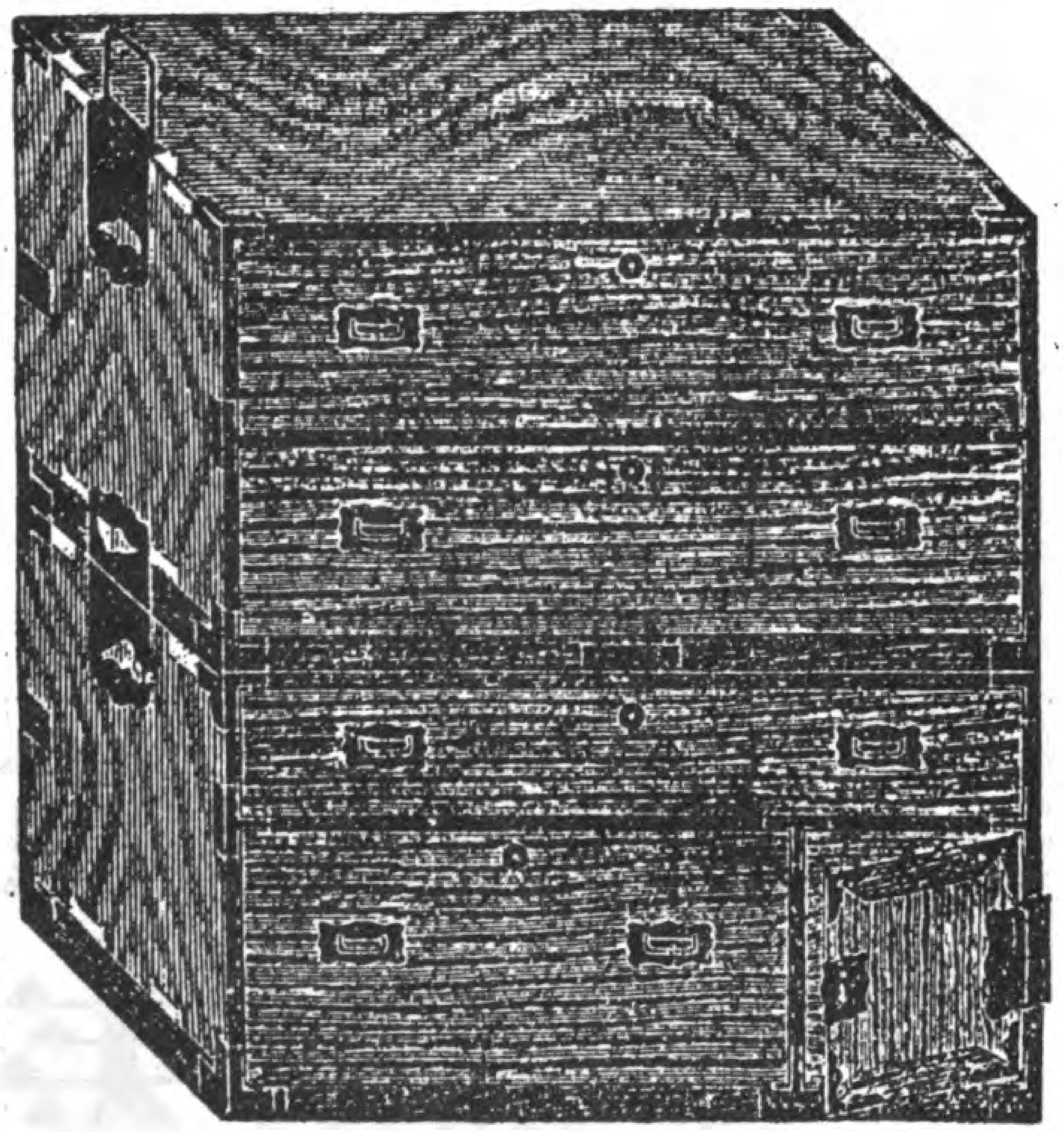
東京美術學校美術祭餘興活人畫



御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候


第四回內國勸業博覽會褒狀
東京市京橋區水谷町
鐵金具
桐製重箪笥　鷲塚清次郎
褒狀
審査官　井上宜文
丹羽圭介
河原徳立
勲五等鹽田眞
審査部長正四位勲四等前田正名
審査總長正三位勲二等九鬼隆一
審査總長ノ申告ヲ領シ玆ニ之ヲ授與ス
明治二十八年七月三十一日　總裁大勲位彰仁親王


時事新報金牌
一重箪笥一号　東京市京橋區水谷町　鷲塚清次郎
時事新報ハ第三回内國勸業博覽會ノ出品ニ對シテ公衆ニ求メタル投票ノ結果ニ據リ前記ノ品物ヲ最良品ト認メ茲ニ金牌ヲ贈進スル者也
明治二十三年八月廿日
時事新報社



第五回內國勸業博覽會褒賞授與式に於て一等賞銀牌授與

せられ候同業者出品の種類中に於て此稀有の名譽を荷ひ候こと江湖愛顧各位の御餘光と難有奉感佩候因て益々奮勵製作に關する總てに一層の注意を加へ尙御各位の御引立に酬ひ可申候此段謹告仕候

御注文の思召ある御方には御申込次第たんす目錄一冊呈上仕候

（但郵劵貳錢封入の事）

東京市京橋區水谷町一番地角

㊥清

越中屋　鷲塚清次郎

東京市京橋區水谷町三十番地

支店　越清支店

御注文の節は女學雜誌廣告に據りたる旨御附記被下度候

(謹)

新年の御慶目出度申納候

華族女學校學監下田歌子女史編

女子自修文庫

全部六冊の内

第一編

女子の心得

製本出來
頗る優美

女子には女子の心得あり之を説く、豈異性男子の能くするところならんや。經驗あり、學識あり、抱負ある、當代女子教育第一女傑下田先生の筆を煩はす所以。

(續刊) 第二編 女子の文藝　第三編 女子の手藝　第四編 女子の衛生　第五編 賢母と良妻と　第六編 東西女子奇聞

正價……（一冊四十錢 三冊一圓十四錢 六冊二圓十六錢 郵稅 一冊六錢 三冊小包料十五錢 六冊小包料三十錢）

出版圖書目錄 御申越次第 無代進呈

横井玉子女史著 **家庭料理法**（四六版上製六十錢 並製四十五錢）郵稅八錢ヅヽ

下田歌子女史著 **家政學講義** 金四十五錢 郵稅八錢

東京神田 冨山房發兌

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下被度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

恭賀新正

附白　弊店等出版の高等女學校、師範學校、中學校等教料用圖書は紙質を精撰したる彫刻印刷を鮮明にしたる製本を堅牢にしたる等大に教育界の賞讃を博したり今や時運の進歩に伴ひます／＼善良なる圖書を出版し聊か斯界に貢献せんとす乞ふ自今陪舊の眷愛を賜はらん事を、

東京市日本橋區通三丁目　**成美堂書店**

東京市京橋區南傳馬町二丁目　**目黑書店**

高等女學校女子

●**女子作法書**　女子高等師範學校教授佐方鎭子先生　女子高等師範學校教授後閑菊野先生　合著　洋紙和裝　全二冊　（文部省檢定濟）　心得之部　定價金四十錢　實習之部　定價金卅五錢

●改選**女子國文讀本**　女子高等師範學校教授關根正直先生編纂　（文部省檢定濟）　和裝　全十册　定價　一ヨリ四迄　二十五錢　五ヨリ以下　二十八錢

●女子教科**本邦新地誌**　女子高等師範學校教授野口保興先生著　（文部省檢定濟）　全一册　定價金六十錢

●女子教科**外國新地誌**　女子高等師範學校教授野口保興先生著　（文部省檢定濟）　全一册　定價金七十錢

●女子教科**本邦地理**　女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎先生編　全一册　定價金五十錢

●女子教科**外國地理**　女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎先生編　全一册　定價金六十五錢

●女子**國史教本**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編　全二册　上卷　金四十五錢　下卷　金五十五錢

●女子教科**日本歷史**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編　洋裝　全一册　（文部省檢定濟）　定價金七十五錢

●女子教科**東洋歷史**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　洋裝　全一册　（文部省檢定濟）　定價金七十五錢

●女子教科**東洋歷史附圖**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　（文部省檢定濟）　全一册　定價金二十五錢

●女子教科**西洋歷史**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　（文部省檢定濟）　洋裝　全一册　定價金七十五錢

●女子教科**西洋歷史附圖**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　（文部省檢定濟）　全一册　定價金三十五錢

●女子教科**外國小史**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　東洋編　一册定價金五十錢　西洋編　一册定價金五十五錢

●女子教科**外國小史附圖**　女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂　（文部省檢定濟）　東洋編　一册定價金二十五錢　西洋編　一册定價金三十五錢

●女學校用**算術教科書**　女子高等師範學校教授森岩太郎先生編　全三册　上中下　定價各金五十錢

●女學校用**代數初步**　森先生編　全一册　定價金五十錢

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

師範學校參考用書新刊稟告書

● 女子高等師範學校教授森岩太郎先生
女子教科 **幾何初步** 洋裝全一册（文部省檢定濟）定價金五十錢

● 女子高等師範學校教授後閑菊野先生 女子高等師範學校教授佐方鎮子先生 合著
增訂 **家事教科書** 洋裝和裝全二册（文部省檢定濟）上卷定價四十五錢 下卷定價四十五錢

● 家事教科書續編 **家計簿記法** 洋裝和裝全一册 定價二十五錢

● 女子高等師範學校教授後閑菊野先生 女子高等師範學校教授佐方鎮子先生 合著
家事提要 洋裝全一册（文部省檢定濟）定價金五十五錢

● 女子高等師範學校教授黑田定治先生 女子高等師範學校教授東基吉先生 合著
女子教用 **教育學教科書** 全一册 定價金

● 第六高等學校教授理學士大渡忠太郎先生編纂
女子教科 **博物學** 植物編 洋裝全一册（文部省檢定濟）定價金四十五錢

● 理學士宮島幹之助先生編
女子教科 **動物學** 全一册 定價金五十錢

● 脇谷洋二郎先生編
女子教科 **博物學** 生理編 洋裝全一册（文部省檢定濟）定價金五十錢

● 女子高等師範學校教授理學士平田敏雄先生編
女子教科 **化學及鑛物學** 洋裝全一册（文部省檢定濟）定價金六十錢

● 女子高等師範學校教諭谷田部須子先生著
裁縫教授法 洋裝和裝全一册 定價金二十五錢

● 女子高等師範學校教諭谷田部須子先生著
裁縫教科書 全二册（文部省檢定濟）定價 上卷三十五錢 下卷五十錢

● 女子高等師範學校教諭谷田部須子先生 東京府師範學校教諭小谷野千代子先生 合著
小學裁縫教科書 兒童用三册 教師用三册 金 金

● 女子高等師範學校教諭谷田部須子先生著作
褄形及說明 全一册 定價金二十錢

● 東京女子手藝教育會編
女子造花手藝教本 全一册 定價金三十五錢

● 東京女子手藝教育會編
女子摘ミ手藝教本 全一册 定價金三十五錢

● 女子造花手藝教本附圖 **切形** 全一組 定價金三十五錢

● 女子摘手藝教本附圖 **切形** 全一組 定價金三十五錢

● 大原鉦一郎先生編
女子用器畫法 幾何畫法 全一册 定價金二十錢

● 女子高等師範學校教授東基吉先生著
幼稚園保育法 全 定價金七十錢

● 小野鵞堂先生著
新編 **女子習字帖** 全四册（文部省檢定濟）一二卷各定價金十八錢 三四卷各定價金二十錢

● 多田親愛先生編
女子習字帖 全四册（文部省檢定濟）一二卷各定價金十八錢 三四卷各定價金二十錢

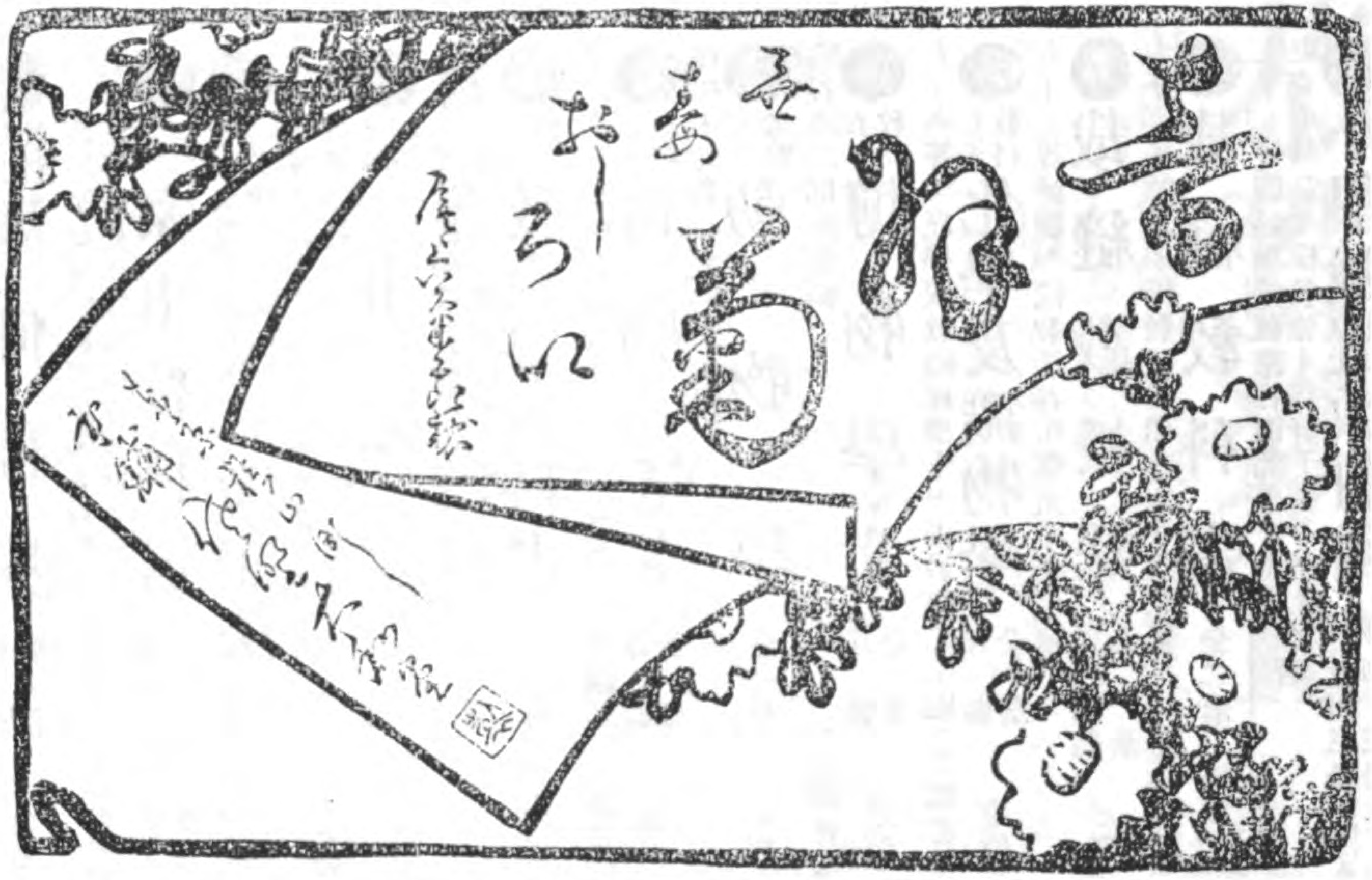
● 學習院教師岡倉秋水先生著
新編女子習畫帖（文部省檢定濟）一二卷定價各金十七錢 三四卷定價各金二十錢 五六卷定價各金二十八錢

● 廣島縣高等女學校教諭吉田信太郎先生編
女子唱歌集 第一集 洋裝全一册 金四十五錢

● 女子高等師範學校教授關根正直先生編
女子教科適用 **中古文選** 和裝全二册 上卷金三十錢 下卷金二十五錢

● 女子高等師範學校教授三輪義方先生纂
女子教科適用 **中古歌選** 和裝全一册 定價金三十五錢

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





定價○金五十錢○金廿五錢○金十五錢○金十二錢

女鑑
第拾四年
第壹號

明治三十七年を迎ふ

東天紅の聲に喚覺まされて、去年の名殘りの夢より起き、盥嗽して机に對へば、天未だ全く明けずと雖も、曙日やうやく光を放ちて、瑞氣の四方に靉靆たるを見るぞうれしき。目出たし、新年の光景。盛んなるかな、昭代の恩德。樂しきかな、聖世の臣民や。誰か謹みて祝賀の意を表せざらむや。

然りと雖も、熟ら思ふに、明治の昭代に向つて、最も多大の感謝を呈せざるべからざるものは、雲井に近き貴顯の方々にはあらず、麟閣に名を留めたる佐命の元勲にはあらず、盛名赫奕たる名士にもあらず、勳章燦爛たる軍人にもあらず、博識なる學者にもあらず、巧妙なる文士にもあらずして、寔にわが一般婦人社會に外ならざることを知らざるべからず。そは明治の昭代に方り、始めて數百千年來の舊習を蟬脱して、大なる新面目を開きたるは、今日の女子にして、是れ全く

昭代の厚き恩德より生じたる教育の効果に外ならざればなり。

遠き古昔は暫らくいはず、近く德川氏の時代に於て女子の教育として見るべきものとては、倫理道德の教科書として、朱子の小學と女大學とのありしのみ。諸書修辭の教科書としては、物語日記及び多くの歌道の書籍ありしのみ。而も是等の教科書と雖も、上流社會及び篤志の女子が、僅かに朝夕洒掃應對の暇を以て、習ひ覺ゆるに過ぎずして、一般普通の婦女子に至つては、いろは四十七文字を習ひて、一片の書簡をさへ綴るを得ば、乃ち足れりとして、それより以上を求めざりき。否殆んど求むること能はざりき。この時代に於て、女子の位置の甚だ低くして、安全ならざりしも亦何ぞ異しむに足らんや。されば七去三從なる慘酷なる法律は、眼前に横はりて朝夕を安んずる能はず、女菩薩如夜叉の不法なる比喩は、上下の社會に通じて、殆ど敬せずして遠ざくべきものとせられたりき。アヽ又た何たる不幸なりしとするぞ。

時を距る僅に三十有餘年にして、かゝる時代に生じたる多くの現象は全く過去の夢と消え去りぬ。上下を論せず、貴賤を問はず。すべての女子は皆な普通教育の門に入り、志あるものは、猶進んで高等の教育をも受けて、その位置品格を高うするを得るに至りたるは、明治の昭代が今日の婦女子に與へたる特殊の恩惠にはあらずや。

故に今日の女子は、この昭代に向つて、感謝すべきのみならず、必ず意を致し心を盡して、之

に報ずるの覺悟なかるべからざるなり。何となれば雲井に近き方々よりも、麟閣の功臣よりも、軍人よりも、學者よりも、及び其他一般の人々よりも、特殊の恩遇を蒙りたる、わが婦女社會は以上の人々よりも、一層奮勵して、その効果をあらはすべき義務あればなり。

回顧すれば、予輩が始めて女鑑を發兌して、我國婦女子の爲め、及び女子教育の爲に、一片の微衷を盡して、十有餘年の久しきに及び、以て今日あるに至りたるは、亦是れ讀者諸嬢と均しく昭代の恩澤に霑ふを得たるが爲に外ならず。女鑑たるもの向後愈よ發奮して、讀者諸嬢と共に、わが女子社會の發達を期するにあらずんば、何を以てか此の昭代に答ふるを得べき。

予輩不敏豈敢て指導の責に任ずといはんや。今後益々碩學名家に乞ひて、その卓論高見を公にし、傍ら予輩の意見をも陳べて、大方の敎を求め、聊か予輩の任務を盡さんことを欲するのみ。微衷幸に讀者の諒とするところとならば、庶幾はくば萬一の裨益を女子社會に望むことを得ん歟。予輩の幸又何ぞ之を過ぎんや。

今は玆に三十七年の元朝を迎えて、予輩の感ずるところ期するところ實に斯の如し。思ふに讀者諸嬢も亦予輩と感を同うせらるべきを信ずるなり。乞ふ共に拍手して聖世の萬歳を祝し、次に女子教育の前途を祝して、昭代の恩德に答へ奉らんことを誓はんかな。

論叢

勸學の說

華族女學校々長男爵　細川潤次郎

古人學問を勸むるの語甚多くして、一々之を擧ぐるに遑あらず、其中古文眞寶の書などに載せたる勸學の文の如きは、如何にも學問を勸むるに相違はなけれども、何故學問をせねばならぬかと謂ふこと、即學問の効用を說くこと詳ならず、譬へば眞宗皇帝の勸學文に、

富ㇾ家不ㇾ用ㇾ買二良田一、書中自有二千鍾粟一、安ㇾ居不ㇾ用ㇾ架二高堂一、書中自有二黄金屋一、云々

仁宗皇帝勸學文に、

朕観二無學人一、無三物堪二比倫一、云々

司馬温公勸學歌に、

養ㇾ子不ㇾ教父之過、訓導不ㇾ嚴師之惰、云々

柳屯田勸學文に、

父母養二其子一而不レ教、是不レ愛二其子一也、雖レ教而不レ嚴、是亦不レ愛二其子一也、父母教而不レ學、是亦不レ愛二其身一也、雖レ學而不レ勤、是亦不レ愛二其身一也、云々

王荆公勸學文に、

讀レ書不二破費一、讀レ書萬倍利、書顯二官人才一、書添二君子智一、云々

白樂天勸學文に、

有レ田不レ耕倉廩虛、有レ書不レ教子孫愚、云々

朱文公勸學文に、

勿レ謂今日不レ學而有二來日一、勿レ謂今年不レ學而有二來年一、日月逝矣、歲不二我延一、嗚呼老矣、是誰之愆、以上の語の如きは、學問を勸むるに非ざるはなく、學問の人に利益あることを述べたるを見れば、多少學問の効用に涉れりと雖も、未だ之を詳にせず、余は學問を勸むるに付き、學問の効用偉大なることを切實に說明せんとす。

學問の効用を大別して二つとす、一は道德上の効用にして、一は智識上の効用なり。道德上の効用は別に喋々を須ゐずと雖も、君に事ふるの忠、親に事ふるの孝、朋友に接するの信の如き、其他倫理上の原則は之に合する者を善とし、之に反する者を惡とするの類、人生の行爲の標準となる者なり、此標準は人性の固有に本づき、古聖賢の格言にて、一定不變の者となれるのみならず、古人の嘉言善行にて之を證明したる者なり、學問をする者は、其師より教を受けて、心に銘刻し、又之を行爲に顯はすを以て其本分とす、此本分を盡す者は、自然に人に愛せられ人に敬せられて、幸福の多き人となるべし、此等は至て明白なる

ことなれども、人生の行爲は、千差萬別變化無量なる者にて、動もすれば事疑似に渉り、善惡を決し難く從て進退に迷ふが如き場合なきに非ず、此の如き場合に至て、信に學問したる人ならば、自己の判斷に由り、猶判斷に苦むことあらば、先生長者に謀りて決する所あるべきも、無學の輩は此の如き大事とも心得ず、輕擧妄動して過惡に陷ゐること少とせず、遂には社會に擯斥せられ、政府の厄介となる者も少しとせず、此の如く人類の相分るゝは、學問の有ると無きと、又學問の足ると足らぬとに由ること、思はる慎むべきことにあらずや。

此の如く論じ來るときは、無學の人若くは學問の十分ならぬ人は、悉く善人に非ざるやうに思はるれども此れ決して然らず、古人の所謂性本善なりとの格言に違はず、一字不通の人たりとも其人の心術も行爲も悉々道理に合して、聖賢にも讓らぬこと其例少からず、余は無學の人の善良なることは、有學の人の善良なることに毫髮も差違なしと信ずる者なり、是等の人の爲には、學問の効用も少きやうに思はるれども、是又然らず、是等の人は各其の信ずる所の道に從ひ、其身を善くすることに付ては、已に十分なれども人の上に居て廣く其道を行ひ、以て天下後世の模範となることは、多少學問のある人に非ざれば能はず、譬へば無學なる田父野老の如き、孝悌仁恕の道を實踐することには餘りあるも、一地方の人民の上に居て其道を行ひ、以て他人を善くすることは能はざるべし、況や之より貴き地位に居て以て之より大なる職分を盡さんとするに於てをや。此點に付て之を見れば、無學の人も有學の人も善良の程度は同じながら、其道を行ふの範圍に至らば廣狹の大差なきこと能はず、學問の効用少しと謂ふべからず、故に學問は善惡の途中に迷ふ人の爲に必用なるのみならず、極々の善人の爲にも其道を行ふ爲には猶必用なりとす、論語に、子夏の語に雖レ曰レ未レ學、吾必謂ニ之學一矣、とあるは語弊なきに非ず。

智識上の効用に至ては、道徳上の効用より更に明白なる者なり、譬へば字を識らざる者は帳面も手紙も讀むこと能はず、又帳面手紙を認むること能はず、算數を知らざる者は、間違なく金錢の取引をなすこと能はず、此の如き尋常の入用すら猶辨ずること能はず、況や之より高尚なる事に於てをや。縱令ひ善良なる性質にて勤勉の一慣習ある人にもせよ、讀み書き十露盤の法を知らざる人は、終身鄙賤の業を執りて其の境界を脱出すること能はざるべし、苟も人の上位に居て或る部分の人を支配するが如き職務を執る者、郡區書記若くは村長の如き者たりと雖も、讀み書き十露盤の法を知らずしてなし得べき者に非ず、之よりも高尚なる職務に至ては、單に讀み書き十露盤の法に止まらずして、更に高尚なる學問を要すること勿論なり、醫者となる者は醫者の學問をせねばならず、辯護士となる者は法律の學問をせねばならず、理科文科を以て身を立てんと欲する者は、理化學文學を修めざるべからず、經濟に志ある者は經濟學を修めざるべからず、陸海軍に從事する者は陸海軍に關する諸科を修めざるべからず、一體高等文官とならんと欲する者は、高等なる教育を受けて特に法律學を修めざるべからず、其中外交官の如きは外國語を修め、親しく外國人と談話することを得て、且其の文書を讀み得るを必用とす、官人の中其の地位愈高ければ其學問の範圍愈々廣からざるを得ず、從て其の講究する所愈々精密にして愈々困難ならざるを得ず、啻に之のみならず、農には農學あり、工には工學あり、商事の爲には、商業學校、高等商業學校の設もありて、各其の講究すべき所より總て之を言へば、此の世界は學問ずくめにて、學問の多少、熟不熟にて人人の資格の由て定まる者と謂ふことを得べし、此點に付ては學問の必用なること最も明白なれども、古人勸學の語中、是等の事を詳にせざる故、淺近なることを厭はず、喋々各位に告ぐること此の如し。

以上は人たる者の當に勉むべき、學問の効用の大略なり、然るに人間處世の大部分は、主として男子の其

の衝に當る者なれば、女子に在りて男子と同一の必用なきに似たりと雖も、女子は男子を助けて其の家を維持する者なれば、男子に准じたる素養なかるべからず。況や女子も不幸にして其の夫を失ふが如きことあらば、單身獨力にて其の家を維持する場合少からざるに於てをや。

（完）

女子高等教育に關する予の意見

普通學務局長　澤柳政太郎氏談

近頃。我國の女子中等教育は非常の發達である。三十一年には、全國高等女學校の數漸く十餘個であつたものが、今は八十餘を數へ、而して、此他これと類似のもの、或はこれ以上のものも立られてある。女子に關しては甚だ不親切で、從つて、女子の中等教育などは、往々輕々しく取扱はれて居た我社會に、かゝる發達を觀ることは、洵に喜ばしいことである。希くば益々この趨勢を助長して、女子中等教育を普及せしめたいものである。

此に一の疑問がある。それは、今後女子に高等女學校以上の教育を與ふる必要がある乎如何かといふとである。

之を男子の方に見れば、帝國大學、高等學校、高等實業學校、或は高等師範其他澤山に、專門學校がある。然るに、女子の方にては、高等女學校以上の學校はない。女教員養成の高等女子師範を除いた外は、高等女學校が止りである。然れども、女子教育は、此位の邊で可いといふ譯であるか、男子の教育の有樣

からいへば、女子にも中等教育の上、尚高等教育を與へねばならないやうになるが、此に疑問が存するのである。

高等教育は男子に必要であるからとて、必らずしも女子にもとはいへぬ。自分は常に女子の高等教育の必要があるならば反つて不幸なる女子に必要であつて普通の女子は之を要せないと信じて居る。

男子が高等教育を受るは、其職業を採る上に於いて必要である。世の進歩するに伴れて、高等なるといふ學問の素養がなければ、世に立てなくなる。大學校を出る人々に見ても、其一生學問の爲に研究するといふは甚だ僅少で、多くは必らず高等なる職業を採るためである。其他諸多の各專門學校を出て來るのも、皆其爲である。男子の高等教育は、斯く世と伴れ合ふて生存競爭の舞臺に立つ上に於いて必要である。然れども、女子に至ては、甚だ境遇を異にして居る。女子も男子と同じやうに、他に嫁することなく獨立自營して行くならば、それは男子の如く高等教育の機關が必要である。

然るに、何の方面から觀察するも、女子は、通常他人に嫁して妻とならねばならぬ。妻となりて、男に内助を與へ又子供を育てる大任を持つて居る。從て自分が進んで、職業を採り自活の活計を營む必要はない。之に反して男子であれば、一家の活計を立て、妻子眷族を扶養する義務がある。女子は其夫や子供を扶養する責任はない。

されば、女子に高等教育といふことは、不幸の人で嫁することの出來ないもの、或は家族の都合で、父母を扶養せなければならぬ境遇にあるものに必要である。かくの如き女子は不幸の人で自分はかくの如き女子の成るべく少ないのを希望する。

世間では、克く女子の高等教育をいはるゝが、自分はかゝる考へよりして、一般女子の上には高等教育

の必要なしと斷言する。

尤とも、職業のためではなくして、單純に、智徳を磨き、品性を善美にするといふ點からして、今後は今の高等女學校以上の教育を必要とすると云ふなら強ち反對ではない。自分は何時迄も高等女學校の程度で滿足せんとするものではない。勿論世の進歩と伴れて其以上の教育が必要と認むる時がくると思ふ。けれども、それにしても、其性質に於いては、些とも高等女學校と性質の違はない、平たくいへば、今の高等女學校を高めて尙一層高い普通教育を授くる所とすれば可いのである。若しさうでなくして、高き專門教育を與へるといふが如きは、どこまでも同意しがたい。

專門教育といふは、智徳を磨き、品性を美しくするのが、其目的ではない。されば、一科の學問技藝を授くるのである。專門教育は即ち職業教育である。

故に女子が今の高等女學校では、滿足せられないといふことになれば、即はち其以上を要求し、而してそれが必要と認めらるゝ場合になれば、高等女學校の程度を高めて、一層高い普通教育を授くる所とする外はない。

かゝる意味で、女子教育の程度を高くするので、專門教育といふ意味の高等教育は不必要である。唯前にもいつた如く、ある事情に居る不幸なる人方が獨立自營のため此等の教育を受て職業を爲べきである。

世の中には、女子の採る可き職業は多くある。而して其中で、格別の智識技藝を有せざる職業即ち下婢の如き、工女の如きは別として、教育を要する職業に付いて考へるときは女子に最も適當なるものは教員である。教員は、先天的に女子の採るべき職業の如く思はれる。

小學校教員の職務は、非常に強壯なる體格を要するでもない、學問といつても、普通教育が立派にあれ

ば澤山である。勿論高等女學校以上になれば、それは多少或る專門教育が必要である。日本にては小學校の如きは、未だ女子が尠ないけれども、將來は益々女子教員が多くなるであらうと思はるゝが、女子が小學教員になつて、男子が適當なる他の職業に向ふやうになることは、甚だ可い事である。殊に女子の報酬は男子よりも低いから、町村の財政上からいつても可い事である。女子の小學教員增加は、世界の趨勢からいつても善い。日本にては、女子が新らしく職業を需むる必要ありといはゞ、自分は切に小學教員たるを勸むるものである。

亞米利加にては、高等女學校は勿論男子の中學校にも女教員を充てゝ居る。日本にては、高等女學校は多く女子を充つることゝなりつゝあるが、まだ其數は少ない。漸々增して行きたいものである。

其外、文字繪畫或は醫師に於いて、各々其長とする所に從つて、就職するが可い。けれども、斯る所に女子の長とする所はあらうが、教員の場合の如く適任とは言ひ惡くい。又此頃は銀行會社に女子を用ゐることが流行するが、其職務は、何も實業專門教育を受けて居る必要はない。普通教育があれば宜しいのである。農業でも、養蠶でも、養禽でも、女子を要するが、これとても、專門的教育を受けて從事するといふほどのことではない。勿論養蠶には種々の智識を要すれども、女子が其業に從事して勞役に服することには格別の專門的智識を要さない。

近時女子の實業教育といふ聲があるが、それらは餘程考ふ可きことで、輕々しく、斷定せらるべきものではない。

女子の職業といふものは、恁なやうなもので、男子のとは、甚だ趣きを異にして居るものである。されば男子が受る專門教育を以て、直ちに女子にもといふは甚だ間違つた考へといはねばならぬ。



要するに、女子教育は、今日の如くして進歩させ、而して、今一段高くしたい時は、尚一層高等なる普通教育を授くることゝす可きも、専門的の高等教育を與ふるの必要はない。唯不幸なる、或はある事情の女子が、其専門を選ぶべきで、普通の女子は高等なる普通教育を受け以て其智徳を研き其品性を高尚にすべきである。女子と男子とは此人間社界に處する上に大に其職分を異にして居る。従て男子に必要なる専門の高等教育は女子には先づ必要がないといつてもよい。

（完）

慈善事業に從事する婦人の心得

錦鷄間祗候男爵　松平正直氏談

茲に『慈善事業に從事する婦人の心得』といふ事に就て所感の一端を話して見やうと思ふ。此の慈善といふ事は、畢竟人の德義心に訴へて、政治法律に羈束せらるゝ以外に立て、無告の窮民又は小兒を救育し、廣く社會の公益風敎を補持する事をいふので、之が即ち慈善事業の趣旨である。之に對して男子が分擔して爲すべき事柄も夥多あらうけれども、此には婦人の方面の事業を主として說き、男子の領分に屬する問題の研究は姑らく他日に讓ることにしやうと思ふ。

婦人の手に賴りて經營せらるゝ慈善事業といふものは、日本の現今の狀態を觀察すると、まだ頗る幼稚に屬するものであつて、眞に之が婦人の力に成りたる慈善事業なりと稱すべき程のものは寥々たるものであるが、世運の漸く發展するに從ひ、近年ポツ〳〵起つて來たのは誠に慶賀すべき事相である。ソコで予の希望する點は、凡そ此の慈善事業に從事する婦人が、社會公益、慈善道德の事を行ふに就ては、或は人の急を救ひ、或は人の疾を治し、或は老幼婦女子の生活し得ざるものを養育してやる等其の方便は種々多岐に涉たるにせよ、其の根源たるや皆善意誠心即ち人間の德義心より起つて來るべきことで、決して一個人又は一團體の利得を目的としては相濟まぬといふ事である。故に苟も斯の事業に從事する位な精神を存する人ならば、婦人であつても、又男子であつても、慈惠救濟を世に施すことを以て、一意自己の天職と心得て之が爲め力を盡す覺悟をなすことが必要である。

歐羅巴邊で各種の慈善事業に從事し居る人は如何なる人物なりやと見るに、皆德操が確固で、己れの信ずる所を十分守て、其の事業に盡瘁する人物のみで

ある。何を守るかと云ふと、夫れは日本人も知る通り即ち宗教である。宗教道徳が百行の因て動く根本となつて居るのである。歐米人は一體日本人よりは宗教心に富み、安心立命の地を皆此に求めて、チャンと一つ據る所あり、其信念が基礎となりて慈善事業といふものも自然發達し、縱令如何に困難なる事が起り、又如何に煩劇なる場合に出逢ひ、何等の事業に當つても屈せず、自己の本心を喪ふことなく、誠心誠意其の業務に盡す爲め終に輝くべき偉功を奏することも出來る理である。彼國に於て慈善事業とか、社會改良とかいふもの丶成効する根抵は實に此處に在るので、人間は腦底に牢固不拔の精神さへあれば底事でも成らぬといふ道理はない筈だ。然るに我が國の婦人はどうかと云へば、設令宗教を信ずると云つた所が、形式のみの宗教家にあらざれば、死後の極樂往生を念ずる位にて、眞成なる宗教家は一朝一夕に求め得らる丶ものでない。又婦人の教育も追々進歩致したるは相違なきも、淑徳美風の素養を積むには是又一夜造にて出來るものでない。然れども苟も慈善事業に力を竭さんとする婦人は、其事業發達の原素たる道徳心と云ふものを平素より極力涵養することを怠つてはならぬ。若し道徳心が缺けて居ると、折角高尚なる事業を經營しながら、其仕方に就て却て惡評を受けたり、又は種々なる誤解を生ずるのみならず、時に或は他の事業の妨害となりて公益慈惠の本旨を失ふやうな事なしとも限らない。

右は現今我國に於て慈善事業に從事する婦人、從事せんと欲する婦人達の特に注意して欲い點である。

慈善といふ事は、事柄が善いものだから、慈善を行ふと云ふと、人咸慈悲善根を施すもの丶やうに思つて居るが、飜つて其の裏面を窺へば、或は慈善事業は形式にして、婦人に厭ふべき行爲、嫌ふべき風評なしとも保し難く、萬一にも其間に嫌惡すべき事實がわつたならば如何にも殘念な次第で、將來婦人が此事業を發達せしめて行くに就て瑕瑾となる事なれば深く戒心を加ふべきである。昔時は日本の婦人は、

貝原益軒が著した女大學のやうなものを淑徳涵養の典範となして、兎に角風敎を維持して來た。今日に及んでは女子敎育の度が大に進歩して居るから、舊來の如き女大學のみにては、個人の德性も、社會の秩序も保持する譯に行くまいけれど、さればとて唯だ無暗に高妙なる學術ばかり研究して試た所で德操の修養が備はるものではない。然るに慈善事業杯といふものは、元々人間の道德心に訴へて爲すべき性質のものなれば、之に從事する婦人には學術よりも道德の方が寧ろ必要である。如何に高尚なる學藝に達しても、斯業の原動力たる德性に於て缺くる所ある婦人は、慈善事業に從事して世に立つべき資格が無いものと謂はねばならぬ。慈善事業といふものは如何なる場合に於ても個人の道德心を離れて社會に存立する事の出來ぬものと思はれる。

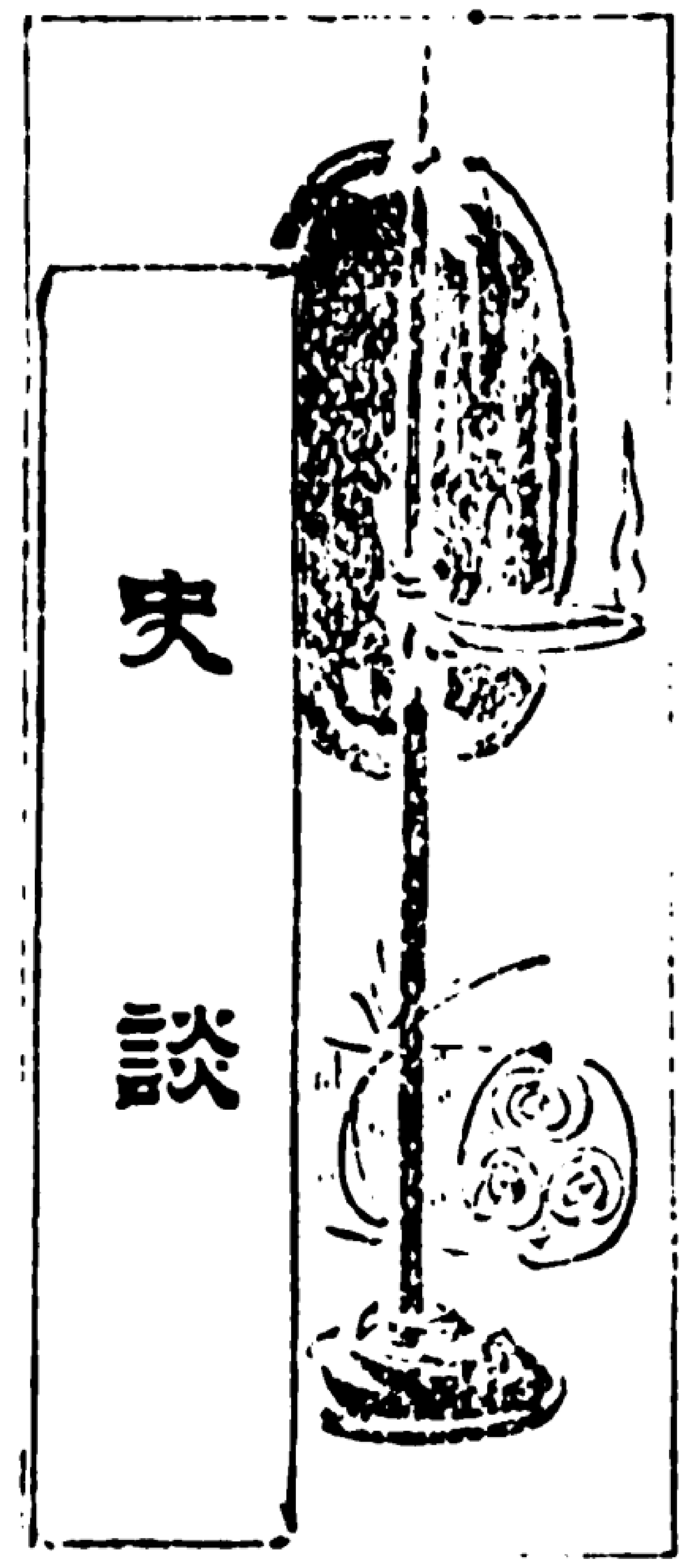
現今我國に於て婦人の經理し居る慈善事業の狀態いかにと問ふに、或は感化を主旨とする學校あり、或は育兒を目的とする協會あり、又愛國婦人會とか、孤兒院とか、慈惠病院とかいふものも設けられ、時としては慈惠救濟を他に施す一方便として慈善演劇慈善音樂會等の催しなど、兎に角其事業を發達せしむべき手段は隨分手廣く研究されて居る。從て婦人の勢力が社業に活用さるゝことも愈々滋くなつて來たは宜いが、唯だ予の遺憾とする所は、世の所謂る慈善事業なるものが、其本を失ふて末に流れ實踐よりも外觀を裝ふやうな傾向あるを免れぬとである。之では折角の事業も役に立たぬ。却て國民の風俗、社會の德義が紊亂せりといふ事を示す證據とならぬとも限らぬ、近時女子に向て高等敎育を施さんとする大學が起つて來たが、之を一方の文明の形式より見る時は、或は大に悦ぶべき事相かも知らぬけれど今日の日本の時勢に照して考へると、女子大學が設立されたりとて、夫れで予は感服することも滿足することも出來ぬ。何故ならば、婦人の地位勢力と云ふものは、所謂本清くして末澄むてふ古訓の如く、學術技藝の練習よりも、先づ其本領たる品性德操の

琢磨を重んじ、之が修養十分ならざるときは、風敎を維持することも權力を擴張することも何も出來難いと信ずるからである。乍遺憾日本人には未だ道德觀念の基礎となすべきものが無い。唯だ傲慢つて高尙なる學藝を修めて智識豐かになれば德義も自然進むべしといふ理想一遍で遣つて見た所が、ソンな理想は却々實行の出來るものでない。願くば學藝よりも德操の實踐を以て敎育の主眼となして將來の女性を養成するやうに致したいものだ。學識の程度の進むと同時に德性も高まり、二者相扞格せざる樣に努むる、是れ社會敎育上又女子敎育上遺るべからざる要訣ではあるまいか。我國文明の進步中、一部は多少速く進み、一部は後れて進み、諸般の事業程度の一律に動き得ざることは當然なりとはいへ、前段說示せる諸點の如きは、婦人の修業上又處世上餘程大切で深く留意すべきことである。女子と慈善事業との關係に就き、予は先づ斯ういふ樣な意見を有つて居る。

歐羅巴邊りで慈善事業、敎育事業（主もに慈惠的敎育事業）に從事するもの〻多數は實に婦人である。予の實見せる所に據れば、英國抔に於ては鰥寡孤獨即ち親なし子、棄兒、貧窮にして養育することの出來ぬ子供等、斯ういふ種類のものをば、悉く公立又は私立の救濟院に收容して、大抵十八歲頃まで敎育を施し、之を終ると更に獨立の職業に就かしむるやうな方針を執つて居る。處がかゝる事業の經營者又は擔任者は皆女性である。又貧民病院とか、施療病院とか、出獄人保護會とか、惡少年感化學校とか稱するもの、多數設立されてあるが、此等の業務に力を盡て居るものも矢張婦人が多く見ゆる。而して此等多數の婦人は皆孰れも十分活動し居ること〻て、其事業着々として進步し匆々感心なものだ。特に爰に記すべきは、其人々の精神の純潔で且堅固で、自恃獨立の念極めて强く、腦底一の信念なき我國の婦人抔とは其性行の上に雲泥の差異あることを發見したことである。例へば彼等が客を學校病院に案内する

時の如き、男子よりは一層親切に、一層周到に、參觀者に對して不愉快又は不滿足を與ふるやうなことは決して爲ない。予は一日或貧民學校を訪ねて見たが、待遇方頗る鄭重なるもので、教室、運動塲、書籍室、事務室等は勿論、生徒の寄宿所まで隈なく示して呉れた。然るにかゝる案内者より教員に至るまで、一校の事務は殆ど婦人の手に依て管理せられ、男子は女子よりも低き職務に服して其補助を爲すに過ぎなかつた、又貧民體育所と稱する所へも往つて參觀したが、案内者は之も矢張り婦人であつた。予は此等婦人達の性行動作につき熟々考へて見たが婦女の生命とも稱すべき貞操廉耻の如き毫も紊れさうな模樣もない、其上いかにも懇切に事業に盡す工合は、どうしても何か一つ我心に據る所ありて、其信念が自ら慈善心の發動を助けて、獻身的に各自の事業に盡さしむるにあらざる以上は到底出來ぬことと思はれた。彼等が甘んじて身を自己の業務に委ねる胸字一點の私慾邪念を留めざることは眞に感稱するに足る。かくてこそ慈善も始めて慈善の目的を達し得べく、世人も其の効績を認めて賞讃することが出來る次第である。予は當時から思うて見て來たが、願くば將來我國の慈善事業に付力を盡す婦人も、確固不拔なる理想の下に獻身的精神を養ひ、之を以て名聞又は生計の犧牲に供するが如き事なく、一意天職の實行と心得て十分骨を折つて貰ひたいものである。夫れに就ては、各人職業又は地位の如何に拘らず、皆自己の腦底に何か一つ理想即ち根底を築かなければならぬ。此根底は一朝一夕に之を作ることは困難だけれど、婦人の本分たる淑徳貞操の修養ならば、教育の方法其宜しきを得れば必ず其目的を達することを得べしと信ずる。予は平素かういふ意見を持つて居るものだ。尙ほ言ふべき事も種々あるが、今日は先づ此位にして詳細は又他日お話する時機があらうと思ふ。

（をはり）



グランビー夫人

文學士　濱田紅於

新春の初刊には、めでたきものなものするこそ、ふさはしかるめれど、想な飾り文を作るは、別にその人あるべし、然れども世は文藝を輕んじ、美的趣味の世人に疎んぜらるゝや久し、常識の圓滿のみ偏重せられて、天才の蔑如せらるゝは、現代社會の大缺陷と云ふべし、讀者諸子は、春秋正に富み、前途の洋々たると春の海の如し、常に意をこゝに留めざるべからず、今日の孃子は、他日の良妻賢母たり、この故に今の時に覺悟せざれば、世は永久に沒趣味に終らむ哉、古人曰く、一年の計は一月一日に在りと、予も亦この綠旨を繰返さむと欲す、是れ予が英國の女流畫家、グランビー夫人を傳せむとする所以なり、然れども予やもと文學の人にあらず、信[illegible]の筆、或は諸子の耳目を涜すものあらむ、たゞ予が美的趣味の挑發と、天才崇拜とについての微衷を酌諒せられよ、若し夫れ予が拙稿が、新春の花の山を飾る枯木ともならば、誠に望外の多幸なり。

數年前、英京ロンドンの新美術館に、優雅なる肖像畫の逸品顯はれぬ、筆者を「ヴァイオレット、グランビー」と云へり、畫中の人物は皆英國當代の名士にして、故「サリスベリー」侯あり、現首相「バルフオーア」氏あり、その寫生の妙は神に入り、輕げに描き去りし一點一畫は、よくその人々の特徴と品性とを發揮しつくしたり、されば他の諸作は悉くこの逸品に壓されて、さながら後宮の寵を楊貴妃に奪はれし、三千の宮女の如く、觀客は常にその前にのみ堵をなして、賞讚の盛なるは、朝日に匂ふ櫻花にもたとへつべく、他の諸作は霜の朝の枯野に似たりとかや。

この逸品のかく興味深きがごとく、その筆者の人格こそ亦をかしきものなれ、夫人の幼名を「ヴァイオレット、リンドセー」といひ、陸軍少佐某氏の令孃

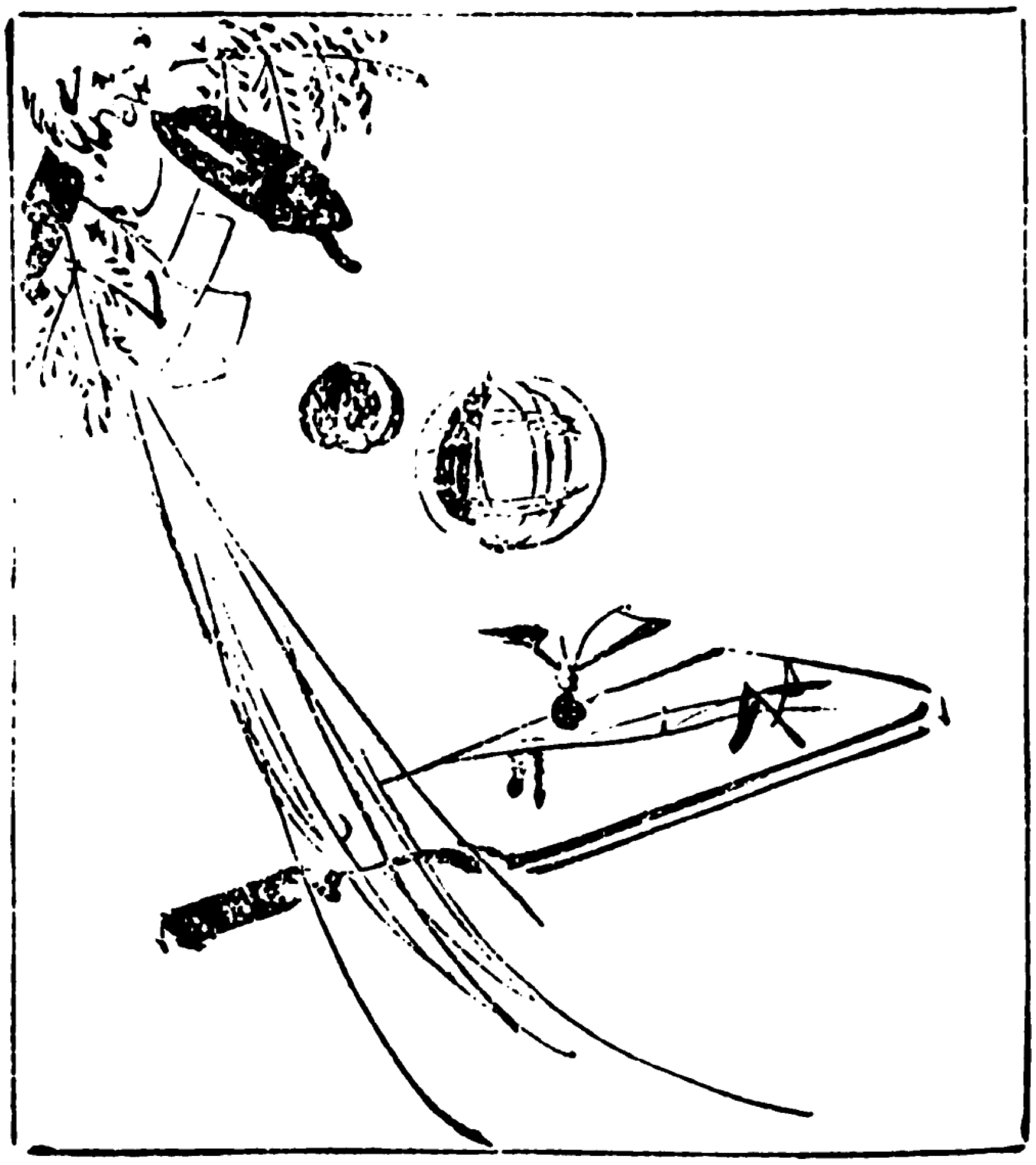
にして、後ち「グランビー」侯爵に嫁ぎしなり、「グランビー」侯爵も亦現代の一名士にして、臺閣に列しては政治の樞機に與かり、下院に出でゝは政黨の雄將たり、この良人にしてこの夫人あり、何ぞ必ずしも孟光伯鸞を羨まむ、況んや夫人の才色兼ね備はれるをや。

夫人の交際の上下に普ねきは、著しき事實なり、その親友の中には、雲の上人も鮮なからず、ローン親王の妃「ルイ」は、髫年の昔より、講道の交こまやかなり「ビーヤホーム、ツリー」夫人は、一女優なるが、夫人と振分髮の誼あるがゆゑに、尙ほ膠漆の交あり、夫人はもと精神會の會員たるを以て、專ら精神を重んじて、外形(社會の階級の如き)を輕んず、その友情の中庸を得たる所以なり、夫人また彫刻家畫家詩人と友とし善し、たゞに交を訂するのみならず、夫人はこれらの友人の製作を批評し品評し、彼等にはこよなき鼓吹なりき、かくてこそ交友の道をつくすと云ふべけれ。

夫人は美人中の美人にして、絶世の佳人と云ふとも、諛言にはあらじ、その美容は都雅にして神聖なり、溫和なる愛嬌の露を含みたるは、かの名匠の描きたる、天女の像に擬らふべし、長身にして清癯なる思慮と精神とに充ち滿ちたる面相、全身の白きは精好なる象牙も物かは、房々しき金髮、愛々しき碧眼、かくて夫人のみやびにして、氣高き容貌を想像すべし、かの婀娜妖艶の賤しさは、夫人の全體より見出すべくもあらず、これ絶世の佳人と稱する所以なり。

夫人は技術家としては二道に長けたり、その繪畫に巧妙なるが如く、意匠に堪能なり、夫人はロンドンにおける美装者の一人なれども、多く他人の力を借らざりき、すなはち親らその上衣を意匠せり、然れども袖の濶さを喜ばざりき、これ擧動の敏活ならむを思へばなり、又古畫をあさりて上衣帽子を謄寫せしこともあり、これその卑俗に流るゝを厭へばなり、夫人の色彩配合法は頗る大膽なれど、未だ多く失敗せしことあらず。

かくて夫人は外にありては、多くの友人に應接し、内にありては、揮毫と意匠に勉めたれども、尙その子女訓育の餘裕を有せり、その地方に在る時は、往往その愛兒を携へて、騎馬を郊外に試むることもあり、夫人が蒲柳の體を擁して、徐ろに鞍に凭り、巧に手綱かいくるさまは、甚だ人目をひきしと云ふ、夫人の如きは能く勉め又能く遊ぶものと云ふべし、かの粉黛臙脂にうき身をやつして、方丈の深窓に閉ぢこもれるもの、宜しく此の夫人に學ぶ所あるべきなり。



終に臨んで、夫人が最も得意とする、繪畫の技倆について述べむとす、夫人は未だ嘗て特別なる畫術の敎授を受けしことあらず、その技倆は實に天才に因るなり、且つその運筆の迅速なるは、電光石火にもたとへつべく、十分乃至十五分にして、能く一傑作を完成し、又能くその眞相を寫出し得しと云ふ、故にグランビー家には寫眞機を活用すべき餘地なきなり若し夫れ夫人の居間を訪ふものあらば、四圍の楣間壁上、悉く繪畫を以て掩はるるを見るべし、夫人は又男女の俳優が、舞臺の上に躍動せる際に於てすら、その神速なる敏腕を振ひて、かれ等の似繪を作ることありかの有名なる女優「エレン、テリー」の如きは、種々の形相に打扮ちて、夫人の畫題となりにき、新美術館に掲げらるゝ三幅對の肖像畫は、夫人が最も急促に描きし傑作なり、その人物は故「サリスベリー」侯

現首相「バルホオーア」氏、及び下院の雄辯家「ピール」子爵なり、これこの三人が各「グランピー」侯を訪づれし時、夫人がこれを寫生せしものにして、輕ろげに運びし筆の端に、自ら入神の妙ありて、寫生畫の最上品との譽高し、就中「バルフォーア」氏の肖像を以て白眉となす、又ある年ロンドンの某劇場にて「キングリーヤ」といふ戲曲を演ぜし時、夫人はこれを參觀しつゝ、各段の光景及び人物を寫生せりと云ふ、これらは皆夫人が非凡なる畫道の能力を顯はしゝ例なり、されば其の友人知己は日毎に夫人を訪ひて、その肖像を寫生せむことを願ひ、夫人も一々これをうべなひて、終日寧居の遑なしとぞ、夫人はまたアメリカ人の知己にして、かれ等夫人の好遇を被りて、感謝の涙にむせびしためし少なからず、米人「ダヴイス」なるものゝかつて「グランピー」邸に客たりし時、夫人その肖像を寫せしことあり、その畫は新美術館に陳列せられしと云ふ。要するに夫人は、技術家として非凡の天才あり、これ企及すべからず、されど主婦として子女の訓育に怠らず、交際家として博愛を旨とし、所謂管鮑貧時の交を辭せざるは、浮雲の榮華を誇る人々の龜鑑とすべし、讀者諸子冀は鑒みる所あれ。



學藝

更科日記摘撮

文學士　境野天華

平安朝時代の日記物語の中で、最も讀みごゝろよきものは何であるかと問はれたら、菅原孝標の女、橘俊道の妻であつた女性の書かれたものであると云はれて居る、此の更科日記を擧げるに躊躇いたしません、それは此の日記には到底源氏物語に見る雄渾なる筆致もなく又枕草紙に見る精彩なる筆致もありませんが、同時代の文學の凡てに免れぬ不醇不潔の分子、家庭の讀物としてまだ年端も行かぬ御婦人方の讀物としてはどうも成り兼ねる所があつて、是を讀むには相應に時代道德の智識と自己の確信とを要することゝ思はれます。獨り此の日記は例へば殆んど同時代の作物と見做すべき、蜻蛉日記、和泉式部日記などゝは違つて、作者自身の感想と事件を記する方法とが如何にも純潔、無邪氣でありて、平安朝時代の女性の面影を有りの儘に傳へて居り、それに其文章は前にも申した通り源氏、枕草紙には及ばなくとも又此の作者獨得の技倆も見えて居りて、如何にも後世から景仰してもよいと思はれる所が多く、諸孃の文藻を養ひ行く一端とはきつと成るにちがひないと思はれる所から、日記の中より、其の文章の殊に秀でゝ面白く、作者其人を思ひ浮べ、又作者の時代を想像するに都合のよい所丈を拔き出して、茲に少しく自己流の評釋を附することゝ致しました、明治時代には明治式の女性の思考方法があり、平安朝時代には又平安朝式の思考方法があつたとすれば、讀者御自身の心の中に兩者の比較權量を試みられるも面白いことだらうと思はれます。

○出立の條、

世の中に物語と云ふものゝあンなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、徒然なるひるまよひゐなどに、姉、繼母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところ〴〵語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、我思ふまゝに、そらにいかで、覺え侍らん。いみじく心もとなきまゝに。等身に藥師佛を作りて、手洗ひなどして、ひとまに密に入りつゝ、京に疾くのぼらせ給ひて、物語の多く侍ふなるあるかぎり、見せ給へと、身を捨てゝ額づきいのり申すほどに、十三になる年のぼらんとて、九月三日門出して、今立といふ所にうつる。

作者自身は京生れの者でありましたが、幼きより父の地方官となりて邊境にあるに從ひ、武藏野の奧に居り、今でこそ武藏は帝都の所在地、全國の首府のある所でありますが、此の時代では、田舍の田舍、寂しいとも、詫しいとも思ふて暮らし、何時かな花の都へと心の向ひて居たのは當然のことです。即ち日記の冒頭に「東路の道のはてよりも、なほ奧つかたに生ひ出でたる人、」とありますのも此等を指したことで、當時の人の心になり返りて考へて見ますれば、如何にもさうであつたらうと思はれます。それに作者は幼き時から、文學を好む僻があつて、いつとなく、母、姉などの其の方の話をして居られるのが耳には入る。殊に此の頃紫式部の作られた源氏物語の評判は中々のもので、其の中に光源氏と云ふ立派な方の話が書いてあるのを、母樣や姉樣が京都に居られた時分に讀んで居られたので、東の奧に來られてからも、頻りと其の話をして居られる。それがいつとなく、作者の幼き心を刺激する、兼々京都戀しと思ふて居る所へ、搗てゝ加へて此の好きな文學の話、堪まつたものではありません。あゝ行きたい、行つて見たいと思ふ心から、自然に佛にも祈られる。どうか佛の加護を得て、一度京都へ上りて見

たいと云つて、當時の風習である所から、作者自身の體と同じ身長の藥師樣を作りて、頻りと拜み、誠を籠めて居つたが、あら有難や願ひ叶ひて、十三になる年に住み慣れし東路を振りすてゝ京に上り、これから自由自在に今迄は只話に聞いて居た源氏物語其他の物を見ることが出來るやうに成つて來たと喜びを記したのであります。源氏物語を好んで讀んだことに就ては此の後にも所々に出て居て、日記の中では最も眼を引く個條と見へます。

年ごろ遊びなれつる所を、顯に毀ちちらして、立ちさわぎて、日の入際のいとすごく霧わたりたるに車に乘るとて、うち見やりたれば、ひとまに參りつゝ額をつきし、藥師佛の立ち給へるを、見捨て奉るかなしくて、人知れずうち泣れぬ。

前に直ぐと引續いて記されてある記事で、凡、人情の常として、今迄慣れて來た所、人物と今日を限り別れる事と思へば左もないことが名殘惜しく思はれる。況して非常に親しくした人物とか、年頃日頃住み慣れたる家を見棄つる場合に於て、茲に作者と同樣の感じをせぬものはなからう。さア今は愈出立と云つて、大勢の人達が、何かと噪ぎ廻はりて居る所を見、造作なども取り毀はして居る所を見、時も時とて日も暮れ、たゞでさへ物悲しい時に日頃どうか都へ行きたいと祈つて居つた等身の藥師如來にもお暇乞を申さんとて、佛間に立入りて見れば、嬉しくなくてはならぬ旅立の今更悲しくなつて來て仕方がないので、人の居ない所で、獨りしく〳〵泣き沈んだ、と云ふ如何にも素直に、詐らぬ女性の美しい所が見るやうです。

○

その夜は黑戸の濱と云ふ所にとまる、片つ方は廣やかなる所の沙子、はる〳〵と白きに、松原しげりて月のいみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし、人々をかしがりて、歌よみなどするに、

まどろまじこよひならではいつか見ん
くろどの濱の秋の夜の月

翠松白沙の好風景に對し、寢もやらず歌よみ明かせし風流が思はれる、黑戶の濱は下總にありとも、又上總木更津のそれよとも申すことです。再び來らんことはとても叶はぬことゝ思はれる。せめて今宵は此の立派な月を眺めて明かさう。黑戶の濱の秋の月よと云ふのが此の歌の意味で、短亭長亭路遙かなる時代の旅行の有樣が眼に浮ぶやうに書いてあります。此の時代の旅行には滊笛一聲の今日の旅行とは別種の趣があつたことが、想像せられるのです。

○

翌朝、船に車かき居ゑて渡して、あなたの岸に車引き立てゝ、おくり來つる人々、これより皆かへりぬ。のぼるはとまりなどして、いき別るゝ程行くも留るも皆泣きなどす。をさなき心地にも哀に見ゆ。今は武藏の國になりぬ。殊にをかしき所も見えず、濱も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、紫生など聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乘りて弓もたるすゑ、見えぬまで高く生ひ茂りて、中を別け行くに、竹芝といふ寺あり。

「船に車をかきすゑ」とあるから、川には橋が無かつたことが明る。此の處まで遙々と送つて來て呉れた人々も還り、互に別を惜しみて、泣きつ、泣かれつ、袂を分ちた時は、未だ幼かつた作者自身にも悲しかつた、是から先は武藏の國であつて、別に好い景色も見當らず、沙白く、美しかつた海岸も「こひぢ」と云つて、濃き泥土のやうな地層に代り、前のやうに松も無く、昔から紫草の生へるので有名な武藏野も、此の邊りにはそれも見つからず、只一面に蘆と荻とが生茂りて居るばかりで、いかにも物凄い有樣である。其の蘆荻の生ひ茂りて居る中を推し分けて、自分共の一行は行くことであるが、先達になりて行く人の持つて居る弓の尖端が僅に見えるばかり、さても詫しい旅行の道筋であつた。(竹芝と云ふ寺は、今の品川金杉邊の一帶を竹芝の浦と云へば其處等にあつたのであらうか。)

○

十二月の二日京に入る、くらく往き着くべしと、申の時ばかりに立ちて行けば、關近くなりて、山づらにかかりそめなる、きりかけといふ物したるかみより、丈六の佛のいまだ荒作におはするが顔ばかり見やられたり。

愈今日は京都に乘り込むと云ふことになつた。長の道中に疲れて、窶れて居る姿を都の人に見られるも恥かしい、暗くなつて行き着くやうにと申の刻(今の午後四時頃)から出發した、夜になりて京都に入ることに就ては土佐日記にも其例あり。即ち二月十六日の條に「夜になして、京にはいらんと思へば、急ぎもせぬ程に、月いでぬ。」とあり。是は當時の人の一種のたしなみと云つてよからう、關は逢阪の關で、其處に山の際に粗造なる板圍の如きもの(きりかけと云ふ語は源氏物語夕顔卷にも出でたり。即ち「きりかけだつものに、青やかなるかつらの心よげにはひかゝれるを云々」)とありて、其の上から丈六の大佛の未だすつかり出來上らぬのが顔ばかり見えておいでになる。

○

そこなる尼に春になりて命あらば必こん。花さかりは待ちつけよ、などいひて歸りにしを、年かへりて、三月十餘日になるまで音もせねば、

ちぎりおきし花のさかりをつげぬかな
春やまだ來ぬ花や匂はぬ

「そこなる尼」は嵐山に住む尼の上をさして云ふ。不定の人の命のこと故未來は云へぬが、若しや生き長らへて居たら復た屹度お尋ねいたす故、明年の春になつたら待つて居て下さいと約束して歸りたが、其の翌年三月も早や半十何日とか云ふ迄何の便りがないので、

(歌)かの御約束は忘れましたか、一向に花のお便りがないのは、貴方の所へまだ春は來ぬのでありましようか、花が咲かぬのでしようか。

(つゞく)

MRS. SUYE INOUYE, WIFE OE THE JAPANESE MINISTER PLENIPOTENTIARY IN GERMANY.

By A. Miyamori.

Those who take a pessimistic view of Japanese women and think they are too effeminate, helpless and ignorant to mix in society with European ladies on equal terms, will find that they are mistaken if they but glance at the case of Mrs. Suye Inouye, wife of the Japanese Minister Plenipotentiary in Germany. She is a type of the young lady of the upper class brought up under the new system of education.

Mrs. Inouye, the daughter of Count Inouye's sister, was adopted by the count and brought up in his home from her infancy. Count Inouye, who was zealous in introducing European civilization and an earnest promoter of education, perceived the vital importance of having his children educated properly. Accordingly the daughter in her seventh year was sent to Yokohama to be educated in the family of Mr. Lauder, the celebrated British barrister. Several years later when Count and Countess Inouye visited Europe, they took the girl with them to London, where she lived for a number of years with a respectable English family among whom she received a thorough European education. Her husband Mr. Katsunosuke Inouye who is the adopted heir of Count Inouye also studied some years in England when he was young; so that the husband and wife are a good match, both bred after the European fashion,—a remarkable couple in the Japanese diplomatic corps.

Mrs. Inouye possesses great linguistic talent. She speaks French with fluency not to mention English which she speaks as if she were born to it. As to the language of the country in which she is living, she is modest enough to say she is only a poor speaker of it; yet surely she speaks it better than most Japanese professors studying in Germany who know no other European language. Not only is she an adept in languages but she is also a diligent reader. Though her social duties are many, yet she may be found during her spare moments reading newly published books. She eagerly reads literary productions which furnish her with subjects of conversation; but books of history

and biography are those in which she takes special delight.

Besides the important duty of representing Japan at the German court and the Japanese legation, a Japanese minister in Berlin has a troublesome duty, if the term is permissible,—a duty which requires constant care and no little exertion. It is nothing less than rendering assistance and giving facilities of every kind to the numerous Japanese students in Germany. These students,—almost all of them doctors, *gakushi** and professors—are men very hard to interfere with. They are very argumentative and are often brooding with discontent. They sometimes assemble in great crowds at the legation to visit the minister. It is no easy task for Mrs. Inouye to help her husband to deal with them and to become popular among them; yet she has succeeded in playing this difficult rôle. On the one hand, she has gained their respect by her learning and views; and on the other hand, she has won their hearts by rendering them every assistance in her power. It sometimes happens that a poor Japanese student who is ill at his lodgings in a wretched quarter of Berlin is startled by hearing the sound of the carriage of Mrs. Inouye who has condescended to come to inquire after his health.

Every Japanese who visits Berlin is surprised when he learns what a good reputation Mrs. Inouye is enjoying in the social circles of Berlin. She is of a dark complexion compared with European ladies; but her beautiful features, her winning manners, her cheerfulness of disposition, her conversational powers, her extensive learning, her business talents,—these conspire to make her highly esteemed by all who know her. She is considered by the diplomatic corps at Berlin an indispensable personage in every kind of meeting. She does her utmost for the success of such parties, and the name "Mrs. Inouye" is mentioned with respect and affection everywhere in the German capital.

Women who are fond of society and are burdened with social duties are apt to neglect the troublesome duty of housekeeping; but Mrs. Inouye is an exception to this rule. Among the inmates of the legation, she is unsurpassed in attending to any sort of business with care and faithfulness. Every financial matter, public or private, is managed by her in a most orderly way. Moreover, every event, important or unimportant, is

minutely entered in her diary. To give an instance, if a dinner is given at the legation, the names of the guests, of the courses served, what wines, cakes and fruits are used, how flowers are arranged,—such particulars are written down in English.

In the German court Mr. and Mrs. Inouye are enjoying great favor and confidence. Some years ago when Mr. Inouye was staying in Berlin as secretary to the Japanese minister, the couple were treated with special intimacy by His Majesty the present Kaiser who was then Crown Prince. Therefore it was quite natural that a few years ago when they returned to Germany in their present capacity and had an imperial audience Their Majesties the Kaiser and Kaiserin expressed their great joy in welcoming their old friends and gave them special attention. Since then they have continued to be more and more in the favor of both their majesties; and Mrs. Inouye is said to be particularly noticed by the Kaiserin.

---

* Graduates of the Imperial Universities at Tokyo and Kyoto.

獨逸駐劄井上全權公使夫人すゑ子

日本の婦人に就て悲觀的の見解を下し彼等を以て優柔怯懦、淺識無能、到底、歐洲の婦人と對等の交際を爲す能はずと思惟する者は駐獨日本全權公使夫人井上すゑ子の事を考一考せば其謬れることを覺るならん。井上夫人は新式の教育を受けたる上流の若き婦人の標本なりと謂ふべし。

夫人は井上伯の妹なる人の令孃にして伯の養女となり幼き時より伯の家庭にて養育せられたり。歐洲文明の輸入に盡瘁し且つ熱心に教育事業に盡力せられたる井上伯は其子女の教育の忽せにすべからざるを悟れり。故にすゑ子孃が七歲の時横濱に送りて有名なる英國牧師ラウダー氏の家庭にて教育を受けしめたり。其の後數年井上伯夫妻相携へて歐洲に赴くに當てすゑ子孃は伴はれて英京ロンドンに到り立派なる英國人の家庭に托せられて玆に幾星霜の間純然たる歐羅巴風の教育を受けたり。良人なる伯の養嗣勝之助氏も亦若き時數年間英國に留學したる人なれば夫妻共に歐洲仕立の好配遇にして日本の外交社會の一名物と謂ふ可し。

井上夫人は語學の才に長せり。英語に於ては英人同樣に談話し得るのみならず更に佛蘭西語に於ても流暢自在なり。任國の獨逸語に於ては自身は甚だ拙いと謙遜すれども其之を操るや獨逸に在學せる獨逸語一本槍の日本のプロフエッサー連よりは確かに巧みなり。夫人は啻に語學に堪能なるのみならず又勤勉なる讀書家なり。交際禮式の忙がしきにも拘はら

ず夫人は寸隙あらば新刊の書籍を繙き居れり。談話の材料たる文學上の著作を愛讀するは勿論其の最も愛誦するものは歴史傳記の類なり。

伯林に駐劄する日本公使は獨逸の宮廷及び日本公使館に於て日本を代表する重大なる職務の外別に一個の面倒なる職務、(若し職務なる語を用ひ得べくんば)なかなか骨の折れる職務を有す。そは彼國に滯在せる許多の日本留學生を世話し之に諸種の便宜を與ふることなり。是等の留學生は殆ど皆博士、學士、教授にして極めて取扱ひ難き人々なり。甚だ議論好きにして且つ不平滿腹の人々なればなり。彼等は折々大擧して公使館を訪問す。公使を助けて彼等を待遇し且つ彼等の仲間から好評を得んことは夫人に取て容易の業にはあらず、而して夫人は能く此難役に於て成功せり。一方には其の學識と識見に於て彼等を服せしめむると同時に一方には力に及ぶ限りの世話を爲して彼等の歡心を得たり。伯林の場末の下宿屋に病み臥せる日本の留學生が屢々病氣見舞の爲めに訪つれたる公使夫人の馬車の音に驚かさる、こと往々にして之あり。

伯林に赴く日本人は何人と雖すゑ子夫人の伯林交際社會に於ける好評嘖々たるには一驚を喫す。夫人は歐洲婦人に比すれば色こそ黑けれ、其の秀麗なる容貌と、其愛嬌ある擧動と、其の快濶なる性情と、其の巧みなる談話と、其の該博なる學識と、其の事務の才とは、夫人をして伯林の交際社會に重きを爲さしむ。如何なる催に於ても夫人は欠くべからざる人として數へらる。夫人も亦斯る會合の爲めに大に力を盡す而して「井上夫人」の名は伯林の至る處に敬愛の情を以て喚さるゝなり。

社交を好み且つ交際に忙しき婦人は兎角に煩雜なる家政をば忽せにするものなれどもすゑ子夫人は全く例外なり。公使館員中如何なる事務を執るにも忠實周到なること夫人に及ぶものなし。公私經濟の事務は悉く夫人の手にて整然として處理せらる。加之大小の出來事は悉く詳細に夫人の日記中に記載せらる。一例を擧げんに公使館に於て宴會を催すとあらんには賓客及び料理の名稱、又如何なる葡萄酒、菓子、果實を用ひたるか、卓上の花は如何に生けたるか、此等の事柄を細かに英文にて認むるなり。

獨逸の宮廷に於ける井上公使夫妻の信任は極めて厚し。先年井上氏が日本公使の書記官として伯林に滯在せし頃現獨逸皇帝陛下は尚皇太子の位に在りしが井上氏夫妻に特別の懇親を賜はりたり。左れば數年前公使夫妻が現今の資格にて再び伯林に赴き謁見せる時皇帝皇后兩陛下は深く舊知を迎ふるの喜を述べ特別の待遇を賜はりたり。爾來兩陛下の信用益厚く殊にすゑ子夫人は深く皇后陛下の眷顧を蒙ると云ふ。



當今の家庭及女子教育に於ける三個の要求

三輪田眞佐子談話

當今の家庭及び女子教育に就きまして、如何なる點が不足であつて、又それにはどうしたならば之を補ふことが出來やうかといふことを、此に私は三個の要求として述べるつもりであります。

（一）　家庭の趣味

日本では、維新前迄には今の所謂家庭といふものは成立つて居なかつたのであります、德川時代或は儒敎などには、家訓とか御家とかいふものがありました。けれども、それは今の家庭とは意味の變つたものであります。當時の家庭たるや、唯家長の權力のみが壯んに行はれて、妻子眷族の自由も權利も認められなかつたものであります　即ち當時の家庭は嚴といふ字が家庭の中心となつて居たのであります。

併しながらそれは未だ人智の開けない曚昧の時代には、洵に止を得ないことで、日本ばかりでなく、未開なる邦國は皆さうでありませう。けれども此處に人文が開けて、開化が謳はる、時代になりますると、人人はそれ〴〵各自の意見を有ち、各自の抱負を懐き、それを實際に行ふといふ事になるものであります。斯る時代になりますれば、唯家長のみの權力で支配せらるゝことは止つて、互々の合意でなければ、家庭が治らないのであります。此に於て乎、家庭に愛といふものが這入つて來るのであります。

西洋人及び西洋崇拜家のいひまする所に由りますれば、家庭の中心は、愛でなければならぬといふことであります。けれども、私は爾うとのみは思ひません。

嚴といふことが、家庭の中心であつた時代には、これは家庭が父子關係の上に立つものであります。故に父を嚴君と唱へ、妻子皆之に附屬して居るのであります。然るに愛といふことが家庭の中心となる時代になれば、それは家庭が夫婦關係の上に立つのであります。故に父母でも、子供でも、共愛の妨げになるときには、別居せらるゝことがあります。

西洋では子供が父母と共に散歩に出かけるのを否だといふことが克くあります。それは夫婦のみが睦しく談して遊ぶため、子供に構つて呉れないからであります。

それで、維新前に於ける日本の家庭の如く家長の權力ばかり、壯んに行はれて。即はち嚴といふことのみが、中心となつて居る家庭は、今の所謂家庭の如き温いものではありませんが、これと同じく、愛といふことが、中心となる家庭も、亦良家庭といひ得られないのであります。これは兩方ともに極端であります。一は嚴君のみの家庭で一は夫婦のみの家庭でありますから、これはドチラも極端といつて可いと思ひます。で私は兩方共に採用して即はち家庭を立てゝ行く上に於いて、其家長なるもの丶權力はどうしても多

少は認むるが可い。これと同時に夫婦の愛を沒しては不可い。詮り嚴と愛との調和を得たものが今の家庭の要素となるものでありますと考へます。

それは、日本では、未だ家族制であつて、個人制ではないのであります。法制の上には少しは個人制を入れて立てゝありますが、まだ家といふものが重きを爲して居ります。でありますから、家庭にはある程度迄は家長の權力を認むる必要があるのであります。けれども昔時の如く家長のみに權力を持たせて置くと進歩といふことがなくなりませう。故に新しく夫婦中心の愛といふものを入れて、而して相竢つて行くことが、最も時勢に適當して居ると思ひます。

斯く調和せずして、夫婦中心に重きを置きまして家庭を立てゝ行くことゝし、而して其方針で、女子敎育をするならば必らず失敗に歸します。其證據には夫婦中心の方針で敎育せられたる人達は即はち亞米利加風の學校に育つた人達は、結婚して必らず離縁せらるゝが十中の七八でありまするが、否らざれば、獨身經營で其身を處して居るのであります。これでも、未だ日本の家庭が、愛のみの敎育を受けたるもので成立つて行ぬことが分るのです。さりとて嚴といふ方のみでするならば、其家庭は、乾燥無趣味のもので、封建制度の下にあつた家庭の如くなりまして、妻たるものは隨分不愉快であります。

其處で、どうしても、愛と嚴との調和の上に、家庭を立てゝ行くことが甚だ重要なることで、私が家庭の趣味として不足を感じまするのは、此二個の調和を得たいのであります。

以上の外に家庭の根本律の一として、數へたいのは、上より下を御する道德であります。

今迄の東洋道德は、多く上より下に對したものであります。臣より君、幼より長、妻より夫といふ風に、道德が出來て居ましたけれども、君より臣、長より幼、夫より妻といふ風に道德がなかつたといつて

可からうと思ひます。それで家庭を立派にして行くには、其嚴と愛との調和の上に、尙此の上より下の道德を盛んにすることが必要なること、思ひます。

家庭の趣味は、其他料理、裝飾、家庭の談話等、甚だ多くありますが、私は其中で家庭の談話を重しとして居ますからこれを少しく話します。

これ迄の家庭談話は人の噂、互の陰口であつて、これは惡因を含んで居ました。そんな話でないときは、單調子で、趣味津々たるものがないのでした。これは婦人が多方面に、趣味や智識を有たない結果だと思ひます。

此處に注意すべきことは、支那の孔子の訓へに君子者食而不レ語とあり。西洋では食するに克く言ふとあることであります。西洋の談話は、凡べて快活に談笑して、甚だ衞生に叶ふのでありますが、孔子のも、言ふことを止めた譯ではないのであります。只君子は食する時、訓戒ともなるべき六かしいことを言はない。それといつて慨歎したり、憤慨したりしては、食事が身に付かないから、訓戒的のことをいふなと止めた譯であります。兎に角御話は大切の事で克く注意して、趣味のある、而して清く樂しい話をするやうになりたいものであります。

（二）　常識の養成

常識の養成は、今日の高等女學校普通女學校で、これを爲さしむるのであります。

抑も今の女學校を分つて二と致します。（一）は職業的の目的を有するもので、それを例へていひますれば、教師、裁縫工藝等の學校を指し（二）は良妻賢母を養成する學校であります。乍去此二のものは、決して分離することの出來ないものであります。職業的の方に於きましても、それと同時に良妻賢母であるこ

とが、必要であります。又良妻賢母の方に於きましてもそれと同時に、一通り職業的の技能あることが必要であります。此處でこれもドチラになるにしても、幾分か他の一方のを心得て居ることが肝要であります。

此處に一つの困難なる問題は、女は獨立す可き乎、又は内助を以て目的とす可き乎であります、私は女は内助を以て目的とす可きものと思ひます。今や女子職業が頗ぶる盛大になりまして、近々新橋停車場の改札人にも女子を以て充てるといふことであります。而して其結果が可いといふことになりて、凡ての方面に女子を充てるやうになれば、これは勢ひ男女職業上の衝突を起すものと考へられます。

勿論女子職業の増進と同時に、女權は壯んになりませう。されど女權の壯んなることは、如何の範圍に限るべき乎、或は限られざるべき乎は、考へものでありますが、私は女子が、男に弄ばさるゝは悪いと思ひますけれども、女權の壯んなることは、何の點迄が女の幸福なる乎、私は萬一男女同等といふこと、ならば、それは女の不幸と斷言します。二十世紀の問題は、(一)勞働者と資本家との軋轢(二)男と女との衝突といひます。而して男女の問題に付きましては、此頃亞米利加では、非結婚同盟が出來て居ります。併しそれは、男女の調和を破るもので、詮り女を教育ばかりして、職業を與へるときには、反つて女を殺すことゝなるのであります。私は女子は女子としての職業を與へるを可いと思ひます。

故に高等普通教育と稱するものゝ目的は、婦人たる品位の養成が第一で、同時に一家の主婦としての心得、及び技倆を養成するのが、非要用なるもので、其外にある特殊の教育は、其例外と見る外はないのであります。

それでありますから、女子教育は、樣々の普通學をもつて、十分の常識を養い且つ克くそれを實地に活

用し得て、婦人たる位地、母の任務、主婦たる任務に堪へるやうにせんければなりません。さうなりますれば、若し不幸夫に先立れましても、君子者不ㇾ器で、決して狼狽する患ひはないのであります。兎に角男女は車の兩輪、鳥の双翼の如く、相まつて、圓滿なる社會を造ることが第一であります。

（三）　體育の必要

體育は近頃壯んに行はれ、殆んど擧國の輿論であります。どうも我國女子の身體の惡いことは、全く西洋などに比べると、恥しいほどでありませう。

體操は東京の女學校などでは高等女學校の如き一週間三時間をかけております。然るに他の各種學校では、何もせずして、座つた切り衛生を構はないのがあります、それに惡いのは、女子の食物であります。女子は多く芋、唐茄子が好物で、肴や牛乳、肉類は餘り好まないのであります。

作法と體操とは、衝突して居ります。作法は少しく禪味を帶びたるものにて、足を内輪に歩み、謹むといふ態で身體を丸く造つて動作します、然るに體操は足を外輪に出し、胸は一ぱいに張ります、同じ學校にありて正反對の教授を受けるのであります、其處で私は二ツがかう衝突するが、何れが自然に叶ふて居るやと考へましたが、これは、體操だと思つて居ります。

併しながら、日本の國情として、作法も必要でありまして、坐作進退の落付はこれに限るのでありますから、私は作法の教師が、同時に體操教師であつて頂きたいのであります。而してこれが女教師でありたいことを望むのであります。即ちかくして兩方一致して、一人の手より出づるときは、啻に學校教授上の便利あるばかりではなく、又自然の調和上に可いことであります。

尚希くは、修身の學課は此作法體操教師が克く心得て居たいのであります、蓋し修身は内部の教育、作法

は外部の姿勢教育であるから、別々に分れて居るのが止み、且つ内外呼應して、其良結果を奏するでありませう。

併し體操が壯んになれば、舞踏の如きも亦た大に流行するのでせう。どうぞ鹿鳴館時代の失敗を繰返さないことを願ひます、要するに自然の動作は體操、靜粛は作法、而して作法は修身と一致することを望みます。

以上の三點は、現今一般教育上に於ける欠點若くは幾らか世人の誤解して居るものを矯正して、是非斯くせんければならぬといふ、所謂私が信ずる理想に到達せしむる方法であります。これを縮めていへば女子教育は、完全なる婦人を造ることを目的とす。從つて婦人の處世上甚だ大切なる目的として良家庭を造ることを要求し、女子教育は克くこれ等の働らき間然する所なきやう其伎能と品位とを訓ゆべしといふのであります。されば教育するものも、亦せらるゝものも、此に相一致して、今後我國婦人の面目を立派に立てんことを希望に堪へません。

（完）



元日の大御食

有木磯水

君が代の萬壽無疆と祝杯を捧げまつる最も目出度き今日の元旦、瑞氣長へに棚き、紫雲深く鎖す九重の奧、賢き邊の御事ども申上ぐるは、最恐れ多き事でありまするが、さる頃宮居大膳職に仕りつる方を訪ひまゐらせ、差支へなしと信じらるゝ限りお話ありし我が　兩陛下が元日の御食膳の事を謹みて記し奉らんに、

宮内省の大膳職と申ますのは、即ち　兩陛下が朝な夕なの御食膳を掌る所でありまして、大膳太夫、大膳亮、大膳屬、膳部長、膳部副長、膳部など申す職員が、それ〴〵供御饗宴及び其器具に關する事務を管理致し、主管に關する會計を掌るのでございます、そして其職員の數は三十五六人居られましやうか、常にすべての事をお手分してお取扱ひになつて居るのでございます。

そこで元日　兩陛下の大御食は、曉の御湯漬、晴の御膳、朝御膳、晝御膳、御夜食の五度御食膳に向はせられまするので、先づ其曉の御湯漬と申しまするのは、年立ちかへる東雲の空がほの〴〵と紫宸殿の邊から明けそめまする頃ほひ、定めの御時刻となりまして、兩陛下御起床遊ばしまして、軈て御盥漱の事が終り、茲に聞食さるゝ御食膳の事でございまして、それには土器燒玉子、御汁(鱈、雪の上)松魚烹鰒、御飯とが供へてございます。

さて此御食膳がすみますると　兩陛下とも御禮服御着用と申す事になりまして、其後捧げまゐらすのが即ち晴の御膳でございます。で、此晴の御膳と申しますのは、御殿の千草の間で聞食さるゝ所謂晴れの御膳でして、酢、酒、鹽、醬油の四種、鯛に龜足、附燒の雉子の燒物二枚、附燒鶇、切重ね鮑、煎海鼠

の平盛三杯を、最と古風の朱塗の御食卓に安排致して奉り、朱塗の御椅子にお凭り遊ばして聞し食さる、儀式の御膳でございますが、其御献立の中、鯛は零餘子焼と申しまして、其形が零餘子に似て居ります、又龜足と申しますと其零餘子焼の鯛を串にさした尖に大高檀紙をきつてさしましたのを申すのでございます。それから高盛八杯と申して、文蛤、鮭、烏賊、御飯、鱲子、鱸、蒲鉾、車蝦の八種を手際よく調理致して、筒形に高く盛つたのを、徑四寸位の銀の皿に入れまして供へまつり、尚御酒器、御汁（鯛に鯉）、御羹、御湯器などをも供へますが、此御湯器と申しますのは、恰度申しますと湯桶形の銀瓶でありまして、よく我々臣民が申しまする焦し湯の如な、粥の稀薄いもので、飯を炊きました御釜の底に飯を極少し殘し、それを狐色に焦した復湯を入れ程よく沸したもので、其香氣と申し味と申し誠に申分無いものを、其銀瓶の中に盛つてございまして、これは御湯の下と申す食しあがりものでございます、そして其御湯器には銀製の杓子の樣なものが添へてございます、此御湯の下は　兩陛下とも平常日々の御朝餐後に食しあがるのを例とせらるゝのでございますと　承はつて居ります。

此の外晴の御膳には、小串鯛、菱葩、割海老、砂糖煮栗、雉子酒、蛤の御吸物など申す種々の品を卓上に進めまゐらすのでございます。菱葩と申しますのは、大きさ三寸位の丸く薄い白の餅の眞中に、紅の餅を長細くして載せ、其上を白味噌で煮上げました牛房の細かいので安じ、餅の中程から柏餅のやうに二ッに折つて、そしてそれを火にかけ、更にそれを二ッ折の美濃紙に包んだものでございます。又雉子酒と申しますと、雉子の抱身と申して羽の下に當りまする極精良の處を鹽漬又は醤油漬といたし刺身などのやうに薄くそいだのを大抵七片位づゝ御茶碗に入れ、結構な生一本の日本酒を熱く沸かして之に注ぎ込みましたものでございます。

先づこれだけが晴の御膳の御献立でございますが

次に朝御膳にお移り遊ばすのでございます。

朝御膳には、一の膳二の膳三の膳とございまして其一の膳には鯛、赤貝、白髪大根、岩茸、栗、生姜、金柑の御鱠、小蕪、梅花摘入の御汁、生大口魚、獨活の御煮物、御漬物、御飯の五品でして、御鱠に使用ひまする三杯酢は、煮詰めました最上の味淋に最上の酢と醤油とを程よく交ぜ致した加減酢でして、御漬物は其時節によりますが、新漬大根、沢庵、白瓜か水瓜の奈良漬、守口大根い焼でございます。二の膳には照焼魴鮄、煎揚鯛、鯛、箕松茸、柚子の御汁、小松菜、花かゝの御浸しの四色でございまして三の膳には御炙小鯛、蕗黄湯婆の御二種を供へます。

次に晝御膳でございまするが、是亦やはり一、二三の膳がございまして、一の膳には鹽引鮭、細魚、防風、花栗、金柑の御鱠、鯉の御汁、素麺、椎茸の御煮物の御三種。二の膳には煎上王餘魚、味噌漬甘鯛、花鰹、千箱草、神馬藻の御汁。蒲焼鰻の御四種。三の膳には御炙小鯛、松魚煎百合根の御二種を供へます。

それから御夜食は煎上端白、山吹鱠、火取沙魚、[illegible]海苔の御汁、砂糖煮人参の御四種の外に、御鉢盛として旭蒲鉾、附焼鶏。味附鯛、崩し生姜。若鶏、椎茸、菜の玉子綴。松魚煎、近江蕪。白魚に櫻の花の御吸物の御五種を供へて、これがお濟みになりますと夜に入りましてから御盃の事がございまして、こゝに始めて御雑煮を御祝ひ遊ばさるゝのであります。其御献立は、小餅、里芋、頭大根、煎海鼠、串貝、花かゝの白味附御雑煮。數の子、附焼車蝦。蜜柑の御菓三種、鯛鰭の御吸物などでございます。

これで元日の大御食は全く終るのでムます。（完）

富美宮泰宮兩殿下の御近況

記者

茲に兩内親王殿下の御近狀に關して記者の洩承りたる所を大要拜寫し奉るはこの芽出度明治

甲辰の歳旦を迎ふるに臨んで讀者諸氏と與に窮りなき我が皇運の彌々隆昌を加ふるを祝し奉らんが爲めである。　（一記者）

兩殿下の御近況に付叓に少しく御話を致しまするが一體富美宮殿下と泰宮殿下とは御年輩が少し違つて居ります。富美宮殿下は明治二十四年の御生誕で、今年恰度十四歳に渉らせられ、又泰宮殿下は明治二十九年の御生誕で、今年恰度九歳に成らせられまする。そこで兩殿下の御性行を御一緒に述べますると一寸談話に混雜を生ずるやうに考へられますから、先づ富美宮殿下の御話から始め、夫れが終つたら泰宮殿下の御行事に移るやうに致したいと思ひます。

富美宮殿下の御近狀

○○○○○○
殿下の御體格　富美宮殿下には今年十四歳に渉らせられますが、之を普通の女子に比すると、御體格が餘程大きく、年來聊かの御障礙もあらせられず、至極御壯健なる御體質を保たせられて居られまする。

○○○○○○
殿下の御性質　と申しては誠に恐入る次第なれども……世間では通常怜悧と云ふことを能く言ひますけれども、殿下の御聰明なる事は、世俗の所謂怜悧抔とは却々以て比較は出來ぬことゝ存じます。且年來至極御健全であらせらるゝと共に、誠に御記臆力に富ませられ、例へて申しますれば、博覽會とか展覽會とか云ふ所へ成らせられて、何か一寸御覽遊ばすと、夫れをチヤンと御記臆なされて、供奉の人々は却て忘失れて居るにも拘らず、彼の物品は何うい ふ處に在つたとか、斯うい ふ物體であつたとか仰せられて、後々までも御話あり、御供の人々が屢々恐縮に堪えざる事ある程御記臆がお宜しう御坐います。

○○○○○○
殿下の御嗜好　殿下の御嗜好に關しては、只今是れといふて格別御話をすることは出來兼ねまするが、先づ種々の學藝は御熱心に御學びになり、又音樂等のやうなものも随分御好みなされますが、別して樂器ではピアノを御嗜み遊ばされ、御餘暇には折々御彈きなされ、却々巧く御出來になる方で御坐ます。

○○○○○○殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學科の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

○○○○○殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらる時分には、御教育の餘暇には、大抵毎日御庭内で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戯も催されまするが其中でもテニスの如きは大層御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野杯を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乗ることは餘り好まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、毎時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かすにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭内が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭内で以て十分行ふことが出來ます。併し鎌倉に成らせられましても、御遊戯杯の種類は矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス杯を能く御好みになりまする。

○○○○○殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懐いて居る仁もありませうが、從來殿下の上着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

○○○○殿下の御食物　これは當飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

○○○○○殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御教育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

○○○○○○○○○○○諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覽になつたり、又秋季には紅葉を御覽になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覽に供すること抔もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歴史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記臆に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には専ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

○○○○

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年青森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御發育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大變下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も實に御達者で、現今の御年齡から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座いまする。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記臆力の御强い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる又殿下には御避寒の爲め毎年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には屢々此等の品類を御實見なさるゝ故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさるゝさうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ來臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御說明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさるゝやうなこともありました。

○○○○御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて種々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はります。

泰宮殿下の御近狀

○○○○殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に涉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記憶力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なことなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に伶悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

○○○○殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と何時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらるゝ丈けの事で、御遊戲のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も異つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御俥とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

殿下の御體格　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歳位な女兒の體格に比較致しまするど、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顔の色艶は誠に良しう御座います。

殿下の御學問　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位であります。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歳位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御教授申上げて居る次第であります。

殿下の御食事　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食杯は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成軟かで消化の良いものを御好みなされます。
御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

殿下の御服裝　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

御起臥の時間　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

兩殿下の御交情　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第であります。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絶えず御配

歴遊ばされますが、又秦宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕あらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。あゝ何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓滿な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑なうらゝかな景色が見えて、樂しい〳〵響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓滿平和な氣象が滿ち〳〵て、朝日の影も今日はことに赤くうらゝかに、旗吹く風も今日は長閑に温かく、松の綠もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、今日のやうな簡略した風は許さない。一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立たものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所のものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてある。これらは抑も主意に反したもので、單に己の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので――。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記録もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記録に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことであらうと云ふ說だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして歯固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月歯固餅と云のが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齢のふる歯固」云々とあり、源語初音の巻には「こゝかしこに群居つゝ歯固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記録に、歯固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て縁を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に歯固を置くと先に歯固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してある。又或書を見ると年代は不明だつたがまづ鏡餅を飾その左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て歯固の方が後になり、下つて今日は歯固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。尙又大伴黒主の「あふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

歯固の祝の席に賞するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には歯固の餅は近江のひぎり（火切の里）の餅を用ゆべしとある、此やうに種々の書記に依て案ずると、先づ歯固餅の方が主になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の歯固餅なるものの意味は其字の如く読むのでなく、歯をよはひと呼んで齢を固むる意で、三宝の上には松竹鶴亀の類を眞として下に敷米、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、舊い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個（内赤さゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ）を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其周りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穂俵草、左に柿と栗とを置くとある。偖又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多小異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、歯朶（ウラジロ）杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、柑子、穂俵草などで、今其の用ゆるものゝ意味を聴くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたまず強壮の意で、クリ、カキ、ミカン穂俵草は山海の時物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬莱、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雑煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通ずるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は徳川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雑煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雑煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顔祝ふともぢつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刄物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのもので あると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

（完）

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

(一)初生兒の取扱
　初湯
　初湯の溫度
　浴後の所置
　初着及び寢床
　第一回の授乳
　沐浴
　口腔の清潔法
　眼の守護
(二)營養法に就ての注意
天然營養法
　母乳
　乳母の乳
　授乳者(慈母并に乳母)の食物
　離乳
人工營養法
　牛乳
　牛乳消毒、防腐并に保存法
　牛乳稀釋の比例
　牛乳稀釋の方法
　煉乳(コンデンスミルク)
　煉乳稀釋の比例
　乳の分量
　哺乳器の清潔法
　喰初
(三)身體に就ての注意
　啼泣
　大小便の排泄
　便秘

併しながらそれは未だ人智の開けない曚昧の時代には、洵に止を得ないことで、日本ばかりでなく、未開なる邦國は皆さうでありませう。けれども此處に人文が開けて、開化が謳はるゝ時代になりますると、人人はそれ〳〵各自の意見を有ち、各自の抱負を懐き、それを實際に行ふといふ事になるものであります。斯る時代になりますれば、唯家長のみの權力で支配せらるゝことは止つて、互々の合意でなければ、家庭が治らないのであります。此に於て乎、家庭に愛といふものが這入つて來るのであります。

西洋人及び西洋崇拜家のいひまする所に由りますれば、家庭の中心は、愛でなければならぬといふことであります。けれども、私は爾うとのみは思ひません。

嚴といふことが、家庭の中心であつた時代には、これは家庭が父子關係の上に立つものであります。故に父を嚴君と唱へ、妻子皆之に付隨して居るのであります。然るに愛といふことが家庭の中心となる時代になれば、それは家庭が夫婦關係の上に立つのであります。故に父母でも、子供でも、其愛の妨げになるときには、別居せらるゝことがあります。

西洋では子供が父母と共に散歩に出かけるのを否だといふことが克くあります。それは夫婦のみが睦しく談して遊ぶため、子供に攪つて呉れないからであります。

それで、維新前に於ける日本の家庭の如く家長の權力ばかり、壯んに行はれて。即はち嚴といふことのみが、中心となつて居る家庭は、今の所謂家庭の如き温いものではありませんが、これと同じく、愛といふとが、中心となる家庭も、亦良家庭といひ得られないのであります。これは兩方ともに極端であります。一は嚴君のみの家庭で一は夫婦のみの家庭でありますから、これはドチラも極端といつて可いと思ひます。で私は兩方共に採用して即はち家庭を立てゝ行く上に於いて、其家長なるものゝ權力はどうしても多

少は認むるが可い。これと同時に夫婦の愛を沒しては不可い。詮り嚴と愛との調和を得たものが今の家庭の要素となるものでありますと考へます。

それは、日本では、未だ家族制であつて、個人制ではないのであります。法制の上には少しは個人制を入れて立てゝありますが、まだ家といふものが重きを爲して居ります。でありますから、家庭にはある程度迄は家長の權力を認むる必要があるのであります。けれども昔時の如く家長のみに權力を持たせて置くと進歩といふことがなくなりませう。故に新しく夫婦中心の愛といふものを入れて、而して相俟つて行くことが、最も時勢に適當して居ると思ひます。

斯く調和せずして、夫婦中心に重きを置きまして家庭を立てゝ行くことゝし、而して其方針で、女子敎育をするならば必らず失敗に歸します。其證據には夫婦中心の方針で敎育せられたる人達は即はち亞米利加風の學校に育つた人達は、結婚して必らず離緣せらるゝが十中の七八でありまするが、否らざれば、獨身經營で其身を處して居るのであります。これでも、未だ日本の家庭が、愛のみの敎育を受たるもので成立つて行ぬことが分るのです。さりとて嚴といふ方のみでするならば、其家庭は、乾燥無趣味のもので、封建制度の下にあつた家庭の如くなりまして、妻たるものは隨分不愉快であります。

其處で、どうしても、愛と嚴との調和の上に、家庭を立てゝ行くことが甚だ重要なることで、私が家庭の趣味として不足を感じまするのは、此二個の調和を得たいのであります。

以上の外に家庭の根本律の一として、數へたいのは、上より下を御する道德であります。

今迄の東洋道德は、多く上より下に對したものであります。臣より君、幼より長、妻より夫といふ風に、道德が出來て居ましたけれども、君より臣、長より幼、夫より妻といふ風に道德がなかつたといつて

可からうと思ひます。それで家庭を立派にして行くには、其厳と愛との調和の上に、尚此の上より下の道徳を旺んにすることが必要なることゝ思ひます。

家庭の趣味は、其他料理、裝飾、家庭の談話等、甚だ多くありますが、私は其中で家庭の談話を重しとして居ますからこれを少しく話します。

これ迄の家庭談話は人の噂、互の陰口であつて、これは惡因を含んで居ました。そんな話でないときは、單調子で、趣味津々たるものがないのでした。これは婦人が多方面に、趣味や智識を有たない結果だと思ひます。

此處に注意すべきことは、支那の孔子の訓へに君子者食而不レ語とあり。西洋では食するに克く言ふとあることであります。西洋の談話は、凡べて快活に談笑して、甚だ衞生に叶ふのでありますが、孔子のも、言ふことを止めた譯ではないのであります。只君子は食する時、訓戒ともなるべき六かしいことを言はない。それといつて憤悔したり、慷慨したりしては、食事が身に付かないから、訓戒的のことをいふなと止めた譯であります。兎に角御話は大切の事で克く注意して、趣味のある、而して清く樂しい話をするやうになりたいものであります。

(二)　常識の養成

常識の養成は、今日の高等女學校普通女學校で、これを爲さしむるのであります。

抑も今の女學校を分つて二と致します。(一)は職業的の目的を有するもので、それを例へていひますれば、教師、裁縫工藝等の學校を指し(二)は良妻賢母を養成する學校であります。乍去此二のものは、決して分離することの出來ないものであります。職業的の方に於きましても、それと同時に良妻賢母であるこ

とが、必要であります。又良妻賢母の方に於きましてもそれと同時に、一通り職業的の技能あることが必要であります。此處でこれもドチラになるにしても、幾分か他の一方のを心得て居ることが肝要であります。

此處に一つの困難なる問題は、女は獨立す可き乎、又は內助を以て目的とす可き乎であります、私は女は內助を以て目的とす可きものと思ひます。今や女子職業が頗ぶる盛大になりまして、近々新橋停車塲の改札人にも女子を以て充てるといふことであります。而して其結果が可いといふことになりて、凡ての方面に女子を充てるやうになれば、これは勢ひ男女職業上の衝突を起すものと考へられます。

勿論女子職業の增進と同時に、女權は壯んになりませう。されど女權の壯んなることは、如何の範圍に限るべき乎、或は限られざるべき乎は、考へものでありますが、私は女子が、男に弄ばさるゝは惡いと思ひますけれども、女權の壯んなることは、何の點迄が女の幸福なる乎、私は萬一男女同等といふこと、ならば、それは女の不幸と斷言します。二十世紀の問題は、(一)勞働者と資本家との軋轢(二)男と女との衝突といひます。而して男女の問題に付きましては、此頃亞米利加では、非結婚同盟が出來て居ります。

併しそれは、男女の調和を破るもので、詮り女を敎育ばかりして、職業を與へるときには、反つて女を殺すことゝなるのであります。私は女子は女子としての職業を與へるを可いと思ひます。

故に高等普通敎育と稱するものゝ目的は、婦人たる品位の養成が第一で、同時に一家の主婦としての心得、及び技倆を養成するのが、其要用なるもので、其外にある特殊の敎育は、其例外と見る外はないのであります。

それでありますから、女子敎育は、樣々の普通學をもつて、十分の常識を養い且つ克くそれを實地に活

用し得て、婦人たる位地、母の任務、主婦たる任務に堪へるやうにせんければなりません。さうなりますれば、若し不幸夫に先立れましても、君子者不ㇾ器で、決して狼狽する患ひはないのでありませう。兎に角男女は車の兩輪、鳥の双翼の如く、相まつて、圓滿なる社會を造ることが第一であります。

（三）　體育の必要

體育は近頃壯んに行はれ、殆んど擧國の輿論であります。どうも我國女子の身體の惡いことは、全く西洋などに比べると、耻しいほどでありませう。

體操は東京の女學校などでは高等女學校の如き一週間三時間をかけております。然るに他の各種學校では、何もせずして、座つた切り衛生を構はないのがあります、それに惡いのは、女子の食物であります。女子は多く芋、蒟蒻が好物で、肴や牛乳、肉類は餘り好まないのであります。

作法と體操とは、衝突して居ります。作法は少しく禪味を帶びたるものにて、足を内輪に歩み、謹むといふ態で身體を叩く造つて動作します、然るに體操は足を外輪に出し、胸は一ぱいに張ります、同じ學校にありて正反對の教授を受けるのであります、其處で私は二ツがから衝突するが、何れが自然に叶ふて居るやと考へましたが、これは、體操だと思つて居ります。

併しながら、日本の國情として、作法も必要でありまして、坐作進退の落付はこれに限るのでありますから、私は作法の教師が、同時に體操教師であつて頂きたいのであります。而してこれが女教師でありたいことを望むのであります。即ちかくして兩方一致して、一人の手より出づるときは、啻に學校教授上の便利あるばかりではなく、又自然の調和上に可いことであります。

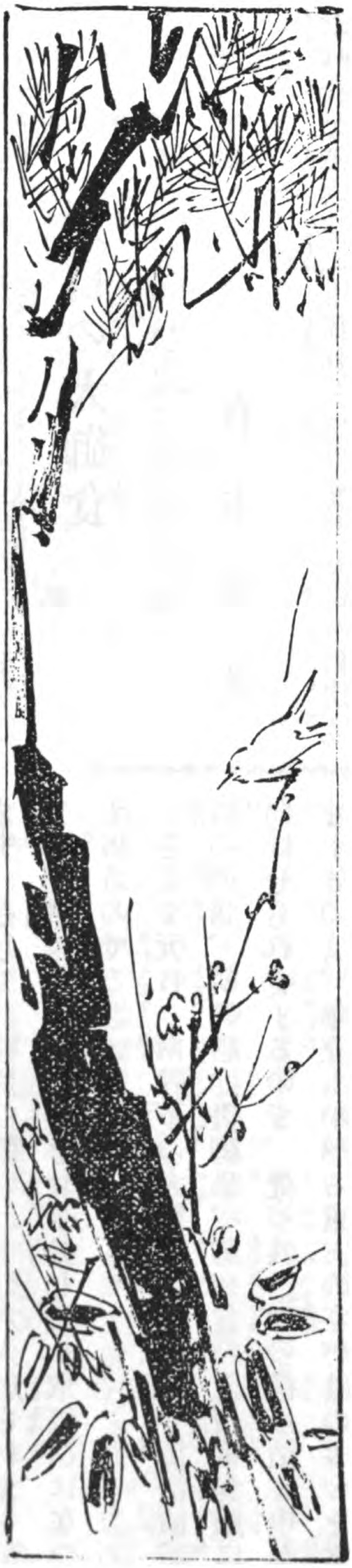
尙希くは、修身の學課は此作法體操教師が克く心得て居たいのであります、蓋し修身は内部の教育、作法

は外部の姿勢教育であるから、別々に分れて居るのが止み、且つ内外呼應して、其良結果を奏するでありませう。

併し體操が壯んになれば、舞踏の如きも亦た大に流行するのでせう。どうぞ鹿鳴館時代の失敗を繰返さないことを願ひます、要するに自然の動作は體操、靜粛は作法、而して作法は修身と一致することを望みます。

以上の三點は、現今一般教育上に於ける欠點若くは幾らか世人の誤解して居ものを矯正して、是非斯くせんければならぬといふ、所謂私が信ずる理想に到達せしむる方法であります。これを縮めていへば女子教育は、完全なる婦人を造ることを目的とす。從つて婦人の處世上甚だ大切なる目的として良家庭を造ることを要求し、女子教育は克くこれ等の働らき間然する所なきやう其伎能と品位とを訓ゆべしといふのであります。されば教育するものも、亦せらるゝものも、此に相一致して、今後我國婦人の面目を立派に立てんことを希望に堪へません。

（完）



元日の大御食

有木磯水

君が代の萬壽無疆と祝杯を捧げまつる最も目出度き今日の元旦、瑞雲長へに棚引き、紫雲深く鎖す九重の奥、賢き邊りの御事ども申上ぐるは、最恐れ多き事でありまするが、さる頃宮居大膳職に仕りつる方を訪ひまゐらせ、差支へなしと信じらるゝ限りお話ありし我が　兩陛下が元日の御食膳の事を謹みて記し奉らんに、

宮内省の大膳職と申ますのは、即ち　兩陛下が朝な夕なの御食膳を掌る所でありまして、大膳太夫、大膳亮、大膳屬、膳部長、膳部副長、膳部など申す職員か、それ〴〵供御饗宴及び其器具に關する事務を管理致し、主管に關する會計を掌るのでございます、そして其職員の數は三十五六人居られましやうか、常にすべての事をお手分してお取扱ひになつて居るのでございます。

そこで元日　兩陛下の大御食は、曉の御湯漬、晴の御膳、朝御膳、晝御膳、御夜食の五度御食膳に向はせられますので、先づ其曉の御湯漬と申しますのは、年立ちかへる東雲の空がほの〴〵と紫宸殿の邊から明けそめますする頃ほひ、定めの御時刻となりまして、兩陛下御起床遊ばしまして、總て御盥沐の事が終り、玆に聞食さるゝ御食膳の事でございまして、それには土器燒玉子、御汁(鯉、雪の上)松魚煮凝、御飯とが供へてでございます。

さて此御食膳がすみますると　兩陛下とも御禮服御着用と申す事になりまして、其後捧げまゐらすのが即ち晴の御膳でございます。で、此晴の御膳と申しますのは、御殿の千草の間で聞食さるゝ所謂晴れの御膳でして、酢、酒、鹽、醬油の四種、鯛に鮒足、附燒の雉子の燒物二枚、附燒鶉、切重ね鮑、煎海鼠

の平盛三杯を、最と古風の朱塗の御食卓に安排致して奉り、朱塗の御椅子にお凭り遊ばして聞し食さる、儀式の御膳でございますが、其御献立の中、鯛は零餘子焼と申しまして、其形が零餘子に似て居ります、又亀足と申しますと其零餘子焼の鯛を串にさした尖に大高檀紙をきつてさしましたのを申すのでございます。それから高盛八杯と申して、文蛤、鮭、烏賊、御飯、鱲子、鱸、蒲鉾、車蝦の八種を手際よく調理致して、筒形に高く盛つたのを、徑四寸位の銀の皿に入れまして供へまつり、尚御酒器、御汁(鯛に鯉)、御羹、御湯器などをも供へますが、此御湯器と申しますのは、恰度申しますと湯桶形の銀瓶でありまして、よく我々臣民が申しまする焦し湯の如な、粥の稀薄いもので、飯を炊きました御釜の底に飯を極少し殘し、それを狐色に焦した復湯を入れ程よく沸したもので、其香氣と申し味と申し誠に申分無いものを、其銀瓶の中に盛つてございまして、これは御湯の下と申す食しあがりものでございます、

そして其御湯器には銀製の杓子の様なものが添へてございます、此御湯の下は　兩陛下とも平常日々の御朝餐後に食しあがるのを例とせらるゝのでございますと　承はつて居ります。

此の外晴の御膳には、小串鯛、菱葩、割海老、砂糖煮栗、雉子酒、蛤の御吸物など申す種々の品を卓上に進めまゐらすのでございます。菱葩と申しますのは、大きさ三寸位の丸く薄い白の餅の眞中に、紅の餅を長細くして載せ、其上を白味噌で煮上げました牛房の細かいので安じ、餅の中程から柏餅のやうに二ツに折つて、そしてそれを火にかけ、更にそれを二ツ折の美濃紙に包んだものでございます又雉子酒と申しますと、雉子の抱身と申して羽の下に當りまする極精良の處を鹽漬又は醤油漬といたし刺身などのやうに薄くそいだのを大抵七片位づゝ御茶碗に入れ、結構な生一本の日本酒を熱く沸かして之に注ぎ込みましたものでございます。

先づこれだけが晴の御膳の御献立でございますが

次に朝御膳にお移り遊ばすのでございます。

朝御膳には、一の膳二の膳三の膳とございまして其一の膳には鯛、赤貝、白髪大根、岩茸、栗、薑、金柑の御鱠、小鯛、梅花摘入の御汁、生大口魚、獨活の御煮物、御漬物、御飯の五品でして、御鱠に使用ひまする三杯酢は、煮詰めました最上の味淋に最上の酢と醤油とを程よく交ぜました加減酢でして、御漬物は其時節によりますが、新漬大根、澤庵、白瓜か水瓜の奈良漬、守口大根の類でございます。二の膳には照焼魴鮄、煎揚鯛、鯛、箕松茸、柚子の御汁、小松菜、花かつをの御浸しの四色でございまして三の膳には御炙小鯛、錦蒸黄湯婆の御二種を供ます。

次に晝御膳でございまするが、是亦やはり一、二三の膳がございまして、一の膳には鹽引鮭、細魚、防風、花栗、金柑の御鱠、鯉の御汁、素麪、椎茸の御煮物の御三種。二の膳には煎上王餘魚、味噌漬甘鯛、花鰹、千箱草、神馬藻の御汁。蒲焼鰻の御四種。三の膳には御炙小鯛、松魚煎百合根の御二種を供へます。

それから御夜食は煎上端白、山吹鱚、火取沙魚、諸海苔の御汁、砂糖煮人参の御四種の外に、御鉢盛として旭蒲鉾、附焼鶉。味噌鯛、崩し薑。若鶏、椎茸、菜の玉子綴。松魚煎、近江蕪。白魚に櫻の花の御吸物の御五種を供へて、これがお濟みになりますと夜に入りましてから御盃の事がございまして、こゝに始めて御雑煮を御祝ひ遊ばさるゝのであります。其御獻立は、小餅、里芋、鏡大根、煎海鼠、串貝、花かつをの白味噌御雑煮。數の子、附焼車蝦。蜜柑の御菓三種、鯛鰭の御吸物などでございます。

これで元日の大御食は全く終るのでムます。(完)

富美宮泰宮兩殿下の御近況

記者

茲に兩内親王殿下の御近狀に關して記者の洩承りたる所を大要拜寫し奉るはこの芽出度明治

甲辰の歳旦を迎ふるに臨んで讀者諸氏と與に窮りなき我が皇運の彌々隆昌を加ふるを祝し奉らんが爲めである。

（一記者）

兩殿下の御近況に付爰に少しく御話を致しまするが一體富美宮殿下と泰宮殿下とは御年輩が少し違つて居ります。富美宮殿下は明治二十四年の御生誕で、今年恰度十四歳に涉らせられ、又泰宮殿下は明治二十九年の御生誕で、今年恰度九歳に成らせられまする。そこで兩殿下の御性行を御一緒に述べますると一寸談話に混雑を生ずるやうに考へられますから、先づ富美宮殿下の御話から始め、夫れが終つたら泰宮殿下の御行事に移るやうに致したいと思ひます。

富美宮殿下の御近状

殿下の御體格　富美宮殿下には今年十四歳に涉らせられますが、之を普通の女子に比すると、御體格が餘程大きく、年來聊かの御障礙もあらせられず、至極御壯健なる御體質を保たせられて居られまする。

殿下の御性質　と申しては誠に恐入る次第なれども……世間では通常怜悧と云ふことを能く言ひますけれども、殿下の御聰明なる事は、世俗の所謂怜悧杯とは却々以て比較は出來ぬこと丶存じます。且年來至極御健全であらせらる丶と共に、誠に御記臆力に富ませられ、例へて申しますれば、博覽會とか展覽會とか云ふ所へ成らせられて、何か一寸御覽遊ばすと、夫れをチヤンと御記臆なされて、供奉の人々は却て忘失れて居るにも拘らず、彼の物品は何ういふ處に在つたとか、斯ういふ物體であつたとか仰せられて、後々までも御話あり、御供の人々が屢々恐縮に堪えざる事ある程御記臆がお宜しう御坐います。

殿下の御嗜好　殿下の御嗜好に關しては、只今是れといふて格別御話をすることは出來兼ねまするが、先づ種々の學藝は御熱心に御學びになり、又音樂等のやうなものも隨分御好みなされますが、別して樂器ではピアノを御嗜み遊ばされ、御餘暇には折々御彈きなされ、却々巧く御出來になる方で御坐ます。

殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學業の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらる時分には、御教育の餘暇には、大抵毎日御庭内で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戯も催されまするが其中でもテニスの如きは大層御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野杯を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乘ることは餘り好まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、何時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かすにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭内が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭内で以て十分行ふことが出來ます。併し鎌倉に成らせられましても、御遊戯杯の種類は矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス杯を能く御好みになりまする。

殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懷いて居る仁もありませうが、從來殿下の專ら着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

殿下の御食物　これは晝飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御教育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覽になつたり、又秋季には紅葉を御覽になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覽に供すること抔もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歷史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記臆に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には專ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

○○○○

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年青森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御發育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大變下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も實に御達者で、現今の御年齡から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座いまする。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記臆力の御强い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる又殿下には御避寒の爲め每年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には屢々此等の品類を御實見なさるゝ故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさるゝさうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ臺臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御說明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさるゝやうなこともありました。

○○○○○御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて稍々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はります。

泰宮殿下の御近狀

○○○○○殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に渉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記憶力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なことなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に怜悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

○○○○○殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と何時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらるゝ丈けの事で、御遊戲のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も異つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御腕車とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

殿下の御體格　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歳位な女兒の體格に比較致しまするど、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顏の色艶は誠に良しう御座います。

殿下の御學問　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位でありまする。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歳位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御敎授申上げて居る次第であります。

殿下の御食事　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食抔は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成歟かで消化の良いものを御好みなされます。

御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

殿下の御服裝　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

御起臥の時間　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

兩殿下の御交情　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第でありまする。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絕えず御配

慮遊ばされますが、又秦宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕わらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。お丶何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓満な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑なうらゝかな景色が見えて、樂しい〱響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓満平和な氣象が満ち〱て、朝日の影も今日はことに赤くうら丶かに、旗吹く風も今日は長閑に温かく、松の緑もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの丶聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので

人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、今日のやうな簡略した風は許さない。一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立てたものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所のものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてゐる。これらは抑も主意に反したもので、單に己の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので――。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記錄もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記錄に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことであらうと云ふ說だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして齒固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月齒固餅と云のが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齡のふる齒固」云々とあり、源語初音の巻には「こゝかしこに群居つゝ齒固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記錄に、齒固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て緣を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に齒固を置くと先に齒固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してある。又或書を見ると年代は不明だつたがまづ鏡餅を飾その左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て齒固の方が後になり、下つて今日は齒固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。尚又大伴黑主の「わふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

齒固の祝の席に頌するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には齒固の餅は近江のひきり(火切の里)の餅を用ゆべしとある、此やうに種々の稗記に依て案ずると、先づ齒固餅の方が上になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の齒固餅なるものの意味は其字の如く讀むのでなく、齒をよはひと呼んで齡を固むる意で、三方の上には松竹鶴龜の飾を具として下に敷米、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、古い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個(内赤きゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ)を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其周りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穗俵草、左に柿と栗とを置くとある。偖又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多少異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、齒朶(ウラジロ)杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、

柑子、穗俵草などで、今其の用ゆるもの丶意味を聽くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたます强壯の意で、クリ、カキ、ミカン穗俵草は山海の昨物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬萊、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雜煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通づるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は德川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雜煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雜煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顏祝ふともちつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刄物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのものであると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

（完）

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

(一)初生兒の取扱

- 初湯
- 初湯の温度
- 浴後の所置
- 初着及び寢床
- 第一回の授乳
- 睡眠
- 沐浴
- 口腔の清潔法
- 眼の守護

(二)營養法に就ての注意

天然營養法

- 母乳
- 乳母の乳
- 授乳者(慈母并に乳母)の食物
- 離乳

人工營養法

- 牛乳
- 牛乳消毒、防腐并に保存法
- 牛乳稀釋の比例
- 牛乳稀釋の方法
- 煉乳(コンデンスミルク)
- 煉乳稀釋の比例
- 乳の粉
- 哺乳器の清潔法
- 喰初

(三)身體に就ての注意

- 啼泣
- 大小便の排泄
- 便秘

（一）初生兒の取扱

初湯　初生兒は先づ法の如く臍帶を切斷り之に適當の所置を施し然る後沐浴をさせます是を初湯と申します此湯は通常の白湯にて湯桶は通常の沐浴盥又は洗濯盥にてよろしけれども可及的淸潔のものを用ひ其底には二重か三重の木綿を敷き其上に生兒を仰臥せしめ產婆又は介者の腕を以て枕となし靜かに洗淨するものであります。

初湯の温度　は攝氏三十六度五分乃至三十七度五分を以て適度といたします古來本邦に於ては產婆の手

加減を以て定めることになつてをつて實に不同でありますが大抵は熱きに失してをります温度が熱きに過ぐるときは種々なる害がありますが解り易き點を申せば初生兒は皮膚が軟弱であるから温の刺戟に因て皮膚炎又は水胞等を起し易くありますそれかと申して冷に失すれば著しく體温を失ひ危險に陥ることがありますすそれゆゑ可及的寒暖計を以て定むることが肝要であります。

浴後の所置　沐浴を終りますれば豫め供へ置たる和かく糊を脫したる布片（タオルを最も適當となす）の上へ揚げ能く濕りを取り消毒ガーゼを以て臍帶を包み其上に脫脂綿を貼し新鮮しき木綿を以て繃帶を施こし然る後衣服を着せるのであります。

初着及寢床　衣服は糊を脫したる和らかきものを要するは勿論でありますけれども小兒は（殊に嬰兒は）大人に比して體温を失ふ事比較的に多いのでありますから厚き衣服（約大人の倍數）を用ひねばなりませぬ臥床は和らかき蒲團を以て頭の方を高く足の方を

低く取り冬期にあつては湯タンポを足方（足に接近すべからず）に入れ温を與へることが必要であります。

第一回の授乳　生兒が出産ますれば直に肺呼吸を初めまして直接に氛圍氣中の酸素を取り身體を養ふものでありますから急ぎ授乳するの必要はありませぬ依て二十四時乃至三十六時間を經て後初めて乳汁を與ふるのを良といたします然而それまでの間は少しづゝの薄き紅茶又は砂糖湯を飲ましておけば宜しいのであります。

沐浴　産兒出生後三ヶ月以内は毎日以後は毎日又は隔日に沐浴をなさしむるを良といたします然て其温度は前述の通り三十六度五分乃至三十七度五分が適度であります全體西洋では漸々下降せしめ三十五度乃至三十六度位の温度において沐浴せしむる樣になつてをりますが日本では全く反對でありまして漸々知らず識らずの間に温度を高めて大抵四十度以上四十四五度位の湯を平氣で使つてをります健康上決して好くはありませぬ。

口腔の清潔法　乳兒の口腔には殘留たる乳汁の腐敗によつて種々なる病氣（鵞口瘡、アフテン、及潰爛性口内炎等）を發し易きゆゑ可成注意し毎日二回乃至三回づゝ沸騰水又は稀薄なる硼酸水を新しき布片に浸し指頭に卷き付け口腔内を洗ふことが必要であります。

眼の守護　初生兒は膿漏性結膜炎を起し易くありますから充分注意して出産後一二週間は毎日一二回無菌水又は稀薄なる硼酸水を以て洗ふことが必要であります膿漏性結膜炎も初め單純の結膜加答兒と同じやうでありますから注意して若し眼が赤くなるか又は眼分泌物にても顯はれる場合には早く醫者。治療を受けねばなりませぬ。

（つゞく）



新年接客の用意

外務大臣官邸庖厨主任　宇野彌太郎口述
岡野なりゑ筆記

日本風ではそれ〲宜き仕方がありますが、しかし室も西洋間の椅子テーブルとなつたとしますと多少接遇の方も新しい方を用ゐたくなり。且つ西洋人でも來賀のうちにありとすると、その工夫が必要となります、それには西洋風を參考するがよろしうござゐますが、一々は他日ゆるりと致すことにして、一寸こゝに參考にならうかと思はれますのは私が朝鮮上海の本邦公使館や領事館で新年祝賀のためにと、のへました仕方をおはなしいたしませう。

公使館、領事館は内外の客がありますので、和洋兩方の用意をいたしました。

テーブルへは(一)島臺に二見浦などをつくり(二)日本料理の口取(三)西洋料理の冷肉(四)日本菓子(五)西洋菓子(六)屠蘇酒(七)シヤンパン酒(八)ポンチ(九)紅茶といつたやうなものを來客の内外に應じて好み〲にすゝめる事にしました。

勿論西洋風の接遇にすれば、まだいろ〱かはつたやり方もあります。しかし晩餐とちがひ元來これはホンの口をうるほすといふだけで、これをたべるのむといふのが主ではなく、景色だけのものゆゑ、肉なども冷寒のものに限つて居ります。

さて家庭によつては手輕くする仕方はいくらもあります。

▲冷肉

カランデン(雉子)ロースビーフ(牛)コールドハム(豚)コーンビーフ(鹽牛)ロースチキン(鷄)とまだないではありませむ、しかしこれを皆そなへるにも及びません、ロースビーフにコールドハムぐらゐにすれば手輕くそれでも澤山であります。

▲ポンチ

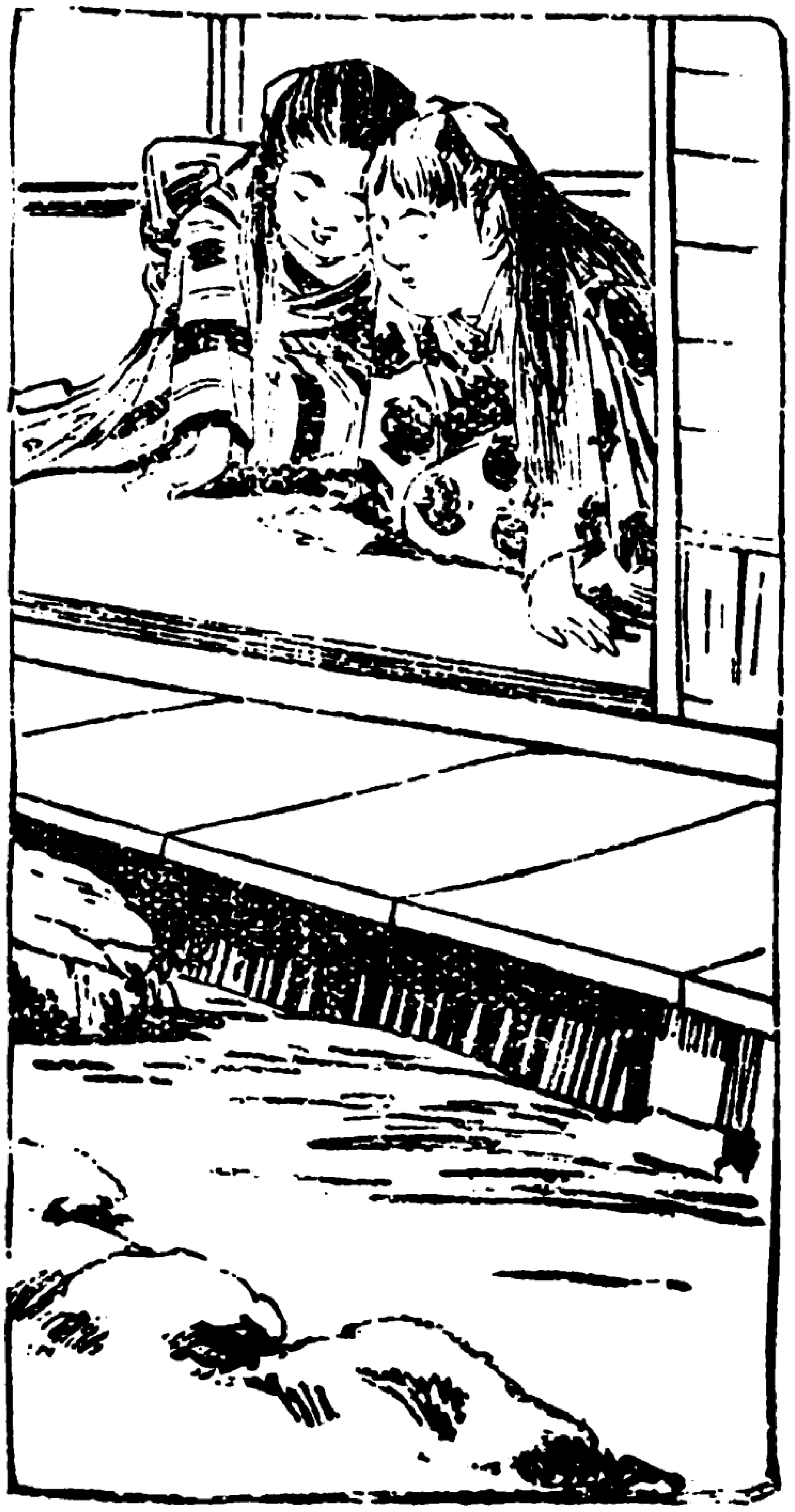
こういふ祝ひには エギノー がよろしうございます參考に製方を末に申します。しかしこれは普通の家

庭には一寸適せぬかも知れませんが、こういふ時には饗をそへるものであります。

▲菓子

西洋でクリスマスにはボロンケーキ一にクリスマスケーキを遣ひます。これなどは新年用としてもよろしからうと思ひますが、非常にたかくもあり、且材料が日本にはないものがあります、それゆゑ有名な製菓師でも十分には出來ません。本統のボロンケーキは一ケ年を經てもまだ味のかはらぬところが名菓とするのです。

ポロンケーキはむづかしいとして手輕いのはスポンヂケーキでしせう、これにドナスやウエーフアーなどをそへるのです。勿論スポンヂケーキは飾をつけるので、すると飾菓子としてうつくしうございますスポンヂケーキの製方もすゑにのべましよう。



▲手輕き接遇

そこで新年の手輕き接遇方は冷肉もボンチものぞき(一)スポンヂケーキそのほか菓子に(二)紅茶を用意して、これを來客毎に饗するばかりで失禮にはなりません

▲ポンチの製方

ポンチはこうしてこしらへます。

玉子八個　砂糖一ポンド　ラム酒八合　ブランデー八合　牛乳五合　ナツメーキ二個

玉子の白味と黄味を別々にし、黄身へ砂糖をまぜ、

ラム、ブランデー、牛乳、ナツメーキを入れて、最後に玉子の白身の泡を立たのを入れます。これでポンチが出來ます、ポンチのコップへ入れて侑めます。

▲スポンヂケーキ

鶏卵六個　砂糖大匙五杯、メリケン粉大匙七杯、ベーキングボーダー茶匙一杯、バニエル三滴

鶏卵白身を水氣なき丼に入れ、泡立にて泡を立て丶泡のもりあがるほどかきまはし、砂糖を入れ、黄身を入れ、メリケン粉を加へ、このときベーキングパウダーを入れ、フウワリとかきまはしテンパンに油を引き、紙をしき、その中へ右解きし玉子を入れテンピの中へ入れて焼く、十分間ほどにてよろし。

年始の食物

岡野知十

家内の膳立と賀客への饗應と二つありますが、年賀の客はまづあとにして、家内の膳立をいさゝかしるして見ましよう。

▲雑　煮

何よりも雑煮をいはふといふ事が上下を通じての例でありますが、さてこの雑煮は家例〳〵で多少ちがひはありましよう、随分明治の新家例として大分ちがつたやり方の家もあらうと思ふ。ある醫學士で今は病院もあり、すこぶる繁昌されますが、こゝの雑煮は牛肉の汁を大鍋につくつて、これで餅を煮るのが例である。これは主人が卒業後小く開業した新年に新夫婦ぎりで牛肉を煮て、それで餅をいはつたのが、翌年も思ひ出してこれをつくり、二十年來の例となつたとの事です。

こういふ例はまだありますことであらう。旨く食ふといふ點から蒲鉾、鴨などを加へるのは大分多いやうである。それも好み次第としてよろしいが。新年の食物などいふものは、必ずうまいものとばかりでなく、祝意といふ事がともなひ、それには(一)名稱のめでたきと、(二)歴史すなはち家例などいふ事が

重なる要件となることゆゑ、それ等からいかに雑煮をつくるべきかも考へる事は無益ではない、といふのは一も二も古式古例にしたがひ、つまらぬ事に手間と入費をかけて、左ほど益のない所謂舊弊をやらうといふのではない。明治の新家庭は舊弊を排斥せねばならぬ。しかし手軽で、趣味があつて、且つ一方新年の氣を生じ得るものとせば、それを用ゐるのはよからうと思ふ。新年家庭の雑煮は古式からいへば左の數種を用ゐる。

(一)餅(二)若菜(三)鰹節(四)串鮑(五)昆布(六)煎海鼠(七)大根(八)里芋

これを用ふるを例となせど、串鮑、煎海鼠等は面倒といふほどはなくとも、一寸うるさいといへばうるさい。畧して

(一)若菜(二)大根(三)里芋(四)昆布(五)花かつを

これを用ゐて、煮汁は昆布、鰹節でよくとつて風味よくつくれば、ナマジ鴫や蒲鉾などを入れたよりは淸く且つどことなく古き風味があつて、新年家庭にはよろしからうと思ふ。尤もこれは殆んど普通の雑煮ゆゑ申すまでもないかも知れぬ。

只だ注意は餅もその他も鍋を別に同じ汁で下煮をし椀へもり、注汁は別に煮立て丶上よりかけ、花かつををかけると汁が消てよろしいのです。チト手數でもこの注意をのぞみます。

鴫、海老、竹の子などを加へての雑煮はうまいにはちがひない、これはむしろ年始の來客用によろしいので、家庭にはまへの淡泊なのがよいでありましよう。

雑煮のほかは、各自の勝手で別に何の椀と例をきめぬ方がよいと思ふ。皿は何、平は何にといふ事はいらぬ事と思ふ。ニンジン、ゴボウ、イモなどを煮溜ておくのがすきならそうしても平に用ゐてもよいでせう、ナマスが好きならそれもよいでしよう、鮭がよければそれもよろしい。大概コンなものを家庭の新年の食例に用ゐるが、わざ〳〵には及ばぬと思ふ。

▲重づめもの

殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學級の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらる時分には、御教育の餘暇には、大抵毎日御庭内で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戲も催されまするが其中でもテニスの如きは大層御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野抔を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乘ることは餘り望まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、毎時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かずにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭内が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭内で以て十分行ふことが出來ます。併し鎌倉に成らせられましても、御遊戲抔の種類は矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス抔を能く御好みになりまする。

殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懷いて居る仁もありませうが、從來殿下の專ら着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

殿下の御食物　これは輕飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御教育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覽になつたり、又秋季には紅葉を御覽になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覽に供すること杯もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歴史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記臆に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には専ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

○○○○○

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年青森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御養育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大變下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も實に御達者で、現今の御年齢から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座いまする。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記臆力の御强い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる又殿下には御避寒の爲め毎年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には歴々此等の品類を御實見なさる丶故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさる丶さうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ臺臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御說明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさる丶やうなこともありました。

○○○○○御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて種々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はります。

泰宮殿下の御近狀

○○○○○殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に渉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記憶力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なことなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に怜悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

○○○○○殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と每時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらる丶丈けの事で、御遊戲のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も異つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御俥とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

殿下の御體格　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歲位な女兒の體格に比較致しまするど、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顏の色艶は誠に良しう御座います。

殿下の御學問　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位でありまする。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歲位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御教授申上げて居る次第であります。

殿下の御食事　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食杯は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成軟かで消化の良いものを御好みなされます。

御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

殿下の御服裝　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

御起臥の時間　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

兩殿下の御交情　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第であります。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絕えず御配

御遊ばされますが、又泰宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕あらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。おゝ何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓滿な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑ならうらゝかな景色が見えて、樂しい〳〵響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓滿平和な氣象が滿ち〳〵て、朝日の影も今日はことに赤くうらゝかに、旗吹く風も今日は長閑に温かく、松の緑もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので

人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、今日のやうな簡略した風は許さない。一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立たものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所ものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてある。これらは抑も主意に反したもので、單に己の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので——。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記錄もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記錄に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことであらうと云ふ說だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして齒固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月齒固餅と云のが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齡のふる齒固」云々とあり、源語初音の卷には「こゝかしこに群居つゝ齒固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記錄に、齒固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て緣を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に齒固を置くと先に齒固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してある。又或書を見ると年代は不明だつたがまづ鏡餅を飾その左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て齒固の方が後になり、下つて今日は齒固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。尙又大伴黒主の「あふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

齒固の祝の席に供するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には齒固の餅は近江のひぎり（火切の里）の餅を用ゐべしとある、此やうに種々の旧記に依て案ずると、先づ齒固餅の方が主になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の齒固餅なるものの意味は其字の如く讀むのでなく、齒をよはひと呼んで齡を固むる意で、三寳の上には松竹梅の類を眞として下に敷れ、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、古い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個（内赤さゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ）を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其周りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穗俵草、左に柿と栗とを置くとある。偖又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多小異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、齒朶（ウラジロ）杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、柑子、穗俵草などで、今其の用ゆるものゝ意味を聽くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたまず強壯の意で、クリ、カキ、ミカン穗俵草は山海の時物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬萊、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雜煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通づるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は徳川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雜煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雜煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顏祝ふともちつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刃物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのものであると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

(完)

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

(一)初生兒の取扱

初　湯

初湯の温度

浴後の所置

初着及び寢床

第一回の授乳

沐　浴

口腔の清潔法

眼の守護

(二)營養法に就ての注意

天然營養法

母　乳

乳母の乳

授乳者(慈母并に乳母)の食物

離　乳

人工營養法

牛　乳

牛乳消毒、防腐并に保存法

牛乳稀釋の比例

牛乳稀釋の方法

煉　乳(コンデンスミルク)

煉乳稀釋の比例

乳の分量

哺乳器の清潔法

喰　初

(三)身體に就ての注意

啼　泣

大小便の排泄

便　秘

(一) 初生兒の取扱

初湯　初生兒は先づ法の如く臍帶を切斷り之に適當の所置を施し然る後沐浴をさせます是を初湯と申します此湯は通常の白湯にて湯桶は通常の沐浴盥又は洗濯盥にてよろしけれども可及的清潔のものを用ひ其底には二重か三重の木綿を敷き其上に生兒を仰臥せしめ產婆又は介者の腕を以て枕となし靜かに洗淨するものであります。

初湯の溫度　は攝氏三十六度五分乃至三十七度五分を以て適度といたします古來本邦に於ては產婆の手

加減を以て定めることになつてをつて實に不同でありますが大抵は熱きに失してをります溫度が熱きに過ぐるときは種々なる害がありますが解り易き點を申せば初生兒は皮膚が軟弱であるから溫の刺戟に因て皮膚炎又は水胞等を起し易くありますそれかと申して冷に失すれば著しく體溫を失ひ危險に陷ることがありますそれゆゑ可及的寒暖計を以て定むることが肝要であります。

浴後の所置　沐浴を終りますれば豫め供へ置たる和かく糊を脫したる布片(タオルを最も適當となす)の上へ揚げ能く濕りを取り消毒ガーゼを以て臍帶を包み其上に脫脂綿を貼し新鮮しき木綿を以て綳帶を施こし然る後衣服を着せるのであります。

初着及寢床　衣服は糊を脫したる和らかきものを要するは勿論でありますけれども小兒は(殊に嬰兒は)大人に比して體溫を失ふ事比較的に多いのでありますから厚き衣服(約大人の倍數)を用ひねばなりませぬ臥床は和らかき蒲團を以て頭の方を高く足の方を

低く取り冬期にあつては湯タンポを足方(足に接近すべからず)に入れ温を與へることが必要であります。

第一回の授乳　生兒か出產ますれば直に肺呼吸を初めまして直接に氛圍氣中の酸素を取り身體を養ふものでありますから急ぎ授乳するの必要はありませぬ依て二十四時乃至三十六時間を經て後初めて乳汁を與ふるのを良といたします然而それまでの間は少しづゝの薄き紅茶又は砂糖湯を飮まして置けば宜しいのであります。

沐浴　產兒出生後三ヶ月以內は每日以後は每日又は隔日に沐浴をなさしむるを良といたします然て其温度は前述の通り三十六度五分乃至三十七度五分が適度であります全歐西洋では漸々下降せしめ三十五度乃至三十六度位の温度において沐浴せしむる樣になつてをりますが日本では全く反對でありまして漸々知らず識らずの間に温度を高めて大抵四十度以上四十四五度位の湯を平氣で使つてをります健康上決して好くはありませぬ。

口腔の淸潔法　乳兒の口腔には殘留たる乳汁の腐敗によつて種々なる病氣(鵞口瘡、アフテン、及潰爛性口内炎等)を發し易きゆゑ可成注意し每日二回乃至三回づゝ沸騰水又は稀薄なる硼酸水を新しき布片に浸し指頭に卷き付け口腔內を洗ふことが必要であります。

眼の守護　初生兒は膿漏性結膜炎を起し易くありますから充分注意して出產後一二週間は每日一二回無菌水又は稀薄なる硼酸水を以て洗ふことが必要であります膿漏性結膜炎も初め單純の結膜加的兒と同じやうでありますから注意して若し眼が赤くなるか又は眼分泌物にても顯はれる場合には早く醫者。治療を受けねばなりませぬ。

(つゞく)



新年接客の用意

外務大臣官邸庖厨主任 宇野彌太郎口述
岡野なりゑ筆記

日本風ではそれ〲簡易な仕方がありますが、しかし室も西洋間の椅子テーブルとなつたとしますと多少接遇の方も新しい方を用ゐたくなり。且つ西洋人でも來賀のうちにありとすると、その工夫が必要となります、それには西洋風を參考するがよろしうござゐますが、一々は他日ゆるりと致すことにして、一すこ丶に參考にならうかと思はれますのは私が朝鮮上海の本邦公使館や領事館で新年祝賀のためにと丶のへました仕方をおはなしいたしませう。

公使館、領事館は内外の客がありますので、和洋兩方の用意をいたしました。

テーブルへは(一)島臺に二見浦などをつくり(二)日本料理の口取(三)西洋料理の冷肉(四)日本菓子(五)西洋菓子(六)屠蘇酒(七)シャンパン酒(八)ポンチ(九)紅茶といつたやうなものを來客の内外に應じて好み〱にすゝめる事にしました。

勿論西洋風の接遇にすれば、まだいろ〱かはつたやり方もあります。しかし晩餐とちがひ元來これはホンの口をうるほすといふだけで、これをたべるのむといふのが主ではなく、景色だけのものゆゑ、肉なども冷寒のものに限つて居ります。さて家庭によつては手輕くする仕方はいくらもあります。

▲冷肉

カランデン(雞子)ローストビーフ(牛)コールドハム(豚)コーンビーフ(鹽牛)ローストチキン(雞)とまだないではありませむ、しかしこれを皆そなへるにも及びません、ローストビーフにコールドハムぐらゐにすれば手輕くそれでも澤山であります。

▲ポンチ

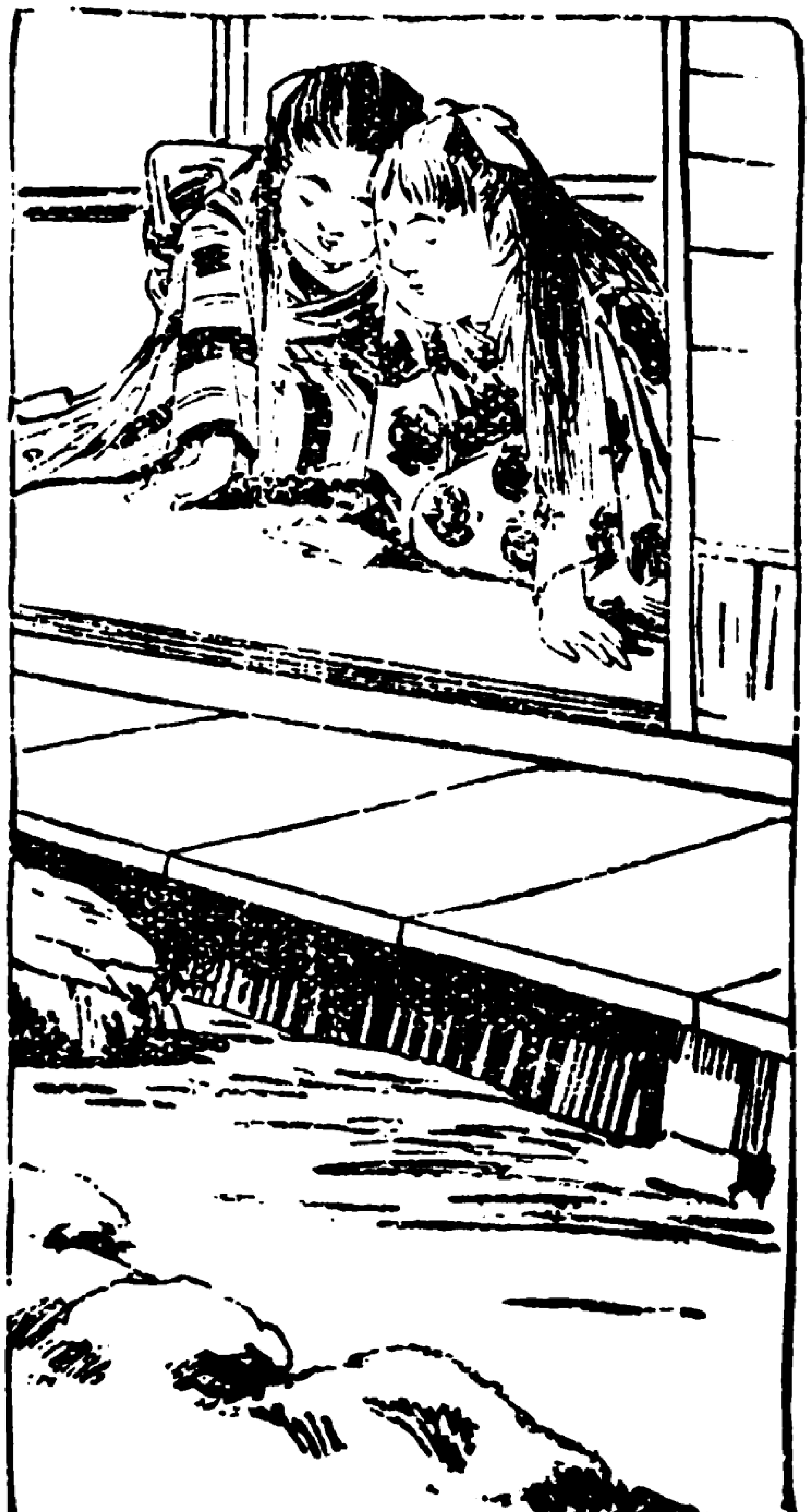
こういふ祝ひには エヤノー がよろしうございます參考に製方を末に申します。しかしこれは普通の家

庭には一寸適せぬかも知れませんが、こういふ時には饗をそへるものであります。

▲菓子

西洋でクリスマスにはボロンケーキ一にクリスマスケーキを遣ひます。これなどは新年用としてもよろしからうと思ひますが、非常にたかくもあり、且材料が日本にはないものがあります、それゆゑ有名な製菓師でも十分には出來ません。本統のボロンケーキは一ケ年を經てもまだ味のかはらぬところが名菓とするのです。

ボロンケーキはむづかしいとして手輕いのはスポンヂケーキでしせう、これにドナスやウエーファアーなどをそへるのです。勿論スポンヂケーキは飾をつけるので、すると飾菓子としてうつくしうございますスポンヂケーキの製方もすゑにのべましよう。



▲手輕き接遇

そこで新年の手輕き接遇方は冷肉もボンチものぞき(一)スポンヂケーキそのほか菓子に(二)紅茶を用意して、これを來客毎に饗するばかりで失禮にはなりません

▲ポンチの製方

ポンチはこうしてこしらへます。

玉子八個　砂糖一ポンド　ラム酒八合　ブランデー八合　牛乳五合　ナツメーキ二個

玉子の白味と黄味を別々にし、黄身へ砂糖をまぜ、

ラム、ブランデー、牛乳、ナツメーキを入れて、最後に玉子の白身の泡を立たのを入れます。これでポンチが出來ます、ポンチのコップへ入れて備めます。

▲スポンヂケーキ

鷄卵六個　砂糖大匙五杯、メリケン粉大匙七杯、ベーキングポーダー茶匙一杯、バニエル三滴

鷄卵白身を水氣なき丼に入れ、泡立にて泡を立て丶泡のもりあがるほどかきまはし、砂糖を入れ、黄身を入れ、メリケン粉を加へ、このときベーキングパウダーを入れ、フウワリとかきまはしテンパンに油らを引き、紙をしき、その中へ右解きし玉子を入れテンピの中へ入れて焼く、十分間ほどにてよろし。

年始の食物

岡野知十

家内の膳立と賀客への饗應と二つわりますが、年賀の客はまづあとにして、家内の膳立をいさゝかしるして見ましよう。

▲雑　煮

何よりも雑煮をいはふといふ事が上下を通じての例でありますが、さてこの雑煮は家例〳〵で多少ちがひはありましよう、随分明治の新嘉例として大分ちがつたやり方の家もあらうと思ふ。ある醫學士で今は病院もあり、すこぶる繁昌されますが、こゝの雑煮は牛肉の汁を大鍋につくつて、これで餅を煮るのが例である。これは主人が卒業後小く開業した新年に新夫婦ぎりで牛肉を煮て、それで餅をいはつたのが、翌年も思ひ出してこれをつくり、二十年來の例となつたとの事です。

こういふ例はまだありますことであらう。旨く食ふといふ點から蒲鉾、鴨などを加へるのは大分多いやうである。それも好み次第としてよろしいが。新年の食物などいふものは、必ずうまいものとばかりでなく、祝意といふ事がともなひ、それには(一)名稱のめでたきと、(二)歴史すなはち家例などいふ事が

重なる要件となることゆゑ、それ等からいかに雜煮をつくるべきかも考へる事は無益ではない、といふのは一も二も古式古例にしたがひ、つまらぬ事に手間と入費をかけて、左ほど益のない所謂舊弊をやらうといふのではない。明治の新家庭は舊弊を排斥せねばならぬ。しかし手輕で、趣味があつて、且つ一方新年の氣を生じ得るものとせば、それを用ゐるのはよからうと思ふ。新年家庭の雜煮は古式からいへば左の數種を用ゐる。

(一)餅(二)若菜(三)鰹節(四)串鮑(五)昆布(六)煎海鼠(七)大根(八)里芋

これを用ふるを例となせど、串鮑、煎海鼠等は面倒といふほどはなくとも、一寸うるさいといへばうるさい。略して

(一)若菜(二)大根(三)里芋(四)昆布(五)花かつを

これを用ゐて、煮汁は昆布、鰹節でよくとつて風味よくつくれば、ナマジ鴨や蒲鉾などを入れたよりは淸く且つどことなく古き風味があつて、新年家庭にはよろしからうと思ふ。尤もこれは殆んど普通の雜煮ゆゑ申すまでもないかも知れぬ。

只だ注意は餅もその他も鍋を別に同じ汁で下煮をし椀へもり、注汁は別に煮立てゝ上よりかけ、花かつををかけると汁が澄てよろしいのです。チト手數でもこの注意をのぞみます。

鴨、海老、竹の子などを加へての雜煮はうまいにはちがひない、これはむしろ年始の來客用によろしいので、家庭にはまへの淡泊なのがよいでありましよう。

雜煮のほかは、各自の勝手で別に何の箇と例をきめぬ方がよいと思ふ。皿は何、平は何にといふ事はいらぬ事と思ふ。ニンジン、ゴボウ、イモなどを煮溜ておくのがすきならそうしても平に用ゐてもよいでせう、ナマスが好きならそれもよいでしよう、鮭がよければそれもよろしい。大槪コンなものを家庭の新年の食例に用ゐるが、わざ〳〵には及ばぬと思ふ。

▲重づめもの

雑煮ばかりではものたらぬなら、重づめものをつくり、(一重)煮豆(二重)テリゴマメ(三重)昆布卷スゴボウ(四重)數の子、これを景色に皿へとりて、ほかには淺漬の大根、それで屠蘇雜煮を祝ふ事で普通には十分であらう。

新年家庭には本膳を用ゐるなどもきまつてよからうが、とても手不足では出來ず。その內には年始客は來る、といふものゆゑ、あまり手を勞せず一家がゆつくり屠蘇雜煮をいはふといふだけに止めておく方がよからうと思ふ。そのほかのこのみは各自の適宜です。

▲來客の用意

來客のための用意もいろ〳〵あります、しかし新家庭はなるべくこれも手をはぶく方がよからうと思ふ來客の一々に膳を出す吸物を出す、といふことはよいかも知れぬが。互につまらぬ事でもあります。殊に倒れるまで醉ふ醉はせるといふに至つてはつまらぬはなしです。

宇野氏の說に從ひ、一々あたゝかなものを饗すことはやめ、重づめものに口取、コールドミート、乃至支那の小菜の類でもつめて置いて、これを小皿へとり屠蘇をすゝめるか、乃至、和洋の菓子に紅茶、抹茶、煎茶のうちでも勸るくらゐがよからうと思ふ。客の方も飲む食ふのは永日として祝詞をのべたらほどよくかへる方がよからうと思ふ。

ハンカチーフ模樣縫ひ方

上村百世子

此のハンカチーフの模樣は、餘りこつてりとしない方が、今はよろしい樣に思ひますから、一隅か二隅がよろしう御座います、圖に載せて有りますのは、極手輕な一隅模樣で有ります、糸は矢張りかま糸を割り合せにいたしまして、前申上ました樣に、あまよりにします、是は左よりで御座います、初め圖に有る如く花より致します、御承知の通りハンカチーフは、裏表の餘り



ハンカチーフ模様



桔梗

次に朝御膳にお移り遊ばすのでございます。

朝御膳には、一の膳二の膳三の膳とございまして其一の膳には鯛、赤貝、白髪大根、岩茸、栗、生姜、金柑の御鱠、小蕪、梅花摘入の御汁、生大口魚、獨活の御煮物、御漬物、御飯の五品でして、御鱠に使用ひまする三杯酢は、煮詰めました最上の味淋に最上の酢と醤油とを程よく交せました加減酢でして、御漬物は其時節により升すが、新漬大根、澤庵、白瓜か水瓜の奈良漬、守口大根の類でございます。二の膳には照焼魴鮄、煮掛鱠、鮑、笠松茸、柚子の御汁、小松菜、花かゝの御浸しの四色でございまして三の膳には御炙小鯛、錦卵黄湯葉の御二種を供へます。

次に晝御膳でございまするが、是亦やはり一、二、三の膳がございまして、一の膳には腹引鮭、細魚、防風、花栗、金柑の御鱠、鯉の御汁、素麺、椀茸の御煮物の御三種。二の膳には煎上王餘魚、味噌漬甘鯛、花鰹、千箱草、神馬藻の御汁。蒲焼鰻の御四種。三の膳には御炙小鯛、松魚煮百合根の御二種を供へます。

それから御夜食は煎上端白、山吹鱠、火取沙魚、此節海苔の御汁、砂糖煮人参の御四種の外に、御鉢盛として旭蒲鉾、附焼鶏。味附鯛、崩し生姜。若鶏、椀茸、菜の玉子綴。松魚煮、近江蕪。白魚に櫻の花の御吸物の御五種を供へて、これがお濟みになりますと夜に入りましてから御盃の事がございまして、こゝに始めて御雑煮を御祝ひ遊ばさるゝのであります。其御献立は、小餅、里芋、鏡大根、煎海鼠、串貝、花かゝの白味附御雑煮。數の子、附焼車蝦。蜜柑の御菜三種、鯛鰭の御吸物などでございます。

これで元日の大御食は全く終るので厶ます。（完）

富美宮泰宮兩殿下の御近況

記者

茲に兩内親王殿下の御近狀に關して記者の洩承りたる所を大要拜寫し奉るはこの芽出度明治

甲辰の歳旦を迎ふるに臨んで讀者諸氏と與に窮りなき我が皇運の彌々隆昌を加ふるを祝し奉らんが爲めである。　（一記者）

兩殿下の御近況に付爰に少しく御話を致しまするが一體富美宮殿下と泰宮殿下とは御年輩が少し違つて居ります。富美宮殿下は明治二十四年の御生誕で、今年恰度十四歳に渉らせられ、又泰宮殿下は明治二十九年の御生誕で、今年恰度九歳に成らせられまする。そこで兩殿下の御性行を御一緒に述べますると一寸談話に混雜を生ずるやうに考へられますから、先づ富美宮殿下の御話から始め、夫れが終つたら泰宮殿下の御行事に移るやうに致したいと思ひます。

富美宮殿下の御近狀

○○○○○
殿下の御體格　富美宮殿下には今年十四歳に渉らせられますが、之を普通の女子に比すると、御體格が餘程大きく、年來聊かの御障礙もあらせられず、至極御壯健なる御體質を保たせられて居られまする。

○○○○○
殿下の御性質　と申しては誠に恐入る次第なれども……世間では通常怜悧と云ふことを能く言ひますけれども、殿下の御聰明なる事は、世俗の所謂怜悧抔とは却々以て比較は出來ぬことゝ存じます。且年來至極御健全であらせらるゝと共に、誠に御記憶力に富ませられ、例へて申しますれば、博覽會とか展覽會とか云ふ所へ成らせられて、何か一寸御覽遊ばすと、夫れをチヤンと御記憶なされて、供奉の人々は却て忘失れて居るにも拘らず、彼の物品は何ういふ處に在つたとか、斯ういふ物體であつたとか仰せられて、後々までも御話あり、御供の人々が屢々恐縮に堪えざる事ある程御記臆がお宜しう御坐います。

○○○○○
殿下の御嗜好　殿下の御嗜好に關しては、只今是れといふて格別御話をすることは出來兼ねまするが、先づ種々の學藝は御熱心に御學びになり、又音樂等のやうなものも隨分御好みなされますが、別して樂器ではピアノを御嗜み遊ばされ、御餘暇には折々御彈きなされ、却々巧く御出來になる方で御坐ます。

殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學業の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらるる時分には、御敎育の餘暇には、大抵毎日御庭内で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戯も催されまするが其中でもテニスの如きは大層御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野抔を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乘ることは餘り好まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、何時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かずにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭内が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭内で以て十分行ふことが出來ます。併し鎌倉に成らせられましても、御遊戯抔の種類は矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス抔を能く御好みになりまする。

殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懷いて居る仁もありませうが、從來殿下の專ら着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

殿下の御食物　これは晝飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御敎育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覧になつたり、又秋季には紅葉を御覧になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覧に供すること抔もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歷史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記憶に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には專ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

○○○○○

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年靑森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御養育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大變下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も質に御達者で、現今の御年齡から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座います。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記憶力の御强い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる。又殿下には御避寒の爲め毎年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には歴々此等の品類を御實見なさるゝ故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさるゝさうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ來臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御説明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさるゝやうなこともありました。

御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて種々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はりまする。

泰宮殿下の御近狀

殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に渉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記憶力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なことなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に怜悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と何時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらるゝ丈けの事で、御遊戯のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も變つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御俥とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

殿下の御體格　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歳位な女兒の體格に比較致しますると、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顏の色艶は誠に良しう御座います。

殿下の御學問　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位でありまする。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歳位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御敎授申上げて居る次第であります。

殿下の御食事　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食杯は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成軟かで消化の良いものを御好みなされます。御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

殿下の御服裝　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

御起臥の時間　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

兩殿下の御交情　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第であります。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絶えず御配

歴遊ばされますが、又泰宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕わらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。あゝ何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓滿な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑なうらゝかな景色が見えて、樂しい〳〵響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓滿平和な氣象が滿ち〳〵て、朝日の影も今日はことに赤くうらゝかに、旗吹く風も今日は長閑に溫かく、松の緑もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立たものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所のものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてある。これらは抑も主意に反したもので、單に己の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので――。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記録もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記録に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことでわらうと云ふ説だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして齒固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月齒固餅と云ふのが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齡のふる齒固」云々とあり、源語初音の巻には「こゝかしこに群居つゝ齒固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記録に、齒固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て緣を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に齒固を置くと先に齒固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してある。又或書を見ると年代は不明だつたがまづ鏡餅を飾その左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て齒固の方が後になり、下つて今日は齒固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。倘又大伴黑主の「あふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

歯固の祝の席に祀するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には歯固の餅は近江のひぎり（火切の里）の餅を用ゆべしとある、此やうに種々の舊記に依て案ずると、先づ歯固餅の方が主になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の歯固餅なるものの意味は其字の如く讀むのでなく、歯をよはひと呼んで齢を固むる意で、三寶の上には松竹鶴龜の類を具として下に敷紙、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、舊い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個（内赤さゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ）を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其周りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穂俵草、左に柿と栗とを置くとある。偖又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多少異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、歯朶（ウラジロ）杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、柑子、穂俵草などで、今其の用ゆるものゝ意味を聴くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたまず強壯の意で、クリ、カキ、ミカン穂俵草は山海の時物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬莱、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雑煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通ずるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は徳川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雑煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雑煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顔祝ふともちつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刄物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのものであると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

（完）

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

（一）初生兒の取扱

- 初湯
- 初湯の溫度
- 浴後の所置
- 初着及び寢床
- 第一回の授乳
- 沐浴
- 口腔の清潔法
- 眼の守護

（二）營養法に就ての注意

- 天然營養法
- 母乳
- 乳母の乳
- 授乳者（慈母幷に乳母）の食物
- 離乳
- 人工營養法
- 牛乳
- 牛乳消毒、防腐幷に保存法
- 牛乳稀釋の比例
- 牛乳稀釋の方法
- 煉乳（コンデンスミルク）
- 煉乳稀釋の比例
- 乳の分量
- 哺乳器の清潔法
- 喰初

（三）身體に就ての注意

- 啼泣
- 大小便の排泄
- 便祕

皮膚の清潔法及び守護
手指の爪
體重及び體重增加
月　代
頭　巾
衣服及び襁褓
種　痘
齒牙の發生
初生兒及小兒期に發する疾病
　初生兒期に發する疾病
　小兒期に發する疾病

（二）初生兒の取扱

初湯　初生兒は先づ法の如く臍帶を切斷り之に適當の所置を施し然る後沐浴をさせます是を初湯と申します此湯は通常の白湯にて湯桶は通常の沐浴盥又は洗濯盥にてよろしけれども可及的清潔のものを用ひ其底には二重か三重の木綿を敷き其上に生兒を仰臥せしめ産婆又は介者の腕を以て枕となし靜かに洗淨するものであります。

初湯の溫度　は攝氏三十六度五分乃至三十七度五分を以て適度といたします古來本邦に於ては産婆の手

加減を以て定めることになつてをつて實に不同でありますが大抵は熱きに失してをります溫度が熱きに過ぐるときは種々なる害がありますが解り易き點を申せば初生兒は皮膚が軟弱であるから溫の刺戟に因て皮膚炎又は水胞等を起し易くありますそれかと申して冷に失すれば著しく體溫を失ひ危險に陷ることがありますそれゆゑ可及的寒暖計を以て定むることが肝要であります。

浴後の所置　沐浴を終りますれば豫め供へ置たる和かく糊を脫したる布片（タオルを最も適當となす）の上へ揚げ能く濕りを取り消毒ガーゼを以て臍帶を包み其上に脫脂綿を貼し新鮮しき木綿を以て繃帶を施こし然る後衣服を着せるのであります。

初着及襁褓　衣服は糊を脫したる和らかきものを要するは勿論でありますけれども小兒は（殊に嬰兒は）大人に比して體溫を失ふ事比較的に多いのでありますから厚き衣服（約大人の倍數）を用ひねばなりませぬ臥床は和らかき蒲團を以て頭の方を高く足の方を

低く取り多期にあつては湯タンポを足方（足に接近すべからず）に入れ温を與へることが必要であります。

第一回の授乳　生兒か出產ますれば直に肺呼吸を初めまして直接に氛圍氣中の酸素を取り身體を養ふものでありますから急ぎ授乳するの必要はありませぬ依て二十四時乃至三十六時間を經て後初めて乳汁を與ふるのを良といたします然而それまでの間は少しづゝの薄き紅茶又は砂糖湯を飲まして置けば宜しいのであります。

沐浴　產兒出生後三ヶ月以內は每日以後は每日又は隔日に沐浴をなさしむるを良といたします然て其溫度は前述の通り三十六度五分乃至三十七度五分が適度であります全體西洋では漸々下降せしめ三十五度乃至三十六度位の溫度において沐浴せしむる樣になつてをりますが日本では全く反對でありまして漸々知らず識らずの間に溫度を高めて大抵四十度以上四十四五度位の湯を平氣で使つてをります健康上決して好くはありませぬ。

口腔の清潔法　乳兒の口腔には殘留たる乳汁の腐敗によつて種々なる病氣（鵞口瘡、アフテン、及潰爛性口內炎等）を發し易きゆゑ可成注意し每日二回乃至三回づゝ沸騰水又は稀薄なる硼酸水を新しき布片に浸し指頭に卷き付け口腔內を洗ふことが必要であります。

眼の守護　初生兒は膿漏性結膜炎を起し易くありますから充分注意して出產後一二週間は每日一二回無菌水又は稀薄なる硼酸水を以て洗ふことが必要であります膿漏性結膜炎も初め單純の結膜加的兒と同じやうでありますから注意して若し眼が赤くなるか又は眼分泌物にても顯はれる場合には早く醫者の治療を受けねばなりませぬ。

（つゞく）



用し得て、婦人たる位地、母の任務、主婦たる任務に堪へるやうにせんければなりません。さうなりますれば、若し不幸夫に先立れましても、決して狼狽する患ひはないのでありませう。兎に角男女は車の兩輪、鳥の双翼の如く、相まつて、圓滿なる社會を造ることが第一であります。

(三) 體育の必要

體育は近頃盛んに行はれ、殆んど擧國の輿論であります。どうも我國女子の身體の惡いことは、全く西洋などに比べると、恥しいほどでありませう。

體操は東京の女學校などでは高等女學校の如き一週間三時間をかけております。然るに他の各種學校では、何もせずして、唯つた切り衞生を構はないのがあります、それに惡いのは、女子の食物であります。女子は多く芋、唐茄子が好物で、肴や牛乳、肉類は餘り好まないのであります。

作法と體操とは、衝突して居ります。作法は少しく禪味を帶びたるものにて、足を內輪に歩み、謹むといふ態で身體を固く造つて動作します、然るに體操は足を外輪に出し、胸は一ぱいに張ります、同じ學校におりて正反對の教授を受けるのであります、其處で私は二ッがかう衝突するが、何れが自然に叶ふて居るやと考へましたが、これは、體操だと思つて居ります。

併しながら、日本の國情として、作法も必要でありまして、坐作進退の落付はこれに限るのでありますから、私は作法の教師が、同時に體操教師であつて頂きたいのであります。而してこれが女教師でありたいことを望むのであります。即ちかくして兩方一致して、一人の手より出づるときは、啻に學校教授上の便利あるばかりではなく、又自然の調和上に可いことであります。

尚希くは、修身の學課は此作法體操教師が克く心得て居たいのであります、蓋し修身は內部の教育、作法

は外部の姿勢教育であるから、別々に分れて居るのが止み、且つ内外呼應して、其良結果を奏するでありませう。

併し體操が壯んになれば、舞踏の如きも亦た大に流行するのでせう。どうぞ鹿鳴館時代の失敗を繰返さないことを願ひます、要するに自然の動作は體操、靜肅は作法、而して作法は修身と一致することを望みます。

以上の三點は、現今一般教育上に於ける欠點若くは幾らか世人の誤解して居るものを矯正して、是非斯くせんければならぬといふ、所謂私が信ずる理想に到達せしむる方法であります。これを縮めていへば女子教育は、完全なる婦人を造ることを目的とす。從つて婦人の處世上甚だ大切なる目的として良家庭を造ることを要求し、女子教育は克くこれ等の働らき間然する所なきやう其伎能と品位とを訓ゆべしといふのであります。されば教育するものも、亦せらるゝものも、此に相一致して、今後我國婦人の面目を立派に立てんことを希望に堪へません。

（完）



元日の大御食

有木磯水

君が代の萬歳無疆と祝杯を捧げまつる最も目出度き今日の元旦、瑞籬長へに聳き、紫雲深く鎖す九重の奥、賢き邊の御事ども申上ぐるは、最恐れ多き事でありまするが、さる皇居大膳職に仕りつる方を訪ひまゐらせ、差支へなしと信じらるゝ限りお話あり我が　兩陛下が元日の御食膳の事を謹みて記し奉らんに、

宮内省の大膳職と申ますのは、即ち　兩陛下が朝な夕なの御食膳を掌る所でありまして、大膳太夫、大膳亮、大膳属、膳部長、膳部副長、膳部など申す職員が、それ〴〵供御饗宴及び其器具に關する事務を管理致し、主管に關する會計を掌るのでございます、そして其職員の數は三十五六人居られましやうか、常にすべての事をお手分してお取扱ひになつて居るのでございます。

そこで元日　兩陛下の大御食は、曉の御湯漬、晴の御膳、朝御膳、晝御膳、御夜食の五度御食膳に向はせられますので、先づ其曉の御湯漬と申しますのは、年立ちかへる東雲の空がほの〴〵と紫宸殿の邊から明けそめまする頃ほひ、定めの御時刻となりまして、　兩陛下御起床遊ばして、軈て御沐浴の事が終り、茲に聞食さるゝ御食膳の事でございまして、それには土器燒玉子、御汁（鱈、雪の上）松魚[illegible]、御飯とが供へてございます。

さて此御食膳がすみまする、と　兩陛下とも御禮服御着用と申す事になりまして、其後捧げまゐらすのが即ち晴の御膳でございます。で、此晴の御膳と申しますのは、御殿の千草の間で聞食さるゝ所謂晴れの御膳でして、酢、酒、鹽、醤油の四種、鯛に鮨足、附燒の雉子の燒物二枚、附燒鯛、切重ね鮑、煎海鼠

の平盛三杯を、最と古風の朱塗の御食卓に安排致して奉り、朱塗の御椅子にお凭り遊ばして聞し食さる、儀式の御膳でございますが、其御献立の中、鯛は零餘子焼と申しまして、其形が零餘子に似て居ります、又亀足と申しますと其零餘子焼の鯛を串にさした尖に大高檀紙をきつてさしましたのを申すのでございます。それから高盛八杯と申して、文蛤、鮭、烏賊、御飯、鱲子、鱸、蒲鉾、車蝦の八種を手際よく調理致して、筒形に高く盛つたのを、徑四寸位の銀の皿に入れまして供へまつり、尙御酒器、御汁（鯛に鯉）、御羹、御湯器などをも供へますが、此御湯器と申しますのは、恰度申しますと湯桶形の銀瓶でありまして、よく我々臣民が申しまする焦し湯の如な、粥の稀薄いもので、飯を炊きました御釜の底に飯を極少し殘し、それを狐色に焦した復湯を入れ程よく沸したもので、其香氣と申し味と申し誠に申分無いものを、其銀瓶の中に盛つてございまして、これは御湯の下と申す食しあがりものでございます、そして其御湯器には銀製の杓子の様なものが添へてございます、此御湯の下は　兩陛下とも平常日々の御朝餐後に食しあがるのを例とせらるゝのでございますと　承はつて居ります。

此の外晴の御膳には、小串鯛、菱葩、割海老、砂糖煮栗、雉子酒、蛤　の御吸物など申す種々の品を卓上に進めまゐらすのでございます。菱葩と申しますのは、大きさ三寸位の丸く薄い白の餅の眞中に、紅の餅を長細くして載せ、其上を白味噌で煮上げました牛房の細かいので安じ、餅の中程から柏餅のやうに二ツに折つて、そしてそれを火にかけ、更にそれを二ツ折の美濃紙に包んだものでございます又雉子酒と申しますと、雉子の抱身と申して羽の下に當りまする極精良の處を鹽漬又は醬油漬といたし刺身などのやうに薄くそいだのを大抵七片位づゝ御茶碗に入れ、結構な生一本の日本酒を熱く沸かして之に注ぎ込みましたものでございます。

先づこれだけが晴の御膳の御献立でございますが

次に朝御膳にお移り遊ばすのでございます。

朝御膳には、一の膳二の膳三の膳とございまして其一の膳には鯛、赤貝、白髪大根、岩茸、栗、生姜、金柑の御鱠、小蕪、梅花摘入の御汁、生大口魚、独活の御煮物、御漬物、御飯の五品でして、御鱠に使用ひまする三杯酢は、煮詰めました最上の味淋に最上の酢と醤油とを程よく交せました加減酢でして、御漬物は其時節によりますが、新漬大根、沢庵、白瓜か水瓜の奈良漬、守口大根の類でございます。二の膳には照焼[illegible]、煎揚鯛、鯛、笹松茸、柚子の御汁、小松菜、花かゝの御浸しの四色でございまして三の膳には御炙小鯛、錦蒸蕎麦湯葉の御二種を供ます。

次に昼御膳でございまするが、是亦やはり一、二、三の膳がございまして、一の膳には塩引鮭、細魚、防風、花栗、金柑の御鱠、鯉の御汁、素麺、椎茸の御煮物の御三種。二の膳には煎上王余魚、味噌漬甘鯛、花鰹、千箱蓴、神馬藻の御汁。蒲焼鰻の御四種。三の膳には御炙小鯛、松魚煎百合根の御二種を供へます。

それから御夜食は煎上端白、山吹鱚、火取沙魚、[illegible]海苔の御汁、砂糖煮人参の御四種の外に、御鉢盛として旭蒲鉾、附焼鶉。味噌鯛、崩し生姜。若鶏、椎茸、菜の王子綴。松魚煎、近江蕪。白魚に桜の花の御吸物の御五種を供へて、これがお済みになりますと夜に入りましてから御盃の事がございまして、こゝに始めて御雑煮を御祝ひ遊ばさるゝのであります。其御献立は、小餅、里芋、鏡大根、煎海鼠、串貝、花かゝの白味噌御雑煮。数の子、附焼車蝦。蜜柑の御菜三種、鯛鰭の御吸物などでございます。

これで元日の大御食は全く終るので厶ます。（完）

富美宮泰宮兩殿下の御近況

記者

茲に兩内親王殿下の御近狀に關して記者の洩承りたる所を大要拜寫し奉るはこの芽出度明治

甲辰の歳旦を迎ふるに臨んで讀者諸氏と與に窮りなき我が皇運の彌々隆昌を加ふるを祝し奉らんが爲めである。　（一記者）

兩殿下の御近況に付爰に少しく御話を致しまするが一體富美宮殿下と泰宮殿下とは御年輩が少し違つて居ります。富美宮殿下は明治二十四年の御生誕で、今年恰度十四歳に渉らせられ、又泰宮殿下は明治二十九年の御生誕で、今年恰度九歳に成らせられまする。そこで兩殿下の御性行を御一緒に述べまするも一寸談話に混雜を生ずるやうに考へられますから、先づ富美宮殿下の御話から始め、夫れが終つたら泰宮殿下の御行事に移るやうに致したいと思ひます。

富美宮殿下の御近状

○○○○○殿下の御體格　富美宮殿下には今年十四歳に渉らせられますが、之を普通の女子に比すると、御體格が餘程大きく、年來聊かの御障礙もあらせられず、至極御壯健なる御體質を保たせられて居られまする。

○○○○○殿下の御性質　と申しては誠に恐入る次第なれども……世間では通常怜悧と云ふことを能く言ひますけれども、殿下の御聰明なる事は、世俗の所謂怜悧抔とは却々以て比較は出來ぬことゝ存じます。且年來至極御健全であらせらるゝと共に、誠に御記臆力に富ませられ、例へて申しますれば、博覽會とか展覽會とか云ふ所へ成らせられて、一寸御覽遊ばすと、夫れをチヤンと御記臆なされて、供奉の人々は却て忘失れて居るにも拘らず、彼の物品は何ういふ處に在つたとか、斯ういふ物體であつたとか仰せられて、後々までも御話あり、御供の人々が屢々恐縮に堪えざる事ある程御記臆がお宜しう御坐います。

○○○○○殿下の御嗜好　殿下の御嗜好に關しては、只今是れといふて格別御話をすることは出來兼ねまするが、先づ種々の學藝は御熱心に御學びになり、又音樂等のやうなものも随分御好みなされますが、別して樂器ではピアノを御嗜み遊ばされ、御餘暇には折々御彈きなされ、却々巧く御出來になる方で御坐ます。

殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學業の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらるる時分には、御教育の餘暇には、大抵毎日御庭內で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戲も催されまするが其中でもテニスの如きは大分御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野抔を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乗ることは餘り望まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、毎時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かずにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭內が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭內で以て十分行ふことが出來ます。併し鎌倉に成らせられましても、御遊戲抔の種類は矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス抔を能く御好みになりまする。

殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懷いて居る仁もありませうが、從來殿下の專ら着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

殿下の御食物　これは晝飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御教育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覽になつたり、又秋季には紅葉を御覽になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覽に供すること抔もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歴史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記臆に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には專ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

〇〇〇〇〇

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年青森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御養育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大變下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も實に御達者で、現今の御年齡から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座います。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記臆力の御強い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる又殿下には御避寒の爲め毎年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には屢々此等の品類を御實見なさるゝ故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさるゝさうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ御臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御說明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさるゝやうなこともありました。

○御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて種々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はりまする。

泰宮殿下の御近狀

○殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に渉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記憶力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なこととなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に怜悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

○殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と何時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらるゝ丈けの事で、御遊戲のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も異つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御俥とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

○殿下の御體格○　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歳位な女兒の體格に比較致しまするど、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顔の色艶は誠に良しう御座います。

○殿下の御學問○　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位でありまする。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歳位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御教授申上げて居る次第であります。

○殿下の御食事○　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食抔は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成軟かで消化の良いものを御好みなされます。御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

○殿下の御服裝○　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

○御起臥の時間○　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

○兩殿下の御交情○　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第であります。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絶えず御配

御遊ばされますが、又秦宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕わらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。あゝ何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓滿な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑なうらゝかな景色が見えて、樂しい〳〵響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓滿平和な氣象が滿ち〳〵て、朝日の影も今日はことに赤くうらゝかに、旗吹く風も今日は長閑に温かく、松の緑もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、今日のやうな簡略した風は許さない。一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立たものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所のものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてゐる。これらは抑も主意に反したもので、單に己の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので──。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記録もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記録に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことであらうと云ふ說だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして歯固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月歯固餅と云のが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齢のふる歯固」云々とあり、源語初音の巻には「こゝかしこに群居つゝ歯固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記録に、歯固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て縁を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に歯固を置くと先に歯固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してゐる。又或書を見ると年代は不明だつたが、まづ鏡餅を飾りその左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て歯固の方が後になり、下つて今日は歯固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。倘又大伴黒主の「おふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

齒固の祝の席に誦するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には齒固の餅は近江のひぎり（火切の里）の餅を用ゆべしとある、此やうに種々の舊記に依て案ずると、先づ齒固餅の方が主になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の齒固餅なるものの意味は其字の如く讀むのでなく、齒をよはひと呼んで齢を固むる意で、三寶の上には松竹梅鶴の類を具として下に敷米、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、舊い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個（内赤さゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ）を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其回りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穗俵草、左に柿と栗とを置くとある。猶又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多小異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、齒朶（ウラジロ）杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、

柑子、穗俵草などで、今其の用ゆるもの丶意味を聽くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたまず强壯の意で、クリ、カキ、ミカン穗俵草は山海の時物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬萊、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雜煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通づるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は德川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雜煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雜煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顔祝ふともぢつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刃物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのものであると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

（完）

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

(一)初生兒の取扱

初湯

初湯の溫度

浴後の所置

初着及び寢床

第一回の授乳

沐浴

口腔の清潔法

眼の守護

(二)營養法に就ての注意

天然營養法

母乳

乳母の乳

授乳者(慈母幷に乳母)の食物

離乳

人工營養法

牛乳

牛乳消毒、防腐幷に保存法

牛乳稀釋の比例

牛乳稀釋の方法

煉乳(コンデンスミルク)

煉乳稀釋の比例

乳の粉

哺乳器の清潔法

喰初

(三)身體に就ての注意

啼泣

大小便の排泄

便祕

可からうと思ひます。それで家庭を立派にして行くには、其嚴と愛との調和の上に、尙此の上より下の道德を壯んにすることが必要なること丶思ひます。

家庭の趣味は、其他料理、裝飾、家庭の談話等、甚だ多くありますが、私は其中で家庭の談話を重しとして居ますからこれを少しく話します。

これ迄の家庭談話は人の噂、互の蔭口であつて、これは惡因を含んで居ました。そんな話でないときは、單調子で、趣味津々たるものがないのでした。これは婦人が多方面に、趣味や智識を有たない結果だと思ひます。

此處に注意すべきことは、支那の孔子の訓へに君子者食而不レ話とあり。西洋では食するに克く言ふとあることであります。西洋の談話は、凡べて快活に談笑して、甚だ衛生に叶ふのでありますが、孔子のも、言ふことを止めた譯ではないのであります。只君子は食する時、訓戒ともなるべき六かしいことを言はない。それといつて懺悔したり、慷慨したりしては、食事が身に付かないから、訓戒的のことをいふなと止めた譯であります。兎に角御話は大切の事で克く注意して、趣味のある、而して淸く樂しい話をするやうになりたいものであります。

(二)　常識の養成

常識の養成は、今日の高等女學校普通女學校で、これを爲さしむるのであります。

抑も今の女學校を分つて二と致します。(一)は職業的の目的を有するもので、それを例へていひますれは、教師、裁縫工藝等の學校を指し(二)は良妻賢母を養成する學校であります。乍去此二のものは、决して分離することの出來ないものであります。職業的の方に於きましても、それと同時に良妻賢母であるこ

とが、必要であります。又良妻賢母の方に於きましてもそれと同時に、一通り職業的の技能あることが必要であります。其處でこれもドチラになるにしても、幾分か他の一方のを心得て居ることが肝要であります。

此處に一つの困難なる問題は、女は獨立す可き乎、又は内助を以て目的とす可き乎であります、私は女は内助を以て目的とす可きものと思ひます。今や女子職業が頗ぶる盛大になりまして、近々新橋停車場の改札人にも女子を以て充てるといふことであります。而して其結果が可いといふことになりて、凡ての方面に女子を充てるやうになれば、これは勢ひ男女職業上の衝突を起すものと考へられます。

勿論女子職業の増進と同時に、女權は壯んになりませう。されど女權の壯んなることは、如何の範圍に限るべき乎、或は限られざるべき乎は、考へものでありますが、私は女子が、男に弄ばさるゝは惡いと思ひますけれども、女權の壯んなることは、何の點迄が女の幸福なる乎、私は萬一男女同等といふことゝならば、それは女の不幸と斷言します。二十世紀の問題は、(一)勞働者と資本家との軋轢(二)男と女との衝突といひます。而して男女の問題に付きましては、此頃亞米利加では、非結婚同盟が出來て居ります。

併しそれは、男女の調和を破るもので、詮り女を教育はかりして、職業を與へるときには、反つて女を殺すことゝなるのであります。私は女子は女子としての職業を與へるを可いと思ひます。

故に高等普通教育と稱するものゝ目的は、婦人たる品位の養成が第一で、同時に一家の主婦としての心得、及び技倆を養成するのが、最要用なるもので、其外にある特殊の教育は、其例外と見る外はないのであります。

それでありますから、女子教育は、様々の普通學をもつて、十分の常識を養い且つ克くそれを實地に活

用し得て、婦人たる位地、母の任務、主婦たる任務に堪へるやうにせんければなりません。さうなりますれば、若し不幸夫に先立れましても、君子者不レ器で、決して狼狽する患ひはないのでありませう。兎に角男女は車の兩輪、鳥の双翼の如く、相まつて、圓滿なる社會を造ることが第一であります。

（三）　體育の必要

體育は近頃壯んに行はれ、殆んど擧國の輿論であります。どうも我國女子の身體の惡いことは、全く西洋などに比べると、恥しいほどでありませう。

體操は東京の女學校などでは高等女學校の如き一週間三時間をかけております。然るに他の各種學校では、何もせずして、座つた切り衞生を構はないのがあります、それに惡いのは、女子の食物であります。女子は多く芋、唐茄子が好物で、肴や牛乳、肉類は餘り好まないのであります。

作法と體操とは、衝突して居ります。作法は少しく禪味を帶びたるものにて、足を内輪に歩み、謹むといふ態で身體を圓く造つて動作します、然るに體操は足を外輪に出し、胸は一ぱいに張ります、同じ學校にありて正反對の敎授を受けるのであります、其處で私は二ツがから衝突するが、何れが自然に叶ふて居るやと考へましたが、これは、體操だと思つて居ります。

併しながら、日本の國情として、作法も必要でありまして、坐作進退の落付はこれに限るのでありますから、私は作法の敎師が、同時に體操敎師であつて頂きたいのであります。而してこれが女敎師でありたいことを望むのであります。即ちかくして兩方一致して、一人の手より出づるときは、啻に學校敎授上の便利あるはかりではなく、又自然の調和上に可いことであります。

尚希くは、修身の學課は此作法體操敎師が克く心得て居たいのであります、蓋し修身は内部の敎育、作法

は外部の姿勢教育であるから、別々に分れて居るのが止み、且つ內外呼應して、其良結果を奏するでありませう。

併し體操が壯んになれば、舞踏の如きも亦た大に流行するのでせう。どうぞ鹿鳴館時代の失敗を繰返さないことを願ひます、要するに自然の動作は體操、靜肅は作法、而して作法は修身と一致することを望みます。

以上の三點は、現今一般敎育上に於ける欠點若くは幾らか世人の誤解して居ものを矯正して、是非斯くせんければならぬといふ、所謂私が信ずる理想に到達せしむる方法でわります。これを縮めていへば女子敎育は、完全なる婦人を造ることを目的とす。從つて婦人の處世上甚だ大切なる目的として良家庭を造ることを要求し、女子敎育は克くこれ等の働らき間然する所なきやう其伎能と品位とを訓ゆべしといふのであります。されば敎育するものも、亦せらるゝものも、此に相一致して、今後我國婦人の面目を立派に立てんことを希望に堪へません。

（完）



元日の大御食

有本磯水

君が代の萬歳無疆と祝杯を捧げまつる最も目出度き今日の元旦、瑞靄長へに棚引き、紫雲深く鎖す九重の奥、賢き邊の御事ども申上ぐるは、畏恐れ多き事でありまするが、さる頃宮居大膳職に仕りつる方を訪ひまゐらせ、差支へなしと信じらるゝ限りお話あり我が　兩陛下が元日の御食膳の事を謹みて記し奉らんに、

宮内省の大膳職と申ますのは、即ち　兩陛下が朝な夕なの御食膳を掌る所でありまして、大膳太夫、大膳亮、大膳屬、膳部長、膳部副長、膳部など申す職員が、それ〴〵供御饗宴及び其器具に關する事務を管理致し、主管に關する會計を掌るのでございます、そして其職員の數は三十五六人居られましやうか、常にすべての事をお手分してお取扱ひになつて居るのでございます。

そこで元日　兩陛下の大御食は、曉の御湯漬、晴の御膳、朝御膳、晝御膳、御夜食の五度御食膳に向はせられまするので、先づ其曉の御湯漬と申しまするのは、年立ちかへる東雲の空がほの〴〵と紫宸殿の邊から明けそめまする頃ほひ、定めの御時刻となりまして、兩陛下御起床遊ばしまして、軈て御盥漱の事が終り、茲に聞食さるゝ御食膳の事でございまして、それには土器燒玉子、御汁（鱈、雪の上）松魚煮繊、御飯とが供へてございます。

さて此御食膳がすみまするど　兩陛下とも御禮服御着用と申す事になりまして、其後捧げまゐらすのが即ち晴の御膳でございます。で、此晴の御膳と申しますのは、御殿の千草の間で聞食さるゝ所謂晴れの御膳でして、酢、酒、鹽、醬油の四種、鯛に低足、附燒の雉子の燒物二枚、附燒鶉、切重ね鮑、煎海鼠

の平盛三杯を、最と古風の朱塗の御食卓に安排致して奉り、朱塗の御椅子にお凭り遊ばして聞し食さる、儀式の御膳でございますが、其御献立の中、鯛は零餘子焼と申しまして、其形が零餘子に似て居ります、又亀足と申しますと其零餘子焼の鯛を串にさした尖に大高檀紙をきつてさしましたのを申すのでございます。それから高盛八杯と申して、文蛤、鮭、烏賊、御飯、鱲子、鱸、蒲鉾、車蝦の八種を手際よく調理致して、筒形に高く盛つたのを、徑四寸位の銀の皿に入れまして供へまつり、尚御酒器、御汁(鯛に鯉)、御羮、御湯器などをも供へますが、此御湯器と申しますのは、恰度申しますと湯桶形の銀瓶でありまして、よく我々臣民が申しまする焦し湯の如な、粥の稀薄いもので、飯を炊きました御釜の底に飯を極少し殘し、それを狐色に焦した復湯を入れ程よく沸したもので、其香氣と申し味と申し誠に申分無いものを、其銀瓶の中に盛つてございまして、これは御湯の下と申す食しあがりものでございます、

そして其御湯器には銀製の杓子の様なものが添へてございます、此御湯の下は　兩陛下とも平常日々の御朝餐後に食しあがるのを例とせらるゝのでございますと承はつて居ります。

此の外晴の御膳には、小串鯛、菱葩、割海老、砂糖煮栗、雉子酒、蛤の御吸物など申す種々の品を卓上に進めまゐらすのでございます。菱葩と申しますのは、大きさ三寸位の丸く薄い白の餅の眞中に、紅の餅を長細くして載せ、其上を白味噌で煮上げました牛房の細かいので安じ、餅の中程から柏餅のやうに二ツに折つて、そしてそれを火にかけ、更にそれを二ツ折の美濃紙に包んだものでございます又雉子酒と申しますと、雉子の抱身と申して羽の下に當りまする極精良の處を鹽漬又は醤油漬といたし刺身などのやうに薄くそいだのを大抵七片位づゝ御茶碗に入れ、結構な生一本の日本酒を熱く沸かして之に注ぎ込みましたものでございます。

先づこれだけが晴の御膳の御献立でございますが

次に朝御膳にお移り遊ばすのでございます。

朝御膳には、一の膳二の膳三の膳とございまして其一の膳には鯛、赤貝、白髪大根、岩茸、栗、生薑、金柑の御鱠、小蕪、梅花摘入の御汁、生大口魚、獨活の御烹物、御漬物、御飯の五品でして、御鱠に使用ひまする三杯酢は、煮詰めました最上の味淋に最上の酢と醤油とを程よく交ぜました加減酢でして、御漬物は其時節によりますが、新漬大根、澤庵、白瓜か水瓜の奈良漬、守口大根の類でございます。二の膳には照焼魴鮄、煎揚鯏、鯛、箕松茸、柚子の御汁、小松菜、花かゝの御浸しの四色でございまして三の膳には御炙小鯛、煮染黄湯婆の御二種を供ます。

次に晝御膳でございまするが、是亦やはり一、二三の膳がございまして、一の膳には鹽引鮭、細魚、防風、花栗、金柑の御鱠、鯉の御汁、素麵、椴茸の御烹物の御三種。二の膳には煎上王餘魚、味噌漬甘鯛、花鰒、千箱草、神馬藻の御汁。浦焼鰻の御四種。三の膳には御炙小鯛、松魚煎百合根の御二種を供へます。

それから御夜食は煎上端白、山吹鰆、火取沙魚、壽海苔の御汁、砂糖煮人參の御四種の外に、御鉢盛として旭浦鉾、附焼鶉。味噌鯛、萌し薑。若鶏、椴茸、菜の玉子綴。松魚煎、近江蕪。白魚に櫻の花の御吸物の御五種を供へて、これがお濟みになりますと夜に入りましてから御盃の事がございまして、こゝに始めて御雑煎を御祝ひ遊ばさるゝのであります。其御獻立は、小餅、里芋、鏡大根、煎海鼠、串貝、花かゝの白味噌御雑煎。數の子、附焼車蝦。蜜柑の御菜三種、鯛鰭の御吸物などでございます。

これで元日の大御食は全く終るのでムます。（完）

富美宮泰宮兩殿下の御近況

記者

茲に兩内親王殿下の御近状に關して記者の洩承りたる所を大要拜寫し奉るはこの芽出度明治

甲辰の歳旦を迎ふるに臨んで讀者諸氏と與に窮りなき我が皇運の彌々隆昌を加ふるを祝し奉らんが爲めである。

（一記者）

兩殿下の御近況に付愛に少しく御話を致しまするが一體富美宮殿下と泰宮殿下とは御年輩が少し違つて居ります。富美宮殿下は明治二十四年の御生誕で、今年恰度十四歳に渉らせられ、又泰宮殿下は明治二十九年の御生誕で、今年恰度九歳に成らせられまする。そこで兩殿下の御性行を御一緒に述べまするとa一寸談話に混雜を生ずるやうに考へられますから、先づ富美宮殿下の御話から始め、夫れが終つたら泰宮殿下の御行事に移るやうに致したいと思ひます。

富美宮殿下の御近狀

○○○○○

殿下の御體格　富美宮殿下には今年十四歳に渉らせられますが、之を普通の女子に比すると、御體格が餘程大きく、年來聊かの御障礙もあらせられず、至極御壯健なる御體質を保たせられて居られまする。

○○○○○

殿下の御性質　と申しては誠に恐入る次第なれども……世間では通常怜悧と云ふことを能く言ひますけれども、殿下の御聰明なる事は、世俗の所謂怜悧杯とは却々以て比較は出來ぬことゝ存じます。且年來至極御健全であらせらるゝと共に、誠に御記臆力に富ませられ、例へて申しますれば、博覽會とか展覽會とか云ふ所へ成らせられて、何か一寸御覽遊ばすと、夫れをチヤンと御記臆なされて、供奉の人々は却て忘失れて居るにも拘らず、彼の物品は何ういふ處に在つたとか、斯ういふ物體であつたとか仰せられて、後々までも御話あり、御供の人々が屢々恐縮に堪えざる事ある程御記臆がお宜しう御坐います。

○○○○○

殿下の御嗜好　殿下の御嗜好に關しては、只今是れといふて格別御話をすることは出來兼ねまするが、先づ種々の學藝は御熱心に御學びになり、又音樂等のやうなものも隨分御好みなされますが、別して樂器ではピアノを御嗜み遊ばされ、御餘暇には折々御彈きなされ、却々巧く御出來になる方で御坐ます。

殿下の御學問　現今殿下の學んで居らせらるゝ御學藝の程度は、先づ初等中學三級位の處で御坐ます。

殿下の御運動　夫れから殿下の御運動の事でありますが、この御運動といふ事は方法が種々に分れて居て、一樣には參りませぬが、先づ東京に在らせらるゝ時分には、御教育の餘暇には、大抵毎日御庭內で適度の御運動をなされて居られまして、其御運動の折には、時に取ては種々な御遊戲も催されまするが其中でもテニスの如きは大層御巧手であつて、御相手の人々は何時も及ばぬ位であります。又夏季に際し函根邊へ御避暑成さるゝとか云ふ時分には、彼方此方と近傍の山野抔を御散策遊ばさるゝ事も折々ありますが、其節は大抵御徒歩で、御駕籠や御車等に乘ることは餘り望まれぬ樣で御坐います、又冬季鎌倉等に御避寒成される節には、毎時も海岸を徒歩しつゝ御運動遊ばさせられます。御修學の餘暇さへあれば御運動は大抵缺かずにお試ませられ、殊に鎌倉等にては御用邸の庭內が廣う御坐いますから、日常の御運動は御庭內で以て十分行ふことが出來ます。御遊戲抔の種類は併し鎌倉に成らせられましても、矢張東京で遊ばすやうなもので、テニス抔を能く御好みになりまする。

殿下の御服裝　女鑑の讀者の中には、殿下は平素洋服を召さるゝか、又は和服を用ゐらるゝかといふやうな疑問を懷いて居る仁もありませうが、從來殿下の專ら着用せらるゝのは和服で、且御袖長の方でありまして、之に御袴を召さるゝので御坐います。是は殿下の平素の御服裝であります。

殿下の御食物　これは晝飯は洋食、朝夕の二飯は日本料理を召させられまする。

殿下の御坐所　は矢張日本御殿建の御坐所であらせられますが、御學問所の方は總て御椅子を使用せられて、御教育に關する事は大抵其處で御習ひ遊ばさるゝので御坐います。

諸所へ臺臨の時の御模樣　諸所と申した所が、東京で成らせられます所は、大抵御濱の離宮とか、芝の

離宮とか、夫れから新宿御料地とか云ふ場所の外は餘り御出でがありませぬ。尤も春季櫻花の咲く時には櫻花を御覽になつたり、又秋季には紅葉を御覽になる爲め出殿せられたり、時としては又御供の者が垂綸をして夫れを御覽に供すること抔もありまする又上野の博物館や美術館、夫れから音樂學校の演奏會とか、華族女學校の運動會とかいふ樣なものには兩殿下共親しく臺臨せられ、生徒の奏樂や運動の模樣を幾時間となく御注視遊ばさるゝ事等もあります殿下が東京に於ての御外出は先づ大抵斯樣な場合に限りまするが、鎌倉邊に御滯在の節御散策の際には、彼方此方の歷史上に關係ある場所は特に留意せられ、御記臆に殘つて居る點も夥多御坐います。函根は鎌倉の如き名勝古蹟も多くありませぬからして格別是と云ふて記述する程の事はありませぬ。御避暑の時分には專ら御運動の目的を以て御用邸附近の山川に玉歩を移さるゝ位の事に止まります。

○○○○

殿下の御美談　兎や角申すも恐縮な次第で御座いますが、殿下には殊に仁慈の情に深い方で、例へて申せば、昨年青森地方に起れる饑饉の如き事が新聞にでも載て居りますと、餘程其邊を御案じ遊ばさるゝやうな御樣子で、明白に夫れを御物語なされぬけれども、思召の程は十分拜察せられ、未だ御幼年の事とて即時に御下問に預かるやうな事なきも、御發育主任などは思召を承はる事などもあるやに聞いて居ります、兎に角大體下々を御憐察なさるゝ御性情を備へさせられ、一體に何事も能く行屆いて居せられます。又殿下には詠歌を好ませられ、近來は別して御上達遊ばされた樣に承ります。又御手蹟も實に御達者で、現今の御年齡から推して誰しも夫れを殿下の御染筆であるまいと云ふ位美事で御座いまする。前陳の如く殿下には性來御壯健な所と、記臆力の御强い所とで、諸所で種々な物體を御覽遊ばされましても、之を忘れずに能く承知して居らせられる又殿下には御避寒の爲め每年鎌倉に御出成されますが、同地は海濱の地なれば、魚類海藻其他異つた貝

類のやうな物が夥多あります。然るに殿下には屢々此等の品類を御實見なさるゝ故に、此種の學科は大層速く御會得遊ばさるゝさうで御座います。又本年大阪地方へ御旅行遊ばされ、博覽會並に附屬水族館へ臺臨あらせられし節の如き、或種類の動植物に關しては、主任者が態々御說明を申上げるまでもなく疾に御會得遊ばさるゝやうなこともありました。

御起臥の時間　御起臥の時刻は季候に依りて種々變りまするが、此頃は御就寢は大抵八時半位で、御起床は六時頃と承はります。

泰宮殿下の御近狀

殿下の御性質　泰宮殿下にも至極御健康に渉らせられまして、富美宮殿下と御同樣に誠に記臆力に長じて居られまする、又永い間には一寸した御熱位のことは無いとも限りますまいけれど、決して御臥床に就かれる樣なこともなく、御病氣と申す程の事は未だ伺つた事がない樣で御座います。殿下も矢張姉宮殿下と御同樣に怜悧な御性質であらせられまして、未だ年齡の御幼少なるに比しては、能く物事に御氣が附かせられまする。

殿下の御運動　御避暑や、御避寒や、又は御運動の場合には、殿下は富美宮殿下と毎時も御一緒になされますから、此點に關しては敢て富美宮殿下と變つたことはありませぬ。唯だ御年齡が姉宮殿下と御相違あらせらるゝ丈けの事で、御遊戲のやうな事も矢張姉宮樣と御同樣の事をなされまする。大體に於ては一も異つた事は御座りませぬ。御運動の時分は、大抵何時でも御徒歩にて、御駕籠とか、御仂車とか云ふやうなものは餘り好ませられぬ。却て徒歩の方が御愉快なやうに御見受け申します。鎌倉等に成らせられましても、海岸の御運動は矢張り富美宮殿下と御一緒になされ、神社佛閣其他歷史上に關係のあるやうな勝地舊跡を御覽になる時も、總て御同伴で光臨遊ばされますから、殿下御一人の御行事として此に格別御話する事はありませぬ。

○○○○○殿下の御體格　殿下も御體軀は大きくあらせられ、普通八歳位な女兒の體格に比較致しますると、著るしい相違があるやうに見受けられまする。且兩殿下共御壯健であらせられますので、玉顔の色艶は誠に良しう御座います。

○○○○○殿下の御學問　御學問の程度は、目下修めて居らせらるゝ所は初等小學二級位でありまする。又殿下にも御手蹟は洵に美事で、八歳位な方の御手蹟にしては驚くやうな御健筆であらせられます。昨年一月頃でさへ隨分美事で御座いましたが、爾後一層御上達遊され、目今では餘程の進境に入らせられました。又音樂等も富美宮殿下と同じく御嗜みになりましてピアノの如きは、御修學の傍らに矢張御教授申上げて居る次第であります。

○○○○○殿下の御食事　召上り物も富美宮殿下と御同樣で、御晝飯は洋食、朝夕は日本料理、之が先づ平素の御食事であります。食品中之が御嫌ひだといふものはありませぬ。唯だ時とすると餘り御箸のつかぬ物がある位の事であります。御嫌ひになる食物の無いのは、畢竟御體質の御健康なる結果であらうかと推測されまする。洋食杯は好んで召上るやうで、又魚類とか、刺身とか、煮肴とか云ふものも、可成軟かで消化の良いものを御好みなされます。

御菓子類は一體に淡泊なものを御望みに付、さう云ふ種類のものを撰んで差上げます。

○○○○○殿下の御服裝　は姉宮殿下と御同樣で、矢張和服に袴を召して居られまする。

○○○○○御起臥の時間　御就寢の時間と御起床の時間とは、富美宮殿下よりも少々御早い位なことで、大體殆んど同一で變りはありませぬ。

○○○○○兩殿下の御交情　兩殿下の御稟質の間には差したる御相違はあらぬ樣に拜察致します。泰宮殿下は御年齡は未だお幼いけれども、仁愛の心に富み、能く下々の者を御勞り遊ばされ、誠に恐縮に堪へざる次第であります。又富美宮殿下には熱心に泰宮殿下を御愛護遊ばされ、何處へ成らせられても絶えず御配

慮遊ばされますが、又泰宮様の方でも深く姉宮様を御欽慕わらせられるのが見受けられます。

鏡餅の話

清水橘村

お正月！。お丶何と云ふ優しい名でせう。お正月と音を出して云つて見ると、如何にも平和な圓滿な心が起きて、又いかにも目出たい瑞象が現はれ、如何にも長閑なうら丶かな景色が見えて、樂しい〳〵響が耳や心の奥底から、身のうちにしみ渡るやうに思はれるのである。いや思はれるのぢやない、實際お正月は樂しく嬉しく、圓滿平和な氣象が滿ち〳〵て、朝日の影も今日はことに赤くうら丶かに、旗吹く風も今日は長閑に温かく、松の緑もいろを増し、梅の匂ひもいや高く、見るもの聞くものとして、一つもめでたからぬはない。僅か一夜の前の景象も今日は全く、新らしく代はられたやうに思はれるので人と云ふ人は平常の邪念を忘れて、本意の人の精神に返る。そこで此の鏡餅の祝ひなども昔は大分喧しい儀式があつて、今日のやうな簡略した風は許さない。一寸した事でも不吉だとか何だとか並べ立たものであるが、今では昔の儀式は其面影を止める許りで、古雅な遺風の掬すべき所もなく、又大分その主意を誤まつてゐるものもある。假令ば昔日鏡餅とは家やら人やらを祝つたもので、室内ですべき所のものであるのに、當節見掛る所に依ると、往來に向つた玄關や店頭に酒樽などを積み重ねて、その上に二三尺もあるやうな大きな餅を供へて、表の方を向け、全く往來の人に見えるやうにしてある。これらは抑も主意に反したもので、單に已の家は有福だぞと意張と同じことであるから爰に聊か鏡餅の古事を調べて、古風をしのぶよすがとなし、一は右の如き衒燿の氣風を去り、眞に古へを愛し、今を祝ふ處の愛すべき風習としたいと思ふので——。全體今日の鏡餅の儀式は支那の風俗が、佛法と共に傳へたものであ

らうと云ふ事で、これに付て確かな記錄もないから判然しないけれど、周の時代の彼國の記錄に正月五辛盤を奉ると云ふことがあり、杜子美の詩に春盤初生春など云ふ句があるところから考へて見ると、その五辛盤の儀式こそ、今日我國で行はるゝ此の鏡餅のことであらうと云ふ說だ。室町時代には武家で鎧とか具足とか旗とか云ふものに正月餅を供へて武神を祭つたやうで鎌倉時代には鏡餅と稱せずして齒固餅と云ふのを供へ用ひたやうで、源氏物語や枕の草子などに就て見ると、昔は正月齒固餅と云のが正式のものであつたかの如く思はれる、即ち枕の草子には「齡のふる齒固」云々とあり、源語初音の卷には「こゝかしこに群居つゝ齒固の祝ひして、



もちひかゞみをさへとりよせ」云々とある。又鎌倉時代の記錄に、齒固餅は細長い鏡（鏡とは餅のことなり）を用ゐ、打衣とて長さ五尺ばかり廣さ三尺ばかりなる衣にことりを付て緣を取り、四のすみに總角を綿にて結ひ、下なる衣を展べて其上に齒固を置くと先に齒固餅の飾り式を述べ次に鏡餅もこれに同じと記載してある。又或書を見ると年代は不明だつたがまづ鏡餅を飾その左方の少し前に並べると出て居つた此時は鏡餅が先に成て齒固の方が後になり、下つて今日は齒固餅の方を止して單に鏡餅だけに略したのではあるまいかと思ふ。尙又大伴黑主の「あふみのやかゞみの山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千代は」と云ふ歌は

齒固の祝の席に誦するものであると云事もあり、花鳥餘情と云書には齒固の餅は近江のひぎり（火切の里）の餅を用ゆべしとある、此やうに種々の舊記に依て案ずると、先づ齒固餅の方が主になつてゐるやうであるから、自分はどうしても昔は此儀式を用ゐたらしく信ずるのである。然して此の齒固餅なるものの意味は其字の如く讀むのでなく、齒をよはひと呼んで齡を固むる意で、三寳の上には松竹鶴龜の類を眞として下に敷米、柑子、串柿、シダ、杠葉とを置くとあるが、舊い記録の飾り式は、紙を一重づゝ三方へ下げて敷き、向を明けて大なる丸餅大小二個を重ねて中に置き、其上にひし餅十個（內赤さゝげを用ゐし赤餅五つに白餅五つ）を並べ中に松を立て、松は三重に枝のあるを用ゐ、其回りは熨斗鮑、向に昆布右に柑子穗俵草、左に柿と栗とを置くとある。偖又當今用ゆる所の鏡餅は、人の家々に依て多少異なつて居るけれども、普通餅の外には勝栗、齒朶（ウラジロ）杠葉、橙、海老、昆布などで其外、熨斗鮑、柑子、穗俵草などで、今其の用ゆるもの丶意味を聽くと、海老は腰の屈りたる高年の意で、シダ、杠葉、山橘は雪霜にいたまず强壯の意で、クリ、カキ、ミカン穗俵草は山海の時物で、熨斗鮑は壽海の草と云ふ意で、昆布はひろめ、又はよろこんぶ、杠葉は親子草、橙は代々で子孫繼續を意味したのであるといふことだ。詩家などは又この鏡餅を蓬萊、春盤などと呼んでゐる其れからお正月の日も十一日となると所謂お供へ崩しと云ふのをして、これを汁粉か雜煮にして食べる、尤も昔は二十日であつて、二十日は刄柄に通ずるから、刄柄を祝ふと云ふ意であつたが、此日は德川大猷院殿の御忌日に當るので、承應の頃から十一日になつた。この日は男の子の祝ひ日で汁粉か雜煮を造らへるのであるが、小豆は煮れば腹を切るからとて昔は用ゐない。又雜煮に蕪菜を用ゐる譯は蕪は矢に似て矢じり草と云ふ異名があるので、それで使ふのである。その二十日は女子の祝ひ日で初顏祝ふともぢつたのであるが、何時か十一日の祝

ひに一件になつて、今では別に祝ふものがなくなつたので。又此時鏡餅を切るに決して刄物を用ゐず、弓弦にて引き截つたものである。切ると云ふ言葉を忌むから今でも崩すと呼び慣はすが、實際は庖丁で切つて用ゐる。又小豆も十五日迄は煮ないのものであると云ふやうな風習もあつたが今は行はれない、特に東京市などは一般にこの昔の儀式を輕んずるやうで、餘程の舊家でなければ斯樣な式に合つた祝ひをせぬものが多い。

（完）

嬰兒の保護

ドクトル　淺田繁太郎

（一）初生兒の取扱

初湯

初湯の温度

浴後の所置

初着及び寢床

第一回の授乳

沐浴

口腔の清潔法

眼の守護

（二）營養法に就ての注意

天然營養法

母乳

乳母の乳

授乳者（慈母幷に乳母）の食物

離乳

人工營養法

牛乳

牛乳消毒、防腐幷に保存法

牛乳稀釋の比例

牛乳稀釋の方法

煉乳（コンデンスミルク）

煉乳稀釋の比例

乳の粉

哺乳器の清潔法

喰初

（三）身體に就ての注意

啼泣

大小便の排泄

便秘

皮膚の清潔法及び守護
手指の爪
體重及び體重增加
月 代
頭 巾
衣服及び襁褓
種 痘
齒牙の發生
初生兒及小兒期に發する疾病
初生兒期に發する疾病
小兒期に發する疾病

(一) 初生兒の取扱

初湯 初生兒は先づ法の如く臍帶を切斷り之に適當の所置を施し然る後沐浴をさせます是を初湯と申します此湯は通常の白湯にて湯桶は通常の沐浴盥又は洗濯盥にてよろしけれども可及的清潔のものを用ひ其底には二重か三重の木綿を敷き其上に生兒を仰臥せしめ産婆又は介者の腕を以て枕となし靜かに洗淨するものであります。

初湯の温度 は攝氏三十六度五分乃至三十七度五分を以て適度といたします古來本邦に於ては産婆の手加減を以て定めることになつてをつて實に不同でありますが大抵は熱きに失してをります温度が熱きに過ぐるときは種々なる害がありますが解り易き點を申せば初生兒は皮膚が軟弱であるから温の刺戟に因て皮膚炎又は水胞等を起し易くありますそれかと申して冷に失すれば著しく體温を失ひ危險に陷ることがありますそれゆゑ可及的寒暖計を以て定むることが肝要であります。

浴後の所置 沐浴を終りますれば豫め供へ置たる和かく糊を脱したる布片(タオルを最も適當となす)の上へ揚げ能く濕りを取り消毒ガーゼを以て臍帶を包み其上に脫脂綿を貼し新鮮しき木綿を以て繃帶を施こし然る後衣服を着せるのであります。

初着及寢床 衣服は糊を脱したる和らかきものを要するは勿論でありますけれども小兒は(殊に嬰兒は)大人に比して體温を失ふ事比較的に多いのでありますから厚き衣服(約大人の倍數)を用ひねばなりません臥床は和らかき蒲團を以て頭の方を高く足の方を

低く取り冬期にあつては湯タンポを足方（足に接近すべからず）に入れ温を與へることが必要であります。

第一回の授乳　生兒か出產ますれば直に肺呼吸を初めまして直接に氛圍氣中の酸素を取り身體を養ふものでありますから急ぎ授乳するの必要はありませぬ依て二十四時間乃至三十六時間を經て後初めて乳汁を與ふるのを良といたします然而それまでの間は少しづゝの薄き紅茶又は砂糖湯を飮まして置けば宜しいのであります。

沐浴　產兒出生後三ヶ月以內は每日以後は每日又は隔日に沐浴をなさしむるを良といたします然て其温度は前述の通り三十六度五分乃至三十七度五分が適度であります全體西洋では漸々下降せしめ三十五度乃至三十六度位の温度において沐浴せしむる樣になつてをりますが日本では全く反對でありまして漸々知らず識らずの間に温度を高めて大抵四十度以上四十四五度位の湯を平氣で使つてをります健康上決して好くはありませぬ。

口腔の清潔法　乳兒の口腔には殘留たる乳汁の腐敗によつて種々なる病氣（鵞口瘡、アフテン、及潰爛性口内炎等）を發し易きゆゑ可成注意し每日二回乃至三回づゝ沸騰水又は稀薄なる硼酸水を新しき布片に浸し指頭に卷き付け口腔內を洗ふことが必要であります。

眼の守護　初生兒は膿漏性結膜炎を起し易くありますから充分注意して出產後一二週間は每日一二回無菌水又は稀薄なる硼酸水を以て洗ふことが必要であります膿漏性結膜炎も初め單純の結膜加的兒と同じやうでありますから注意して若し眼が赤くなるか又は眼分泌物にても顯はれる場合には早く醫者。治療を受けねばなりませぬ。

（つゞく）



新年接客の用意

外務大臣官邸
庖厨主任 宇野彌太郎口述
岡野なりゑ筆記

日本風ではそれ〴〵舊き仕方がありますが、しかし室も西洋間の椅子テーブルとなつたとしますと多少接遇の方も新しい方を用ゐたくなり。且つ西洋人でも來賀のうちにありとすると、その工夫が必要となります、それには西洋風を參考するがよろしうござゐますが、一々は他日ゆるりと致すことにして、一寸こゝに參考にならうかと思はれますのは私が朝鮮上海の本邦公使館や領事館で新年祝賀のためにとゝのへました仕方をおはなしいたしませう。

公使館、領事館は内外の客がありますので、和洋兩方の用意をいたしました。

テーブルへは(一)島臺に二見浦などをつくり(二)日本料理の口取(三)西洋料理の冷肉(四)日本菓子(五)西洋菓子(六)屠蘇酒(七)シャンパン酒(八)ポンチ(九)紅茶といつたやうなものを來客の内外に應じて好み〳〵にすゝめる事にしました。

勿論西洋風の接遇にすれば、まだいろ〳〵かはつたやり方もあります。しかし晩餐とちがひ元來これはポンの口をうるほすといふだけで、これをたべるのむといふのが主ではなく、景色だけのものゆゑ、肉なども冷寒のものに限つて居ります。

さて家庭によつては手輕くする仕方はいくらもあります。

▲冷肉

カランデン(雉子)ロースビーフ(牛)コールドハム(豚)コーンビーフ(鹽牛)ロースチキン(鷄)とまだないではありませむ、しかしこれを皆そなへるにも及びません、ロースピーフにコールドハムぐらゐにすれば手輕くそれでも澤山であります。

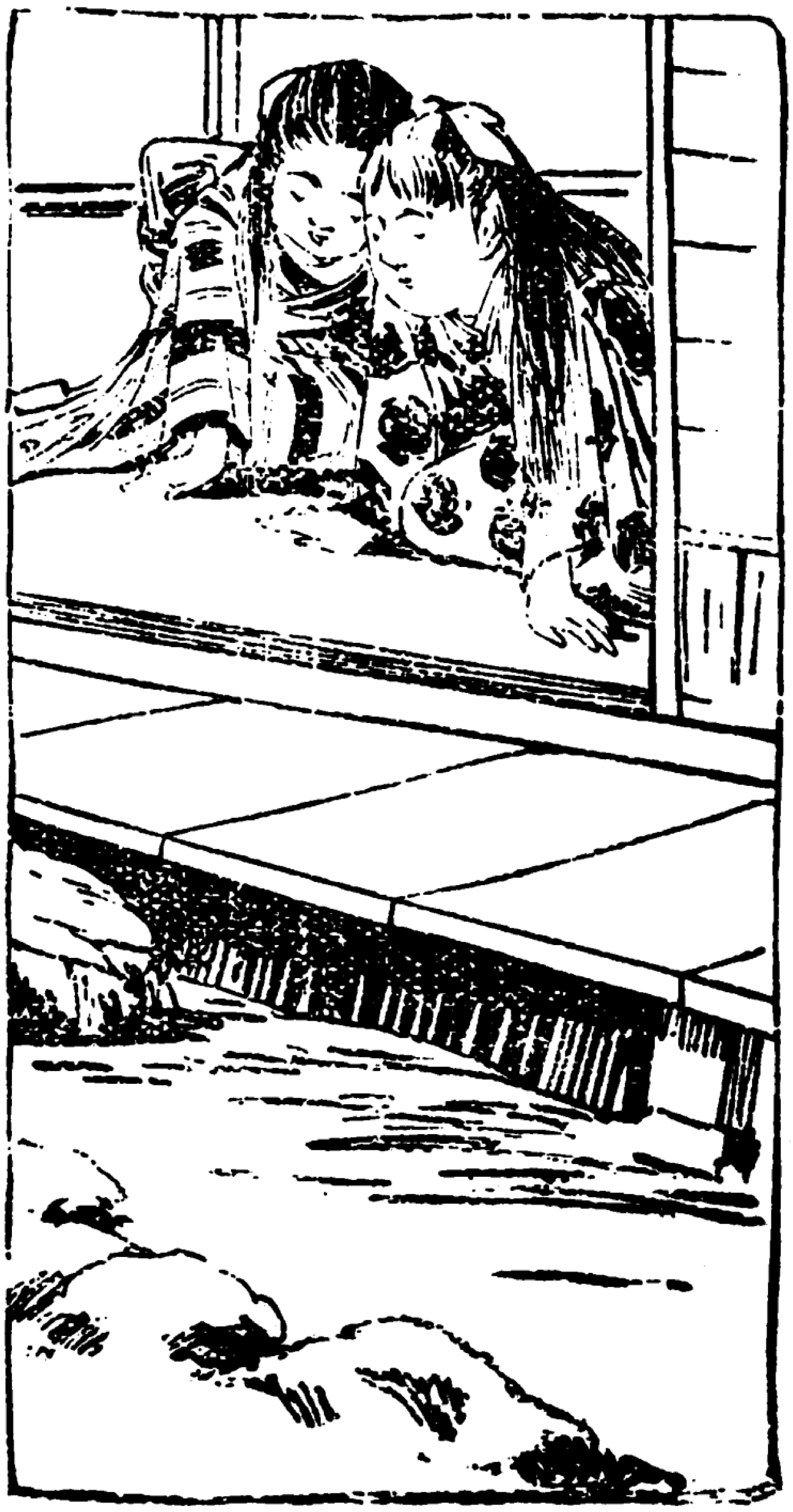
▲ポンチ

かういふ祝ひには エギノー がよろしうございます參考に製方を末に申します。しかしこれは普通の家

庭には一寸適せぬかも知れませんが、こういふ時には饗をそへるものであります。

▲菓子

西洋でクリスマスにはボロンケーキ一にクリスマスケーキを遣ひます。これなどは新年用としてもよろしからうと思ひますが、非常にたかくもあり、且材料が日本にはないものがあります、それゆゑ有名な製菓師でも十分には出來ません。本統のボロンケーキは一ケ年を經てもまだ味のかはらぬところが名菓とするのです。



ボロンケーキはむづかしいとして手輕いのはスポンヂケーキでしせう、これにドナスやウエーファーなどをそへるのです。勿論スポンヂケーキは飾をつけるので、すると飾菓子としてうつくしうございますスポンヂケーキの製方もすゑにのべましよう。

▲手輕き接遇

そこで新年の手輕き接遇方は冷肉もボンチものぞき(一)スポンヂケーキそのほか菓子に(二)紅茶を用意して、これを來客毎に饗するばかりで失禮にはなりません

▲ポンチの製方

ポンチはこうしてこしらへます。

玉子八個　砂糖一ポンド　ラム酒八合　ブランデー八合　牛乳五合　ナツメーキ二個

玉子の白味と黄味を別々にし、黄身へ砂糖をまぜ、

ラム、ブランデー、牛乳、ナツメーキを入れて、最後に玉子の白身の泡を立たのを入れます。これでポンチが出來ます、ポンチのコップへ入れて侑めます。

▲スポンヂケーキ

鷄卵六個　砂糖大匙五杯、メリケン粉大匙七杯、ベーキングポーダー茶匙一杯、バニエル三滴

鷄卵白身を水氣なき丼に入れ、泡立にて泡を立て丶泡のもりあがるほどかきまはし、砂糖を入れ、黄身を入れ、メリケン粉を加へ、このときベーキングパウダーを入れ、フウワリとかきまはしテンパンに油らを引き、紙をしき、その中へ右解きし玉子を入れテンピの中へ入れて燒く、十分間ほどにてよろし。

年始の食物

岡野知十

家内の膳立と賀客への饗應と二つわりますが、年賀の客はまづあとにして、家内の膳立をいさゝかしるして見ましよう。

▲雑煮

何よりも雑煮をいはふといふ事が上下を通じての例でありますが、さてこの雑煮は家例〳〵で多少ちがひはありましよう、隨分明治の新嘉例として大分ちがつたやり方の家もあらうと思ふ。ある醫學士で今は病院もあり、すこぶる繁昌されますが、こゝの雑煮は牛肉の汁を大鍋につくつて、これで餅を煮るのが例である。これは主人が卒業後小く開業した新年に新夫婦ぎりで牛肉を煮て、それで餅をいはつたのが、翌年も思ひ出してこれをつくり、二十年來の例となつたとの事です。

こういふ例はまだありますことであらう。旨く食ふといふ點から蒲鉾、鴨などを加へるのは大分多いやうである。それも好み次第としてよろしいが。新年の食物などいふものは、必ずうまいものとばかりでなく、祝意といふ事がともなひ、それには(一)名稱のめでたきと、(二)歴史すなはち家例などいふ事が

重なる要件となることとゆゑ、それ等からいかに雑煮をつくるべきかも考へる事は無益ではない、といふのは一も二も古式古例にしたがひ、つまらぬ事に手間と入費をかけて、左ほど益のない所謂舊弊をやらうといふのではない。明治の新家庭は舊弊を排斥せねばならぬ。しかし手輕で、趣味があつて、且つ一方新年の氣を生じ得るものとせば、それを用ゐるのはよからうと思ふ。新年家庭の雑煮は古式からいへば左の數種を用ゐる。

（一）餅（二）若菜（三）鰹節（四）串鮑（五）昆布（六）煎海鼠（七）大根（八）里芋

これを用ふるを例となせど、串鮑、煎海鼠等は面倒といふほどはなくとも、一寸うるさいといへばうるさい。畧して

（一）若菜（二）大根（三）里芋（四）昆布（五）花かつを

これを用ゐて、煮汁は昆布、鰹節でよくとつて風味よくつくれば、ナマジ鴨や蒲鉾などを入れたよりは清く且つどことなく古き風味があつて、新年家庭にはよろしからうと思ふ。尤もこれは殆んど普通の雑煮ゆゑ申すまでもないかも知れぬ。

只だ注意は餅もその他も鍋を別に同じ汁で下煮をし椀へもり、注汁は別に煮立て丶上よりかけ、花かつをかけると汁が澄てよろしいのです。チト手數でもこの注意をのぞみます。

鴨、海老、竹の子などを加へての雑煮はうまいにはちがひない、これはむしろ年始の來客用によろしいので、家庭にはまへの淡泊なのがよいでありましよう。

雑煮のほかは、各自の勝手で別に何の箇と例をきめぬ方がよいと思ふ。皿は何、平は何にといふ事はいらぬ事と思ふ。ニンジン、ゴボウ、イモなどを煮溜ておくのがすきならそうしても平に用ゐてもよいでせう、ナマスが好きならそれもよいでしよう、鮭がよければそれもよろしい。大概コンなものを家庭の新年の食例に用ゐるが、わざ〳〵には及ばぬと思ふ。

▲重づめもの

雑煮ばかりではものたらぬなら、重づめものをつくり、(一重)煮豆(二重)テリゴマメ(三重)昆布卷スゴボウ(四重)數の子、これを景色に皿へとりて、ほかには淺漬の大根、それで屠蘇雑煮を祝ふ事で普通には十分であらう。

新年家庭には本膳を用ゐるなどもきまつてよからうが、とても手不足では出來ず。その内には年始客は來る、といふものゆゑ、あまり手を勞せず一家がゆつくり屠蘇雑煮をいはふといふだけに止めておく方がよからうと思ふ。そのほかのこのみは各自の適宜です。

▲來客の用意

來客のための用意もいろ〳〵あります、しかし新家庭はなるべくこれも手をはぶく方がよからうと思ふ來客の一々に膳を出す吸物を出す、といふことはよいかも知れぬが。互につまらぬ事でもあります。殊に倒れるまで酔ふ酔はせるといふに至つてはつまらぬはなしです。

宇野氏の說に從ひ、一々あたゝかなものを饗すことはやめ、重づめものに口取、コールドミート、乃至支那の小菜の類でもつめて置いて、これを小皿へとり屠蘇をすゝめるか、乃至、和洋の菓子に紅茶、抹茶、煎茶のうちでも勸るくらゐがよからうと思ふ。客の方も飲む食ふのは永日として祝詞をのべたらほどよくかへる方がよからうと思ふ。

ハンカチーフ模樣縫ひ方

上村百世子

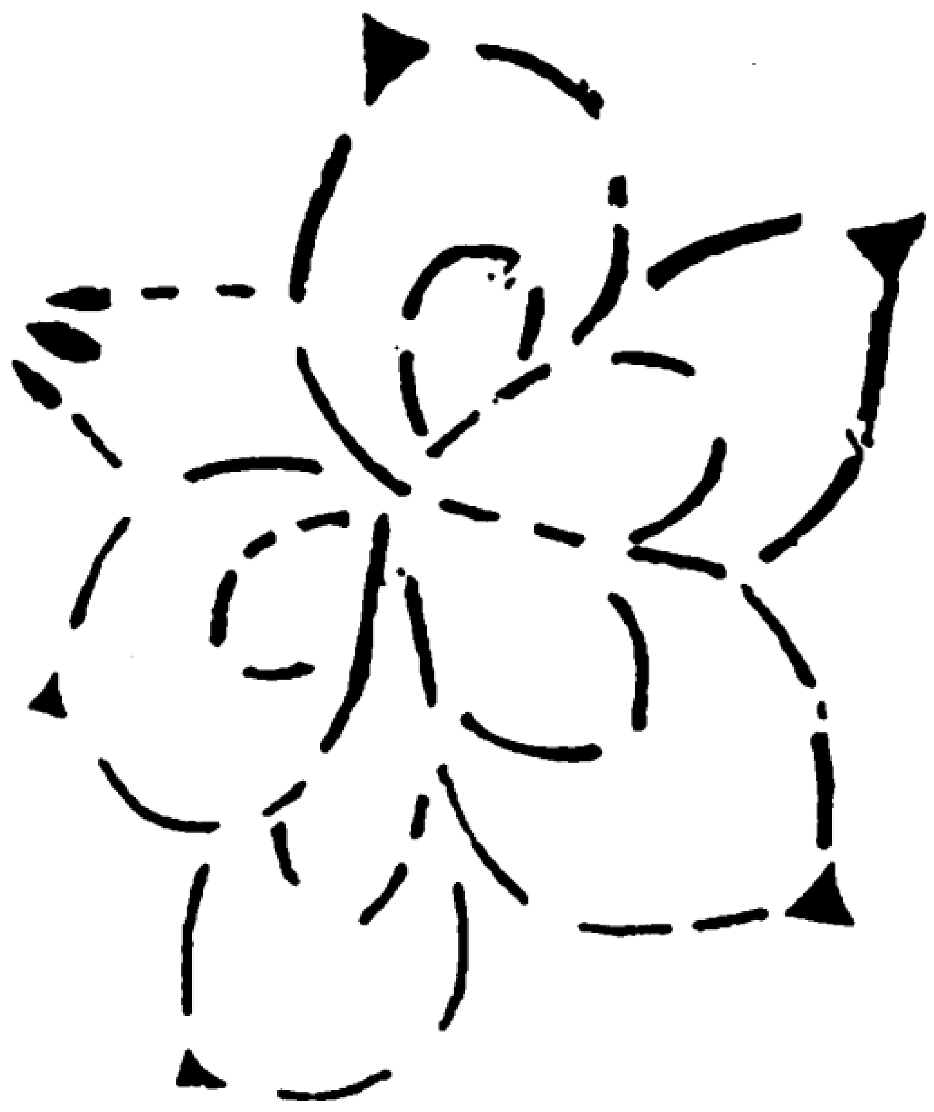
此のハンカチーフの模樣は、餘りこつてりとしない方が、今はよろしい樣に思ひますから、一隅か二隅がよろしう御座います、圖に載せて有りますのは、極手輕な一隅模樣で有ります、糸は矢張りかま糸を割り合せにいたしまして、前申上ました樣に、あまよりにします、是は左よりで御座います、



初め圖に有る如く花より致します、御承知の通りハンカチーフは、裏表の餘り

ハンカチーフ模様





桔梗



目立ぬもので有りますから、此の針留は布片上より針を出し、五分ほど殘し措きたる糸



を圖の如くなして、極ちいさくいたしまして、前圖の如く花を縫ふ、是は兩面物で有りますから、前木綿糸の練習の時の菊の花の反對に、針目を致しまして裏に出でたる時となりに針を出して縫ふ、一々糸を切りませずにいたします、



裏面の圖は、上に畵いて有る様に致します、それから枝は繼ぎ針と申ます、して、──圖の如く針目を一つづゝ扱く様に致します、之は終りまで致しました時、返して餘りますのに、其一つづゝぬいて措きました所へ、針を出して致します、そうで有りますから、繼ぎ針と申します、次に葉を致しますには、其の付て居ります所まで、枝の針目を一つづゝぬいて參りまして、葉を縫ひます。葉の縫ひ方は、花瓣と同し縫ひ方で有ります、片側に有ります葉を出しましたらば、片側のに轉じて縫ひます、此の圖のごとく

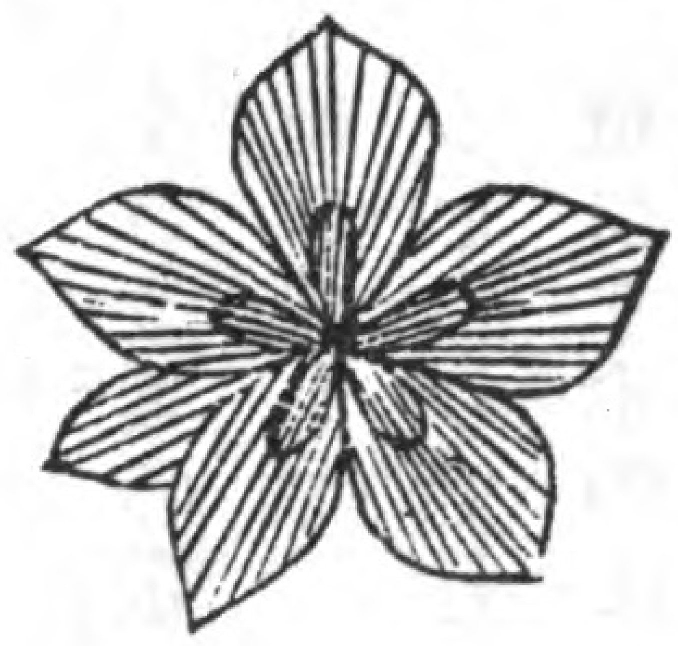


縫ふのです、兩方に出て居ります枝を縫ひました後に、眞中に在る花を致します、全圖に有ります、形の中に一寸した三角の形の有りますのは、名を書きますか縫ひますので有ります、糸の色はあまり變らない方が品がよく御座います、變らせますには、花は時色か若しくは藤色葉は草色を用ひます、是は極手輕な形の縫ひ方で有ります。

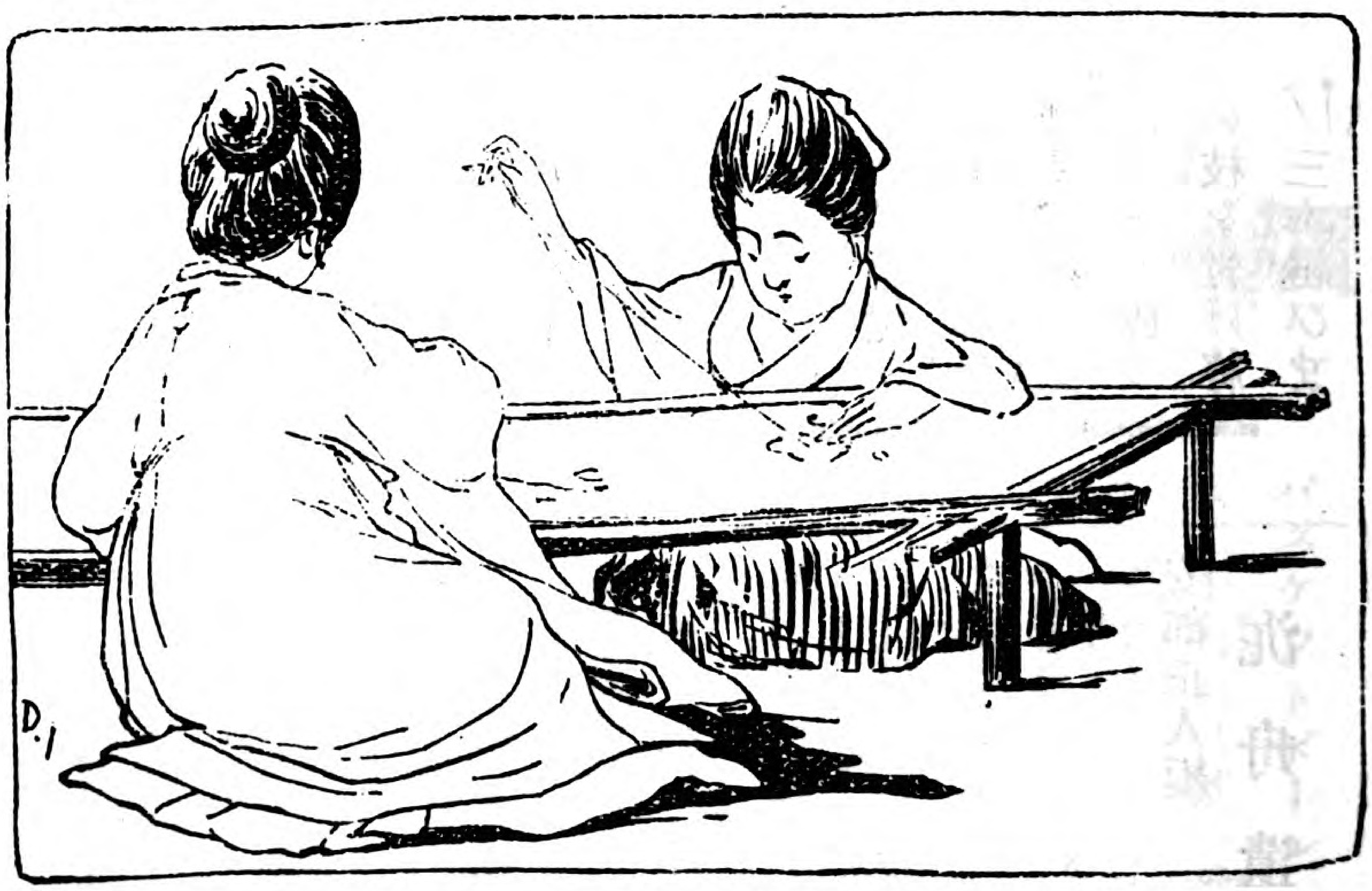
繻子桔梗縫ひ方

ハンカチーフの縫ひ方で、一通りの練習は終りましたので御座います、次ぎは繻子にかま糸で縫ひます繻子は餘り地のよろしく無いのは、縫ひにくい物で有りますから、すこしよろしいのをお求めに成りました方が、よろしう御座います、繻子を張りますには、切れの目の所に糊を付けます、是は切りました所がほつれない爲めです、糊代は二分程でよいのです、よく乾きました後に、匡に張ります、初め繻子に形を附けますには、圖に示したる様に、布片糊粉で畵きに成りましても、よろしう御座います、圖を

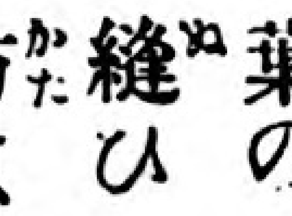
切り取りまして、其裏は糊粉で圖の通りを書きまして、後乾きたるをまちて、糊粉の方を布片に付け、象牙ヘラ―(縫ひ物を致す時用ふ)で布片の下に板をあてまして、上の圖紙をこするので有ります、よくすりますと、なか〳〵に能く付く物で有ります、そう致しまして、糊粉を水で解しまして、それで其上を書きます、縫ひます桔梗は、先づ其色が能く似る様に致します花は紫色に白かま糸、及び草色濃淡二色黄色是れだけ有ります、縫ひますには花から致します是は内中の形ちを



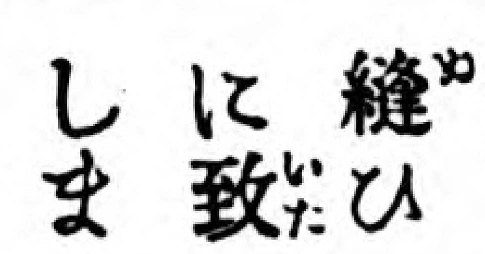
白のかま糸にて、圖の如く縫ひま



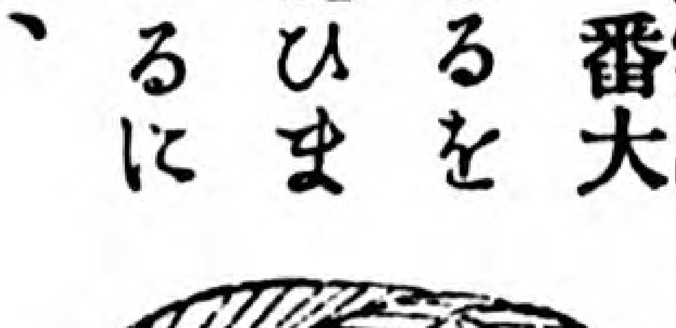
す、後に紫色にて外側を矢張り圖の如く縫ひまして、其上に内側の白で縫ひました所の中途から、外側の紫色の中途迄白と紫とのたづなよりを掛るので有ります、此の糸は一すが合せで有ります、花を縫ひます糸は、糸の太さにもよりますけれども凡一本宛でよいのです、只立てに縫へばよろしいのです、次に葉の縫ひ方は。



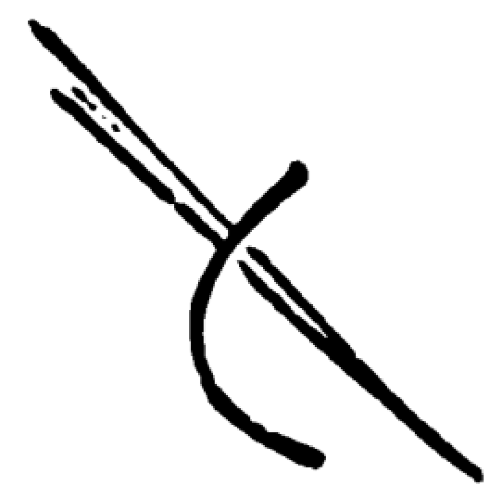
◦小さなるは圖の如く縫ひます、葉脈の有ります葉は圖の如く割り縫ひに致します。



◎一番大なるを縫ひまするには、圖の如く葉の裏面の出



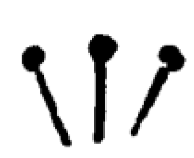
ました所は、表を縫ひました後とで、圖の如く別に致します、小さき葉の重り合ひました所は、其下に有る葉から縫ひまして、上に有る葉を縫ひます、葉の色は大なるを濃のでし、小なるを淡いので致します、皆是を縫ひますのに、メツチを用ひます、又圖の如くかま糸の間に、メウチを入れまして能



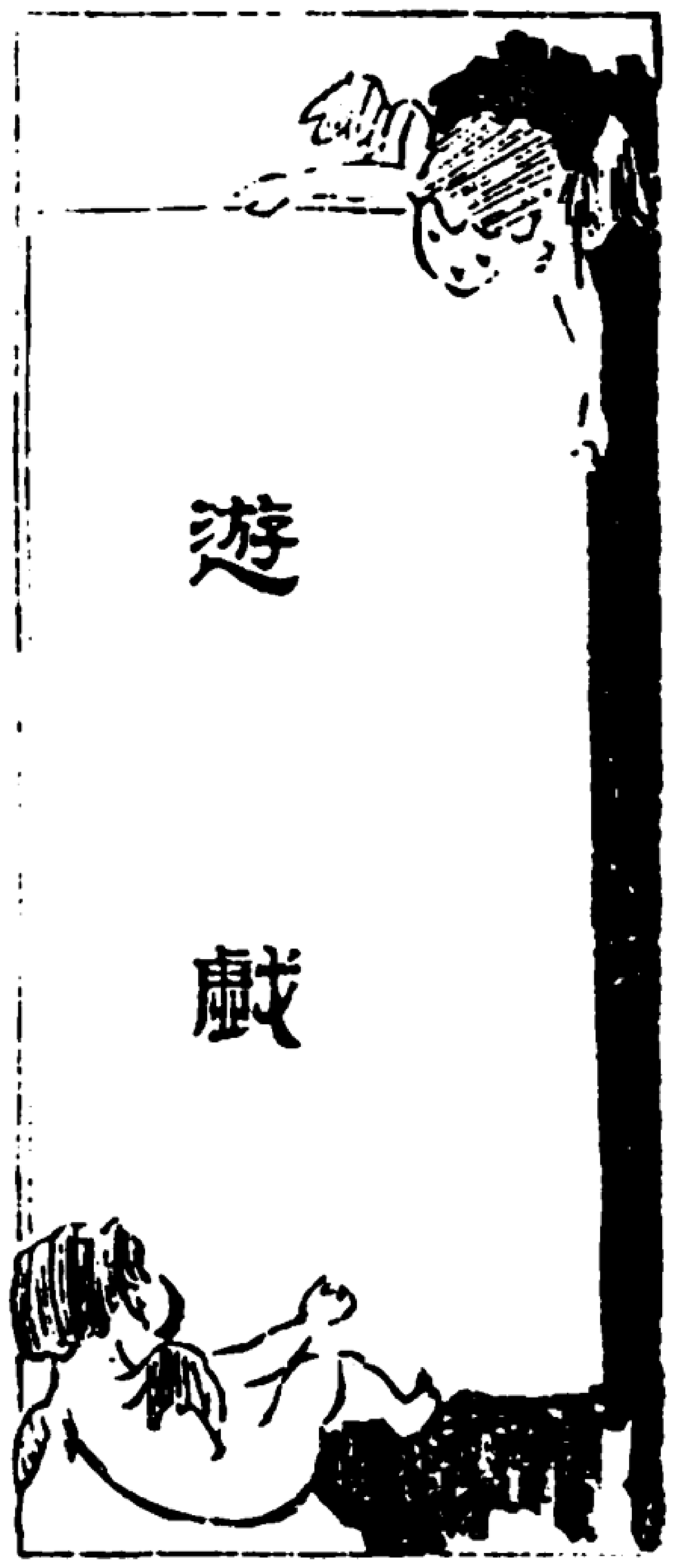
く二三度返し下より糸を引きます、是はかま糸がほけ安き物で有りますから、此のメウチを用ひまして、能く糸をなじませるので有ります、次に枝は草色に割り合せに致します、是は廿よりでも無く辛よりでも無く、中程がよいのです、枝を附けます前に蕚を縫ひます、是は形の通りに立に二本程糸を出し、二つ縫へばよいのです、枝を附けますには、蕚のきはから、



圖の如く縫ふので有ります、餘り太く成りません様に、次にふとく成つて行きます、次に蕾みの枝を付け終りに香を入れます、是はすが合せにして



三本縫ひます。



内外遊戯百番

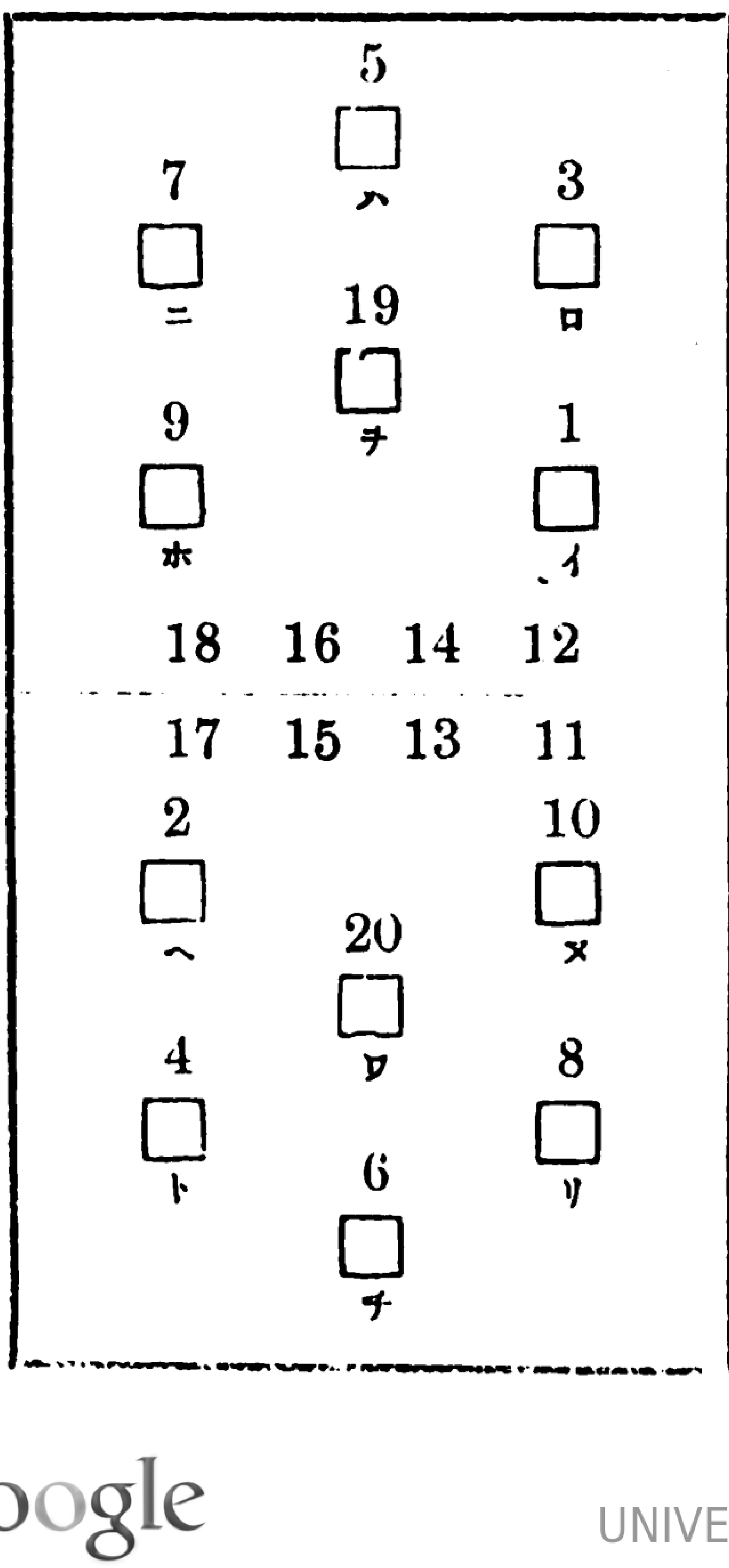
女子大學講師　白井規矩郎

昔の人も善く學んでよく遊べと申して居ります通り、餘り學ぶ斗りでも宜くない又た遊ぶ斗りが能でもないので、つまり其中庸を採てゆくのが肝腎であります、其れで茲には家の中で遊ぶ事又た野外で遊ぶ方法、一人でも娯めるもの多數で行ふものなど、雜ぜて面白そふなもの斗百種を御目に掛けます。

キャピテン、ボール、

是は室の内でも又た芝原か河にかわる庭でもよろしいのです、遊び道具としては、フートボールか、バスケットボールか一個あればよいのです、人數は二十人あれば一番面白いのですが、其れより少くても差支はありません、併し五人や三人では餘り面白くないものとなつて仕舞ひます。

先づ室の内なり又た庭なれば地面へ



左半部

右半部

の様に四角長方形の線を畫きます、廣さは人數にもよりますが、大抵長い方を八間と致せば一方は四間位の割合でよろしいです、場處が出來ましたら人數

を分けるので、二十人なれば双方十名づゝと致して白と赤の襷位で組を別けます、其處で赤組が右半部なれば白が左半部を占める樣に致し、兩組の塲所が定まりましたら、次には圖にあります樣に方形の五個處へ一人づゝ立ちます、(之れは各自の立つ處へ小さい圓形を書いて置いてもよいのですが、ベースと申して麻袋へ砂を入れましたものを造つて置きまして、其れを前の圖の位置に備へまして、其處へ立つことゝ致せば上等です)又た兩半部の中央にあります、圓形の處へもベースなり、小板なりを置きまして塲處を作ります、

双方に、十名づゝで組が出來ましたら、其中で一番身長の高い人を各組から一名づゝ選びまして之れをカピテンと致します、カピテンは兩組とも前の圖の五つの塲所の中央にある圓形の處へ立ちます。

次に左組の五名はイ、ロ、ハ、ニ、ホの五塲處へ各一人づゝ立つて、又た右組の五人ヘ、ト、チ、リ、ヌの五塲所へ一人づゝ立ちます。

其處で双方とも四名づゝ餘る勘定となります、此四人は各境界線の處へ、左組は12 14 16 18 右組は11 13 15 17の樣に立ちます。

前に用意いたした大きな毬が一個つあります、之れを其境界線に居るものが一人誰でも上空に投げます、スルト赤組は赤の領分へ、白組は白の領分へ其毬を送らうとして互に爭ふのでありますが、併し毬は常に上に投げつゝ致すので決して一人で手に握つて居てはなりません、則ち自分の組のベース、に立つ人へ投げ送る樣に致すのであります。

遊びの目的は境界線に立つ人から毬を一旦ベース(周圍の)に立つ人へ送つて、ベースの人から中央のカピテンに投げる其時カピテンが甘く其毬を執れば一點の勝となるのです。

境界線に居る人から直ぐにカピテンへ投げても無効です、勝負になりません、併しカピテンから境界線に立つ人へ投げるのは差支ない。(尤も之れも勝敗には關係はないのです)

ベースに居る人とカピテンとだけは決して其場處を動く事を許しません、ベースが、カピテンへ毬を送るときも、又たカピテンが毬を受取るときも必ず片足をベースへ載せて、致さぬと無効になります。
併し境界線に居る人（則ち双方の四人づゝ）は自分の領區内でも敵の領區内でも何處へでも自由に奔走が出來ますから、若し毬が敵のベースへ行つたと見たら、急に其近傍へ往つて其ベースがカピテンへ送らうとする邪魔を致すのです、（此時でも何時でも毬は必ず上空に投轉じつゝ行ふのであります）
又たベースの人は敵の邪魔があつてカピテン、へ毬を送ることが出來ぬと見たら、成るべく自分の組の他のベースの人へ投げるやうに致すとよいのであります。
方法は之れだけですが實地にして見ますと隨分面白いものであります。

慰み半分 鳥の飼法

囀々子

園藝とか養蜂とか大分此頃は女子の慰み半分に實益になることを致される樣になりましたが、禽鳥を飼ひますことなども中々趣味のあるものでして、或は卵を産ませる、或は囀る聲を聽く又た固くるしく申せば動物學研究の一端ともなるもので、實益のある趣味の深い慰みであらうと思はれます唯だ飼が面倒であるとか、鳥としての衛生が六ケ敷とかいふもので今まで閑人の他は餘り飼はぬ樣に見へますが、致して見れば格別面倒も手數も掛りません、學生諸君が勉强の間にでも出來ます樣に誠に手輕な方法を話して見ませう、成る程と合點があつたら一トつ始めては如何です。
人間は衣食住の三つを欠くことが出來ませぬが、鳥も亦た人間と同じ樣に衣食住の中が一つ欠けても活きて居ることは出來ませぬ、其中でも一番先きに

立ちますものは食でありますゆゑ、先づ其れから申しませう、

鳥の餌

一ト口に餌と申しますが、此中に幾通りもありまして鳥の老若種類性質に應じて、其に適當なものを與へませんと、折角の香餌も毒物となります樣な結果を來します。

其れで餌の種類をザット別けて見ますと、磨餌、米粉餌、生餌、青餌、合せ餌、摘み餌、白ら餌、の樣な工合になります。

磨餌　と申すのは鯑雑魚などを燒きて乾しましたものを、米と糠の煎粉へ合せまして青菜の汁で交せましたものであります。

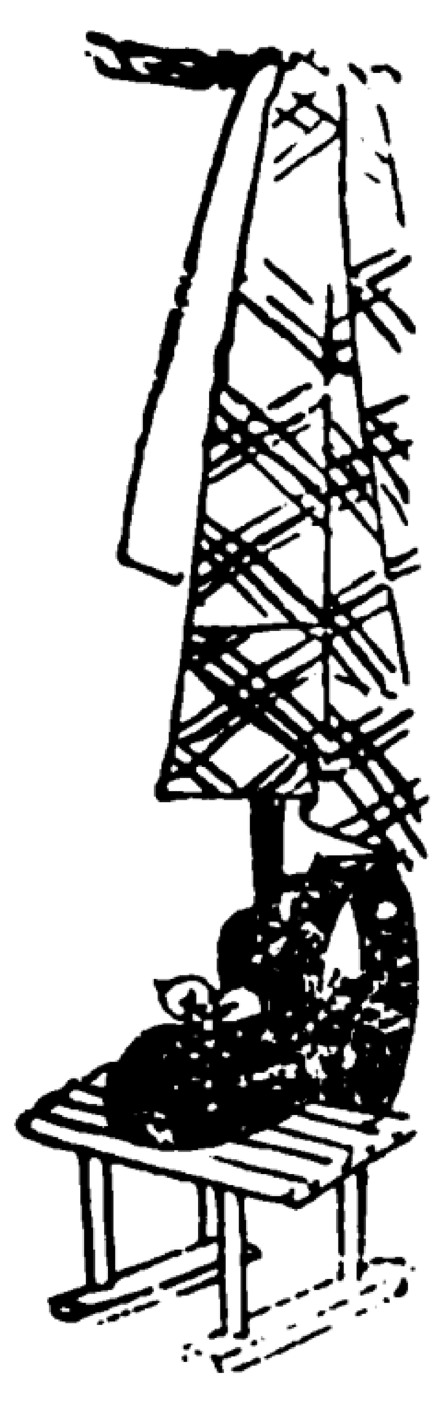
此米と糠との煎粉を合せましたものは、斯道の通語でハッタイと申します、此ハッタイは何處の鳥屋にでも出來て居りまして、少々でも分けて與れますが、自分で製れば鳥に應じて自由に加減が出來ますから、一トつ傳授致しませう。

玄米一升に糠一升五合の割で双方とも煎りまして粉に引き篩に掛けましたものを合せればよいのです又た人に依りましては、玄米一升に糠三升二合の割合で致すものもあります、何れも鳥の性質やら、氣候の加減など見計つて致すのが肝心であります、又た別に上鳥粉と申して、

米　一升　糠　三升一合　白大豆　一合
大麥　四合

を別に煎りまして挽きましたものを合せて作つたものがあります、凡て煎り加減は煤竹色より少し淺い位の處が度であります。

此上鳥粉は鷦、菊頭「セッカ」「センニウ」「小ヨシ」など丶申す、弱い質の鳥には極めて良いものです、鶯や駒鳥など、此の餌で飼へば上等であります。



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

謹賀新年

御羽織紐　時計紐　御帶とめ

絹糸編物類　房類

★印優等絹縫糸

全絹小町糸各種

其他糸組物類大勉强販賣仕り候

日本橋區兩國米澤町
三丁目五番地

冨屋商店

文學士 登張竹風著

新刊

讀書と修養

四六判洋裝
定價三十錢
郵稅六錢

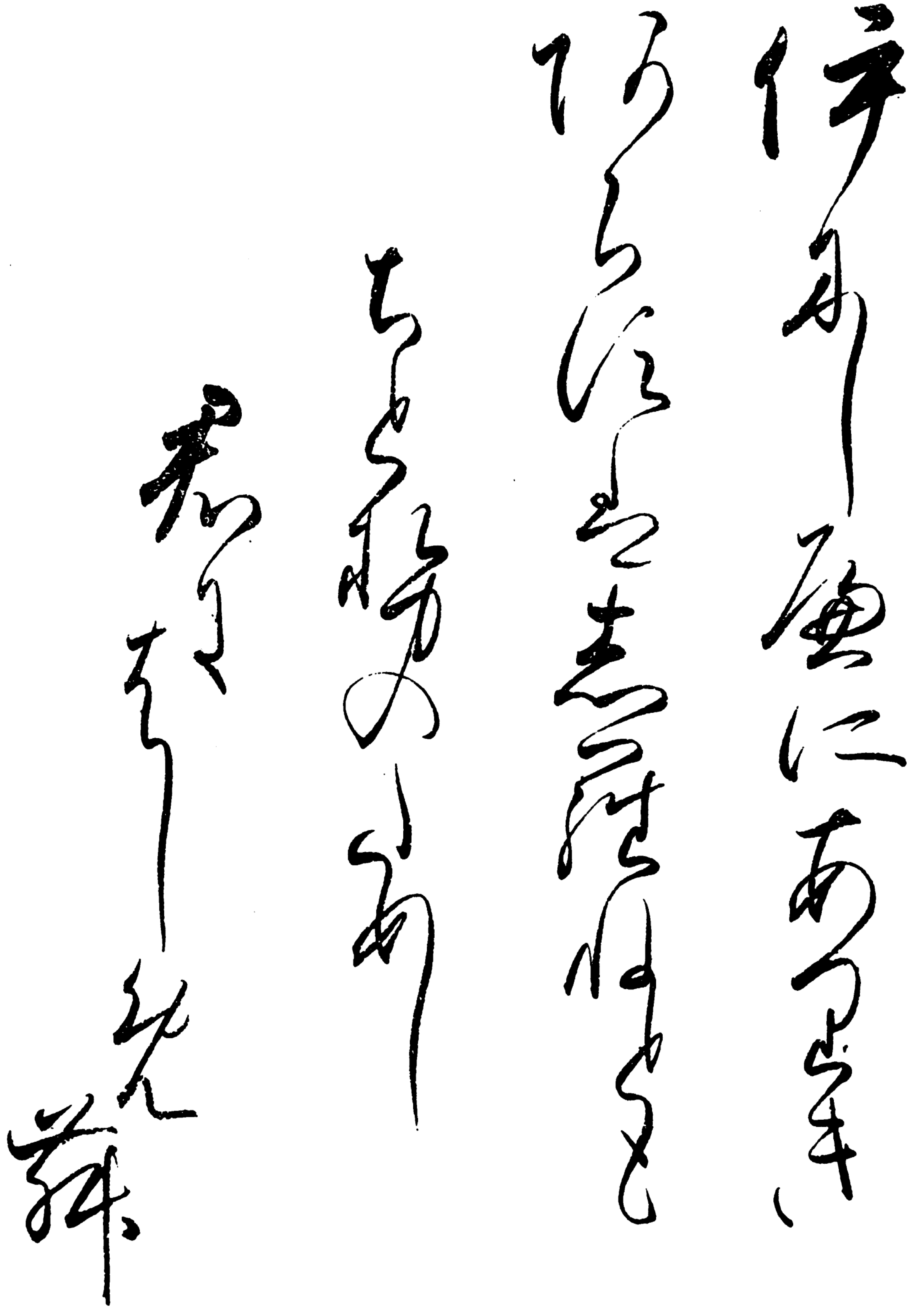
如何なる書籍を讀むべき乎。如何なる書籍を讀みて修養を資くべき乎。是れ恐らく讀書家の胸間に蟠れる先決の問題なるべし。

著者竹風氏奇警の見識と卓拔の議論とを以て此間の疑問を解決するや、恰も庖丁の牛を解くが如く、向ふ處整然として解けざるはなき也。

此書一たび出でゝ。讀書社會未決の大問題は釋然として氷解し、机に對して亡羊の嘆を發するものなきに至らん、復何ぞ其の讀書に益し修養に資くのる多大なるを疑はんや。

希はくは江湖の讀書家一本を購ふて、座右の參考とし、以て讀書の興味と利益とを併有せられんことを。

發兌元 東京築地 株式會社 國光社



宮里三太村子書



東京市本郷區弓町廿六番地 今関南召

募集當撰繪畫

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

磯部武者五郎著

家計簿記法

●家計寶典

●御婦人方必携

本書家計簿記の法を說く簡にして明、何人も一讀會得するを得べく主婦たる人には勿論苟も家計整理の任ある者必ず座右を放つべからざる良簿記法なり

菊半切厚表紙美本
定價十五錢
郵稅二錢

中村清藏序
中村佐平著

●銀行簿記學

菊版總クロース
定價五十錢
郵稅六錢

富田鐵之助題字
須田毎六著

●銀行利用法

菊判洋裝美本定價金四十錢郵稅金六錢



發兌元　株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



福引

安藤笹舟

●女禮式　△折鏡。（行儀）

●學の庭　△押繪。（敎へ）

●女の歩　△團扇。（内輪）

●筒、非筒　△糸心三つ。（最と親密）

●入雲琴　△果實。（音樂）

●僧の妻　△盆栽。（梵妻）

●婦の道　△竿三本。（操）

●新夫婦

●賢き女　△糝薯、鯛。（新世帯）

●三味線　△絹布。（賢婦）

●女の病　△ペン二つ。（ぺん／＼）

●芳紀二八　△尺。（癪）

●女事務員　△帶に鉢

●娘道成寺　△洋燈。（世に用ゐらる）

●化粧道具　△空財布。（鐘に怨みが數々ござる）

●加留多の會　△串。（櫛）

●薄命の美人　△瓶。（仲が宜くみへる）

[illegible][illegible]

●正月の御飾　△小さき寸燐。（小町）

●尾上への召使　△松蕈。（松竹）

●三絃の名手　△薩摩芋。（おさつ）

●宮城野信夫　△元結。（音が締まる）

●祇王と祇女　△鏡臺。（姉妹）

●愛娘　△紙四枚。（姉妹）

●わが戀は汐干にみへぬ沖の石の　△箱入人形

●雑布。（人こそ知らね乾く間もなし）

●かさゝぎの渡せる橋におく霜の　△炭團。（白きを見れば夜ぞ更けにける）

●うかりける人を初瀬の山颪　△禿頭病の藥。（はげしかれとは祈らぬものを）

●瀬を早み岩にせかるゝ瀧川の　△早繼粉。（われても末に逢んとぞ思ふ）

●見せばやな小島の蜑の袖だにも　△上等裏地。（濡れにぞ濡れし色は變らじ）

（以下次號）



雜録

支那の正月

半佛生

茲に掲載するは、直ぐ隣國なる支那に於ける正月の儀式なので、處變れば品變るとやら、一寸變つてる處に面白味があります、尤も支那と云つても、支那は大變廣い國で、同じ支那語でも南方の言葉は北方に能く通せぬのが多い位ですから、儀式の如きも一概にそうとは云へませんが、之は重もに江南、浙江あたりの風俗に付いて調らべたのです。

◎先づ在京の官人に付いて云へば、元旦には朝服を着し、朝珠を掛けて參內するのですが、其時官人は轎子に乘り、開棍と云つて、皂隷二人棒を持つて先拂ひを致します、僕從は京城內では、官の高下に依り人數の制限があつて、執事でも列に加はる事を許されぬ事があります　宮中で拜賀の次第は、文官は東側に列し、武官は西側に列し、其品位に從ひ、一班二班三班と順次に列を分ち、一同に萬歲を唱へ、三跪九叩頭の禮を行ひ以つて式を終へます。

◎退朝の後は、各自名帖と云つて、赤紙に新年の祝詞、並に自己の姓名を書き記るした名札を持ち、諸衙門互ひに往來して、年賀を述ぶるのですが、官人は七日迄の間は、外出の時は勿論家に在つても必ず朝服を着して居ります。

◎京外の官人は、元朝には朝服を着し、開棍の皂隷行牌涼傘旗などを先きに備へ、跟隨の者を多人數召連れ、所々の寺廟に安置せられたる、今上皇帝の龍牌に詣で拜賀するのですが、其の龍牌と云ふものは、木にて作り、其面に天子萬歲萬々歲と書るしあ

つて、寺廟には必らず安置されてあります、官人が參詣する時は住持役僧を連れ門前迄迎送します、又人により役僧のみ挨拶する事もあります、是等の事を總へてから知府知縣等の官人は、上司官に謁し年賀を述ぶるのですが、是れ亦た七日間は必ず朝服を着用して居ます。

◎其他官人庶人とも、元朝には必ず先づ衣服を改め天地を拜します、天地を拜するのは、古來の慣はしで、天地の恩を謝するのです、其れから家廟の神主を拜し、終つて兩親を拜します、召使ひの奴僕は又新衣を着け、主人を拜するのが恒例で、此時に外套を着する事を許されません、其れから家廟の禮拜を終つて後喜神(喜神とは惠方と云ふが如し)の方に向つて外出し、其れから又たボツ〳〵神廟寺院等に參詣します、尤も香燭などは寺廟にも備へあれど、大抵は自身に攜へて參るやうです、總じて寺廟には多く水盥の設けがありませんから、宅を出る時手を淨めて行かねばなりません、其れから三日迄の内に親類朋友の家に名帖を持行き年賀を述ぶるのですが朋友の家では門口で祝詞を述べ、親類又は格別親しい家には、上がり込んでユックリ年始の馳走に與ります、其時先方では酒又は年糕を出して祝ひ、又所によりては屠蘇酒を出す家もある、大家になれば跟隨の二人或は三人を召連れ、遠路の處は轎子或は馬を用ひて、十五日迄の内に年禮を述べに廻ります、ソコデ先方の宅では燰鍋と云ふ鍋で、日本の鍋料理のやうに仕掛け、外に小菜八鉢を設けて經應致します、其の献立は

（燰鍋）綠豆麪、鷄、鴨、肉圓、香菰、冬筍、火腿、海參、魚翅、

是等の品は孰づれも燰鍋で煮立て、其暖まるのを待つて賞翫します。

（小菜）魚、火腿、鹽蛋、蝦米、鹹蘿蔔、炒悄、青菓、紅棗、

右燰鍋及び小菜料理の献立は、大抵斯くの如く定まつては居りますれど、猶ほ原料の都合により增減し

ます、尤も支那では年始とて、日本のやうに雑煮、吸物などを出す事はありません。

◎元旦には又試毫とて、吉利の文句を例の赤紙に書き記るします、尤も元朝繁用なるものは、便宜の爲め除夕に認むる向きもあります、總じて又元日は吃素と云つて精進する者が多い、之は年の始めと云ふ處から、深く愼しむの意を表するのでしよう、三日頃から春酒又は新年禮酒など唱へ親族朋友互ひに招請して酒宴を開らきますが、其時は請帖即ち案內狀を發して、太抵前日に其事を申し遣はします、尤も此宴會には婦人は參會しません、年頭に婦人の出步るくのは唯だ實父母の方に行くのみです。

◎商家は元日は、招牌をひき、內店にて商賣するのですが、曆の開市と云へる日に其招牌を掲げます、此日は店開らきの祝ひとて、手代其外商賣仲間の者を招き盛んに酒宴を張ります、又船乘りの者は出行と云ふ日に乘り始めます、店卸しは盤帳と唱へ、開市の前後に拘はらず、手透を見合はせ、前年の商賣金高、幷に品物有高等、總ての帳合勘定を致します。



◎正月十三日を上燈、十五日を元宵十八日を落燈と云ふ此六日の間は燈夜と唱へ、十三日の夜より家々の門前に燈籠を點し、官府富豪の向きは門前は勿論、堂上又は樓上などに、結綵とて紅縮綿を四方に張り、兩端を柱或は上檻より垂れ、所々に花の樣を形に結び下げ、樣々の飾燈籠を點じます、此夜は殊に酒宴を張り又絲竹を弄ぶ家も多いやうです。

◎燈夜の間は、市中の空地に戯臺を設け、倣戯を催

ふす事が慣例で、又本町通りとも云ふ可き大家富豪の住居せる町筋には、燈棚とて此方の軒より先方の軒へ互ひに竹を渡し、其上に木綿の幕を掩ひ、麻縄を垂れ種々の飾り燈籠を點じます、其他街上には行燈と云つて、若者でも打寄り、龍燈、馬燈、獅子燈魚燈、鳥燈など、種々様々の形に拵らへた燈籠を振り廻はし、銅羅太皷にて囃し立て、町々を練り歩るくのですが、其時町家にては、店頭に酒肴を出して若者共を饗應します、總じて諸衙門など、猥りに諸人の出入を禁じますれど、十五日上元の夜に限り、燈籠見物の爲め門戸を門放し、之を放夜と唱へ、衆庶の縱覽随意です。

◎正月の先祖祭りは、中々嚴格なもので、臘月二十八九日の頃、主人盛服を着し、家廟に至り、神主の前に拜跪し、拈香して神主に向ひ、今迎新春恭奉祭祀と告げ、廟の傍に高卓子を据ゑ、神主を暫し其處に移し、然る後家廟を掃除潔淨し、其れから又元の如く神主を安置し、神主の後に眞像を掛け、前に香案を置き、其上に香爐燭臺を飾り附け、其前に又一の高卓子を据ゑ、大なる花瓶に牡丹の造花をいけ置き、脇の小いさき花瓶に、草花を深山挿し、兩方に燈籠を吊るし、燒物の皿に茘枝、龍眼、落花生、松子、東瓜、糖桔餅などを供へます、斯くて元朝に至れば主人早朝に沐浴し、盛服を着け、子孫弟姪を引領して家廟に至り、廟外にて盥洗し、燈火を點じ、三牲を備へ饌を進じ、爵杯に酒を盛り、主人先づ跪いて杯を奠し、終つて拈香禮拜するのが例です、主人の禮拜終れば其れから嫡子、庶子、伯叔、弟姪、婦女等同居の親族が順次に禮拜し廟拜全く終つて後に、家内の祝儀を述べます、進儀は元日計りで、其後は致しません、十五日は又上元の佳節と云つて、主人早朝に盛服して、燭を照らし香を拈し奠酒を致します、十八日が先祖祭りの最終で、此日に色々の供物を徹し廟厨の扉を閉し、香案に元の如く香爐燭臺を飾り附け、而して後に廟門を閉します。

◎正月七日を人日、八日を穀日、九日を豆日、十日を綿日と稱へ、此四日間に天氣が晴朗であれば其年は豐年だと云ひます、七日の人日は人の始めて生れた日と云ふので、浙江邊では、斤量を以つて身體の量目を量る事が一の例になつて居ります。

◎正月から、小供の紙鳶をあぐる事が中々盛で、紙鳶を一名鷂子と稱へ、其形は人形、胡蝶、又は魚鳥など種々あります、又風箏と云ふて竹を弓の形に曲げ、綸子、紗綾等の幅二三歩計りの切れを弦に掛け紙鳶の頭に結着けたのがあります、之を揚ぐれば風を受け響を發するから、風箏とは名を附けたものでしよう、又兒女正月の遊び物には見踢と云つて鷄毛を三本又は五本計り錢にさし、之を絹に包み足で蹴つて戯れとするのがあります。

◎儒者の家では必ず神農の像を掛け、之に年糕菓物等を供へて禮拜しますが、普通の家では先祖の像を除夕から掛け、三日迄之に供物を致します。

◎除夜に爆竹を打鳴らす事は、何時頃からの風習であるか能く分かりませんが、近來は益々盛んで、知らぬ者は俄かに戰爭でも始つたのかと驚く程です。

初日の出

卜部觀象軒

歳の神の何處まで來しや知らねど、百八の鐘の音一つ一つ時を刻みて、今年もたゞ二三時間を殘すのみ明くれば嬉しき新玉の春の光、遣羽子凧を喜ぶ者のみならで、伊勢海老の如き腰を伸しつゝ、恵方詣する人々にも、赫耀として輝く日の出を尊がるゝ日輪の、今頃ははや太平洋上の波の一部を照し居るらんと思はるゝ大晦日の夜更、敢て此夜寢に就くことの遲ければ遲き丈け年とること少しとの古き言葉を眞としてにはあらず、常に勉めて試驗前には懷に書物を忍ばするやうの事はせず、悠々と遊びて居たき如く、思ひ殘す事なき迄萬成し了へてせめて、此除夜を長く樂しき夢に明したくはあれど、怠者の節

句働きとの諺に洩れず、日常怠りし報とて、明けての年始に昨夜の鬼がと思はるゝとか云ふ掛取りに行く面倒は素より、來らるゝ憂もなく、才無きだけに斯かる事には何處の空を風吹くかとばかり心安き身なれど、將に成らんとして未成らざる事のあれば少しも早くと心せくまゝ、燈を挑げ、机に對ひ、漸く成し果して時計を見れば、はや一時を過ぎて、火鉢には僅火入れに埋むべき程の哀れの火氣を殘すのみ。

明くるにはまだ間わり、爲すべき事は成し了へたり曆已に改まりたるも、去年の名殘に少時の暇も美しく圓なる夢結ばんとは思へど、生憎にも先刻に苦茗を啜りしものから、眼はいよ／＼冴えに冴えて、眠に入らん氣色だになし。斯かる事には曾て節々經驗ある身の、今直に床に就くとも、眠られざらんには實に甲斐なき愚の事、若かず、好める文にても繙きて時を移し、後湯島の社頭になりとも初日の出を看んものと思案を定め、先雨戸繰開けて空打眺むれば薄曇りせる處無きにあらねど、大方は晴れて星斗爛たる樣の、八分の望を示し居るに心落着き、炭をつぎ、机を拂ひ、書架より好める物を取出して繙くに何時しか興に入りて、數篇を讀み終る頃しも、田舍近き住居の常にはあれど、曉を告ぐる鷄の音の、今朝は殊更珍らしく聞えぬ。

戶外はまだ暗く、日出には一時間餘の暇あれど、十數町の道を行きて觀るには早くもあらざるべしと、人の勸むるまゝに衣を重ね、襟卷を厚くし、外套の頭巾深く被りて立出づるに、塀の上などに置きし霜の間にも白く、夜氣身を襲ふも是非なし。馴れし道とて、文目も分かねど跌きもせず、やがて下なる町へ出づるに、日常靜なる所も昨夜は常になく物騷がしかりしも道理、雨戸ひきし家の極めて稀に、大方は或は高張、或は大きなる提灯を軒へかゝげ、商家は更に洋燈を增して景氣よく、人の通ひも、囂き夏の夕に讓らず、而も多くは急ぎ勝にて、或は蹴高く罵り騷ぎ、或は小胯に走せ行くなど、流石は年の

境なれど、先刻までは用事に追はれしが今は人の忙かしさを見る我が上を思へば、世の様々なるをかしく、歩を次第に進むれば、晝は行くに従ひ賑かなる町の、今は却て漸く淋しく、高張を下すもの、店を仕舞ふ所、雨戸閉づる家の多くなりゆきて、人影は次第にうすれ、菊坂より勧工場の邊へかけては、ひきし戸の内は知らず表よりは未寝ざる家の二分程と見らるゝばかり、玆處は又働きある人々か、或は未練なき人々の多く住へる所かなど思ひつゝ、廣き通を切通しの方へ折れて、はや薄明るき東雲の色に歩を急がするに、常にも夜店多



き場所柄とて、正月の必用品を賣るものは素より、下駄屋、古着屋、繪葉書屋、あるは帽子、襯衣、襟巻、手袋と、所狭きまで并べ立てたる唐物店など、洋燈の油煙を盛に立てゝ、未仕舞はんとする氣色なけれど、他の店の大方は、車に一載の荷物をまとめ、今は月夜の提灯にも似たれど、法律に違はんことを恐れてにやカンテラの光に道を照して、各々家路に歸り行く様、常に變りて珍らしき眺めなれど、何處も變らぬ切辛き世の是非なや枳殻寺の前頃より、天神の方に向いて急ぎ行く二三の人々あり。こも亦日の出を見んとの心ある者なる

へしと、我も劣らず歩をつゞけ、前後しつゝ見晴に至るに、はや三十人近く集まり居て、ベンチに明きし處とてなし。

我は先抉に煙草をさぐり、鐵柵に倚りて東の方を打見やるに、山腹にも半天大雲を以て蔽はれ、中天に近づくに從ひ、茜色を帶びし所多く、風のまに〳〵徐々と搖ぎて、奇峰倒れて怪石浮び、不動の出現するかとも思はるゝ所、やがて羊飼ふ小山の如くなるなど、宛ら浮雲のたゞずまひ面白く美しければ、下方は未だ薄暗く、而も曉霧遠く靆いて、何處が天、何處が地と、其境を明かに認め得ん由なく、模糊遼遠たるが却て趣ある中にも、殊に、夕日を背にせし島嶼のやう、其周圍の茜色もて鮮かに隈取られ浮出したる島の形、そが對岸に峨々たる巉巌の、頂には紅く光を受け、中腹の黒きは削立せる樣を示して餘ある、而しそが間の下方には、金色の波ゆるく走する所、汽船の黒煙の如きもの二條、輕く南に向ひて流るゝ樣、古戰場の落日をパノラマにて看る如く、心を惹き、思を誘ひ、そゞろ冥想に入るを禁じ得ざらしむる迄をかしきに、少時は朝風の冷かなるも忘れ遙に凝視して思ひに耽れど、彼の黒煙に似たるものの、他の雲に比しては速に、煙と見しこそ眞に近けれ、雲としては異なる、所尠からざるも、其何なるかを見定むることを得ず、果は倦みて、人聲喧しき後の方を顧るに、以前には只黒き姿のみ、よくは分らざりし四邊の人の衣の文も。今は大凡見分けらるゝ程にて、コート用ひし者は知らず、お高祖頭巾を深く被し者、髮美しく結ひたる者などの側には、其人々の品はわれど、常の衣裝とも見受けられず、先は小洒落したる容姿多きは尤なれど、下にヒピらせたる下女らしき女の、髮のみ不相應に立派に結ひて、澄まし返りたるもなか〳〵にをかし。

人は分を追ふて愈多く、神前に鳴る鈴の響、敷石を踏む下駄の音漸く高く、空は秒を重ねて益明かに、畸形の雲、模稜の曉靄次第に散ず、遠く望めばさても〳〵、曩に黒煙と訝りしも道理、本所か深川

か、遙に立てる二本の煙筒の、盛に煙を迸らすがあり。靄の爲に見えざりし上に、時は元朝の拂曉なれば、斯かるべしとは思ひ設けぬ事ながら、こも少しは近視なる我が眼の幾分か與かりしところなしとも云ふべからず、以前の事を思ひ出して、斯かる折には、近視もさして惡きはあらずなど、獨勝手に理屈付して慰むるもわれながら可笑しからぬにあらず。はや日の出の時刻に及びたれど、雲の爲に遮られて其壯なる景を見ることも得ず、欠伸の聲は彼方此方に起り、われも徒然なるまゝ遂誘はるれど、歸らんも無念なり、今少時待たんものと、煙草燻らしつゝあるに、尙續々と來る人あり、其多くは美しく着飾りたる者か、或は何處かの歸りに立寄りたるらしき人々にて、所柄とて、潰しに結ひたる意氣なる者の、白襟卷にて頭より包みし人の後などより、首差伸ばせる樣も見受けられしが、やがて朝風に靡きて搖ぐ雲の切目より金色の光を射出し、大なる日輪の徐々と覗り出せし時は、拍手の響忽霰の板屋を打つ如く起りて、近くに物語せる雀の驚きも思ひやらるゝばかり、中には帽を脫して禮拜し、或は合掌して伏拜む者もありき。

太陽再上なる雲に隱れ終るを視て、我は四散する人々の中に步を急がせ、元來し道を還り行くに、今露店を仕舞ひし人の、荷車を曳きて來るもあり、四町のさる所にては、破れ人力車を路傍に置き、只一枚の餅を買ひ居る車夫を見て、其境遇を想像り、不覺憐れを催せしが、家に歸りて直に屠蘇の膳に對ひ樂しく笑語の人となりぬ。

（完）

龍の話

森又八

今年は辰の年だから、辰に因んで茲に龍の話を致します、元來龍だの鳳凰だの申す者は、東洋に於ける架空的のもので、現實あんな者があつては堪まりません、凡べて物の中で、非常に靈妙な者と云つた

ら、平生何處に行つても、目のあたりに見得らるゝ者では難有味が少く、又注文通りの趣が乏しい、ソコデ理想から架空的の者を拵らへ出して、之に靈妙の意を寓し、物類絕頂の者として尊重するのは、強ち東洋計りでも無く、西洋にも隨分ソンナ類があるようです、龍や鳳凰なども、最初矢張りソンナ理屈から描がき出されて、其れが今猶ほ世に傳はり恰かも現物が有るかのやうに世人に稱せられて居るのです。

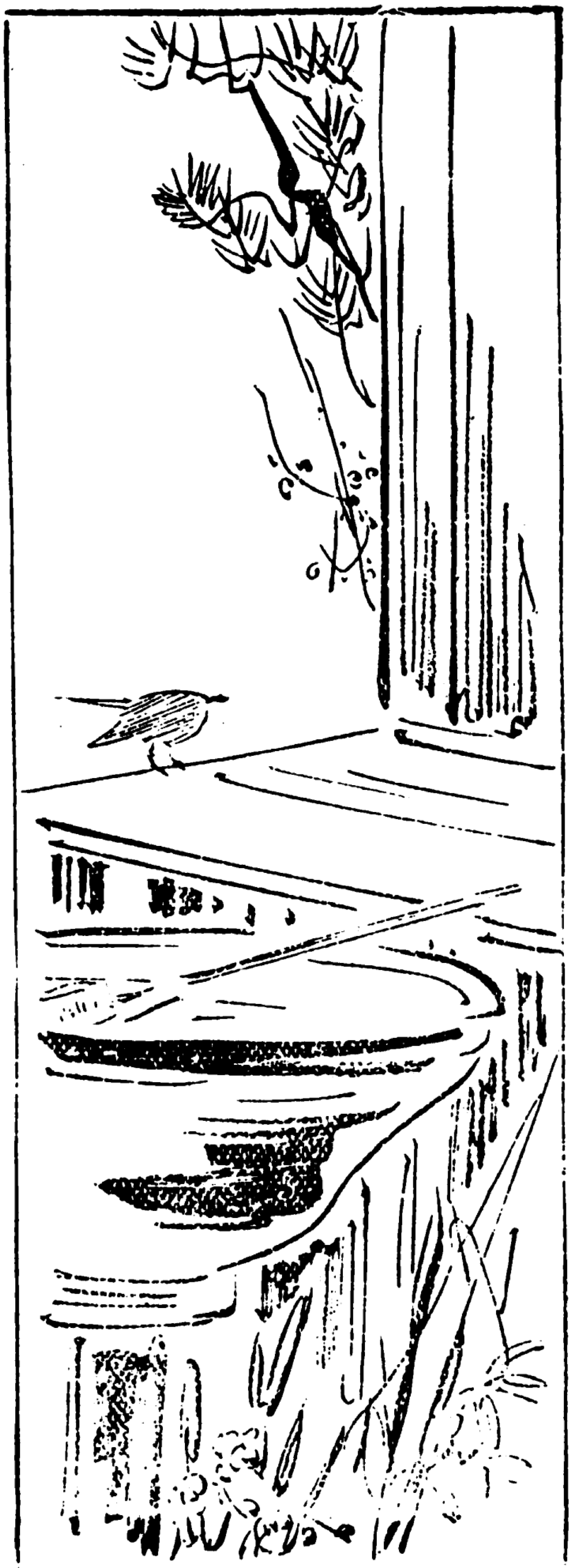
元來龍と云ふ神變不可思議の怪物が、東洋人に如何に尊重せられて居るかは、古來龍と云ふ文字が、何時も如何なる處に使用せられて居るかを見れば分ります、龍顏龍鬚袞龍、是等は皆な畏こくも、一天萬乘の天子の事を記し奉つるに用ふる言葉で、其逆鱗など云ふ事も、天子に怒らせ玉ふ事を云ふのであるが、是は龍の喉の下に徑寸の鱗がありて、物が之に觸るれば、龍が直ぐに怒り出す、其れに基いて起つた言葉だそうで、此一事でも龍の字の如何に尊とい事を著はして居るのが知れます。

其れ程尊とい處の龍は、最初如何にして世に描がき出されたのであるか、其想像の起原を尋ねて見ると凡べてあらゆる動物の特長のみを搔き集めて、始めて玆に龍と云ふ者が描かれたに相違ない事が分かるナゼならば、龍は寄せ集めもので、角の形は鹿に取り、頭の形は駝に取り、眼は鬼（鬼も元來架空的のものなれど）頸は蛇、腹は蜃、鱗は魚、爪は鷹、掌は虎、耳は牛と、斯く種々の動物の長所々々を寄せ集めて出來て居るのです、又龍の背には八十一鱗あつて、九九の陽數を具へ、其聲は銅盤を戛るが如しとあるから、聲丈けは餘り感心しないやうです頷下に名珠あり、所謂龍の珠と云ふが是れで、頭上には又尺水と云ふ者がある、是の尺水の無い者は天に昇る事が出來ないそうで、是等が所謂る凡俗の輩でしよう。

龍と蛇は元と兄弟分とも云ふ可き者で其形からして既に能く似て居ますが、元來龍と云ふ者の本體は、

斯の現在せる動物の蛇から考へ出し、夫れに前申したやうな、種々の道具をクッ附けて、難有味を添へた者に相違ありません、其區別は兩者とも皆な地上を紆行する者ですが、四足ある者を龍の屬としこれ無き者を蛇の屬としてあります、畢竟するに龍は蛇の向上した者で、其變化の際には春夏の天能く黒雲を起し、白雨を降らし、一躍して天に昇る者だそうですが、是れが所謂る龍昇りと云ふので、今日でも猶は斯んな荒誕無稽の説を信じて居る者があります、古るき歌に

龍のほる雲の俄かに鳴神の物恐しき空のけしきや



とあるのは、此の龍昇りの事を詠んだのです、龍には色々の種類が有つて、鱗のあるのを蛟龍、翼のあるのを應龍、角のあるのを虬龍又蚪龍角の無きのを螭龍、又蜻龍其外黃龍、靑龍、赤龍、白龍、黑龍などの區別がありますが、是等は大抵其色に依つて別けた者です。

又龍の屬に蜃と云ふのがある、形は蛇に似てより大きく、角があります、之が氣を吐けば直ちに樓臺城郭の形をなすと云ひ傳へられ、世に之を蜃氣樓又は海市などと申しますが、後世は是の蜃を貝の事と思ひ違へ、蜃氣樓の畵などには能く蛤のやうな貝が樓臺城郭

の形を吐き出して居る處を描いてあるのがあります、あれは全く是の蜃を貝と間違へたのです。

龍の性は極めて淫縦な者であつて、何者にも交らざる無く、牛と交れば麒麟を生み、豕に合へば象を生み、馬と交れば龍馬を生むなど〻随分可笑しな事を云ひ傳へた者であるが、又九つの子を生むと云ふ説がある、其第一子を蒲牢と云ふ之は鳴く事を好む者であるから、鐘の龍頭は之を象る、第二子を囚牛と云ふ、之は音を好むから、琴皷の飾りに之を附ける第三子を蚩吻と云ふ、飲む事を好むから、盃盞などの飲器に之を畫がく、第四子を嘲風と云ふ、險しきを好むから、堂塔樓閣の瓦之に象る、第五子を睚眦と云ふ、殺す事を好むから、太刀の飾りに之を附ける第六子を負屭と云ふ、文を好む故龍篆、印材の扭、文章星の下に之を畫がく、第七子を狴犴と云ふ之は訟を好むもの、第八子を狻猊と云ふ、狻猊は即ち獅子であつて、座する事を好む故、椅子彔曲は之を象る、第九子を覇下と云ふ重きを負ふ事を好む故、鼎の足など之に象るとあつて、色々の理窟を附會した者です、此外猶ほ龍には種々の子がありますが、餘まりくだ〱しいから略します。

既に龍を以つて鱗族の長とし、神靈不可思議の怪物とするからは、其活動を又極めて靈妙不測にせなければならぬ必要がある、ソコデ其の變化を説き立つる條が亦た極めて奇々妙々である、曰く合する時は體をなし、散する時は章をなす、雲氣に乘じ陰陽に養はれ、或は明らかに、或は幽かなり、大なる時は宇宙に徜徉し、小なる時は拳石の中にも隱る、春分には天に登り、秋分には淵に入り、夏を迎ふれば雲を凌いで鱗を奮ふ、是れ其の時を樂しむなり、冬となれば泥に淪み潜まり、蟠つて敢へて出ず、是れ其の害を避くるなりなど、古書に説いてある處を見れば、其德の神靈なる事は殆んど人智を以つて測る可からざる程です。

始めて龍と云ふ理想的の者が人間界に描き出されたのは、何時の頃であるか、能く分かりませんが、

印度にも、此說行はれたものと見え、佛說に龍王經あり、又法華經の提婆品に八歳の龍女成佛の說があります、或は印度から起つて支那に傳はつたものではありませんか、支那に此說あるは頗ぶる古るく、昔し蚩尤が黃帝を禦いだ時帝應龍をして干翼の野を攻めしめ、又女媧の時畜車に乘つて應龍を服すなど云ふ事が古史に記るされて居ります、其他龍を以つて無上の靈物とした事は周公が易を繋ぐ時、龍を聖人に比した事があるのを見ても分かります、是等の事からすれば、龍が今日淸國の國旗となつて居るのも偶然ではありません。

我國に龍の說あるは全く支那から輸入したので、古來の圖書彫刻模樣等には龍が畫がいた物頗ぶる多く又文字の上にも龍の字は前申した通り尊重す可き處に使用されて居ます、之は全く支那の感化を受けたのです、辰の年の始めに龍の話し先づザットこんなものです。

女子小觀

三宅青軒

○歐米人は云ふ『日本の婦人は猫の如し』と、斯は其容貌の可憐にして柔媚なるを評するの語、愛らしき圓顏は鴨脚返しの髮、成程よく肖て居るなり。

△素より其外貌を評したるまでのことゝて、之れを惡口と僻むにも當らねど、されどわれをして忌憚なく言はしめば、無念ながら其猫に似て居るを承認せざるを得ず。

△優しく美くしく物柔にして翫弄的なるところ、或ひは猫に類せずや。

△『女人は成佛すべからず』の佛の壓制、『女に七去三從あり』の儒の束縛、此二つの教が古くより我國の婦人を虐待して、無慘や猫に類する今の有樣とはなし了れり。

△偖て此壓制束縛より脫して、眞に『天使』の地位に進まんとするは目下の女子なり。讀者諸君の務もな

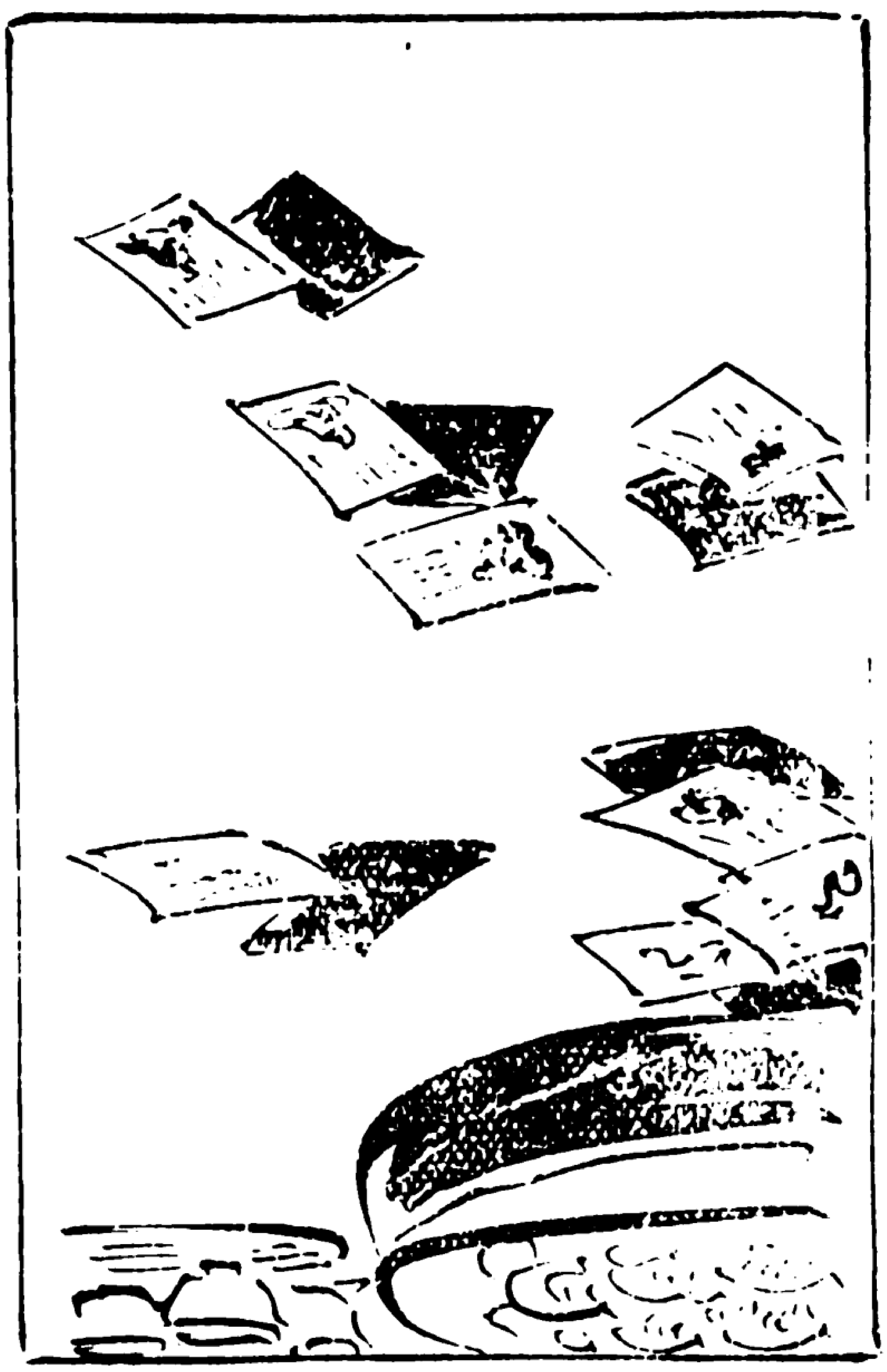
かなか豪いかな。

△久しき歡弄的遺傳の爲めに、弱く小さく形作られたる我國の婦人に向つて卒然として手荒き運動を强るは無理ながら、併し成るべく活潑なる體育を施し彼のお姫樣的お孃樣的のぞい、ろ〳〵したる風を無くしたきものなり。

△擊劍體術などに鍛へられたる武家の家庭より、夫婦共稼ぎの勞働に鍛へられたる平民の家庭より、貞女烈婦も出でし例を思へば、活潑なる精神はどうしても健全なる身體に宿るなり。貧血性美人のお姫樣では何の仕事も出來ざるなり。

○新聞記者に、商店の販賣人に、諸工業の技術に、近時追々と女子の職業の殖行くは、讀者諸君の爲に慶すべき事なり、諸君よ、『生涯の苦樂他人に賴る』の活地なき習慣より脫し、各々奮うて獨立自營の道に進み、斯くて婦人の地位を高くするならば、自ら男子の敬愛を得るに至るべし。

△婚して夫を助くるどころかは、時に夫の厄介となれるが如き今の有樣にては、婦人の地位の高まりやうは無し、今は新舊過渡の時代、讀者諸君の大いに奮勵せざるべからざるの時なり。



源俊賴朝臣

君がためみたらし川を
若みづにむすぶや
千代のはじめなるらん

米國だより

澁谷馬頭

雜信

◎米國婦人日本婦人　過る天長節に當地駐在の久水領事は、午後には米國人を招待し、夜分には同胞の人たちを招待して、祝賀會をお開きになりました米國人の來會者三十人の中に、婦人が七八分を占めましたと聞きましたが、夜分の會に、同胞の來會者が九十人ばかり御坐いました中に、婦人はタッタ三人ありました。

◎森田貞孃　の事を先便に英字新聞に據て通信致しましたが、紐育の邦字新聞の記事によりますれば、まだシカゴ大學に入學はして居られません、入學試驗が不首尾で御坐いましたので、哀にも自殺を企てましたのを、人に止められたと申しますのです。

◎女教師　と云ふ語を米國では、特別には遣ひません、たゞ教師と云つただけで、もはや女教師と云ふ事になります、なぜと申しますれば、學校では男教師が御坐いません、御坐いましても稀でございますからです、勿論これは小學校に於ての事です。

◎教師の食物　と云つて、別の種類が有るのでは御座いません、但日本の女教師などは、教場へ參觀人でも入りますると、大きにあはを食ひますが、さすが米國の女教師は、平氣な者で、菓子だの菓物だの食ひながら、講義を續けて居ります、生徒はと申しますと、是もポッケットに色々携帶して居ますけれども、教師の講義を筆記しますのが急がしくて、食ふ暇が御座いませんのです、生徒の持てる教科書は詳しい事は書いて有りません、ホンの筋書だけしか書いてありませんから、教師の口述を一々筆記して置かなければなりませんのです。(黑川文學博士は教場でいつも、砂糖湯を召しあがられましたネ)

言語學上文字の增減に就いて

◎黑川博士の講義　であつたかと思ひます、かの枕草紙にある下司のもの云ひは必ず文字あまりする

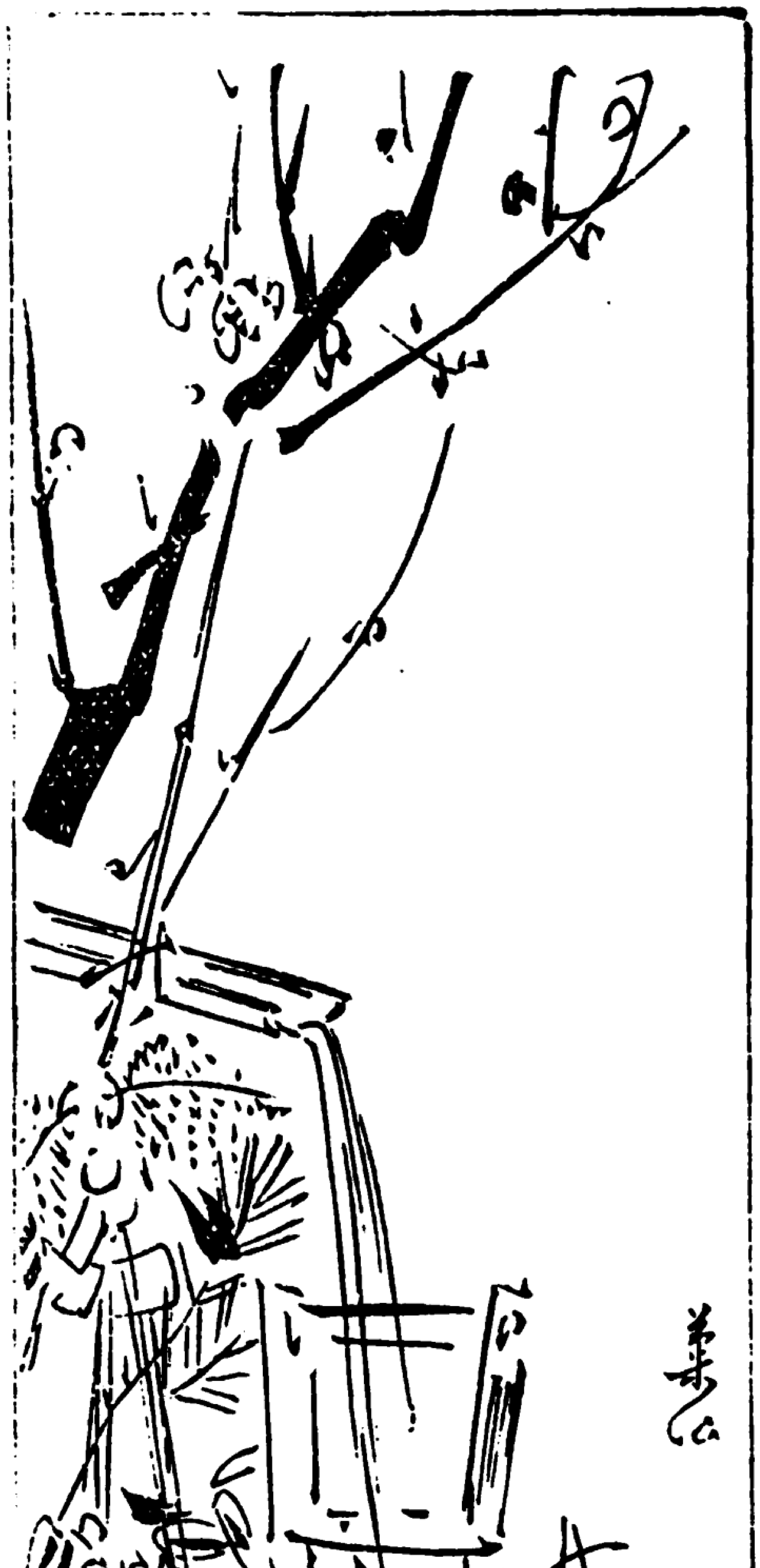
と云ふ事を敷衍して『今でも東京の下司の物云ひはたゞ落ちたと云ふべき所をおつこちたなど云ふ』かやうに仰しやつたかと思ひます、併し文字を添へたり、略したりする事は、言語學上から申しますれば珍らしい事でもなく、また咎めるべき事でもないので御座います、管絃をくわげんと略いて響せますと同時に、詩歌をしいかと添へるもみやびやかなるわざで御座います。

◎倫敦市民の英語　はだん〵變化して行きます或は字を略いたり、或は字を添へたり、甚だ新來者には困難を感じます、純粹の英語は、亞米利加に殘つて居るので御座います、とは紐育週報紙上に見えました倫敦通信で御座います、日本に於ても或人は『純粹の國語は、陸奥の山の奥に殘つて居る』と申しましたやうです、なる程奥州人のベイと云ふ詞は源氏物語にもわんべいかなと見えて居ます、併しながら言語の變化して行くのは、自然の勢で御座います、何も不純粹になり行くのを憂ふるには當ません。

◎英語欄　が此程女鑑紙上に新設されまして結構で御座います、さて英人に對しても米人に對しても朝の挨拶をするとて、グードモーニングと聲ほがらかに申しましたら笑はれますよ、英米人共にグードのドは殆んど微かで聞えない如くに發音します、そしてモーニングのグは全く發音しませぬ　から一寸『グー、モーニン』と聞えますのです、又夜の挨拶はグード、ナイトとは發音しませんでグー、ナイと申しますのです、又 All right はオール、ライトでは御座いません、オー、ライで御座います、又 What is the matter with You? をオスマラ、ユーと發音しますのは、米國に限つた俗語なさうで御座いますが、隨分思切つた大省畧で御座います。

◎シャトルとシャル　私の只今居ます處は、Seattle で御座いまして、日本人は皆シャトルと申しますけれども、此所の市民はシャトルと云ひましては通じません、シャトルとは何處の事ですかと問ひ返されます、此處ではトを略いて、唯シャルと云ふや

うに申します、オスマラユーの如きは特別として、モーニングのグ、ナイトのト、オーライトのトの如くロでは省略して云はぬ者でも、字書ではチャンと發音すべく載せてありますが、後來は漸々變化して行きます間に、是等の字特に語尾にあるは全く發音しない字であると記して置くやうになりますで御座いませう、佛語のやうにです、此點から申しますと、佛語は英語より一期進歩して居ますやうです、即ち發音しなくなつた語尾の子音や複數のエスと云ふ字などは、發音しない字だと、ハツキリ断つてあります、英語もだん／＼左樣にきまりが付くやうになりますで御座いませう、以上は言語の變遷上文字の増減されるは各國普通の事であると云ふ事を申しまして、其中にも英語に於て文字の省略される場合の例を一寸詳く申上ましたので御座います尚ほ其他の變遷に付いて皆さんの御參考になるものを少々申上ます。



文法の變遷に就て

◎米國の英語　は紐育週報に見えました通信の如く、純粹な者が保存されて居るのでは御座いません、却つて各國人が多數に入り込んで來ます者ですから、其等の人々によりて亂雜なる言語になり行き

ますので御座います、米國に來ますと露國人は露國的英語を遣ひます、獨佛人は獨佛的英語を遣ひます支那人日本人は支那的日本的の英語を遣ひます、日本人が最もよく英語の文法を正しく話すことに勉めて居ると聞ます、支那人などはメチャメチャな英語を話します、併し米人には支那人英語が最もよく通じます、日本人の英語が最も米人に分りにくいと云ふ事です、或人の說にそれは支那語は英語と共にアクセントが澤山ありますから、此點に於て支那人は英語の調子を眞似し易いのであると申しました、成程支那人がマカ、ハイヲーなど云ふ時のアクセントは、巧妙な者で、日本人には學び易くありません、支那人英語に破格の文法ですが、Me (First person. objective case)と云ふ語をやたらに遣ひまして、ミーサベ、ミーオーライなど、主格にして申します、これは支那人ばかりでわらうと始めは思ひましたが、此夏當地で、

◎濠洲人の身投げ　して死んだ者がありましたまだ死切らないうちに、人に救ひ上げられましたが、漸く Me hungry の二語を發して、息絕えましたので、この男は食ひかねて入水したのだと云ふ事が分りました事が御坐います、濠洲人ばかりでは御坐いませんです、本家本元の米國人がアイ(私は)の代りにミー(私に)を云ふ事が、稀には有りますのです、英語の文法は『元來獨逸語や、佛語の文法に比べて大へんに簡單なやうに見えますが、それすら學びおほせずに、テニハに合はない事をだん〳〵と云ふやうになりゆきまするのは、これは米國民は實用を主とする勞働者風の者が多くて其上日々事務室や、店先に接する客も、各國のブロークン英語を話す人のみであるからで御坐いませうと思はれます、此う云ふ風で、漸々と米國の英語は變化して行ます。

◎田舍農夫の英語　は實に僅々の數を以て用をたして居ます、或人の說に田舍農夫は三四百語しか知らない者が多くあると申しました、成程私共が書物で覺えました學術上の語などは、田舍者とは云

はず、町人でも知らない者が多く御坐います、私共のやうな者までが、米國に來ましては學者で御坐います、併し米國では學者は勞働者の下に位する者で御坐いますから、其おつもりで………米國では學者でも字書は常に携帶して居ます、ウエブスターの字書を見て、字の數の多いのに驚きますが、それを皆覺えて居る者など有りません、あの字書の序文即ちイントロダクションだけ知つて居る者は、◦餘程の大學者で御坐いますと申します。

◎ウエブスター字書にない語　をどし〳〵米人は遣ひます、之は學者ではない、無學者が遣ふので御座います、例を擧げて申しますと、Ain't と云ふ語があります、字書を探しても見當りません、(或字書には一寸載せてありますが）其の意味は有らぬ、居らぬ、持たぬなどの意味で御座いまして、「I ain't money. は、私は錢を持て居ませんと云ふ事です、と申しました丈けでは此語の妙用をまだ盡しません、更に此語は I ain't got no money. など遣ひまして、普通の語法によりますと、ノー、マネーを打消して居ますから、マネーを持つて居る事になりますけれども、當地の用法ではそんな窮窟な法則などには拘泥しませんで、矢張錢は少しも持ちませんと云ふ意味に遣ひますので御座いまして、誠に重寶で御座います。

◎文法によりますと、下の場合に於きまして、動詞が名詞の前になければ、なりませぬ Do you know? Have you Some………? , Are you going………? . 然るにこれらを常に You know, you have……… You are going………と申しまして、説明にも疑問にも通用しますので御座います、何と重寶では御座いませぬか、たゞしこれは、

◎日本語にも　稀に聞きます、懇意な書生などが兩人途中で出合はしまして、其一人が『君學校へ行く』と申しますは、即ち學校へ行くかと問ふので御座います、此場合には、米國語でも日本語でも其語尾をピンと撥ねますのは同一で御座います、そして

相手の人の顔をジロリと見まはしますのも、同一で御座います。

◎日本學生　が英文法によく通じて居ると云つて、米國教師は常に驚いて居ます、「どうして其樣な事まで知つて居るか」とは日本學生の屢々受ける問ひで御座います、齋藤さん著述の英文法(四冊)などは、大學校の文法科教科書として餘りある者なさうです當地では初等學校などでは、文法と數學とが最も重んじられて居ます、これは純正なる英語を保存して置きたいと云ふ、當局者の考へで御座いませう併し

◎言語の變遷の勢力　はとても人力車で走つても滊車の速力には及びかねると同じで仕方ない者で御座います、文法は其當時當時の法則を定めた方が宜しいと思ひます、文體も言文一致體を採用した方が宜しいと思ひます、(日本に取ての事です) 私が言文一致會員で御座いましたから、ツイ本音を出したのだと思召すな。

R と L と

◎日本のルの音　は、英米國のRの音に當つて居て、佛國のLの音に當つて居ます、併しローマ字書きには、一般にRを書く事にきめて御座います、さて左樣致しますると、

◎米國のRの音　は即ち英語のRの音は、佛語のLの音に同じ發音であります事がわかります、そして其ついでに英語のLの音が佛語のRの音に似て居まする事も知られまする次第でございます、この英語のLと佛語のRとは、日本人には發音しやすくありません。

◎リーダーとリードル　日本に於て英米教師に就かない學生などは、動もすれば讀本をばリーダーと讀むが正則でありまして、リードルと讀むはいけない事のやうに考へて居ります、是はむしろ反對な御話で御座います、リーダーでもなく、リードルでもないが、どうかと申しますれば、リードルと讀方が英米人によくわかりますので御座います、Father, Mother, Sister, Teacher 等すべて同格でファーザー、マ

ーザー、シスター、テイチャーと云ふよりも、ファヅァル、マーヅァル、スイストゥル、テイチュールと云ふが分りよく御座います、Fourはフォアと云ふよりも、フルと云ふが近いやうです、近頃東京で麥酒のことを呼んで、

◎ビーヤ　と云ふ事がはやりまして、ビールと云ふのは田舍もの丶様に考へられますやうです、是もビイルと云つた方が却つて當地の人には分りよいのです、又醫師をドクターと申しますやうですが、これもドクトルの方が分りよいです、佛語にも麥酒はビイルで、醫師はドクトゥルで御座います、本家本元の獨逸でもよくは知りませぬが、左様申しますやうです、日本人は何國の語を學んでビーヤを飲み、ドクターに見てもらひますのかと思ふとをかしくなつてまゐりますので御座います、諸孃子達英語を研究するならば宜しく御本家の人々に親しく交はつて、其の發音やアクセントに注意して、其の上達を期し決して日本的英語を遣はない様に願ひます。

婦人と客舍

土肥月巴

△曾て婦人と旅行と題して、細々述ぶる所ありしが尚は其の單に旅行と云ふ外、客舍に於ける心得方に就て、少しく述べ置きたい事がある。

△第一婦人の旅行に就ても、附添人の有る時と、亦之に反して無い時とある、左れば自ら場合に依つて、注意すべき事柄も多少の差違がある。

△先づ附添の無き場合に於て、婦人の客舍に投ずるには、

（一）入口に到れば直ちに舍主か、若しくは手代の者に逢ふて、宿泊の日數を通知するが必要だ。

（二）夫れから停留する間、爽快に日を送ることを望まば、最も日光の透り善くして、空氣の流通宜しき室を擇み、其所を占領するに限る。

（三）總て僕婢に用向を命ずるには、成るべく温和に、柔穩なる音聲、成るべく明々白々の言葉を

用ひ、彼等をして誤解に陷るの煩なく、且つ樂んで遵奉せしむべしだ。

（四）朝晝晩の三食が、チヤンと整ひ出るまでは如何にヒモジク感ずるとも、成るべく新聞雜誌など閱して、暫時心を他に紛らし、無暗に手を鳴らし之を催促し、若しくは自ら賄所に接近し、待ち遠らしく覗ひ込むるど、苟も輕卒の擧動あつては宜しからぬ。

（五）滯留中、面洗場、入浴場、或は此節の旅館となると、大分西洋流の輸入で、倶樂部的集會所の設けもあり、殊に洋食を求むる人の爲めに、食堂をしつらひ置く所もあるが、總て斯樣の場所に出入するには、華美の衣裝を飾らずに、寧ろ質素の打扮にて、餘り他人の注意を惹かぬ樣、力めて心掛るが可し。

（六）假令無聊を覺ふるとて、濫りに單身で座舖廊下を徘徊し、或は格子欄干に凭れて、隅々を見渡す等の事は忌むべしだ。

（七）隣室や向座敷に於て、他の客人の逗留しあるに拘らず、聲を發して讀物をやるとか、或は其の前を通過するとも、低聲ながらも唱歌や短形詩など、流しつゝ行くことは禁物の最上である。

（八）若し用務あつて外に出るときは、押入及び行李に締を打ち、就中高價の品物は、一々舍主の保管を賴み、決して取り散し其の儘で、居室を空にしてはならぬ。

（九）滯在久しきに瀰ると共に、未だ曾て面識なかりし男女の、漸く接近し來るもあらんなれど、男子は成るべく之を避けて、程よく交るは無難の秘訣だ。

（十）若し食堂に入りたるときは、衆に先んじ喫食する爲め、濫りに給仕を呼び立つるか、若しくは食卓を裝飾せんとて、累積しある蜜柑林檎など遠慮なく之を貪り食ふは、抑々沙汰の限りである隣席の客人に瓶子の傳遞を受けた場合は、慇懃に其の勞を謝せねばならず。且つ洋食と云ふからに

は、衆人の迷惑を慮りて、必ず時間を遅延してはならず。又た其の自己の爲め供られたものでも殘つたからと云ふて無遠慮に、菓實や菓子を其の室に持ち歸るなどは、眞に醜劣の行爲であつて、必ず戒めざるべからずだ。

（十一）集會所的の室に入つて、新聞紙や雜誌を閲覽するも可いが、若し他にも望手の居合す折には、成るべく速に讀み了りて、直に之を其の人に傳遞し、感情を害せぬことを圖るべしだ。

○○○

（註に曰く）併し實際の上から云ふと、苟も婦人たらん者は、斯樣の場合には成るべく謹愼し、食事も、誤樂も、將た仕事も、一切自分の室に於て辨じ、集會所の、會食場のと、浮き足つくつて飛び出さぬが、結局上々分別である、其の理由は總て斯樣の場所柄は、必ずや種々の雜話を開かされ、且つは數多の人の爲めに、言葉を交すの必要も起り、斯くて漸く相慣るゝに及べば、妙齡婦人の一美徳として、最も愛慕すべき畏懼の念、質素の性、謙愼の姿を損傷し、宛も秦鏡の光を失ひ、趙壁の垢を含むがごとく、甚だ惜むべきの結果を招ぐに至らずんば已まじ、西人曾て之を言はずや、女子の貞節なる者は、僅に人の口氣を受くるも、則ち幾分の汚れを免れずと、之を思はざるべけん哉。

（十二）万事幇助を受けし給仕には、客舍を立ち退く際に於て、相當の報酬を心付けねばならぬ。

（十三）兎角客舍の奴婢風情には、横着にして職務に忠實なるもの少く、從つて癇癪に障ること多けれど、狂げて心を平にし、直接聲を荒げ叱責するなく、舍主又は手代を室に招ぎて、靜に事實を告ぐるを可しとす、然れど魚心あれば水心ありで最初より充分同情を以て、懇切に物事を吩咐するときは、縱令頑迷の奴婢と雖も、自ら從順の誠を以て、之に酬ゐざる譯には往くまい。

（十四）愈々出發せんとするときは、豫め行李を整頓し、切符の買入を手代に依囑し、充分時間の餘裕を存して、反覆手落の有無を考へ從容として停車場に臨むべしである。

小說

初紅葉（上）

新星

茲年十一月五日、麹町區番町の須藤公爵家に於て、秋季演藝會といふ名目の下に、男女幾百人の會合が開かれた、勿體なかれ會費僅かに三拾圓。秋の夜は長い、未だ日足も長いのに、早や音樂吹奏につれ、舞踏會、次で常磐御前の演劇が始つたのである。

馬鹿囃がドッと窓から溢れて、門外の馬及馬丁を驚かした時、只見る、秋葉の裏傳ひ、當家の御主人が専有に係はる自然の庭園を、容赦もなう輕く踏むで、四阿差して遁げ行く美人の姿、二個三個。

『何が可笑くつて？、妾嫌ッ……』、眼尻の下つた馬面の白粉嬢が、御自分で笑ひながら斯ういへば、割に頭の小さいのへ、晃帽戴いた洋裝嬢は、グッと腹を押えて、

『だつて、？、雲井伯の禿頭がピカ〳〵』。

今一人の花月卷の令嬢は笑泣。

誰か茲に秋わりといふ？、花も恥らふ彌生の春は、風が吹いても小狗が啼いても、櫺木が轉んでも、キャッ〳〵と笑ひ綻ぶる時であるから、よし秋如何に深く樹木の梢の浦淋びて、立添ふ風に冬枯の聲わるも、更に頓着お介ひなしである。然ばあの十六七歳の淑女連は今常磐御前の假髪が脱げて、眞赤な禿茶瓶がピカリ、雲間をかける電光と閃くのを見て、最う堪らない、笑泣さすべく遁げ出したのであつた。

稀らしや生殘りの寒蜩が、榎の枝で切りと浮世の風を悲しむで居た折しも、樂天の笑聲、物の響にハタと音を留めたが、笑の止むだ瞬間、四邊が森とした

ので、また啼出さんとす。然るに花月孃が話を始めた、『宛然、二輪加ねエ』。
『本當に、高麗屋を見た眼には、那んな演劇三文の價値が無いワ、ねエ豆子樣』。
『左樣よ、詩的でもない脚本を仕組むで、那んな藝をするのだから堪らないワ、何故岩倉男の小説でも取つて、仕組まないのでせう、そして川上一座に演らしたら、面白いワねエ』
『否高麗屋に、演らした方が、餘つ程好くつてよ、何故高麗屋に振を着けて貰はないのでせう？、今の華族は高慢ちきな』。
『春子樣は高麗屋狂氣者、ホツホツホ』と豆子孃が冷かし笑。花月卷の孃も頰笑むだけれど、洋裝は平



氣な者。
『ウイ、マドモアゼル、ジエーム、ボークードウ、セツトンムラ、セ、プレー』と、佛語で淸らかに、而かも濟ました調子。
豆子は眼を圓くして、
『オヤ〳〵』
慾も懸もない詩人の腹を抱えて、花月卷をふるはした令孃、笑を止めて、ツと襟を正し、
『否〳〵、令孃そんな事は學校の體面を汚すワ、勿論藝術をお愛しなさるお心はよくつても、役者なんぞの事を、口にお出しなすつては………華族の體面に關するからおよしなさいよ』。
然り、花月卷の令孃は國木侯爵の愛孃、富子の君といつて、學識麗容天下に喧しきもの、わけて詩想に

富み給ふ、かるが故に如件、御意見に及ばるゝのである。

時に頓狂聲あり、

『那れ……御覧!!』。

驚きの眼を上げて、春子嬢が指す方を打見やれば、其處に人あり。築山の彼方、紺碧の池に渡せる橋の上、温ひ小春日とはいふもの丶、淋びれ行く秋の景色を、餘念も無う眺めつゝ、歩を移す好男子、學習院の制服つけた優美な風采、年は二十か、二十一。

『誰?』と、富子は覺えず問ふた。

豆子嬢の説明『あの方?、あれは、そをら何時も、下田先生がお話しなさる岩倉男爵、岩倉様ですよ、まア一寸、きれいな事ねエ、あの小説家で哲學家、そして大詩人で……』

『ゑツ、あの方が……』

『ハア』。

『本當に……けれども、まだ、まだ、高麗屋の方が……』と、ツイロ辷らすは春子の前。

『今の世で、華族にも似合はぬ學者、年にも似合はぬ哲學家、そして小説家……岩倉様とはあの方か知ら……まア綺麗な、詩人らしい、末頼母敷お方どうかして知己になれば好いのに……まア意外、あんな方でわらうとは……』と心の中、富子嬢茫乎として、恰も月の山の端の雲に入る如く、青葉黄葉の林の陰に、かくれ行く男爵が後姿を、見送るのであつた。

待つてゐましたと、寒蜩の泣く聲。

『あらッ、蜩……』と、衝立つて、空を仰いだ春子の君は、『蜩が、蜩が居てよ』

『何?……』と二人は振向く。

『妾、取つてやるワ』と駈出した。

『まア、春子様何うして?』

『取るワ、登つて取つてよ』

『登れはしないワ』と、豆子も後を逐ふ。

『失禮だワ、此位の樹登平氣よ、自轉車よりか、餘程上手なの、これ御覧』。榎の枝へヒラリと上つて、

知らぬ顔。

豆子が呆乎して居るので、其危險の出來事に氣注いた富子は、四阿を走出た、

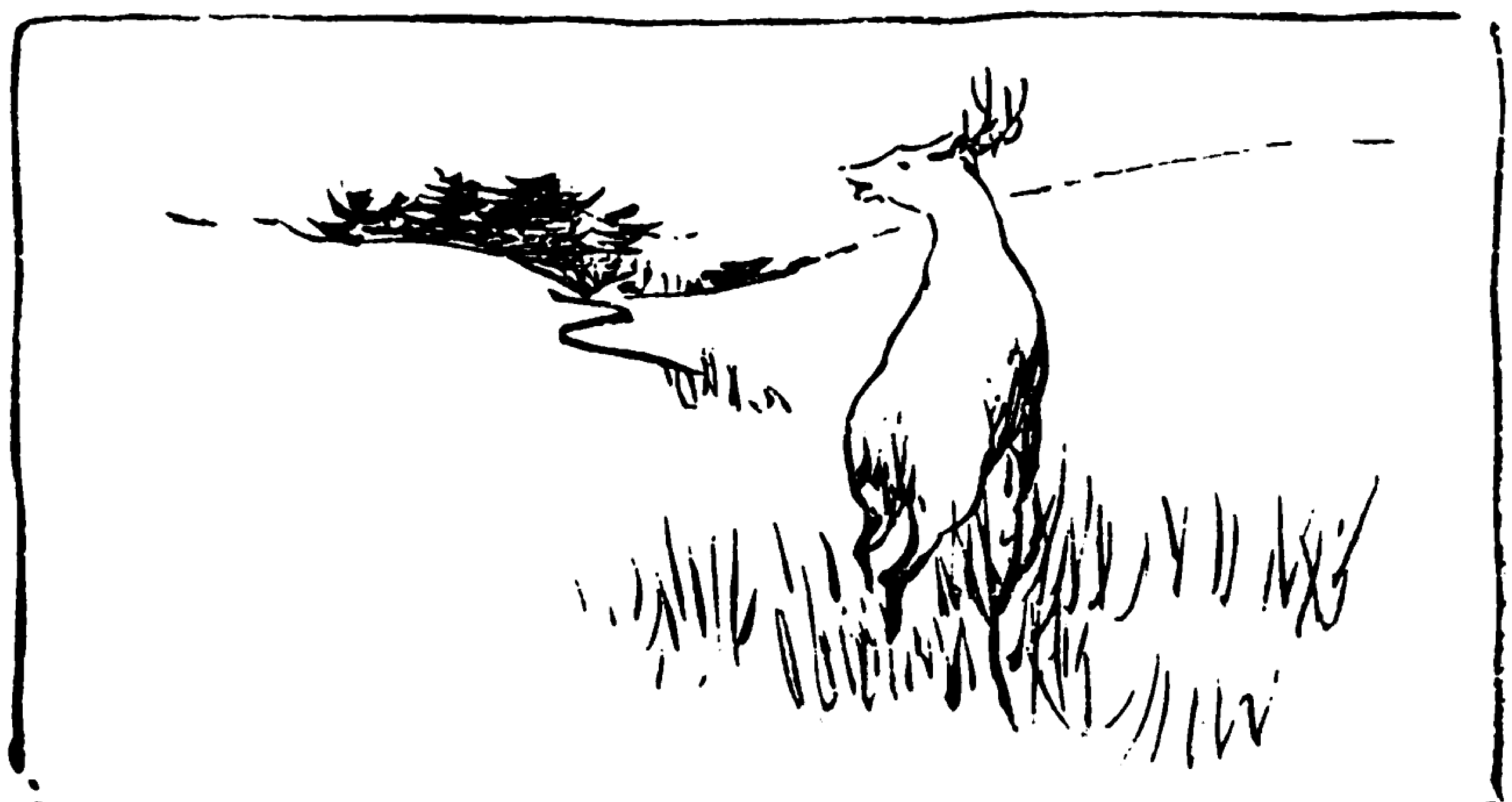
『春子樣、お負傷を……よッ、およしなさいといふに……』と、止めるけれど、『これ、御覧!!』と、猿は一足立。

是に於てか豆子孃。

『およしなさいよ!、女がそんな事を……』と黄色い泣聲、バタ〳〵と無意識に驅寄る。

『上手でせう、二十世紀の婦人…………』と大威張。成程馬丁金吉が、戰爭國の婦人の標本は、お姫樣だアね、と自慢する程ある。

『馬鹿なまねを……下りて頂戴、よー下りて頂戴てば……下りなけりやア、下から突衝いてよッ』、下なる家鴨が喚めけば、上なる猿は嫣然笑むで、



『突衝くものがなくつてよ、下から突衝いて御覧よ、上から小便して進げるワ』。

『仕方がないねェ』と嘆息の聲、家鴨が婆を仰いで立悚むだ時、

『無言つてゐて頂戴よー、逃げるからよー』と、制して置いて、猿は第二の枝へ相登り候。

彼の孃がねらひ澄まして、手を延べる所、憐れなる、甲冑に五體固めし若武者が、背後に敵ありとは露知らず、いぢらしい聲立てゝゐる、恐らくは運命の神に見放されたのであろふ?。

只是れ一刹那である、敵の手が今や落下し來らむとする時、速し、五分の虫亦賢なる哉、

アバヨと許り、チーと啼いて、立ちかけ、お尻を絞つて、お土産にパッと尿水を。

思はぬ敵の散弾に、眼を射られ、鼻をつぶされ、吃驚仰天、手を放すと、案の定春子の君あはれや、脛も露に眞逆樣。

『アッ』と家鴨の悲鳴。

『エッ』といつた限、富子は石像と化つたのである。

頓て駈寄つて見れば、二孃は無慘倒れ伏してゐる。上なる猿こそ幸なれ、下に敷かれた家鴨の孃こそ不憫の至。

『貴孃、何うかなさいましたの、まア何うしたら宜かろう？』とオロ／＼聲。眞青になつて富子が騷ぎ出した折から、主家の方から咄の聲。

『ア、ッ、ッ、アッ、ッ』と、二孃はお尻を撫せて泣出したので。

富子孃が途方に暮れて居ると、

『如何なすつたのです？』と呼ぶ人の聲。誰やら飛んで來て、二孃を惹起した。

『何所か痛むですか』と問はれて、洋裝孃は苦い顏上げて、ハッと驚く風情。

『否、もう大丈夫です、どうも相濟みません』。帽がぬげてゐる。

『左樣ですか、君はどうです？、お負傷は無いですか』、色々介抱して貰つて、白粉孃は白粉剝がした顏を擡げ、『ハア、ありがたう……』と口の裡。

手を添へて心配した富子孃が、ホッと一息つくと同時に、『それで安心だ』といつて、延上つた人の顏を、フイと見ると岩倉男爵。

『あら、貴君……は有難う存じます』

初めて知つた耻かしさ、心の糸の亂れ亂れて、富士こめてサッと散らした初紅葉。

目を逸せば、庭の楓なす初紅葉、秋口から濃くなり、眞紅の雲の色、美の極を呈するであろふよ、雪さへ降らねば何時までも。

（つゞく）

文林



宮中月並兼題御歌會詠進寫

観楓

家つとのもみぢもいまだをらぬまに
あきの日かげはかたぶきにけり
高崎正風

ものゝふのわかきこゝろを紅ぢはの
ちりてのゝちのいろにみせけり
渡邊千秋

たに川のみづのみどりもかはりけり
きしのもみぢのいろをうつして
鍋島直大

本居豊穎
そめてみるこゝろの色はやまふかき
もみぢもしらぬちしほならまし
黒川眞頼

みれど／＼あかぬもみぢばいかにせん
あきの日かげははやくれんとす
津輕承昭

たに川のきしかげみればいはあらふ
なみにぬるてのもみぢしにけり
松浦詮

さをしかの聲するやまのもみぢはの
あきのにしきをきてみつるかな
渡邊清

うちむれてきたるをとめも秋やまの
もみぢのかげをはなれざりけり
梅溪通治

たくひなくそめし高尾のもみぢはゝ
とつくにひともあふぎみるかな
竹屋光昭

大(おほ)きみのめぐみのつゆのふかければ
そめぬかたなき木々(きゞ)のもみぢは
前田利鬯

もみぢはも外(ほか)にたぐひはあらしやま
はなのみなにかひとのいふらん
藤井行徳

わが庭(には)もいろつきぬれどさしなみの
となりのもみぢめでゝみるかな
唐橋在正

男鹿(をしか)なくみやまのおくにわけいれば
もみぢのいろのうつくしきかな
水野忠敬

ふりすぎしよへのしぐれにわが宿(やど)の
のきばのかへでもみぢしにけり
清岡長延

たかを山(やま)まつをのこしてそめわたす
もみぢは今日(けふ)やさかりなるらん
柳原愛子

思(おも)ふとちみにくしものをもみぢばの
かげははやくもひとのしめたる
常磐井堯熙

うすくこくそめし楓のもみぢはゝ
はるのはなよりうるはしきかな
藤枝雅之

のぼりきてみれば青葉(あをば)ぞまじりける
ゆふひにゝほふみねのもみぢも
小原適

わけいれはわけいるまゝに箕面(みのお)やま
もみぢのいろのふかくも有(ある)かな
千種任子

わきゝりのはれたる山(やま)をみるたびに
いろまさりゆくみねのもみぢば
小倉文子

こゝのはの露(つゆ)くみかはしもみぢみる
ひとのおもわもいろに出(で)にけり
町尻量弘

いはまゆく谷のながれにたのみえて
たかねのこずゑいろつきにけり
園 祥子

小鳥なくあきのやまべにわけいれば
ひとむらもみぢいまさかりなり
宮地巖夫

高尾やまみねもふもともくれなゐの
もみぢばかりになりにけるかな
阪 正臣

ゆるされてもみぢもけふはみつる哉
きくのかふかき御そのふのおく
小池道子

夕日かげかげろふまでとたどるまに
もみぢのかげはさむくなりけり
藪 兼子

あかねさすゆふ日まばゆくみゆる哉
もみぢは今日やさかりなるらん
北島糸子

たきの川しぐれはゝれてゆふ日かげ
ぬれしもみぢをてらしぬるかな
津守好子

村さめのふるたびごとにいろふかく
なりまさりけりにはのもみちは
荻原巖雄

ひえ鳥のなくこゑさむき小はやしの
つゆにぬるてのもみぢしにけり
平田三枝

山のはにゆふひのかげはいりたれど
たちさりかねてもみぢをぞみる
吉田 愛

あききりの晴れたる松のこのまより
ふかきもみぢのいろをみるかな
植松有經

さいはひのやすみ日なれば紅葉みに
いでぬひとなし野べにやまべに
小出 粲

雨はれし野がはのきしのかへてはら
ゆふひのにしのこゝちこそすれ
中村秋香

もみぢがりかり残してもかへるての
かげにみちかき日わしをぞしる
小杉榲邨

松かせはふきさますなりとかのをや
みる〳〵ゑへるもみぢはのいろ
大口鯛二

ことさらにかよふくるまもひらけゝり
はつしほはらのもみぢみてこん
熊猪夏樹

小倉やまもみぢみにきてくれやすき
ひかげをしまぬあきなかりけり
千葉胤明

よの人にほこらんまではなけれども
そめつくしけりにはのかへるで
滋野井實麗

大井がはみなかみとほくわけいりて
となせのおくのもみぢをぞみる
遠山英一

嶺こえて見おろす谷のそこふかく
そめこそつくせ木々のもみぢば
加藤義明

さかつきを手にせぬ人のおもわまで
わかくみえけりもみぢばのかげ
鈴木小舟

ゆたかなる年のたりほをつみあげて
もみぢみすなりさとをはのには
則武正副

かきねには菊もにほへどもみぢばに
こゝろをそめてあそぶけふかな
尾崎宍夫

おしねかる田づらの末のきりの中に
やましたもみぢほのみえにけり
須川信行

おもしろき水(みづ)のながれをまへにして
やまのもみぢはみるべかりけり

陽春布徳　岩倉贈太政大臣

野邊(のべ)の草(くさ)やまの木(こ)のめもはるの日(ひ)の
めぐみにもれしものなかりけり

新年宴　三輪貞信

萬世(よろづよ)のむつびはじめといはふなり
おろしのみきをくみかはしつゝ

新年望山

くらま山(やま)はつとらまうでさむからん
こぞよりふかくゆきつもるみゆ

新年雪　税所敦子

枯木(かれき)にもはなさく御世(みよ)をとしのたつ
あしたのにはのゆきにみるかな

新年朝　本居豊穎

玉(たま)はゞきとりもとらずもとしのたつ
けさのこゝろはゐるちりもなし

新年晴

若(わか)みづにうつろふほしのかげはれし
ことしのそらもくまなかるらん

新年雪

かどの松今朝(けさ)ゆきしろし世(よ)のなかの
ちりのほかにやとしもたつらん

新年積雪

足御世(たりみよ)のとしのはじめとしろかねを
ゆきもつむらんおほくらのやま

新年望山

夢(ゆめ)ならでみるもめでたしとよとしの
としのはじめの富士(ふじ)のしらゆき

新年川

たつとしのやすの川(かは)なみやすらけき
よにあふみこそうれしかりけれ

新年鶴

足御世(たりみよ)のとしのはつひをいたゞきに
まつさゝけてやたつはまふらん

新年聞鶯

うぐひすは年（とし）のはつねをしらぶめり
ことやひかましまつやひかまし

新年庭

年（とし）たゝんあすはといひてしめはへし
にはうちきよしぬさのあさかせ

新年神祇

神（かみ）いはふとしのはじめのたぶりとは
しらぬしづさへしめはひくらん

元日によみ侍りける　冬道

つるのまふ千代田（ちよだ）の御城（みしろ）の松（まつ）の上（うへ）に
富士（ふじ）のたかねをあふくけふかな

心をのぶる歌　下田春興

なせばなりなさねばならず
ならずとてなさでやまめや
われははやうなゐにあらず
いつか世にたゝむとすらむ

ひさかたのつきのかつらも
あれたつのあぎとのたまも
ひとたびはとらではつべき
なせはなりなさねばならず
ならずとてなさでやまめや
こゝろことぐ

百姓

かねもなければちゑもなし
ちゑもなければよくもなし
よく〳〵のむきなわが身かな
くわ一本（いつぽん）で世をわたる
ちゑのないのはおなじでも
地ぬしのいへをあふぎ見よ
かねとよくとをつみあげて
ことしもたてぬくらひとつ

をりにふれて

くろたまのめかねをかけし
このみちにあかるきはかせ

しかとなきひげかきなでて
ほこりがにひとにかたらく
あめつちはしろしといへど
あめつちはくろきものぞと
あをたまのめがねをかけし
このみちにくはしきがくし
たかゝらぬはなうばめかし
ほこりがにひとにいへらく
あめつちはあかしといへど
あめつちはあをきものぞと
世のなかはかくなるものか
見るひとのめがねによりて
よきこともあしくや見えむ
あしかるもよくや見えなむ
くろたまのめがねをかけて
そのたまのくろきを知らず
あをたまのめがねをかけて
そのたまのあをきを知らず
ほこりがにかたらふひとの
はかせらごと學士らがごと

少女に與ふ

山本細柳

相州にものしける時、もの學びに京に上らむとする少女あり。そが母なるひとより、とゞめてよと、せちにたのまれし時

わかきいのちのあけぼのに
色なき里を花と見て
ひとりとびたつ雛鳥の
心うれしやなつかしや

さはいへこゝに驚かす
あしくは思ふことなかれ
かなしいかなや君はまだ
うき世の罪を見ざるらむ

まつりの幟にゆく牛の

かざれる絹なうらやみそ
にしきをすとふ血の肌を
たがあでびとゝなづけゝむ

梢にうたふ鳥を見よ
人はたのしと思へども
鳥の心はしかすがに
つらや餌食にくるふとや

うしやうき世のその瓶は
まどがのつやに似たれども
ひとみをすゑてながむれば
あなあやにくにかけたりな

蓮は濁にそまねども
まよひやすきはひとごゝろ
ひじりのまみはにくけれど
悪魔のこゑは酔ひやすし

都大路のたわやめの
リボンの絹のくれなゐは
心にさわぐ大紅蓮
その血けむりのほむらぞや

日高の川に蛇となる
むかしがたりにあやあれど
かのあげまきの學女の
こゝろにつやのあるべしや

花ほとゝぎす月雪に
ものゝあはれを身にそめて
珠より清き君が身を
可憐とわれは思ふもの

君にをしへむ世の中は
やみとひかりのふたつみち
さてもしるべのその神は

心のそらにませるぞや

うき世のとばりひきあけて
かざらぬまゝのひとの世の
くるひさけびをそれぞとも
しらざる君や神ならむ

ものゝあはれをしりそめて
思ひぞしげききのふけふ
君いたはしと思ふたび
梢の花もしぼむぞや

夢のうきはしとだえして
ひとりねられぬさよなかに
つくづくものを思ひ見よ
世はあらなみの音たかし



老對菊

佐々木濱子

老らくは
子のきせわたに
あたゝかく
霜しら菊の
花やめづらん

曉擣衣

夜を寒み
いそやの蜑の
ぬれころも
波とくもにも
うち明すらん

瓢

花紅葉
めでんこゝろの
たけのつゆ
くみしらん身に
いつなりひさご

教の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰
（菊池武則先生代撰）

松

天

大みやのいはほにねさすおいまつは
うこかぬ御代のすかたみえけり
肥後国菊池郡隈府町 千々波橋子

地

ならひ立つ杉もときわのうちなれと
まつこそ千代のすかたなりけれ
福井市佐佳枝中町 平田そう子

人

大にはのまつかけたかくふくかせや
東京市赤坂区青山北町三丁目六十八番地 山本茂子

ちよゝろつよのしらへなるらん

甲

しも雪のかゝらさりせはなか〳〵に
ときはのまつもかひなからまし
熊本 田代艶子

こからしにしくれにゆきに色かへぬ
こゝろやまつのみさをなるらん
秋田 和田りつ子

ゆきしもに染まぬみさをの松にこそ
ちとせのいろはあらはれにけれ
摂津 塩見文子

乙

深みとりかへぬみさをを根さしにて
千代を經にけんたかさこのまつ
熊本 日高かず子

みさをありてすかたもたかき老松は
木々のなかなるきみといふらん
上総 高石登代子

少女子のまもるみさをは千代かけて
みとりかはらぬまつに見るかな
東京 林 環子

初日かけのほらんとするやまのはに
たつさかえてもみゆるまつかな
秋田 梅村いよ子

君か代のさかにもしるくはることに
みとりくはゝるまつのいろかな
三河 永井さい子

幾千代もかへぬみさをゝあらたまの
としのはしめのまつにみるかな
廣島 和住千鶴子

影たかき千代田のみやのまつかせに
なへてなひかぬたみくさそなき　東京　岩谷梓子

老まつはいはほとともにこけむして
おほそらたかくいくよさかえん　肥後　鶴田良子

いろかへぬみとりのみかは松かせの
おとさへ千代のしらへなりけり　東京　篠田園子

老ぬれとかはらぬいろはたかさこの
尾のへのまつのすかたなりけり　東京　三好珍子

霜しもに堪へてをゝしきみさをこそ
かはらぬまつのいろにこそ見め　東京　敷島うた子

わたかまる龍にひとしきおいまつの
くもゐをしのくかけの木たかき　肥後　佐々小琴子

つぬさはふいはほにねさすおい松は
八千代よろつ代さかえゆくらん　肥後　佐々有鄰子

いく千代か波のしらゆふかけまくも
かみさひにけりすみよしのまつ　東京　篠田久子

雲井さして昇るたつかと見ゆるまで
すかた雄々しきみねのおいまつ　熊本　田代綾子

ふりつもる雪にみさをのいろかへぬ
こゝろやめてんにはのひめまつ　福岡　中島たけ子

新としやけふひくしめもかそはるゝ
いく代へぬらむまつのよいゐに　京都　坪内りき子

おほそらのみとりの色にならはすは
まつもちとせはたもたさらまし　山口　村上操子

春あきとかはらぬまつのみとりにそ
めつるこゝろのいろはそみける　松山　上原のふ子

春ははなあきはもみちとうつる世に
まつのみとりはかはらさりけり　東京　林艶子

みつしほにうら風はやくふきたてゝ　東京　椎野鋭子

なみのはなさくいはのまつかえ

もゝちたひ年はふれともわかみとり
むかしにまさるまつのいろかな　東京　牛山業子

さゝれいしのそのむかしより契りけん
いはほのまつのふかきみとりは　東京　椎野秀子

木々の葉はうつろひはてし中に立て
みさをかへせぬまつのゆかしさ　秋田　小島いわ子

冬かれしきゝのみとりをひともとに
あつめてふかきまつのいろかな　河内　竹内敬子

ことのはのつきぬためしをその色に
みせて老いそふわかのうらまつ　名古屋　濟子

根あかりの松とやよはるおいし木も
としとゝもにそさかえてそ行く　河内　小山英子

幾とせをへぬともいろのかはらぬは
もろひとはやすまつのみさをゝ　河内　小山美世子

汝かはるのみとり増すへう降りつもる
ゆきないとひそにはのわかまつ　東京　山内菊子

ゆき霜をしのきてたてるおいまつは
おのか千歳もしらてやあるらん　秋田　古瀬隘子

きみか代のゆるかぬいはの松かえは
なみそこふかく千代をこむらん　東京　椎野滋子

文つくゑにはちのみとりの松おきて
我かこゝろそといもは笑みけり　東京　山内濱子

ちよやちよよろつよまても栄ふらん
ときはのまつのふかみとりして　秋田　古瀬とよ子

とことはにかはらぬ松のみとりこそ
かきりなきよのためしなりけれ　和泉　福原すみれ子

とこしへにかはらぬ松のみさをゝは
きみか千とせのかけと見るかな　東京　積山きやう子

丙

としきむくしほむにおくる松のはの
ちとせかはらぬみさをたかしし　下野　佐藤季子

はるあきの花やもみちなよそに見て
ときはのまつのいろそめてたき　東京　河田いし子

しもゆきに枯れぬなみれはおい松の
みとりはいよゝ深くもあるかな　長野　松澤まつ子

年ことにみとりふかめてしけりゆく
まつはいつをやおいといふらん　東京　清水はろみ子

君か代のちよのためしの澤にあれと
ときはのまつにおにしかめやも　三河　石川ます子

昨日けふ世はしらゆきにうづもれど
まつのみとりはかはらさりけり　信濃　伊藤道子

おのつから千代そさかゆる門ことに
まつのしらへもそはるにひとし　東京　石川薫子

あさな／＼にはのおい松あふくかな
千代のみさをなかゝみとはして　陸奥　工藤とし子

千代へてもみさをなかへぬまつの色
ひとのこゝろにそめてほしけり　東京　山田ふみ子

いろかへぬ松のみさをの手にとれは
ひとのこゝろにうつしてや見む　攝津　大岡幸子

門ことにまつたてわたしにきはふし
わかおほ御代のめくみなりけり　陸前　前田河みさを子

いつの世に根さすみとりの色ならん
むかしのまゝの千代のおいまつ　攝津　大岡花子

去年の雪の消え殘らたるにはの面に
みとりそまさるふたもとのまつ　東京　平岩靜子

年經ぬれは松はしるらんむかしより　兵庫　原田ひで子

なみものとけきおほみよなれや

神代よりいくとしなみをこゆるきに
またたちかへるわかのうらなみ　埼玉　前野壽賀子

としことに千代なかされて深みとり
れさしさかゆるあひおいのまつ　埼玉　前野ふさ子

のきちかき一木のまつはむらとりの
やとゝなりてもちよをへぬらん　大和　栗山たか子

ひともとの松にもかせのしらふなり
手なれのをことかきならさはや　埼玉　横田音羽子

みとりさへ深くそ見ゆるたかさこの
まつのよはひやいくよなるらん　長崎　岩田作子

九の重のみにはにしけるまつとても
はしめはおなしふたはなるらん　東京　荒井千代子

わかいほの庭においぬるまつの木も
ゆたけきとしのいろはみえけり　大和　栗山俊子

幾千世もかわらぬまつのおい木さへ
はるは一としほいろまさりけり　東京　荒井幸子

ときはなるまつのみとりも大御代の
としたつ今朝はめづらしきかな　東京　牧繁子

ときはきの松もみとりのかすまして
をのへのえたにつるそすこもる　東京　荒井滿武子

あらたまのとしのはしめのわか松は
いく千代こめて日出たかりけり　東京　荒井讃久子

ときはなる松のみとりにくれたけの
世にへつらはぬいろにまりけり　美濃　吉村せみ子

葉かへせぬ松の榮とりもいろふかく
きみか代千よといはふならまし　下野　菅淑子

春ことにひとしほいろのまさりつゝ
かけのとかなるにはのおいまつ　東京　青木たま子

いろきそふ花ももみちもなか〳〵に
まつのみさをにおよはさらまし　壬生　岩佐とく子

ときはなる松とはいへとしたちて
なほあたらしきいろそみえける　肥後　徳永萬壽子

千年ふるまつの木すゑにうら〳〵と
はつ日てりそふいろのゝとけさ　肥後　徳永多瑠子

こけむしろしきてよはひを岩とこに
ちきれるまつのさかえひさしも　肥後　徳永廣子

朝日かけにほへるまつのいろふかみ
さかねさかゆく春にもあるかな　肥後　徳永識子

ときはなる松もはるとやきみかため
ふたはに千代をいはふなるらん　下野　菅沼徳子

八千草の枯れふす野邊にをゝしくも
みさをたゝしくしけるおいまつ　壬生　岩佐久子

萬千代もかはらぬまつのみさをこそ
よのをみなこのかゝみなるらん　壬生　森田みと子

千歳をも經にけんまつのいろ見せて
いよゝうこかぬいはくらのやま　長野　山本直枝子

まつしまの松のけしきを見わたせは
なみのまに〳〵みとりいろそふ　長野　山本甚子

きたかせにまつの一と枝をれおりて
こまとにさむきゆふつきそてる　三河　白井よし子

たかさこの尾上のまつに古ことを
とはゝやとおもふ友ならなくに　埼玉　横田やな子

齢なから千と世のともを得たりけり
あさゆふまつをみわたしのなか　埼玉　横田秋子

苔むせるおい木のまつのまつかねは
さかゆくみよの根さしなりけり　陸前　前田河千年子

天津かみくにつかみ代のすかたとも
東京　岩谷淺子

冬枯れの庭のまなかのわれのみと
見ゆるや伊勢のはまのまつはら　壬生　岩岡きよみ子

是あれはかくこそよにはしられけれ
みさをたゝしくしけるひめまつ　島根　岩倉なを子

松のみはおい木なるそとめてたけれ
みとりいろこきまつしまのまつ　神戸　名なし子

いろかえぬ松のふたはのみさをさへ
みとりのいろもこまやかにして　羽後　三浦さわ子

磯なれてからきつき日をおくるとも
まもるこゝろそするとかりける　備中　大橋姚子

時めきしはなやもみちのちりてこそ
まつのときはのいろはかはらし　備中　大橋廣江子

千代よはふ群田鶴の音のたえ間なき
いよ〳〵しろきまつのみさをは　備中　久山政代子

つゆしもにみとりの色をうしなはぬ
おほうちやまのみれのまつか枝　美濃　稻葉ひさ子

冬かれのにはにをゝしくまつのみは
まつのみさをはちよもかはらし　美濃　稻葉よれ子

よもの海なみたひらかにいはか根の
いろもかはらておひたてりけり　常陸　山本延枝

ひめ小松ふたはにちよのかけこめて
をゝしきまつにたつもことほく　常陸　宮本繁子

山となく野となくすさふ木からしを
にほふときはのいろもゆかしき　豐後　中山なつ子

雲は谷にしつみはてたるゆふまくれ
ことにすましてひくみれのまつ
こたまにひゝくまつかせのおと　千葉　豐原みち子

華族女學校教授井上頼圀先生撰

歌留多會の記

天

熊本市東寺原町　田代艶子

正月の七日は、七草とて、めでたき日なりとかや、今よひしも、待設けたる、例のかるたの戰ものせんとて、おとなげなくも立さはぐ、燈火頃よりは、兼て注進なしおきつる、つはものども思ひ〳〵のいでたちに我おくれじと、馳せ集りぬ、はや勢も揃ひにたり、いざやとて、源平に分れ、今日を限りと戰ふほどに、何れも名にしおふ、古つはものどもなれば、何れとも定めがたく、罪なき手には、劍をおび、まだうら若き紙札も、いつしかしはの波をたゞへぬ、しばしいどむほどに、やう〳〵勝負つきにたり、と見れば、おのれは、負組とて、はりつめし勇氣も、とみにくじけつ、のみかは、罰として、白粉てふ、ものまでぬられぬ、此度こそはと、何れもまけじ魂ふり起せば、うれしや勝は此方にありぬ、引つゞき、又もかちにたれば、さしもほこりし敵勢も、かぶとをぬきて、降るになん心地よき事限りなし、折から、しばし休戰し給へ、引出物まゐらせん、とて次よりはしための、持いづるは、兼て心をこめたる、福引にそある、よき物得て、ほこりがほなる、不相應しきに、こうじたる、とりとりおもしろく、興に入りてぞ笑ひのゝしるかゝるほどに夜も更けらぬらんとて、みな〳〵歸り去らんといふにあな殘りをしゝ、今一勝負をこそと、あながちに乞へば、さらば最後の合戰に、花々しき、功名せばやと實盛ならぬ、老武者の、若やぎ給ふに、人々勇氣、いやまして、彼方に乙女を爭へば、此方には、流れもあえぬ、もみぢ葉を、錦と見しか、引あひつ、雪こそふらね、白菊に、おきまどはせる、霜の夜の、寒さ忘れて、いつしかに、かたぶく月の、影さへ知らず、あはや、味方の敗軍と、おぼえしに、彼方の運やつきたりけん、あはれ、只有明の月一つ、のこりしばかりにはや、こなたにては、かちどきをぞ、あげぬる、げに目ざましき、合戰なりしよ。

地

福岡縣筑紫郡警固村　中島たけ子

師の君の御許より御文たまはりぬ、なつかしさに、何

事にやと、とく讀み下せば、今日なん何子何子の君の集ひ來て、歌留多催さんにとく〳〵車を枉げよとなり、

姑君の御ゆるし如何にと思ひわづらひしは杞憂にて今は客人も打絶えて事もなし、心置きなくまかれよとのおほせに、飛立嬉しさつゝみもあえず、急ぎいでゆきぬ、

久しう打たえし友の顔見るさへうれしきに、改まりぬるほぎごと述ぶるまも、師の君にはいとう待ち詫びつるに、早や〳〵とのたまひて、歌留多をば運びたまひぬ、

集ひしは我と師の君と打交へて六人なりけり、源平の二手に分れてはや月雪花のまとひは定まりぬ、師の君にはいとう、みけしきうるはしう、我讀てんと聲高らかにふしをかしう讀上げたまふ、聲の下に、手ぶりも勇ましく人には一札もゆるしたまはぬぞうたてき、萬おぞましき身は我方のみ打まもりて、敵の攻手をぞ防ぐに勉めつゝ、猶御鼻の毛まゐらせんなどいひて、ぬき取らるゝくやしさ、敵の札見定めてたがはじとたまに手を出せば、けふを限りにてはなくて、けふ九重にぞありける、お手つきの罪にとおきてにまかせて、札おくらるゝ腹立しさ、やう〳〵十札二十札と上り行くまゝに、人々の眼光稲妻のとくにして隙間なし、あまつ風乙女のすがた、大江山まだ文も見ずなど、讀み出でたまふほどもあらせず、我早きに否とよと師の御前も打忘れつゝ、いと白き手の赤くなるまで取合ふもをかし、敵の札の數いつしか味方の半とはなりぬ、人々の視線我一方にぞ集りぬる、いかで一札もとあせれども〳〵かひなし、味方の運はや盡きなんとする折しも、吉野の里に降れる白雪の一札にて、我方の勝利とはなりぬ、猶二番三番とつゞくる程に、いつしかみあかしも出きて、夜の更くるも打忘れたる樣なりけり、あはれうれしきは友垣のつどひよ、いつくしみ深き師の打よろこびたまふみけしきよ、此年の歌留多遊びほど、世にうれしくたのしきはなかりき、

人

播磨國揖保郡龍野町　原田ひで子

天津日影うら〳〵と、千代よばふ鳥の聲ものどかに

吹く風も枝を鳴らさで新しき年は何處よりともなうきたりぬ、去年は須磨の浦わに立かへる年波を迎へ、今年は揖保の川瀬の清けき流に立ち昇る、初日のかげに初春をよろこぶ目出度さよと、とそ汲みかはすいとゆかしさよそれさへあるに夜となりて母君や、はらから下女下男、打つどひ、歌留多會をぞすなるいひしらずおもしろし。年每に皆々くわしくなりゆきて、未だ讀み終らぬまに取りそめ、いよ〱戰の闌となりゆけば人々の面さし眼の光も鋭どく、やらじとひしめくわれば、早合點に歌の詞をたがへておもはぬ敗を口惜しがるあり、あるは、たゞ周章ふためきて見苦しき失死をなすあり、攻むるもの防ぐもの、わめくもの笑ふもの、一室も爲めに震はん斗り、勇ましさ面白さいはん言の葉もなく長き夜の更け行くもおぼえざりしが、いつしか鷄鳴き交すに、わはやと打ち驚き窓押し開いてながむれば横雲切れ行く東雲の空瑞氣を含んでうるはしう鳴きつれわたる鴉の聲もいとめでたくぞおぼゆ。

東京　林　環子

年たてる三日の朝、親しき友より文おこせて、今宵、知己のたれかれ家に集へて、歌留多遊びの會催すべければ、是非にとそゝのかすまゝに、夕餐とゝのへて、そが家をぞ訪れけり。招かれたる人の皆集へるまゝに、いざとて源平二組に分れて、そが戰ひぞ始められける。敵方の牌稱へば三枚を與へ、そを過ちなんには、一枚を受くべきの定めさへ言ひ合せたるまゝに、人々耳ひきたて、目を皿にしてぞ、己れ取られじ、敵のをも取らんと、ひしめけるぞ、まことをかしさのきはみなりけり。さてもことにさがしきは某の君よ、己れの持てる牌は、皆よく心に暗んじて、讀人の誦する初の句打きくまゝに、早くも敵をおどろかすぞ、まこと巧みなれや。またおぞましきは某の君よ、自らの持てる牌さへ得覺えぬに、手搦せんとて、敵方のみ覗へるまゝに、いと〱敵に物せられて、味方の恨み買へるぞ、まことにをかしかる。ことに某の君は、此の遊び始めて物せることゝて、我衣手とあれば露と露とを過り、有明の月とあれば、只有明となん過るなど、かゝることの起るまに〱、敵も味方も、歌をかぎりに打さゞめけるぞ、げに嬉しき年の始めの樂しみ、この一夜につきぬる心地ぞして、限りなきゆかしさに心とられ、夜のふくるをも知らず過したりしか。

東京　篠田則子

正月六日親しき蕙子の君より御消息來れり。取る手遲しと讀みもてゆけば、今宵女子の群にて歌留多會催すべければ、夕さりつ方よりぜひに物せよとの誘ひ文なりけり。いと嬉しくて直に筆とりて必ずまうのぼる由答へ奉りぬ。待てば一日も千秋とやら今日のみは暮るゝ間の如何に遲きと、かこち顔なるを母君見給ひて、わりなしと笑ひ給ふ。漸くにして、たそがれ近なりければ急ぎ車走らせて蕙子の君がりおとづれぬ。主人の君いと笑ましげにまちえて迎へ入れ給へるいと嬉し。誘はるゝ儘に座に通れば中垣の隔てぬ君達早三人四人集り居給へり。後かりしよと宣ふに聲分け小舟のと答へ奉れば何かは君にしてと内輪知れる君の宣へるもをかしや。一禮終りて主人の君の進め給へる茶

を契しつゝ未だ物し給はぬ君達を待つ程、深雪子の君の宣はく。先つ日は好子の君の許にて己痛く後れをとりたれば今宵はぜひに其の恥を注がでやはと意氣ごみて語り給へるに御手練の程さこそと推し量られて未だ始めぬさきより心後れせられぬ。話とだへて一人の君が來ぬ人をまつをの浦のと宣へば又一人の君は、いかに久しき物とかは知ると、たはむれ給ふ。折しも二三の君うちつれだちて、かばかり遲れしを、さぞや、しづ心なしと思し給ふらむと宣ひつゝ入り來り給へり。今は人數も揃ひぬれば、いざとて主人の君は歌留多とうで給ひぬ。先一度は「ちらし」をとりたる方皆の君の目なれて宜しからむと薫子の君の宣へば、いづれも實にもと御言葉に從ひたり。菊子の君が讀み役と定まりてやがて淸らかに誦しそめ給ふ。己かじゝうの目たかの目に求めつれどいざとなれば猥て心あてになしおきつるも初霜のおき惑はせられ、時鳥鳴きつる方の有明の月もいづれへか雲がくれて、とみにはそれとも見わかざりき。彼所ならむと向ひの君のあたりを尋ぬる程にいつか己が前にありとて人に求め出でられたる、れたくも又淺まし。我身一つのと誦し給ふを我身世にふると取り違へ、人こそ見えれを人こそ知られと思ひ誤りなどしつゝ互にとりつとられつひこじろひうち競ふさま石橋山の戰もかくやと思ふ。興みちて一勝負終りたり。さながら數へ分けたらむ如く各、等しきやうに取り得てさしたる勝敗の差なかりしは上手なりしと皆々笑ふ。深雪子の君こたびは源平に分けむと主人の君にせがみ給へり。こは先き程宣ひし恥注ぎせむとなりしと己はまづ思ひ浮びつ。組定まれば果して深雪子の君は敵の方に入り給へり。己はまづ思ふ。かゝる程は親しき友をも暫し敵なといふ事の心もとなさよと。こたびの誦じ役は好子の君と定まれり。源平といへは「ちらし」とは又異り皆々一際必死の姿にて太刀こそとられ。鎗こそ持たね。各今日を限りの命ともかなと、美はしく結びあげ給へる髮の亂るゝも顧ず。白魚の如きやさしきおよびの損はるゝも厭いとはずして息もつきあへずきほひあふ樣の凄ましさ。よそめにはさこそをかしうこそありけめ。やがて勝どきは己が味方にあがりぬ。きのどくげなるは深雪子の君なりけり。味方のつはものら思はぬ勝利得しと喜びあふを皆まできかず深雪子の君には重ねて今一度とせきこみ給ふ。己は其の御心を推しまつる物からしばし待ち給へ、餘り直にてはいかに猛き武夫らとて、なやましげなればと聞えまつれば主人の君には心きかして水菓子など澤にもてなし給へり。菓子たうべつゝ實に今は大劇戰なりしよなと皆の君かたりあひ給ひぬ。勝ちたる方は自ら誇ましげに見ゆるも理なりけり。敗北勢の一人なる菊子の君は人をも身をも恨みざらましなど平然と宣ひつれどいづこともなく勇氣おとろへてぞ見え侍る。花子の君てふは諸共に哀と思へと勝ちたる薫子の君の袖ひき給ふもいとしげなりや。それより又幾度と數知れず勝ちつかたれつ打ち興ずる程に、いつか夜もふけゆきぬ。名殘はつきれど少女の身にて夜深き道ゆくも心もとなければ御いとま申さむと聞ゆる折しも宿より迎ひの車來れり。さらばと座を辭せむとすれば皆今一度と止め給ふ。されどおく霜の白きを見ればといへば否まださばかり更けしにはあらず。彼の白く見ゆるは月影なりと偽り留め給ふ。たらちねのまつとしきけばといなめば、そもさる物から今一度の決戰をとせちに袖ひきとめ給ふなりけりさはれ家庭の教へも背きがたければ強ひて樂しさをさきて皆の君に別れを告げぬ。外面は霜白く月すごう更け渡りてさつとふきくる夜寒む の風車の母呂をもれておそひくるに源平の戰ならで膽さへ冷え入りぬ。

肥後　佐々有鄰子

一月一日なれば神拜をへて、親族の家に年の賀言をへのて、中垣ゆはぬ友の許に立よりぬ、神酒たまはり、齒かための餅を饗つ、なにくれとしつるほどに、竹村梅子刀自が、なしへ子等あまた引つれて訪來たまへば、をりこそよけれと、主人の松子女史歌留多會せんと取り出らる、詩やよけん、源氏五十四帖のやよからん、古今の歌はいかがあらんと、さだめかねらるを、妾はてとり鍋口さしいでゝ、普通の百人一首にしくものあらじと演、贊成者多數なれば其に定りぬ、梅子刀自年長なれば、上の句を讀出らる、竹子孃がかわ、衣では露にぬれつゝと

いふよりはやく第一番に取あげられぬ、次は錦山君が飛いりに、人しれずこそおもひそめしか、といふ下の句を、取られたれば、今日の會は女子の會なるに、男生の横矢いり給は、あたらぬしわざなりと、席上さわがしかりしも、賓頭たちの中とり持にて、漸くしづまりぬ、今度は妾より、上の句を讀てよとありければ、つひまつとりあげて讀はてぬまに、衣ほすてふ天香山、と萬願寺のおきかきの如き黒き、手をさし出て、とりあぐるをみれば、此家の下はたらきの女なり。聖代の惠の露にうるほひ、賤川かつの娘まで、文林にあそぶぞ目出度かりける。

肥後　德永廣子

あらたまの新年の式も目出度濟て、三日の日とはなりぬ。今日も年の始のなぐさみに、れいの歌留多の會をもよふさんとて、友達のもとより、いざなひ給ひければ、たそがれ頃より、おもむきける。早くも友なる人々はうちつどひて、今にもはじめんとし給へるを、かの家主なる人のこよひこそ人の數も多けれ、源平兩手にわかれ給へ、わが身大將軍にて勝を得し方々には何か賞をあたふべしとの言葉に、あだかも戰場のごとくに、あらそひける。妾は平軍方にあらば、はい軍のみにていと心もとなくこ、今度は勝を得ばやと、あせる折しも、まだふみもみぬ天の橋立といふ、下の句なれば、いとゆかしく尋れしに、吾友の妹なる人の手にはやくもありけり。いとをかしく、いつのまにとらせ給ひけるかと問ひしかば、日頃歌人の物語に、此歌人の小式部内侍といふ人は、母の和泉式部が、國の守にともなはれて、丹後に在しころ、某の公より、丹後の使はかへりしやと、問はれければ、某公の袖をひかへて詠出つる歌なれと、聞はべれば覺居しなりとこたへらる。邪なくかしこき、ことに侍りしか、なりしも午前二時といふを報じぬるまゝ。いざやめてんとて、皆々その火桶によりそひて、今夜のあらましをかくなん。

熊本　日高かず子

年のよことも終へたれは、今宵なむ、歌留多遊せんとて、そゝのかし聞えやりたる人々、暮ぬさきより集ふけはひさへそまつ樂しき。四方の話はとまれ角まれ、いで、去年の仇返しまゐらせんなど、のゝしりつゝ、源平二に分れぬ、負けたる方は白粉ぬらるゝやう定めて、秋の田の、と詠み初むるに、おくれじと爭ふ男の子、取られじとさけぶ少女の聲かしましきものからいとたのしう、重れし年さへ忘られて立ましりぬるもをかし。十枚あまり殘りて源氏方やぶれぬ、義經もおはさぬにやなど勝ほこる平氏方、筆とりて白粉ぬりもてさわぐ、ほの赤うなりたる少女の顔に一きは白うつけるがいと艶なるに、いかめしきひげとも生ひたる人の額などましろになりたる、黒き髭に、雪のむら消えたる心地して、とかゝれたる草紙も思出られてなむ、己が顔は目に見えて、人を指さし笑ふ樣こそまたなくをかしけれ。度かさぬる程に勝つ負つ、いよゝ打けふじつゝ、山鳥の尾の長々し夜の更るもおぼえずなむ、あかぬ遊を後の日に契りて、化ならねど、靜心なくちり〴〵になりぬるは、十二時過る頃なりけり。

熊本　田代綾子

新玉の、年の始は、よろずたのしからぬは、なきものから、殊に、かるたの遊びこそたぐひなう、うれしけれ。こよひは、何某の館にて、歌留多の、合戰、開かるゝ由、友の知らせに、より、好めるわざとて心の駒にむちうち、急ぎかけつけしに、早一騎當千の、つはもの、ばかり、十人あまり、つどひ居給へり、それ〴〵、組を分ち、いざとて、ひかへぬ、やがて、よみ出でたまふ、あるじの君の、聲をあひづに、戰は初まりぬ、おのれが組の、將とも、立てつる、春子の君、まづ、敵の、かこみにうち入り給へば、われも、後れず、駒おしすゝめて、むかふほどに、かなたも劣らず。ふせぎあふ、その樣げに矢玉こそ、ふられ、目覺るばかりになん、かゝる程に、はやくも、味方の、勝利となりぬ、うれしとも、うれし、されど、勝敗は、幾度となく、めぐりあひて、只かてるもやぶれぬるも、いとうれしげなるは、げに邪なきわざなりけり、これも豊かに治まれる御代のたまもの、なめりと、いづれも同じ心にやありけんかし

長野　松澤まつ子

一ト二タ君が御代と羽子つく少女の聲もたえ、青やぎのいと長き日もくれゆく頃、從姉の君かりひらかるゝ歌留多のまとゐには親しきかぎり誘ひておもむけば、什器びて、「奥山のもみぢならね、我庭のゆきふみ分けて訪ひ給ふ聲きく時ぞ我は嬉しき」と打ずんじたろ、まづ笑まれつ。やがて始めぬ、一人の友の鶯の初音ゆかしき聲もて「君が爲春の野にいでゝ」といふに、何となうたらちれの親もつ身には涙ぐましくて「心あてに折らばや折らむ」ときゝつれどかすむ眼に得分くべくもあらず。いみじう負けゝる事よ「あな口惜しや」とつぶやけば、同じ心の從姉の君「こは興なし、源平勝負こそをかしからめ」とせちにいふに、人々「そは眞き大將の君な賴らむの御心じらひにや」などされ言いひ〳〵己等は平氏となりつ、君達は源氏となり給ひつ、始めの程こそ、かたみに武者ぶりやさしけれ。やう〳〵たけなはになりもてゆけば、眞白きかひなもあらはになりつ、我身を忘れてきそふほどに、源氏の軍勢いよ〳〵みだれ、靜心なく花とちりぬ。いと嬉しけれど、中々にかなたゝあはれ深きを、さは見せじと、しのぶれど色に出にけん源氏の君達「やよ平家の公達さな心なおごり給ひそ、此方にもちり殘されし兒櫻生行先のゆかしくも壇ノ浦風吹きおこし侍らむ」といふがやさしくて、己「花の盛りの幾時迄か久しかるべき、秋に逢はれはかれてかくごに侍れば」といへば皆々げにもと打笑みしか。それよりはちらしを物しつ。ふと「おく霜の白きを見れば」とずんじたろに心づきて暇乞ひて立ち出づれば十日許りの月あなひ顔にさえ渡りぬ。

女鑑教の庭撰文の賞として書籍を賜りし禮文

肥後　佐々有鄰子

去月は撰文の賞として、女子文章軌範を賜はり、妾が文林にわけいりしは近年のことなりしかば、奥深き文意はつゆしらぬ身に、かゝろうろはしき、心つくしの指原乙子君の編纂せられし双紙を、惠ぐまれんとは思ひもかけざりき。朝夕文學の教の師として、文案の上にひもときて、頬をわかてる七門に、眼をさらしけろ。をりしも德永萬壽子刀自訪來られつれば、此の双紙見たまへと取出でて見せければ、刀自にも撰歌の賞とて同双紙を惠與されつと語られぬ、同社の教の庭草なれば先輩の刀自のもとにかよひて、讀會といふことをはじめぬ。入ればますます奥ふかく。採ればいよいよ興味ありき。かゝる惠の露にうるほひし妾こそ。文學に身をゆだねまほしく思ひ侍れば、一首の禮文きこえあげ奉ろになんあなかしこ。梅𫝼軒有鄰子。

明治三十七年　女鑑月並兼題豫告

	歌	文
一月	待春	おもしろきもの一ツ二ツ
二月	富士山 餘寒月	雪中梅園に遊ぶ 春日局の傳記を讀みて
三月	旅行 春雨	春季運動會の記 月夜櫻花を賞して
四月	海上雲 遠山花	故郷の友に試驗成蹟を報ず 春を惜む詞
五月	猿 夏朝	硯 吾が常に愛讀する書籍に就て
六月	親友 郭公	藤花を贈る 梅雨中日記の一節



○讀師講師等被仰付

明治三十七年一月十八日午前十時より宮中鳳凰の間に於て催ふさせらるゝ新年歌御會所役は左の如く仰付けられたり

讀師	侯爵	中山孝麿
讀師控	子爵	黒田清綱
講師	子爵	堤功長
發聲	子爵	綾小路有良
講頌	伯爵	大原重朝
同	子爵	前田利鬯
同	正五位	長谷信道
同	從五位	滋野井實麗

○赤十字篤志看護婦人會

同會は去月四日午後一時より赤十字社本部に於て開會華頂宮、東伏見宮、梨本宮各妃殿下及び會長鍋島侯爵夫人、毛利前公爵、花房男爵、松平伯、男、裏松子爵、櫻井前子爵、三宮男爵、大村子爵、小早川男爵、山口子爵各夫人其他貴婦人令孃、清國女子留學生龍丹常、陳安彥、英人ヘンリーエルフアオデ孃等五十餘人出席し足立軍醫監の眼炎、耳中異物に關する講義あり次で山上二等軍醫正は足部繃帶第三繃法を人體模型に就て實地に教示し各殿下を始め會員何れも熱心に聽講練習し午後四時半散會せり

○留學女生招待會

東洋婦人會の催に係る各國婦人留學生招待會は去十二月十日午後一時半より一ツ橋內帝國教育會階下の倶樂部にて開會せられたり當日參會せしは都下の女學校に留學し居る支那女學生八名、朝鮮女學生二名、暹羅女學生六名と支那留學生監督沈兆緯氏の十七名にて會場には女子職業學校生徒の手藝品にて本年三月より開會の聖路易博覽會に出品すべき各種の造花

を飾り正面には兩陛下の御眞影を掲げ斯て一同着席すると共に同會創立者の一員なる子爵夫人松平久子氏立て此會を開くに至りし理由を簡短に述べ唇齒輔車の關係わる東洋各國婦人の斯く一堂に會して交を結び樂みを互すを得るは幸福なりゆる〳〵寛ぎて遊ばれたしと挨拶し續て下田歌子女史我國も一時は開國進取の國是を執りて萬國交通の路次第に開けんとし婦人にして東洋各地に押渡る者も出來んとする形勢なりしが計らざる鎖國解船の嚴命は遂に久しく別天地に鎖さるゝの止むを得ざるに至りしも今日再び萬里同風の樂みを結び東洋の婦人を會の標榜として此處に相集るを得るに至りしは悅ばしき限りなりと述べ來會者總代として沈氏夫人臣卿氏は此に對する答辭を支那語にて述べ終つて一同茶菓の饗應を受けながら新式蓄音器の日本樂に十二分の歡を盡し互に胸襟を開きて留學の樂しみ苦しみなど語り交し四時前袂を別ちたりと云ふ同會は今後益す此の留學生等の同情者たると共に清韓、暹各國公使領事等の夫人等に對し交際社界の仲保者ともなり好誼者ともならん事を期し居り飽くまで東洋各國の裏面的團結に盡力せん希望なる由

○在留女學生

(暹羅、支那、朝鮮女學生の近狀)

支那及朝鮮から我國へ留學して居る女學生は彼地にて孰れも上流社會の者で深窓の内に育てられ外出さへも碌々仕ない婦人であつたが兎に角留學を思ひたつた其壯快なる意氣は頗る感ずべき事である目下下田歌子女史の許に教育され居る清韓留學女生の近狀を聞き且つ異國の風土に對して彼等は如何なる感を抱き居るや左に其一二を記さん

▲現在の女學生　實踐女學校(下田歌子設立)へ入學した一昨年以來の留學生は朝鮮の女子一名支那の七名であつたが日露問題の起つてから四名程歸國した其中に北京から來た一名の婦人があつて名は金と云ひ彼地では相當の地位のある人の妻で廿七歳であ

つたナカ〳〵學術も優等で勉强家であつたけれど惜いかな病氣の爲め歸國する事になり外の三名も何時日露談判が破裂して知ぬ他鄕に苦しむようなことがありはせぬかと憂慎の餘り歸國して今では支那女學生三名朝鮮女學生一名のみである

▲折衷の食物　　留學生の年齡は十七歲以上二十歲前後で孰れも日本の情態に慣れ日本の服裝をして日本語を談す處は彼國の女子とは思へない、最初日本へ來たときは風俗習慣も異なつて居るし食物などは日本食を厭う樣子であつたから支那料理と日本料理と折衷したものを食卓に列べ追々慣れた處で日本料理に改めたさうだが今では日本料理を喜んで居るようになつた、殊に最初は肉類の大きなものは頗る氣味を惡がつて何うしても箸を執らなかつた故肉を細微く切るか或は擣つて料理したら追々食べ慣れたそうだ

▲規律と入浴　　寄宿舍の規律に束縛されるのは最初は餘程迷惑に感じた樣子であつたが之れを矯正するには敎育の任に當るもの丶最も苦心された所で追々規律正しい美風に薫陶されたが風呂に入らない事などは些細のようでも監督者の苦心は一方ならぬ事であつたそうだ支那の婦人などは一生に一度か二度より風呂には入らない習慣だから夫れを矯めるのは骨の折れたことであらう今では喜んで入浴し淸潔として氣持が宜いと自分から進んで入る程だそうだ

▲日本人は親切だ　　學術の進步は決して日本の女學生に讓らない殊に英敏で事物の理解が早く、會話の巧みな事、交際の上手な事等は確かに日本人より優さつて居る、夫れだから平生の友誼は圓滿で旅窓の憂さも忘れて如何にも愉快らしく「日本人は親切で此樣嬉しい事はありません」と日本語で話す抔は誠に殊勝しく見受けられた

▲暹羅の留學生　　近頃暹羅からも留學生が來て居るが孰れも食物には不便を感じて居る何うも口に慣れると云ふ事は風俗の異つた處へ來ては困難なことと見ゆるが、それでも慣れると日本料理を大層賞美

するのは淡白な處が口に合ふと見へる

○得難き貞婦　岡山縣上房郡呰部村大字阿口川上芳藏の妻ユキ(三十)は貞操の譽れありて其筋にても他の摸範とし相當の保護を加へんと目下協議中の由ユキは阿哲郡豐永村大字赤馬田中彌三郎の三女にして資性温良篤實去二十二年芳藏と結婚し程なく長男寛藏を生み夫の實兄國藏妻子と合せて一家十人の暮しなれどもユキが心の至れるより家庭頗る穩かにて共に農業を勵み居たり然るに夫芳藏は二十八年の春より人の最も恐るゝ癩病に罹りたり之れより實兄國藏は一方ならず忌憚すると共に其の妻ナエも加擔して疎外し始めたるにぞ一家の和合乍ち破れ遂に田地の幾分を分ちて芳藏夫婦と長男との三人を西隣に分家せしめたり左れば止むなくも三人にて僅の田地を耕しつゝ生計を營めど素より足らぬ勝ちなるが上夫は一人前の働きも爲し兼ぬるに至りユキは日雇稼ぎを爲し一家の暮し夫の藥用身を粉に爲して日を送る中病は日々に加はりて屋外にさへ出づる能はざるに至れるにぞ淺墓なる近隣の者はユキに向ひ人の嫌ふ不治の病人を抱へ行く〳〵何うする積りなるや今の中離別して里に歸りて再縁の口でも求めねば年過ぎては一生を過るべしなぞと只管に勸むればユキは其の人恨めしく夫が無病の時に嫁ぎ難症に罹ればとて之れを振り捨てゝ一日も安樂に暮さん心更になし殊に長男寛藏は我が手に人とならせずば誰れあつて之れを助けんにお志しは有り難けれど之ればかりは私しにはと更に受け引くべき氣色もなきにぞ只の目からは馬鹿にも見ゆべく其の後勸むる者もなかりしユキは專念に夫の快方を祈りつゝ八ヶ年を過ぎ來せど何んの顯のある事なく搗て加へて杖と賴む長男寛藏は赤痢病にて死亡なし夫の病も益々加はり今日に至りては分與されたる田地すら賣り盡し只ユキが日雇賃のみを以て糊口を凌ぎ看護怠る事なきが夫は全身腫れ上り全體に紫斑色を呈し四肢指頭は腐亂脫露し汚汁を流出して見るかげもなき有樣に親族は申すに及ばず實兄國藏に至るまで捨てゝ殆んど糞土の如

く米一粒をも惡む事なく哀れ敢果なき境遇となり居れどユキは期したる事とて益々看護と勞働とに餘念なく送れりとは實に當代稀れなる貞婦なりされば村長等よりも其の筋へ彰善方を申請したりと

○孝行納豆　麻布區新堀町十一番地に住む納豆賣小林勝次郎(十三)と云は三年前に父を喪ひ母いせ(四十八)に養はれ弟妹五人と暮し居たるが父の死後母は家財なども賣却し日雇稼に出でゝは僅に其日を送りしに母も亦病氣にかゝり長々褥に就きて家事を取締ることも出來ぬ始末なるに勝次郎は感心にも納豆賣を始め毎朝疾く起きては麻布十番に行きて仕入をなし近所を賣りあるき漸やく五六錢の利益を得ては母及び弟妹の口を糊し人より金錢を惠るゝことあれば母のために實母散を買ひ求むる杯誠に殊勝の心掛けなれば近邊にては誰一人感せぬものなしと人の子となりては誰も斯くありたきことなり

○女子師範の新事業　大阪府女子師範學校にては從來丙種講習科を置き小學准教員を養成しつゝありしが去る三十四年四月創設以來本年迄六回にて總員二百四十人の終了者を出だす事となりたれば本年にて一先づ休止し更に來年度より是等准教員にして進んで尋常本科正教員たらんとする志望者の爲乙種講習科を設置せん計畫にて豫算中に編成したり修業年限は一箇年にて准教員の資格ある者を收容し月々三圓の手當を支給し四十人の定員となす由

○京都淑女學校　同校は既に生徒滿員に達し現在の校舍は狹隘を告げ入學志願者を收容すること能はざるに至りしを以て今回下京區猪熊通り六角南入西側に移轉し(敷地坪數六百二十七坪二合建物坪數二百七十八坪五合教室九、講堂一、雨中體操場二、運動場二、職員室一、事務室一、應接所一、會議室一、喫茶室一、小使室一、玄關二、)來る一月十一日より授業を開始すといふ因に云ふ今回の校舍は生徒六百名を收容し得べく寄宿舍は當分の内從前の場所に設置し追て本校境内に新築すべしとぞ

○女子新聞　中川愛氷氏の主宰する女子新聞は從來週刊なりしが來一月よりは日刊とし以て女子社會のために智識開發の任を盡すといふ

○マクレーン嬢に對する海軍下士の表誠

日本海兵の母として廿餘年一日の如く我海軍軍人の爲めに好意を傾けつゝある英國倫敦市なるエム、マクレーン嬢の名は久しき以前より我同胞の耳に熟する處なるが嬢は元と相當の資産を有せしも帝國同胞歡迎の爲めに殆ど之を蕩盡する程なるも往年尚ほ居をテームス河畔に移して毎夕我軍艦商船の出入を觀旭旗の檣影に接するを以て畢生の樂となすものなりと云ふ嬢の高義は遂に叡聞に達し曩きに勳六等に叙し寶冠章を賜はり海軍將校中の有志者も物品の寄贈を爲したれども親しく嬢の好意に浴したる下士は未だ何等の酬ゆる所なきを遺憾とし砲術、水雷術、機關術の各練習所、鎭守府の海兵團の下士一同發起となりてマクレーン嬢に對する表誠方法として寄贈金を爲すことゝなり横須賀下士卒集會所に於て昨今右に關する事務の取扱中なりと聞けり因に記す右の企てあるを聞き込みて神戸市なる妙齡の一少女は巨額の金圓を集會所に託して寄贈方を依頼し來れりと

○女教師と結婚

女教師てふ生活が結婚に不便であるといふ事は誰れも口にする所であるが、果して何れだけの程度まで不便であるか未だ正確に之れを説明したものあるを聽かぬ、素より女教師と結婚との關係をば統計的に示すのは至難の事であるが假りに女子高等師範學校の卒業生に就て之れを調査したならば其大體を察する事が出來やうと思ふ、然るに同校の卒業生は結婚の際一々學校に屆け出る必要もないので正確な事は調べられぬ唯結婚の爲めに姓名が改まれば改姓の屆があるので僅かに之れを知る事が出來る、從つて他家に入らざる結婚は或は之れを知る事が出來ぬのである、が大體の形勢は夫れでも充分之れを察する事が出來る譯である

却説本科と本科の專修生といふのを合して明治二十三年より三十六年に至るまでの卒業生は合計三百二十八人其内結婚者は百二十五人即ち四割一分（分以

下切捨て、以下倣之）である、年々の卒業生に就て之れを見れば尤も多く結婚者を出して居るのは二十四年の卒業生十七人中十三人（七割六分）之れに次ぐのは二十六年の十四人中十人（七割一分）等で、最も鮮いのは三十六年の六十四人中一人（一分）で之れに次ぐのは卅五年の四十八人中二人（四分）であるが、是等は卒業後未だ間もないのだから無理もない事である

又専科といふのは三十年以來卒業生を出して居るが其本年までの卒業生十七人の中三人（一割七分）だけ結婚して居る、又専修科といふは家事科卒業（三十二年度）の二十二人中五人（二割二分）は結婚國語漢文科卒業（三十四年乃至三十六年）の七十五人中二人（二分）は結婚、地理歴史科卒業（三十五年）三十三人中一人もない

次ぎに保姆練習科では三十年乃至三十四年の三十三人中六人（一割八分）は結婚してゐる

又小學師範科といふのは明治十二年以後廿八年まで二百七十八人の卒業生を出して居るが、其中百八十八人（六割七分）は結婚して居る

去れば以上總卒業生七百九十九人の中三百七十二人即ち四割六分は結婚して居る譯である。然るに去る三十一年度に於ける日本中の女の配偶の有無を見るに、二十歳以上四十歳までの女總數六百二十四萬零八百四十七人の中配偶者ある者は四百二十萬八千四百七十八人即ち六割七分は確かに結婚者である。之れを前の女教師の結婚數に比べて見れば女教師の方は二割一分だけ寡ない譯である、去れば女教師の生活は多少結婚に不便なるは明了であるが、未だ今日の所では其不便は世人の考ふるほど重大なるものではないといふ結論に達する（日本新聞）

○婦人と職業　英國に於て千八百九十七年以來女工保護の目的を以て婦人を衛生監督官に任用したるに極て好結果を呈し此度四十五人に増加せり△露國遞信大臣は先般婦人を驛長に任用することを許可し之を二三の小停車場に試用したるに頗る好結果なり

しといふ△英國に於ては郵便電話等に婦人を任用すること多く其地位も甚だ高し英國郵便局に於ける婦人の總數は三萬四千人にして其内千五百人は郵便預金に從事し長官の俸給は五千圓なり爲換部にも婦人少なからず長官の俸給は四千五百圓にして此の二人は國王陛下より勳章を着領せり其他婦人の郵便醫長となりて同く五千圓の俸給を受け居れり獨墺兩國は英國に比して郵便事務に屬する婦人の地位甚だ低く俸給も九百圓以上に出づるものなし△獨逸國スッツトガルト市の女子職業學校意匠科を出でたる某婦人は此程伯林市の一商店に改良服の新意匠を目的とし三千五百圓の俸給を以て雇聘せられたり△米國フロリダ州にありては速記婦人キホー孃の盡力により議會及び法廷に於て婦人速記者を使用することゝなれり

○色鉛筆に就て　目下一問題となり居る色鉛筆の事に關し粟本警視廳第三部長は語りて曰く色鉛筆に就て井上賀古兩醫學士が眼科的有害と報告をせられたるは大に世人の注意を促したり我等は衛生上の問題として是等研究の成績が續々世に出でんことを希望するものなれば該報告に對して敢て批難攻擊を試みんとするが如き事は毫も念頭に浮ばざる所なれども警視廳が何故に取締を爲さゞるかといふ點に至りては一言辯解し置かざるべからず抑も目下坊間に販賣せる紫鉛筆（獨逸國ニユルンベルグ市ステツトルン會社製造）の製造に使用する紫色々素はメチールヴイオレツトなる爹兒色素より成りて砒素を含有せず爹兒色素は其發見以來日尚ほ淺けれども比較的廉價にて且つ着色力頗る強く今日に於ては從前汎く使用したりし鑛物性色素及び動植物性色素を壓倒する傾あり而して從前は爹兒色素を製造するに當り砒酸法と稱へ酸化藥として砒酸を使用し此法に依りて製したる爹兒色素中より砒素を除去するは最も難事にして往々市上の品には砒素の如き有毒物を含有することあり然れども近來は爹兒色素の製造藥大に發達し有害なる砒酸に代用するに硝基ベンツオール

を以てし從て有害なる金屬を含有せざる純蓼兒色素を製出販賣するに至れり鉛筆中のメチールヴイオレットも恐らく後法を以て製したるものならん而して蓼兒色素は其數甚だ多く而も生理的精驗を經たるもの少なしと雖も諸學者の説に依れば其純粋なる狀態に於てはチエトロクレゾール、コラルリン及びピクリン酸の如き種類を除くの外恐く甚だしき害を有せざるべし是れ明治三十三年四月内務省令第十七號有害性着色料取締規則に於ても前三種の蓼兒色素の外不問に附せられたる所以ならん而して人身に對する有害作用如何に就ては學者間未だ一定の確説を得ず唯眼球に對しては腐蝕作用(即ち有毒)を認むる事あるも之を以て直に此着色料全體若くは此色鉛筆一般に取締を行ふといふは充分の考慮を要すべきものと信ずるを以て宜しく精驗を經たる後に於てすべきなり井上學士の説と稱し傳ふる所に依ればメチールヴイオレットを以て猛烈なる有毒色素とし獨逸國に於ては學問上の研究の外工業上の使用を嚴重に禁止し且つ窓掛及び靴足袋の如き物にさへ其使用を禁止し然のみならず鉛筆も禁止せるならんとの事なれども右は獨逸國有害性着色料取締規則を誤解したるものにして同規則は何れの着色料を問はず砒素を含有したる場合に限り其使用を禁止するの條文あれどもメチールヴイオレットの如き蓼兒色素の使用を禁止したるの條文なし之を要するに一定の砒素を含有せずとすれば法定の有害性着色料とは認め難し又眼科的危害の存在は兩學士が説明する所の如くなれば之が注意を世人殊に父兄教員等に喚起せしむるの必要はあるも廣く着色料其者に對して取締を爲すと否とは未定なりと云々

○婦人春着のさま〴〵　市中の呉服屋は孰れも爰を詮度の賣出し時にて華族方の令婦人より太物一反前垂一掛の景物を目的とする中流の世話場に至るまで春着の品定めに忙しきは今日此頃の間なるべし先づ江戸向きを見廻りて今川橋松屋呉服店の陳列場を覗けば博覧會の受賞品を集めて陳列したる其中に二

藍染の小紋縮緬今時の目には新らしく三十歳以上四十歳位の奥樣又有德なる商家の内儀向きには品位ありて好し價十二圓、次に薄雪染の小紋縮緬は年若き奥樣内儀に打て付の柄にて價十圓前後なり此二種の染は昔しの御殿風を思ひ起したるならん、紋御召色絲入の大絣は令孃達に當世向きの柄なり價十圓前後にて色合は嫌みなくて好く、繻子入御召の瀧縞是も當世向きなれど堅氣の人には如何あらうか價十三圓百花友禪是は意氣の粹のと云ひし花柳の姿も近來素人を眞似る樣になりたるより總て友禪は地味になりたり價十五圓前後、無線友禪夜櫻の模樣これは地黑に薄墨の花を見せたる一寸新らしき意匠なれど着尺にはならず下着には贅澤なりまた莟の花の晴着には寂しく如何に凝つた内儀でも是には呆れ顔なり價四十二圓、紋羽二重紅染匹田絞りの長襦袢は昔し禁裏女官の外堅く禁止されたる桐に鳳凰の鹿の子絞り是も素人には如何あらうか何れ藝人肌か三味線に緣ある人に向くものなるべし價九十九圓、諸撚絲富國織は四季押通しの縞柄多く經濟を旨とする婦人達に持て囃さるゝとなり價十四圓、幽谷織の帶地は綴、天鵞絨を織出して花卉或は模樣を彩り金絲の配合に影日向を現はし小倉の色紙、豐年に因む田の實に雀の織出しなど極めて美くし價二百五十圓以上、

三井呉服店には上流の婦人達より好みの注文孰れも千差萬別なれどわれは顔なる服裝したき初春の心は皆一ッなるべく中には奥の知れぬ好みもあれど先づ齡三十以上より五十路に近き婦人は小紋縮緬京絲織色と柄との屈托に餘念なく又年若向きの品定めは濃い媚茶地の御召、障子格子の絲織なり是は色合の少し薄からんには尙ほ妙なりと餘所目には見ゆれど意氣な姿の好みには適當なるべし價十四圓三十錢、栗梅地の紋御召、立よろけの赤絲入、菱形の星絣は二十歳前後の奥樣向きにて尙ほ此種の工夫を凝らしたるもの多し、藍鐵色地に鼓子胴大絣の御召は幼女の正月着なるべし價三十圓、紫紺地匹田形に陰日向の紅葉を上置したる紋御召は令孃達に適當の品なり價

二十三圓五十錢、薄錆鐵色地の紋御召は町家の娘達には好し柄も極めて上品なり價十九圓、大島紬の工夫絣は奥樣向きの長羽織なるべく價二十圓、友禪縮緬の中にて一寸人の目に付く模樣は雛の菊、敷松葉の二種なり但し雛の方は薄紫と紫紺の二色に紅の隈をとり菊の花は藤鼠又敷松葉の方は若茶地に黑色の松葉、枠は紅にて龜甲形の上置きは紅、紫、白茶の三種なり一匹の價二十三圓是は先づ花柳向きの意匠なり風通壁御召紫紺の地色に色絲を以て菊の花を現はし何となく愛嬌のある柄なれば十六七の令孃に好し、縮珍の帶地は錆金茶地に金銀通し老松の織出しに縹色にて雲澗の水を取合せたるあり價百二十五圓同金茶地に雲形に氷梅の模樣價百三十三圓是等は婚禮用の品なるべし此外模樣緯取絣の御召價十八圓、絣壁御召價九圓より十一圓、吾妻コート地色紋羽二重價十二圓より十五圓、以上ば先づ春着の新柄にて絹物木綿類とも價は一昨年と變りなしと云へり

白木屋の陳列場にて眼に留りたる新柄の二三を記さんに御召の曙染め廻り栗色、裾は鼠色の暈しに金絲の織出し模樣、吉野御召裾模樣の織出し地色鳩羽鼠白茶の染分、以上價十六圓何れも當世風にて派出好きの若向きには申分なき意匠なるべし、小紋縮緬(石持)立涌模樣價廿四圓五十錢、龍田川の模樣紅葉に金絲を彩りたるは少し風致を缺きたり是れは東京を離れた土地に縁あるべし、御召風通織は何れも上品の柄を集め着尺にも羽織にも好し疋にて價三十五圓、養老御召色絲の亂立縞は盛りの花の正月着なるべし價十三圓、無地の倶紋御召地色は濃鐵にて少し青味を帶びたり價十五圓三十錢極めて上品なり齡三十以上の奧樣向きに適當の柄、同瀧縞は上品界の吾妻コート地には妙なり、獨樂撚諸絲織は表堅縞裏微塵の兩面織にて金茶の千筋、名も柄も甚だ野暮なり裏表の縞を異にしたる工夫は外にも種々あり、縞斜子の辨慶縞是れは一寸人の眼に付く品なり併し派出者が下着に見立つるや否や覺束なし、絹縮の長襦袢地色松葉鼠模樣は無造作にて何とも判斷が付かず價二十

四圓、同梅鼠地の長襦袢、模様は大小亀甲の中に松竹梅の彩り價二十三圓五十錢、地白縮緬の長襦袢、百鬼夜行の墨染價二十五圓、紋羽二重の絞り、染色は數ありてお好次第なり羽織の胴裏或は胴着と云ふ見立なれど絞りの延びたらば蕎麥と同様更に味ひなし、繻珍の下着是れは芝居の衣裳めきて可笑し、風通織、博多織の無双羽織は派出でなく意氣でなく中品界の婦人に適當の品數々あり、博多織の女帶は世に廢りたれど近來種々の意匠を凝らして面白き模様を織出せり價五圓以上八圓迄なり

◎新春の婦人髪飾（大西白牡丹店員の話）

新春の服裝は前に其流行の一斑を紹介したれば今回は夫に伴ふ婦人の髪飾の流行を案内せん

◎櫛　笄　奥様向の櫛としまして當世流行のものを申しますれば例の操形ですが若き方には稍大形のもの又老けた方には小形のものと夫々年格好に依つて形に大小の別あることは今更云ふまでもありません上等の品所謂貴夫人向となりますと黒鼈甲臺で總金地蒔繪もあれば平目地即ち梨子地蒔繪もあるし研出しもあるし芝山象眼をあしらつたものもありまして模様は月に梅だの波に千鳥だのと種々ありますが新春のものとしては金地に若松と色紙を現はし其色紙に「子の日とて今日曳初むる小松原高き迄をも見るよしもがな」との古歌を記した子の日の松の意匠を蒔繪としたものなどが面白からうと思ひます斯う云ふ上等の櫛と一對の笄は無論黒鼈甲臺の形は平丸と云ふのが現今持囃されて居りまして直段は一組が十四五圓以上三十圓位迄でありますが次に中流以下に向く品ですと櫛は矢張操形ですが品質は黒鼈甲の張臺で中挿の笄は角形か或は半丸形でして是も總金地蒔繪もあれば研出しもあるし模様とても前に述べたのと大抵似たもので新年用としては目出度い意匠を凝らした物が種々ありまして直段は一組四五圓以上十二三圓位迄ですが六七圓位の處で随分宜しい品がありますし且つ此邊のものが一番多く賣れます

◎後挿　貴夫人向の後挿の釵としましては先づ

二十二金製か或は二十金製の松葉脚で之に梅とか吉野龍田などの肉彫を致して七寶をあしらひましたものが流行でありまして直段は釵の大小なり彫刻なりに依つて無論夫々異ひまするが大凡の處を申しますと二十圓以上三十五圓迄の間で御座います今一ッ上等の釵を申しますれば二十金製の松葉脚で青金の梅を打附にしまして花の匂に金剛石をあしらつたもので一寸乙な佳い釵ですが孰らかと云へばマア粹向でありまして上品向には矢張前に申しました方が宜しう御座いませう次に普通の後挿で新年用としましては黒鼈甲臺の平打に金蒔繪を爲て之に芝山象眼をあしらつたものとか左もなくば彫刻模樣に矢張芝山象眼を爲たものかで模樣は御題の巖上の松又は月に梅或は梅に水若くは水仙とか吉野龍田とか云つた樣なもの其他種々ありますから模樣の處は召す方のお好みに任すこととしまして直段は若向のもので上等と云つても五圓位なもの並の品ですと二三圓位で御座います

◎根掛　も種々ありますが當節は管根掛が流行です極上等の品となりますと二十金製に彫刻を爲たもので二十五圓以上三十五圓位も致しますが銀臺に矢張銀の針金細工で模樣を現はしたものなら三圓位で御座います

○春の七種　春夏秋冬花不斷の向島百花園にては初春の眺めを添えんとて既に七種植込の壇を設け又提籠にも植込みて土産物に出來へたるが這は園祖鞠塢時代よりの慣例なる由にて小杉文學博士曾て雪中若菜と題して雪の日園圃を訪づれられし折柄七種を詠込みたる左の國風一首を園主に贈られたりき

いまもさかりのむつの花その
なゝくさの其ひとくさを摘そめぬ

總じて七種を祝儀に用ひたるは延長二甲申年正月廿五日人皇六十代醍醐天皇四十御賀の時宇多上皇より紫宸殿に献ぜられたるが抑も之が濫觴なりとかや其後に至り子の日の祝儀として七種菜羮に用ひ北野燒野、みよし野、交野、禁野、平野、嵯峨野等の七ッの

野邊より七種を採集められたる由なれど兎にわれ提籠に作りたる七種を向島歸りの土産として携へつゝ堤上を辿らんも最と興あるべし

●讀者の回答（女鑑發兌回數に就いて）

△私は是非ともこれまでの通りを望みます月二回でも待遠い位でありますのに一回にされましては兎ても待切れません（横濱吉田よし子）

△月一回の方に御賛成申しますそして口繪も體裁も記事も當時流行の諸の雜誌にまけない樣にして下さいまし（東京田中雪子）

△どちらでもよございますが只記事だけは今時流行の毒にも藥にもならない諸雜誌にかぶれて讀者の氣嫌氣妻をのみとる樣な幇間雜誌にならない樣切に願います（同花田好子）

△今の百頁を二百頁として口繪も澤山にしてさうして月二回になされたらよございませう（同後藤かつ子）

●記者曰くかつ子孃の御說は結構ですが少々問題外に渉りはしますまいか

△矢張り二回說を主張しますその譯は早く見ることの出來る丈でも大に得益があります流行にかぶれて體裁ばかりを好くなさるのは甚だよくないことと思ひます（埼玉林たけ子）

△春秋の二季に臨時增刊を出して頂戴さうすれば一回で我慢しますその代りにどうぞ外の雜誌に少しも負けない樣にして下さらねばなりません（水戸藤井さわ子）

△私しは矢張りこれまで通り二回の方がよいと思ひます、二回を三回にでも四回にでも殖すと云ふのなら贊成ですけれど減すと云ふのはてんから嫌です、尙は申し添えますのは、どうぞ此上にも學術的高尙な趣味のあるものを撰んで澤山掲して頂きたい（東京入河薫子）

△其他たゞ可否のみを申越れしもの丶點數を合せて左に表示す

二回說	二十五人
一回說	二十三人

!!讀者の意見を求む!!

女鑑記者謹むで本誌愛讀の令夫人、令孃諸子に向ひて御相談致したき事あり、そは他にあらず

女鑑發兌の回數

に就きての事なり、御承知の如く女鑑は十三年來毎月二回の發兌として今日まで永續し來りしが、今後愈々大擴張を施し大改良を行ふの氣運到來したるに就きては此際二回の發兌を改めて

毎月一回の發兌

となし、從來の二回分を集めて一回分として頁數百頁を二百頁に增し又た口繪其他も四枚若くは五枚なりしものを十枚以上とし一冊の定價を二十錢とせんか、或は依然是迄の通り

毎月二回の發刊

として(定價は從前の通)口繪及び頁數は從來のまゝに止め益々材料を精選し、記事を豐富にして諸子の高顧に酬ひんか、是れ記者の再三熟慮して尙ほ未だ決する能はざる所なり、云ふまでもなく新聞雜誌は讀者と記者との意思相投合融和して始めて妙境に入り讀者の心益々躍りて記者の筆益々動くものなれば記者が躊躇して容易に決する能はざる此の問題の如きも當然

讀者諸子の意見

を聽きて、兩者の一方に決定すべきものなりと信ずるにより、玆に世に有振れたる

多數決の方法

を以て諸子の御意見を求め、來年二月十一日即ち

紀元節

の日を以ていづれにか決定斷行せんとするとせり、就ては各位以上の趣意を諒せられ

御遠慮なく

はがき、電話(匿名にてもよろし)其他の方法によりて女鑑編輯局へ御申越しあらむことを希望に堪へず、且つ其の御意見及び可否の點數は一々本誌に掲載して諸子の一覽に供すべければ又一の興味あるを見るべきなり

明治三十七年一月

東京京橋區築地
二丁目國光社
女鑑編輯局
特新橋八八番
新橋二六九三番

新年附錄

漁村の初春

江見水蔭

上――一

富士の姿を寫して鏡ケ浦。麗かなる元日の朝、おのづからなる門松の千本松原、盛砂の淸き渚に立出でたのは、舊冬から北條の別莊に避寒の浦上夫人邦子。續いて臨時傭人の女中勇喜が、荒々しい歩調に、白砂を蹴て雪に行くが如くである。

邦子は病氣なので、療養の爲此方へ來て居るのである。然らざれば、決して東京の正月を脫した事は無いのである。

良人浦上芳周は、外務省參事官、交際上手の人である。其夫人としての邦子も、高等なる女學校の卒業生、新智識の敎育を充分に受けた人であるので、勿論應接ぶりは巧み。この夫婦を直ぐと公使にして、外交晴の舞臺へ出しても、立派に切廻して行くであらうとは、知人間の輿論。未來をこれは云當てたものであらう。

されば邦子が東京に在らうものなら、三ケ日は年賀の客を受け、それから此方からも年始廻りをして、馬車の轍は東西南北の土に塗れるのみか、福引會、歌留多會、宴會、音樂會、或は歌の會、茶の湯の會、さまざまの會に顏を出して、それは〳〵忙がしい事。おちついて雜煮の箸も持たれぬ程であるのが、此方の別莊へ來ては天地一變して、別莊番の老爺と、臨時傭の女中勇喜と、それから東京から連れて來た老女の

志摩と、それだけで、訪ふものは松の風に烏の音、浪の調に鷗の聲、それ位である。されば別に衣服を改めるでもなく、不斷着の上に羽織だけは紋の附いた黒縮緬、寒からうと絹獵虎のショールを肩にして、草履の儘で濱邊へ出た。女中勇喜元來濱そだち、潮風に吹かれてお色が眞黒な上に、お白粉をコテ〳〵塗つて、髮は昨夜枕を結付けて寢た所爲か、無事に髷を存して居る。デモ附き嶋田、仕立おろしの双子のめし物、思切つて今日を晴れと着たものなり。

『好い景色だこと』

邦子は立留つて斯う云つた。初霞、沖ノ嶋鷹ノ嶋に薄く引くを指示して。

『然うで御座いますかねえ』

勇喜の御挨拶には驚いた。

『お前には、この美しい眺望が分らなくツて？』

『はい、分りませんですわ』

『然うかねえ……』

分らぬといふ心が邦子には分らぬのである。しかしながら境遇で、人の嗜好は異るから、強て同情を求めるにも及ばぬと、更に歩をうつして浪打端に出た。

砂、濡れて、且、洗はれて、千鳥の足跡は模樣を置いた形である。其模樣の動き出でたかと疑はれるは、小さな蟹の穴を出て歩くので、處々に泡を吹くは蛤か。其口から吹出した蜃氣樓とも見るべし。向ふ相模

路の山々今朝は一入美しく、此方は大房崎、雀嶋の浪の花、此所から見れば白装の騎馬の突撃する狀に宛如たり。

あの大房崎の鼻に黑煙の昇るのが、東京からの汽船。それを此所から望みて次第々々に船體が明かに見え出して來るのを、常に樂しむ邦子、今朝は一入待たれるのである。東京からの初便り、それでなければ友の某夫人、某令孃、誰か訪ねて來て下さる筈。どちらか吉相が得られるのだと、そればかりに心は傾いた。

大房崎の鼻の先、それかと見れば漁船の帆、今度はと見れば鷗の群、煤煙かと見れば散り雲のなだれ。忽ち見える汽船の、浪を蹴つて來ると心から出た幻影も消え、又しても幻影の汽船、又しても幻影の汽船、後にはその汽船の甲板に、某夫人の姿、某令孃の顏、ありありと見えるまでに爲つた。

『あッ、これが未だ健康のすぐれない證據だねえ、酷く腦が惡いと見えて……』

邦子は、つひ獨語を云つた。

『如何なさッたですよ。奧樣、何か妾が仕ましたッけか……』

勇喜は心配顏だ。

『いゝえ、東京からの船だがね、如何したのだらうねえ、今朝は未だ見えないよ』

『あッれ、未だ早いで御座いますヨウ。昨夜出た船ですッけ、然う早くは着きましねえね』

『然うかねえ』

『正月だから、休んだッけか知れましねえね』

『馬鹿な事をお云ひでないよ』

『妾の云う事ァ時々當りますッけ』

『當ッては困るわ』

斯う云ひながら、鏡ケ浦の端を傳うて、知らず〳〵那古の方へ足を向け、思直しては又踏戻つて、つひには勞れて汽船の引揚げてゐる、それに身を倚せ、一息邦子は吐いたのである。

『あッれ、來ましたヨウ』

急遽しく勇吉は叫んだ。

『何處に汽船が……』

と邦子は胸を躍かした。

『いえ、汽船では御座いません、犬で御座いますヨウ』

『犬なんか如何でも好いもの』

『でも、あの犬は咬付きますッけ』

『厭だねえ』

と邦子は懔毛を顫つた。

『あッ來ました〳〵』

『又犬かえ』

『いえ、今度は汽船で御座いますヨウ』

果して汽船は彼の崎の方に現はれた。

上——二

船形、那古、それから北條に着く船は着いた。客よりは魚籠の空が多かつた。艀船で岸へ上つたのは、書生二三人と、漁師四五人と、商人夫婦と、農夫親子と、それだけであつた。
邦子が待つて居た、某夫人、某令嬢、誰も來なかつた。
元日早々邦子は失望したのである。
『如何して見えなかッたのだらう』
恨むが如く邦子は口走つた。
『御用がお有んなさるからでせう』
と勇喜は輕く云つた。
女中が解釋したやうに單純であらうか。夫人はそれでは濟まされぬのである。
此方へ轉地療養すると云ふ事を、親しい人々に告知らした時に、それは、嘸、おさびしいでせうから、必らずお見舞に行きます。はい、妾も參じますと、大分然ういふ聲が高かつた。中でも某の夫人、某の令嬢、これは、キット元日にはお驚かし申しますといふのであつたが、扨、その元日は今であるのに、つひに此船では見えなかつた。けれども、未だ午後の三時に着く船があるから、それで見えぬとも限らぬと、すごすごと、別莊へ引還す事と爲つた。
『勇喜や。何んと淋しいお正月だらう、人一人濱邊には見えないねえ』
『おほゝゝゝ。奧樣、お正月で御座いますさア。漁場で皆休みますでねえ、皆濱へは出ましねえでね…』
何んでも無い事で勇喜に揚足を取られて、益邦子は不快なのである。
『妾の意味は然ういふのでは無いよ……』



斯う云つて、先きに松林の間に入つて、砂路を拔けて、別莊へ歸つた。入口で又感情を害した。それは別莊番の久兵衞老爺に、われ程嚴しく命令して置いたのに、國旗が出して無いのである。

「如何したんだねえ、久兵衞老爺…」

「國旗でがすか」

裏の方から廻つて出た老爺、平氣な顔で。

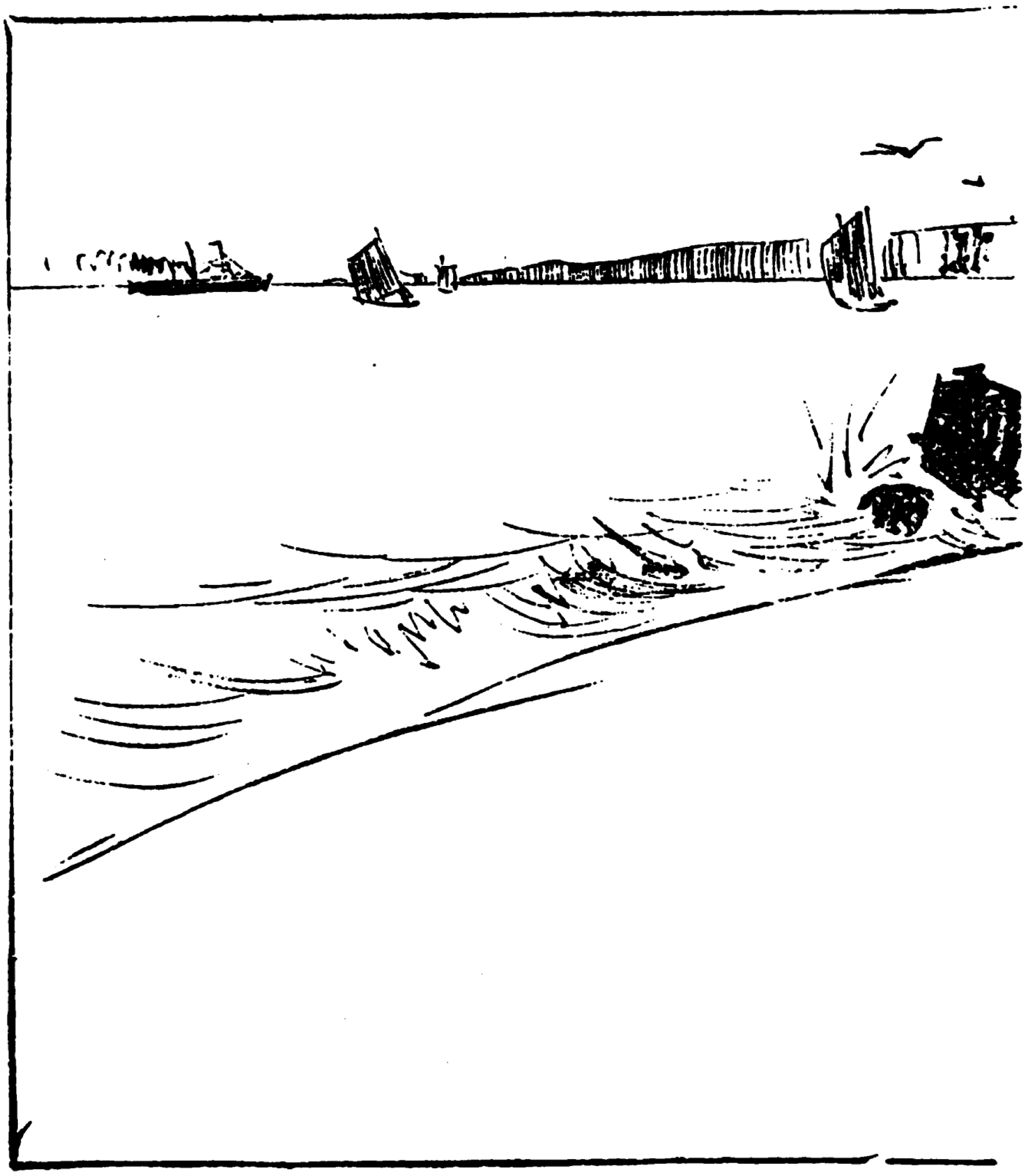
「本統の日の丸が出て居さッしやるだア、旗には及ぶめえと思つてゞがす」

「それはお前の考へなんだらう」

「左樣さ。私、考へたでがす」

「だッて、妾の考へを何故めちやめちやに破りました」

「なに、大事に疊んで仕舞つてあるでがす」



「それァ國旗の事だらうね」

「然うでがす」

「お前は本統に分らないねえ」

「これでも、久兵衞さんは、物の分つた人だッて、相談に來る者があるでがす」

邦子は、かゝる徒に、かゝはるの愚かを知るので、つひと内に入つた。と異臭鼻を衝いて、思はず嘔吐の氣を催すのである。如何したのかと見ると、火鉢の傍は灰神樂、さなきだに白髮の老女、阿政は灰に塗れて大騷ぎをして居る。それは邦子が毎朝用ゐる牛乳を暖めて居て、火度の强さに心づかず、煮過ぎて、沸騰して、大半を火中に溢したのである。

御幣を擔ぐ古風の人なら、元日早々から不吉な事ばかりと、非常に神經を惱ますであらう。邦子はそれ程の偏僻な心では無いけれど、不快で不快で耐えられぬ。無言でわが室に入ると火鉢の櫻炭がパチ〳〵、縮緬幽染の座蒲團の上に跳ねて、危く燃えやうとした。周章て柔消すと、湯呑の茶を溢して、疊の上に春の海。手を打てば、久兵衞が出て來て。

「國旗なら、はい、今出したでがす」

邦子は自劣多く、つひ聲高に。

「いえ、雜巾だよ」

すると、阿政が、

「いえ、最う火鉢は拭ひて了ひました」

邦子は益甲走らして。

「なに、勇喜をお呼びなさい、茶が此所へ溢れたのだから……」

「まア、何んて、そゝッかしい、彼の子がお茶を溢しましたかい」

「いゝえさ、妾が溢したのだから」

「おや、飛んだ失禮」

下

今朝の汽船で來た郵便は、早出しの新聞初摺、附錄の木版、寫眞石版、ページ數の多いのを誇るのやら、挿畫の美しいのを自慢にするのやら、まことに都の錦の紙、それから大晦日のスタンプのある、先潜りの年賀の葉書やらで、邦子が待つ人からの手紙は來らなかつた。

常ならば、樂しみにして讀む新聞であるが、今日は繪だけ雜と見て、讀まず。午餐を食べて、間もなく今度は勇喜を連れず、一人で外へ立出でた。

コートを着て、シオールを懸けて、頭巾を冠つて、少しも寒く無いやうにして、それで午後三時に着くといふのを、今から待つべく濱邊へ出た。

けれども大房崎の彼方には、煤煙に似た雲さへ見えぬのである。

帶の間から邦子は時計を出して見た。未だ一時にならぬのである。未だ二時間からある。どの邊を汽船は航行して居るであらうか。金谷へは最う着いたらう。保田か。加知山か。それとも未だ浦賀へ寄つて、ぐずぐずして居るであらうか。嗚呼、待ちに待たれる汽船、これには某の夫人、某の令孃、必らず自分のさ

びしさを憫み、見舞に來るべく、乘つて居られやう。今朝のやうな失望を、再びする事はあるまいと、賴みにすれば爲る程待遠しく、靜として立つては居られぬのである。

松原の松を數え盡し、砂原に足の跡を印し盡し、寄せては返へす大浪小波、これが幾千度、音を立てたか知れぬ頃に、やうやくにして大房崎の突角が、一汽船を產出した。

船形で、大層手間取れた樣に感じた。那古では一層甚しく手間取れた樣に感じた。

然うして、甚しく、實に甚しく、進行の遲々たるやうに感じた汽船は、漸くにして、北條の沖に假泊した。

汽笛の音の好さよ「御安心なさい、お友達は入らッしやいました」と語るかの如く邦子には聽えたのである。

浮船に乘移つた十數人、中に其人らしいのが、一人……二人……三人。

けれども、かたきと見えしは、群れゐる鷗、ときの聲と聽きしは、浦風なりけり。味方と見しは、誰なりけむ。群ゐる客の其中に、知る人絶えてあらざるに、浦上夫人は又失望。最うがッかりして了つたのである。

とぼ〳〵として松原を通り、砂路を過ぎて、我家に入ると、出迎へた勇喜が、頓狂な聲で。

「おや、お一人ですか……」

嘲つたかの樣に胸に響いて、何んとか此方からも云ひたい氣も生じて來るのを、さるはしたなきわざを靜かにおさへて。

「妾は、最う見捨てられて了ッたのだよ」

阿政と勇喜とは、雜煮の餅から、阿部川餅に腹を肥やして、氣の重さうな欠伸をつゞけ、久兵衛は屠蘇酒から、唯のお銚子頂戴に醉を催し、獨悅に入つて、他愛は無し。

歌留多は勇喜に讀めず、トランプは阿政が取れず、久兵衛は、ヲイチヨカブとやら下賤のすなるそれならば知つて居るとて、役に立たず。

何んといふ淋しい正月であらうと、邦子は悲しさが一杯。讀書は醫師から禁じられて居るし、バイオリンでもと思つたが、それも心がすゝまぬのである。

友の夫人令孃などが見えたら、那古の觀世音、船形の觀世音、それから此方は舘山の町、鹽見村の臥龍の松、鉈切神社の窟まで案內して、それから漁村の面白い風俗。それやこれや語り合して、それから潮の風呂にもお入れ申して、それから新しい魚の未だぴん〳〵して居るのを料理してさし上げて、それから、何して。それから、彼してと、空想がとんと無駄に爲つて、むしやくしやと腹の中に何物やらむ生じたやう。一人で斯う考へてばかり居たならば、折角快くなりかけた病氣の、再び重らずとも云はれねば、矢張り下らぬ事のみ語り合ふ、下らぬ者の仲間に入つて、翌日を待つより他には無いと、次の間に出て久兵衛に向ひ。

「老爺や、何か面白い話でもして御覽な」

阿政は遮つて。

「お止しなさいよ。大分醉つてますから、何を喋るか知れませんです」

久兵衛、醉眼を秫とさして。

「や、醉つてるだから、面白い話が申上げられるだ。私、海の中で龍卷に卷かれて、龍宮へ行つたでが

す」

「そら始まつたア」

と勇吉は冷評。

「いんにや、此話ははじめてだアよ。未だ誰にも仕て聴かした事ねえでがす。昨夜考へたばッかりだからな」

これには邦子も噴飯した。

「作り話は御免だよ」

「はゝゝ、仕方がねえでがす。だから、浦嶋太郎一代記のデロレン祭文でもやんべえかの」

下—二

二日目も同じ様な失望で日を暮らして、其夜の配達の郵便では、新聞と年賀の葉書との他に、五個の封書を邦子は受取つた。

甲の夫人の書中には、是非参るつもりでしたが、よんどころなき用事の為、殘念ながら、とある。

乙の夫人の書中には、すこし歯が痛むから、としてある。

丙の令孃の書中には、某家の歌留多會に如何しても行かねばならぬから、としてある。

丁の令孃の書中には、海が荒いさうですから、としてある。

戊の夫人からのは、他の事ばかり書いて有つて、あれ程堅く約束した事は、忘れたのか、如何したのか、何んとも書いて無いのである。

「あゝ――」

と邦子は、長大息した。

なる程人間は、いざといふ、其いざといふ聲を聽くと、がらりと的が掛變るとやら。それは、しかし、最う過去つた無秩序の時代で、今では我々の上流社會で、其樣な事は有るまいと信じて居たが、依然さうでも無いと見える。

某夫人、某令孃、隨分輕薄な方達――と、むら〳〵腹を立てかけて、扨、我身はと考へて見ると、人を咎める資格に於て缺けて居ないとは云ひ切れぬ。

交際場裏の花として立つて居る間に、時と場合の水のまに〳〵。その藻のそれならねど、彼方にも好い事を云ひ、此方にも好い事を云つた、つまり好意を以ての虚僞を、知らず〳〵の間に云つて居た。この振舞いたお世辭の種が、意外に堅く根を持つて、動きの取れぬ事の生じたのは、決して少なく無かつたのである。

後には自分の餘りに人々から持てはやされて、彼方からも、此方からも、呼ばれたり、招かれたり、或は訪問をされたりすると、時として、まことに蒼蠅く感じて、それ程必用の無い人には、つひ留守を遣つた事の、それよ、無かつたとは云切れぬ。

それ程に無い人がらの招きには、先約有りとの口實に、行かなかつた事が、それよ、無かつたとは云切れぬ。

今は、今は、それ程の人で無い人でも、訪うて來て呉れかし、此方からも訪ひたしとは、餘りに自分勝手に過ぎるでは無いか、皆是身から出た錆を知らぬのであつたよ。

扨は、この別荘の靜養は、此身にこの味を知らしめむとして、神のさすらひ給ひしにはあらざるか。又しても考へられる、都門の虚を悟り、漁村の眞を知らしめむとの、自然の風の吹廻して、此身この春を此所に過すのではあるまいか。

鏡ケ浦の初日の出、浦越しに富士を拜した、このすがすがしき心の時に於て、はゞかる處なく、わが儘に呼吸した空氣には、神の御靈のふくまれつるよ。あら、嬉しやと邦子の氣を取直した時には、病氣も、不平も何も無かつた。

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

三日目からは、浦上の別荘に、漁村の男女が群れつどひて、遊び戯れの聲、松濤の音を壓して、實に目出たさの限りを示した。

（完）



恭賀新年

明治三十七年一月一日

株式會社 國光社

社員一同

恭賀新年

明治三十七年一月一日

株式會社 國光社女鑑編輯局

一同

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

工藤武重講著

孝明天皇御遺德

謹て按ずるに先朝孝明天皇は曠古の明君なり若年にして事蹟偉德湮晦に屬し聖德未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰御製及び歷朝に奉仕せし當年月卿官人の實歷談に依り以て洩く遺事遺聞を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

菊判洋裝
定價廿五錢
郵稅四錢

皇后陛下御製記

坤德

菊版美本　定價上製卅錢並製廿錢　郵稅四錢

畏多くも本書には皇后陛下の御肖像を精巧なるコロタイプ寫眞版にて奉寫したれば坊間に有觸たるものと頗る異にし恰も新御眞影を拜するが如く加之土方伯御珍藏の御宸筆(竪一尺二寸橫一尺七寸)を同伯の許可を得て拜寫し皆公の御詠を土方伯に拜寫を乞ひ共に卷頭に奉載し又華族女學校學監下田歌子女史の序文を附し而して表紙の(坤德)の二字は前皇太后宮太夫杉孫七郎子の揮毫を乞ひたるもの眞に弊社の光榮出版界空前の盛事なり

發兌元　株式會社　國光社

明如上人

遺芳錄

國光社編纂

本書は遷化せられたる本派本願寺第二十一世明如上人大谷光尊法主一代の御傳記にして本山の記錄に基き眞宗文學健雅家編纂の任に當り顧問諸氏の校閱を受けたるものなり殊に信徒諸氏は勿論他宗門の人と雖も一本を購ふて長く上人の高德を欽仰感銘せられむことを切望して已まざるなり

全一冊菊版最美本・上人最近肖像・名號・御消息・和歌・筆蹟挿入・別にアートタイプ肖影を添ふ

◎壹冊定價金貳拾錢郵稅四錢

東京府第一高等女學校教頭市川源三著

高等女學校用 教育學教科書

菊判總クロース美本
定價五十錢
郵稅金四錢

●本書は著者が多年實驗の結果を平易簡潔にものせるものなり
●內容に於て心の現象は最新學說の粹を集め教育の方法は公平中正の精を竭したれば女子の教科として最も適當なるものなり

鈴木龜壽著

◎實驗理科教授法

菊判總クロース美本
定價金五拾五錢
郵稅金八錢

松本敬之
高橋正熊 共著

◎法制經濟教科書

全二冊
菊判總クロース
定價六十錢
郵稅六錢

生田目經德編

◎標註雅文消息集

全一冊
菊判洋裝
定價金廿五錢
郵稅金四錢

發行所 東京市京橋區築地 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りだる旨御附記被下度候

!!

大町桂月著
常磐御前

國府犀東著
靜御前

長田偶得著
顔世御前

小林雨塔著
勾當內侍

濱田廉著
袈裟御前

各 四六倍判三切洋裝
定價十三錢郵稅二錢

!!

和軒梅澤精一著
清少納言と紫式部
定價卅五錢 郵稅六錢

清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との勢力の消長よりして椒房の光景を敍し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章をば内外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕源語製作の動根に及び往生要集によりて時代精神を陳べ天臺宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を敍し又小説としての源語を評し觸れて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神劇と紫女が源語と比較せり

現今諸名家撰述○女鑑編輯局編纂
新編
ひめかゞみ
菊版美裝全一冊
定價金二拾五錢
郵稅金四錢

近世女子敎育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも稱すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を主として重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何を顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨すること久し仍て本書を編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝の兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は實なり花あり實ありてこそ始て完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を兼ね備へ玉はんことを

杉谷正隆編
家庭歌訓
修身百首
菊版洋裝
定價二十錢
郵稅四錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

小川霞州著

結婚と家庭

四六倍判三ツ切
定價金拾五錢
郵税金四錢

結婚と家庭！是れ未だ解答を與へられざる一大問題なり抑も兩性結合は天の大倫。男女相愛は人の常情。誰れか又之を防遏するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず。是を以て或は失戀に泣き或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて。厭世の人となる者古來其相多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや。著者の麗筆を以て此の大問題の解決を試み。近く證を取り遠く例を引き。縱横論議して毫も憚かる所なし希はくば青春妙齢の士女、此書に據りて以て、相愛の結儀を擧げ和樂の家庭を構成せば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

[illegible]内新泉著

少女讀本



花月雪の卷

全三冊定價各十八錢郵税各四錢

先づこの書の特色は、第一孃さん達のためになるお話ばかりを集めたのと、第二には面白いのやら、悲しいのやら、又勇しいのやらいろ／＼あるお伽話の中に、みな一／＼修身の教のこもつて居るのです。その外まだ面白い唱歌もあれば、球歌などもありますが何れも世にありふれたものとは、丸でかはつて居りましてこの度著者が親切に皆新しく作つたものばかりでございます。

藤野天城著

女子小觀

四六版洋裝
定價二十錢
郵税四錢

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

國光社發行

明治三十七年 女生日記

定價　上製三十錢　並製二十錢　郵税各四錢

●各新聞好評●

◎東京日々新聞評　體裁の優美なる意匠の巧良なる一見女學生の好日記なるを認むるものは此日記なり卷中日々の欄外に天氣と寒暖とを記入するの場所を設け古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯等にして女子の心得となるべき材料を挿入し且つ女學校案內、女子職業案內等を附記し其の實益と興味とを兼ね供へたるは在來の日記と大に其選を異にする所貴婦、令孃、女學生等新年第一に机上に飾らるべきは恐くは此日記ならんか

◎都新聞評　築地國光社より發兌したる女生日記は日々の欄に古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯など女子の心得となるべきものを挿入し且女學校案內、女子職業案內等を附記しあり女生に適したる好日記帳なり

◎二六新報評　這回築地國光社に於て發兌したる女生日記は意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり（以下略す）

◎日出國新聞評　（前略）實益と興味とを兼備せる事普通日記の比にあらず貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは此優美に愛らしき日記なるべし

◎東京朝日新聞評　學校及び職業の案內其他女子須要の事項を其卷首に掲げ教訓行事等有益なる項目を記せり體裁優美女生及家庭の實用に適す

◎報知新聞評　意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり卷中日々の欄には古今東西の金言、俚諺、詩歌英和對譯など女子の心得となるべき種々の材料を精選して挿入し且女學校案內、女子職業案內等をも附記しありて實益と興味とを兼備せること普通日記の比にあらざれば貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは必ず此の優美なる可愛き日記なるべし

◎平民新聞評　日記も色々出來たが女學生日記は此冬の新案で是れは一アテ當てるであらう別に變つた事もないが可愛らしく善く出來て居る

●各新聞好評●

本誌後付廣告欄に割引券あり

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縱六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

弘田正郎編

豪吟集

嗚呼斷腸の詞、絶命の辭みな是れ當年の志士仁人が義を唱へ身を殺して國家の爲に濺ぎたる熱血の餘沫にあらざるなし之を秋風落日の前に吟じ之を寒月冷烟の中に誦しなば焉んぞ义豪懐壯圖の勃然として起らざるを得んや

安部正人編纂

泥舟遺稿

定價四十五錢
郵税八錢

菊判洋装大和綴

高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也。其の言行の超凡脱俗なる、誰れか嘆賞せざらむや、先生徽さるれども朝に仕へず赤貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、遥の菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年、本書は則ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に。又一面には幕末の眞事情を知るを得べし。加ふるに先生の經歴及び逸事等、編者先生に親炙して聞きしところのものを掲げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし

村上濁浪譯述

鐵血宰相語録

四六判洋装定價卅錢郵税四錢

●本書は公の一世に於ける逸事を編纂したるもの或は「ザスレリー」と握手し或は「ゴルチヤコフ」と歡晤し或は「ナポレオン」を揶揄し忽ちにして熱火の修羅場となり忽ちにして樽俎の和局を現し忽にして閑静なる家庭となる其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり

宮崎滔天著

三十三年の夢

●滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異様の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懐する哲學的理想に據て直に地上に施かんと欲し運籌畫策する所一二にして足らざる也唯慷む天時人事共に未だ可ならず群島の獨立に參與して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して曰半生夢覺めて落花を懐ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歴を叙す(定價卅三錢郵税八錢)

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

幸田露伴編

再版



飯沼珠城畫

全壹册

定價五十錢

郵税金四錢

菊判袖珍總クロース製本頗優美

柳浪氏の鏡のうらは春曉鶯を聴き、素影氏の歸省は夏雲奇峯多く、煙村氏の傑作は秋風索寞、鶴伴氏の初陣は雲華濱紛たるに似たり、編者露伴子題していふ、これは不老門中の春夏秋冬なれば、見る人心ゆたかに欣賞し玉へかしと、以て本書の内容如何を知るべし。製本亦美麗にして殆んど珠玉の如し、机上の粧飾として燦然彩を發するを見ん。

森鷗外著 ●**長宗我部信親** 新刊

菊判半切 定價拾錢郵税二錢

塚原澁柿著 ●**山崎合戰** 再版

菊判洋裝美本 定價卅九錢郵税六錢

堀内新泉著 ●**女樂師** 再版

菊判洋裝美本 定價卅五錢郵税六錢

發兌元 東京築地 株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據り旨御附記被下度候

吉丸文學士編

名家修養談叢

菊判洋裝美本全一冊
定價卅六錢・郵稅六錢

○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士 井上哲次郎
○數學的智識の必要……島田三郎
○常道論……文學博士 元良勇次郎
○日本の人種の言語……法學博士 田口卯吉
○快樂……文學博士 加藤弘之
○善良なる市民……安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士 志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士 村上專精
○言論文章に就て……島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士 山田一郎
○青年を誡む……文學博士 加藤弘之
○學問、出身、目的、手段……島田三郎
○兩極主義……文學博士 藤井健次郎
○苦學……文學博士 根本通明
○實學……島田三郎
○無窮的進步……海老名彈正
○讀書と修養……松村介石
○進化論と現今の日本……元良勇次郎
○ベーコン、ルッソー、及びバーゼドーの敎育思想……尺秀三郎
○歷史的國民と非歷史的國民……獨逸文學博士 長瀨鳳輔
○慾望……文學博士 元良勇次郎
○苦學生に望む……片山潜
○福澤諭吉翁……島田三郎

小松宮彰仁親王殿下題辭
內務大臣內海男爵題辭
前內務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭
內務大臣官房編纂

明治國民鑑

菊判大和綴美本紙數一千餘頁
口繪授賞者肖像褒章石版色刷挿入
定價金貳圓郵稅十五錢

東京築地
國光社發行

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御申越被下度候

第五回博覽會

銅牌幷に褒狀受領

登録商標

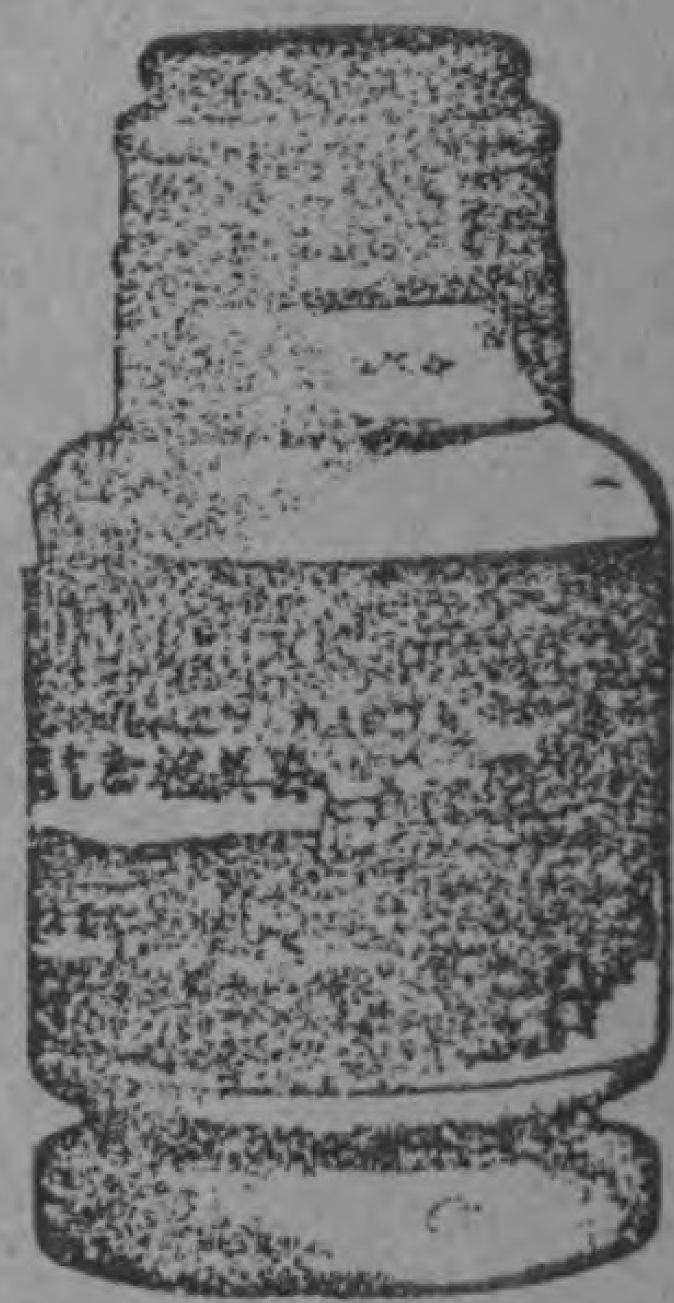
第二回品評會功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト石鹸
錫香附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい

ねり製〔定價 大壜二十錢 小壜十二錢〕
水製〔定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢〕





錫栓附乳白硝子壜入

ヴワイオレツト水製

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用ひて御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、わせも等を生せず御肌へを滑々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁とへ保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

緑、藍、紅彩蝶畫ひボックス入三錢　罐詰六錢五厘　袋入壹錢

◎弊舖製造の壽美禮洗粉の儀は方今歐米諸國に專ら賞讃する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を滑々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

◎常に髪洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くしく艶を出し髪のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白するの作あり

◎使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHILNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舖　東京東兩國横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

一月一日發行 第拾四年第壹號 第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷